

**令和 3 年度
文化芸術創造都市推進事業
成果報告書**

令和 4 年 3 月 31 日

創造都市ネットワーク日本(CCNJ)・文化庁

目 次

第1章	はじめに	1
1.	事業の目的	1
2.	事業概要	1
3.	参加団体数	1
第2章	文化芸術創造都市のネットワークの円滑化	3
1.	ネットワーク会議（総会）	4
2.	創造都市政策セミナー in 神戸市.....	8
3.	創造農村ワークショップ in 丹波篠山市.....	10
4.	現代芸術の国際展部会 in 珠洲市.....	16
5.	幹事団体会議の開催.....	19
6.	これからのCCNJの在り方について.....	21
第3章	文化芸術創造都市に関する国内外の情報収集・分析・提供、創造都市事業の効果検証・発信	27
1.	国内の創造都市に関する調査研究.....	27
2.	CCNJに加盟する市町村における文化芸術推進基本計画の策定状況について	41
第4章	CCNJの活動を広く国内外に発信するためのウェブサイトの充実、管理・運営	46
1.	ウェブサイトの保守管理・運営.....	46
2.	YouTubeチャンネルの開設	48
添付資料	49
1.	令和3年度 創造都市ネットワーク会議 総会.....	49
2.	令和3年度 創造都市政策セミナー in 神戸市（オンライン配信）	59
3.	令和3年度 創造農村ワークショップ in 丹波篠山市（現地・オンライン配信） .	83
4.	令和3年度 現代芸術の国際展部会 in 珠洲市（現地・オンライン配信）	117

第1章 はじめに

1. 事業の目的

平成25年1月、文化芸術の持つ創造性を活かして産業振興や地域の活性化に取り組んでいる地方自治体や、これから取り組もうとしている地方自治体を支援するため、情報収集・提供、施策分析及び会議・研修の実施等を行う国内ネットワーク（＝「創造都市ネットワーク日本」(Creative City Network of Japan)（以下、CCNJ））が設立された。平成29年6月には、文化芸術基本法が公布・施行され、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業等の幅広い分野との有機的連携による文化芸術政策の推進が求められている。

本事業は、文化芸術の持つ創造性を活かして地域振興、観光・産業振興等に取り組む自治体等の取り組みを促進するため、取り組み成果の蓄積・発信、会議・研修の実施、海外の創造都市との交流等を通じて、国内ネットワークを強化するとともに国内外に広く発信し、国全体が文化芸術の持つ創造性により活性化するための基盤を形成することを目的とする。

2. 事業概要

創造都市ネットワークの強化・充実及び国内各地域における文化芸術創造都市の活動促進を図り、広く国内外にその活動を発信するため、CCNJ及び文化庁が実施する総会（創造都市ネットワーク会議）、セミナー、ワークショップ等の開催にあたり、代表幹事団体や事業開催自治体への支援を実施した（第2章）。また、文化芸術創造都市に関する国内外の情報収集・分析・発信、創造都市事業の効果検証を行った（第3章・第4章）。

事業実施にあたっては、加盟自治体が各地域の文化芸術資源を有効に活用し、文化プログラムをはじめとした文化芸術政策を広く展開・発信できるよう、CCNJ幹事団体等との連携を図りつつ、テーマに応じた有識者選定や、企画のコーディネートを支援した。

3. 参加団体数

令和4年3月31日時点、116自治体、43団体が参加している。

創造都市ネットワーク日本 参加団体一覧

※団体名に囲みがある団体は、令和2年度総会（R3.2.8）以降新たに参加した団体

■自治体

(116自治体：令和4年3月31日現在)

北海道・東北 (19)	札幌市(北海道)、美唄市(北海道)、東川町(北海道)、美瑛町(北海道)、剣淵町(北海道)、旭川市(北海道)、八戸市(青森県)、盛岡市(岩手県)、仙台市(宮城県)、多賀城市(宮城県)、加美町(宮城県)、仙北市(秋田県)、山形市(山形県)、鶴岡市(山形県)、金山町(山形県)、いわき市(福島県)、白河市(福島県)、喜多方市(福島県)、伊達市(福島県)
関東・甲信越 (25)	取手市(茨城県)、水戸市(茨城県)、足利市(栃木県)、 <u>鹿沼市(栃木県)</u> 、 <u>那須烏山市(栃木県)</u> 、前橋市(群馬県)、中之条町(群馬県)、さいたま市(埼玉県)、川越市(埼玉県)、草加市(埼玉県)、富士見市(埼玉県)、松戸市(千葉県)、浦安市(千葉県)、品川区(東京都)、豊島区(東京都)、板橋区(東京都)、横浜市(神奈川県)、小田原市(神奈川県)、茅ヶ崎市(神奈川県)、鎌倉市(神奈川県)、新潟市(新潟県)、三条市(新潟県)、十日町市(新潟県)、津南町(新潟県)、木曾町(長野県)
北陸・東海・近畿 (30)	高岡市(富山県)、氷見市(富山県)、南砺市(富山県)、金沢市(石川県)、珠洲市(石川県)、大垣市(岐阜県)、可児市(岐阜県)、静岡市(静岡県)、浜松市(静岡県)、三島市(静岡県)、名古屋市(愛知県)、瀬戸市(愛知県)、碧南市(愛知県)、長浜市(滋賀県)、草津市(滋賀県)、守山市(滋賀県)、甲賀市(滋賀県)、京都市(京都府)、舞鶴市(京都府)、南丹市(京都府)、与謝野町(京都府)、大阪市(大阪府)、堺市(大阪府)、豊中市(大阪府)、神戸市(兵庫県)、姫路市(兵庫県)、豊岡市(兵庫県)、丹波篠山市(兵庫県)、奈良市(奈良県)、明日香村(奈良県)
中国・四国 (15)	出雲市(島根県)、岡山市(岡山県)、真庭市(岡山県)、美作市(岡山県) 広島市(広島県)、尾道市(広島県)、宇部市(山口県)、山口市(山口県)、岩国市(山口県)、神山町(徳島県)、高松市(香川県)、丸亀市(香川県)、松山市(愛媛県)、内子町(愛媛県)、高知市(高知県)
九州・沖縄 (12)	北九州市(福岡県)、久留米市(福岡県)、宗像市(福岡県)、熊本市(熊本県)、多良木町(熊本県)、大分市(大分県)、別府市(大分県)、臼杵市(大分県)、竹田市(大分県)、那覇市(沖縄県)、石垣市(沖縄県)、中城村(沖縄県)
都道府県 (15)	岩手県、群馬県、埼玉県、神奈川県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、鳥取県、岡山県、香川県、徳島県、佐賀県、大分県、宮崎県

■自治体以外の団体

(43団体、令和4年3月3日現在)

アーツ&コミュニティふくい | 一般社団法人アーツシード京都 | NPO 法人アート NPO リンク | NPO 法人いわてアートサポートセンター | 宇都宮市創造都市研究センター | 一般社団法人エーシーオー沖縄 | 公益財団法人大垣市文化事業団 | 公益社団法人岡山県文化連盟 | 公益財団法人岡山シンフォニーホール | 公益財団法人沖縄県文化振興会 | 公益財団法人音楽文化創造 | 一般財団法人カルチャー・ヴィジョン・ジャパン | 公益財団法人関西・大阪 21 世紀協会 | NPO 法人キッズファン | 一般社団法人クラブ沖縄 | 公益財団法人京都市音楽芸術文化振興財団 | 公益財団法人京都市芸術文化協会 | 一般社団法人クリエイティブクラスター | NPO 法人グリーンバレー | NPO 法人黄金町エリアマネジメントセンター | NPO 法人さをりひろば | 滋賀次世代文化芸術センター | NPO 法人駿河地域経営支援研究所 | 大道芸ワールドカップ実行委員会 | 株式会社ダン計画研究所 | NPO 法人 DANCE BOX | 株式会社地域計画建築研究所 | NPO 法人都市文化創造機構 | NPO 法人鳥の劇場 | 株式会社ニッセイ基礎研究所 | 公益社団法人日本オーケストラ連盟 | 一般財団法人日本ファッション協会 | 一般社団法人ノオト | 公益財団法人東松山文化まちづくり公社 | 公益財団法人兵庫県芸術文化協会 | 株式会社バウハウス | 公益財団法人びわ湖芸術文化財団 | 福岡県文化団体連合会 | NPO 法人 BEPPU PROJECT | 一般社団法人 METACITY 推進協議会 | NPO 法人山形国際ドキュメンタリー映画祭 | 公益財団法人山本能楽堂 | 公益財団法人横浜市芸術文化振興財団

創造都市ネットワーク日本 (CCNJ) 幹事団体(自治体コード順)

札幌市、鶴岡市、松戸市、豊島区、横浜市、新潟市、高岡市、金沢市、可児市、浜松市、京都市(代表)、神戸市、丹波篠山市、宇部市、高松市、北九州市、大分市

お問い合わせ：CCNJ 事務局(京都市 文化市民局 文化芸術都市推進室 文化芸術企画課)

TEL：075-222-3119

お問い合わせフォーム：<https://ccn-j.net/contact/>

第2章 文化芸術創造都市のネットワークの円滑化

都市相互の積極的な交流及び広くその活動を発信するための場として、令和4年3月末現在、116自治体・43団体が加盟するCCNJ及び文化庁が実施する総会（創造都市ネットワーク会議）、セミナー、ワークショップ等の開催にあたり、代表幹事団体や事業開催自治体への支援を人口規模や体制などの実情に応じてきめ細かく行い、創造都市ネットワークの強化、拡大及び充実を図った。

令和4年度は下記会議等の開催に取り組んだ。

会議名		開催時期	開催地
ネットワーク会議（総会）		令和4年3月3日（木）	オンライン （事務局：京都府京都市）
創造都市政策セミナー		令和3年10月1日（金）	オンライン （事務局：兵庫県神戸市）
創造農村ワークショップ		令和4年3月11日（金） ・12日（土）	兵庫県丹波篠山市・オンライン （ハイブリッド開催）
現代芸術の国際展部会		令和4年1月21日（金） ・22日（土）	石川県珠洲市・オンライン （ハイブリッド開催）
幹事団体会議	第1回	令和3年6月28日（月）	オンライン （事務局：文化庁地域文化創生本部）
	第2回	令和3年11月12日（金）	京都市・オンライン （ハイブリッド開催）
	第3回	令和4年2月15日（火） ～18日（金）	書面開催
オンライン分科会			参加団体から開催希望がなかったため、令和3年度の開催を見送った。

1. ネットワーク会議（総会）

日 時：令和4(2022)年3月3日（木）15:30～16:40

開催方法：オンライン開催（ZOOM）

主 催：文化庁、創造都市ネットワーク日本（CCNJ）

共 催：京都市

出席団体：自治体60、団体6、個人会員1名

議決方法：事前に議決の電子投票を実施 全回答数119 過半数59

次 第：

門川 大作 京都市長挨拶

榎本 剛 文化庁審議官挨拶

議案審議

第1号議案 令和3年度事業報告について →賛成多数により承認

第2号議案 これからのCCNJの在り方について →賛成多数により承認

第3号議案 規約改正について →賛成多数により承認

第4号議案 次期幹事団体の改選（案）について →賛成多数により承認

第5号議案 令和4年度事業計画（案）について →賛成多数により承認

CCNJ 新規加盟団体の紹介

CCNJ 顧問による総括 佐々木 雅幸 創造都市ネットワーク日本顧問

事務局からの連絡

ご挨拶 /京都市長 門川 大作 氏

- 創造都市ネットワーク日本（以下、CCNJ）の活動は、文化庁の多大な協力と参加されている159団体の努力によって、各地で協力しながら、まちづくりや地域活性化などと横断しながら広がってきている。しかし、社会は貧困や格差など、創造力とは相反することが大きな問題となってきている。
- CCNJでは、新たな取り組みとしてSDGsの達成への貢献を掲げようとしている。今後は新たな部会の設立や文化庁の本格的な移転により、一層の充実を図っていきたい。
- 現在、京都市の姉妹都市キエフのあるウクライナが、創造都市活動とは正反対の戦争に巻き込まれている。市役所前にはキエフから寄贈されたモニュメントがあり、献花台設置や募金活動等の支援活動を行っている。また、100年前の本日、全国水平社が設立されたが、人間が人間らしく暮らしていける社会こそが、創造都市の原点だと思っている。

ご挨拶 /文化庁審議官 榎本 剛 氏

- 文化庁は文化芸術基本法と文化芸術推進基本計画に基づいて施策を進めてきたが、この5年間で文化財と文化振興の2つに分かれていた組織を見直し、経済や観光などと連携し、文化GDPの拡大や文化フェスティバル等の支援、博物館法の改正なども進めている。また、京都和食文化研究センターの設置や伝統的な酒造りのユネスコ無形文化遺産への推薦など、食文化の振興も進めている。自治体単独では成しえないことでも、このネットワークを活かして取り組んでほしい。

- この 2 年間は新型コロナウイルス感染症のために、文化行政で地方創生に取り組みながらこられた皆さんは苦しまれたと思うが、一緒に頑張っていきたい。文化庁の予算は補正予算を獲得したことで、この 2 年で 2 倍に増えた。日本の豊かな文化を大切に育てることで、社会を平和にしたいと考えている。

令和 3 年度事業について開催都市からの報告

【神戸市（政策セミナー）】

平田オリザ氏の基調講演「文化芸術が社会に与える影響」は、他都市の方にも参考になると思う。アーカイブ動画をサイトに掲載しているので見ていただきたい。

【珠洲市（現代芸術の国際展部会）】

2 日間開催し、現地参加は多くなかったがオンラインで多数参加いただいた。昨年の奥能登国際芸術祭には、コロナ禍ではあったが多数の方をお迎えした。今後もまちづくりの一環として続けたい。

【丹波篠山市（創造農村部会）】

県外の皆様はオンラインとなるが、11 日にワークショップを開催するので参加してほしい。エクスカッションは後日、映像で配信する予定である。

次期代表幹事（北九州市）のご挨拶

この 2 年間は感染症の影響を受けながらも、約 200 の事業を実施した。「SDGs 推進に向けた世界のモデル都市」に選定されており、昨年は「北九州未来創造芸術祭 ART for SDGs」を開催し、文化芸術を通じた SDGs に取り組んだ。日中韓文化大臣会合や東アジア文化都市の交流事業も開催できた。CCNJ の新しいビジョンの実現に向け頑張りたい。

次年度の各部会事務局のご挨拶

【横浜市（現代芸術の国際展部会事務局）】

コロナ禍で国内外を自由に往来できず、国際展は思ったようには開催できない。部会も年 1 回集まって話ができる貴重な機会だが、ハイブリッド開催にせざるを得なかった。来年度は岡山市で開催する予定だ。部会へは昨年加盟されたが、既に国際展を 2 度開催されている。

【岡山市（次年度現代芸術の国際展部会開催都市）】

2016 年から 3 年毎に国際展を開催している。来年度は 9～11 月の 2 カ月間開催する予定で、この期間に部会を開催し、皆さんにお越しいただきたいと考えている。

【丹波篠山市（創造農村部会事務局）】

CCNJ のダイナミックな変革期に関われることをうれしく思う。小さなまちでも文化的な暮らしができることを証明できるよう、部会では皆さんと膝を詰めて話をしていきたい。

【京都市（国際ネットワーク部会事務局）】

創造都市のブランド価値を上げていくためにも、ユネスコ創造都市ネットワーク（以下、UCCN）や東アジア文化都市との関係を深めていきたい。まずはできるところから始め、顔の見える関係から国際的な活動をサポートできる関係に進展させることができれば

と考えている。

CCNJ 新規加盟団体のご挨拶

【鹿沼市】

鹿沼市は日光市や宇都宮市の隣に位置し宿場町として栄えてきたが、日光東照宮の造営職人が居住したことで彫刻屋台の祭りが盛んになり、那須烏山市とともに山鉾・屋台行事がユネスコ無形文化遺産に登録された。他にも多数の文化遺産や、3人の女性で起業した仏像修理工房などもある。廃校でのアートフェスティバルなど、若者が活躍できる場も整えており、ネットワークに参加して頑張っていきたい。

【那須烏山市】

鹿沼市と一緒に下野国の二大祭りとして、道路に舞台をつくって行う野外歌舞伎「烏山の山あげ行事」がユネスコ無形文化遺産に登録された。他にもジオパーク事業や文星芸術大学と連携して民話をアニメーション化し、観光客誘致を行っている。皆さんの知恵をお借りしながら、地域振興を進めていきたい。

総括 / 創造都市ネットワーク日本顧問 佐々木 雅幸 氏

- 創造都市ネットワーク日本は 2013 年に設立し 10 年近く経験値を積み上げてきたが、この 2 年間は大きな試練に直面した。その中で様々な努力とアイデアで活動を広げてきたことを感謝したい。また、京都に新文化庁を迎え、パンデミック後の地域のウェルビーイングを高めてくれることを期待している。
- 世界銀行が創造都市に興味を持ち、2年前に京都市で開催したシンポジウムでは、開発途上国の皆さんが大変熱心に取り組まれており、創造都市は光だと考えられていた。今後は創造都市への取り組みが、パンデミックを超えて地球全体に広がるのではないかと。
- 今年度は臼杵市が UCCN に新規に加盟し、日本からの加盟都市が合計 10 都市になった。CCNJ では来年度に国際ネットワーク部会を立ち上げるが、UCCN では早くから SDG s に取り組んでおり、CCNJ の次のアジェンダとした。文化芸術と SDG s をもっと深めるべきだと提案されたのは北九州市長だった。北九州市は工業都市から環境都市となり、今は創造都市を目指しており、次期代表幹事を引き受けていただいた。
- 東アジア文化都市については、大分県に引き受けていただいた。以前に政策セミナーを開催した時よりも実力が付いている。次回はぜひ、皆さんの中から東アジア文化都市に立候補していただきたい。
- 今後は文部科学省のユネスコ担当と CCNJ の関係をもっと密にし、UCCN とつないでいきたい。そのためにも、2016 年に東アジア文化都市を成功させた京都市に、国際ネットワーク部会の事務局を引き受けていただいた。
- 丹波篠山市は UCCN に加入申請を行う際、人口 10 万人以下の都市では難しいと言われたが、小さな都市でもできることを証明してくれた先駆者であり、今回、創造農村部会の事務局を引き受けていただいた。CCNJ には小さな都市でも参加できるようにしてほしい。



CCNJ ネットワーク会議（総会）の様子（ZOOM ミーティング）

2. 創造都市政策セミナー in 神戸市

開催日 : 令和3(2021)年10月1日(金) 14:00-16:00

開催方法 : オンライン開催 (ZOOM ウェビナー)

主催 : 神戸市

共催 : 文化庁、創造都市ネットワーク日本 (CCNJ)

テーマ : 「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」

参加者数 : 78名

基調講演「文化芸術が社会に与える影響」

／劇作家・芸術文化観光専門職大学 学長 平田 オリザ氏

【概要】

文化芸術の3つの役割として、芸術作品が人々を勇気づける役割、コミュニティ形成の役割や社会包摂の役割、教育や観光、医療等に具体的に貢献する役割を挙げ、特に文化芸術が教育や観光にどのように影響するのかを、芸術文化観光専門職大学での実践を踏まえて説明された。

- 昨今、センスやマナー、コミュニケーション能力といった「身体的文化資本」の重要性が認識されており、これらは文化芸術によって身につくと言われるものの、地方では学ぶ機会がなく、文化格差が広がり、これが大学入試や就職に直結する事態となっている。
- 年収の低い家庭でも学力の高い子どもは、非認知スキルが高いことが分かっており、博物館や美術館に連れて行くなど、子どもたちの知的好奇心を伸ばすことが学ぶことにつながる。これに文化芸術が大きく役割を果たすことから、文化芸術によるコミュニケーション教育が広がっている。そもそも学力は学んだ結果ではなく「学ぶ力」であり、そのためには主体性や多様性、協働性通じて「学ぶ力」を身につけることが求められる。
- 日本では、観光客がまた行きたくなる食や文化芸術、夜の観光といった文化観光が弱い。特に宿泊してもらうことを考えると、ナイトカルチャー・ナイトアミューズメントが重要になる。これは豊岡市でも神戸市でも喫緊の課題である。芸術文化観光専門職大学は、こうした身体的文化資本と文化観光を学ぶ大学として開学し、人材を育成している。

ディスカッション「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」

／劇作家・芸術文化観光専門職大学 学長 平田 オリザ氏

(公財) 神戸市民文化振興財団 理事長 服部 孝司氏

<モデレーター>同志社大学経済学部教授 河島 伸子氏

ワクチンが行き渡り、ある程度自由に行き来できる社会を「ポストコロナ社会」と位置づけた上で、ディスカッションが行われた。

- 服部氏からは、神戸市民文化振興財団はコロナ禍で7億円の赤字に陥り、アーティスト

支援をする必要がある一方、財団としての存続危機となっている。こうした中でも、コロナ禍の中で気付かされた過度な海外アーティスト偏重や劇場内での徒弟主義への反省を踏まえ、コロナ以前に戻らないよう一歩二歩でも高いところへたどり着くよう取り組むことが使命であり、身体的文化資本を提供することにつながると話された。

- 平田氏からは、エンターテインメント産業が1兆円産業となったが、コロナ禍で7割減少したとも言われる。また、コロナ禍で延期・中止になった作品の中には、もしかすると演劇史に残る作品があったかもしれない。命が一番大切だが、命の次に大切なものは人によって異なり、中には文化芸術を鑑賞することで心が安らぐ人もいる。このような異なる価値観、異なる文化的背景を理解する能力を「エンパシー」というが、こうしたエンパシーを身につけるためにも文化芸術が役に立つという話があった。
- また河島氏から、コロナ禍における次世代教育について問題提起があり、服部氏からは作品を作り上げていく、アートマネジメントを行う人材を育成し、活躍させる場が少ないことが指摘された。こうした中、神戸市民文化振興財団と芸術文化観光専門職大学は連携し、大学で学んだ学生がインターンとして財団で研修する計画も披露された。平田氏からは、まちづくりや地域振興の視点を持って、アートマネジメントを学ぶ学生が増えていることも指摘された。

KIITO:300 の紹介

／デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO) センター長 永田 宏和氏

デザイン・クリエイティブセンター神戸 (KIITO) の概要や歴史背景、KIITO のこれまでの活動を振り返った後、3階にオープンしたこどもの創造的学びの拠点、社会貢献活動の拠点である「KIITO:300」について説明された。

総括

／文化庁文化創造アナリスト・学校法人稲置学園理事 佐々木 雅幸氏

2年前に創造農村ワークショップ in 豊岡市を開催し、平田オリザ氏に登壇いただいたことを思い出し、国内の創造都市の活動には、どれだけ創造的な人々を生み出せるか、特にこれからは、ビヨンドコロナに向けて如何にクリエイティブな若い人材を育てていくかが重要であり、そこに焦点を当てた内容だったと総括された。



3. 創造農村ワークショップ in 丹波篠山市

開催日：令和4(2022)年3月11日(金)、12日(土)

開催方法：現地 ユニトピアささやま レイクホール
オンライン開催 (ZOOM ウェビナー)

主催：丹波篠山市

共催：文化庁、創造都市ネットワーク日本 (CCNJ)

参加者数：現地 21 名、オンライン 28 名 (創造農村ワークショップ)

【3月11日(金) 創造農村ワークショップ】

テーマ：日本遺産のまち・創造農村の役割とは

特別講演「これからの創造農村とは」

／文化庁文化創造アナリスト 学校法人稲置学園理事 佐々木 雅幸 氏

【概要】

日本政府が呼び掛けている Society5.0 (ソサエティ 5.0) は、狩猟社会、農耕社会、産業社会、情報社会と変化してきたが、次のフェーズは創造社会である。テクノロジーから見ればスマートシティ、人間側から見ればクリエイティブシティ、つまり、人間の顔をしたスマートシティがクリエイティブシティである。これからの時代は創造性というキーワードで人々が活動し、そういう地域が発展する。特に農村には豊かな自然があり、創造的な暮らしや農業、工芸などの様々な仕事の豊かさを、魅力として発信するべきであり、今は工業経済社会から創造経済社会への大きな転換点だと説明された。

- ユネスコ創造都市ネットワーク (以下、UCCN) の加盟都市は世界に 295 都市、日本には 10 都市あり、丹波篠山市も加盟している。ユネスコは第 2 次世界大戦後に国際平和などのために生まれたものであり、丹波篠山市長がロシア総領事に文化の力による平和について話に行かれたことは素晴らしい。UCCN では芸術文化から SDGs の実現に貢献することをミッションとしており、創造都市ネットワーク日本 (以下、CCNJ) も SDGs の実現に向けた活動を行うことになった。
- クリエイティブツーリズムを提唱しているアメリカのサンタフェという都市を、丹波篠山市はお手本にしている。歴史的な芸術文化の多様性を持ち、ツーリストと市民が創造的な体験を共有している。これからの創造農村のひとつの軸にしてほしい。
- イタリアのボローニャでは、工芸職人が行う仕事や作品もオペラと呼び、金沢市では新しい工芸作家や未来の工芸を生み出している。両者に共通しているのは、オペラ的な働き方や工芸的なものづくりであり、これがソサエティ 5.0 の基調になる。
- 創造農村ワークショップを始めた際、当時の文化庁長官が、21 世紀の社会を切り開くのは地方分権と芸術文化であり、これを結び付けるものが CCNJ で、中でも小規模な自治体が頑張ることの重要性について述べられた。人づくりが上手くいってこそ、創造農村を持続的に発展させることができる。

- 宮沢賢治が「農民芸術概論」という本を書いたが、農村での芸術文化の価値を人づくり、地域づくりに活かすことを、これからの流れにしていきたい。

基調講演「日本遺産に認定された丹波篠山市の事例を基に」

／公益社団法人 日本観光振興協会総合研究所 顧問 丁野 朗氏

【概要】

ここ数年で文化観光推進の流れができ、文化資源の活用と保全の対立的な考え方から、一体的な投資や循環的な捉え方に変化してきた。日本遺産は文化財の裏側にある地域の文化を物語で説明して海外にも伝えることが主題であり、地域を創造するプレーヤーの育成や行政計画等、環境整備の重要性を説明された。

- 6年間で104件を日本遺産に認定した。丹波篠山市のデカンショ節と六古窯は、重要伝統的建造物群を軸にした物語が多い中では個性的な日本遺産だ。また、日本遺産としてのブランドを担保するため、総括評価や先進モデルの構築、取消入替制度を導入した。多くの遺産の評価の中では、自立自走に向けた取り組みの推進が望まれている。
- 日本遺産物語を活かすためには、訪問者に物語を伝える仕組みとしての環境整備が大変重要である。また、中長期的な視点も重要で、組織整備や戦略、人材育成には時間がかかる。まちづくりには30年かかると思っている。今年の観光甲子園では、丹波篠山鳳鳴高校が日本遺産部門のグランプリを取っており、本当に素晴らしい。このような活動が非常に重要だ。情報発信については様々な方法があるが、海軍の鎮守府4都市の観光ガイドは毎年交流会を行い、互いの説明ができるほど関係が深まっている。
- 日本遺産と地域ブランディングについては、いくつか事例を紹介する。十日町は2つの日本遺産を持っており、ジオパーク的な捉え方をしている。信濃川と河岸段丘、豪雪地帯で形成した里山の生活文化をひとつの物語としており、文化観光推進法ができたと同時に地域計画を策定して、新しい博物館をフィールドミュージアムの1拠点のようにつくった。益田市は「中世日本の傑作益田を味わう」というテーマで日本遺産の認定を受けており、中世のまま残っている町割を活かし、中世の「食」の再現など様々な「中世の〇〇」を創造するなど、「益田観光みらい塾」の塾生と一緒に、中世を味わうための起承転結の物語をつくっているところだ。
- 丹波篠山市には日本遺産の物語を活かして、創造農村として新しい地域の生業、産業を生み出すことを期待したい。地域を創造するプレーヤーが必要であり、人を育てることについて後ほどディスカッションしたい。観光商品は比較的短期間でできるが、しっかりした行政や地域の方針や組織がなければ、地域の受け皿をつくるのは難しい。



パネルディスカッション

／MASSE 丹波篠山 事務局長 井本 季伸 氏

クラフトヴィレッジ製作委員会 代表 加古 勝己 氏

丹波立杭陶磁器協同組合 理事長 市野 達也 氏

公益社団法人 日本観光振興協会総合研究所 顧問 丁野 朗 氏

＜モデレーター＞

元日本遺産プロデューサー、株式会社ブルームコンセプト代表取締役 小山 龍介 氏

【各団体の活動内容について】

- 市野氏は約 60 軒の窯元を中心に丹波焼の産地を盛り上げる活動をされており、通販サイト「丹波のイロドリ」での売上の拡大、日本六古窯が日本遺産に認定されたこと、ターゲットを 40 代の女性に絞ったこと、景観条例の制定や登り窯の修復などの効果による観光客の増加について話された。また今後については、窯元に長期宿泊して焼成まで体験するツアーの提供やインバウンドの誘客、六古窯産地との交流などを進めたいとお話をいただいた。
- 加古氏からは、ご自身が移住者であり、近年、工芸家の移住者が増加してきたため、交流の場として「丹波篠山クラフトヴィレッジ」と名付けて活動を始められ、去年はクラフトマーケットやオープンファクトリーのイベントを開催されたこと、今年は作ることに触れるワークショップ形式でのイベントを企画されていることについて話された。また、移住者が新しい工芸文化を丹波篠山に根付かせ、「工芸のある空間演出」ができればと考えられているとお話をいただいた。
- 井本氏からは、MASSE 丹波篠山が様々な団体から構成される任意団体で、観光送客から移住まで総合的な窓口となっていることや、「里山暮らし 5 日間～人とつながる旅」というツアーを企画し、体験型観光コンテンツや市民との交流、里山暮らしを体験できる宿泊施設などを用意し、将来的な移住候補者との接点としても役立てようとしていると話を伺った。今後も年数回実施して採算ベースに乗せ、移住者や関係人口の増加につなげたいとお話をいただいた。

【域内連携の重要性】

- モデレーターの小山氏から、丹波篠山では生業がとても魅力的な文化資源になっているのではないかと質問があり、丁野氏からは燕三条の事例として、いわゆるオープンファクトリーから始め、年数を重ねる中で町全体の祭典になり、まちづくりにつながっているとのお話があった。また、マスから個別の時代になると、地域の様々な事業者の協力がなければ、魅力的な観光商品はできなくなるとの意見があった。
- 域内連携については、同じ目標に向かって別々に努力していた 6 団体が、協力して目指すことに賛同した（井本氏）、情報共有とその提供でファンの拡大をサポートするような、自由参加の緩いシステムにしている（加古氏）、丹波焼の組合はひとつだけであり、産地を守ろうという地元愛で強くまとまっている（市野氏）との回答があった。
- キーマンについては、移住者の場合もあれば、地域の有力なリーダーの場合もあり、地域の社会構造にもよる（丁野氏）との意見が出された。

【今後の展望】

- 今後の展望については、今あるまだ皆が経験していないことを組み合わせたコンテンツをつくり、移住者の増加につなげたい（井本氏）、多くの工芸家が住む地域であることを発信し、他産業との新しいパズルをつくっていききたい（加古氏）、丹波焼の産地が残っていくために、他産業とつながり可能性を広げたい（市野氏）との回答があった。
- 質疑応答で行政の役割についての質問があったが、丁野氏からはしっかり計画を作成し、文化資源を持っている民間を支える仕組みも重要との意見があった。



総括

／文化庁文化創造アナリスト・学校法人稲置学園理事 佐々木 雅幸 氏

- 丹波篠山市はこの十数年間で着実に進化し、現在は次のフェーズの入口にあり、伝統の焼き物の産地の中で全く新しい動きが出てきた。この町の人々が工芸を大切にしており、そこに移住者が集まってきている。これは行政の応援で、文化遺産から文化資本に変わってきたことを意味している。
- 「クリエイティブ暮らし」は新しいというよりは、むしろゆったりとした日常の暮らしの体験であり、どれだけ質の高い体験や経験を準備できるかが重要である。また経済価値だけでなく、移住者を増やすためには里山暮らしツアーは強力な武器になる。現在はテストマーケティングを行って結果が出てきており、行政はここに集中投資すべきだ。
- CCNJ では、UCCN との連携を深める国際ネットワーク部会と、丹波篠山市がリードして創造農村部会を立ち上げる。グローバルとローカル、この両輪で閉塞状況にある日本をクリエイティブに変えてほしいと願っている。

【3月12日（土）】エクスカージョン

日本六古窯の一つにも数えられる丹波焼の郷と、「里山暮らし4泊5日ツアー」の一部を体験するツアーを実施した。訪問したのは下記の通りである。

・加古工房

陶芸家の加古勝巳氏より、加古工房及び丹波篠山での陶芸活動について話を伺った。また、クラフトヴィレッジ代表として行ってきた、丹波篠山市で活躍する陶芸家とその使い手の交流を生む仕掛けづくりについても説明された。



・泊まれる学校 おくも村

閉校を活用した宿泊施設「泊まれる学校 おくも村」で、おくもの魅力を伝える交流地点としての取組について、在所スタッフから説明を受けた。施設内には、談話室、レンタルスペース、シェアオフィスなどもあり、地域と都市をつなぐ場としての機能を持っている。



・福住地区見学 自転車工房 ハイライダー

福住地区にある自転車ショップ兼自転車工房では、福住の田園風景を堪能するサイクリングツアーを通じて、自転車のある暮らしを案内している。



・MAGNUM COFFEE

福住の伝統的建造物群保存地区にある、昭和初期に建造された芝居小屋を改装し、丹波篠山の自然豊かな四季を感じながら楽しめるコーヒーを提供している。



・丹波篠山デカンショ節

日本遺産のストーリーにもなっている丹波篠山デカンショ節には、篠山の魅力を唄いついでいる。デカンショ節保存会のメンバーに福住地区の唄を披露いただいた。



・丹波立杭焼市野伝市窯

陶芸家の市野達也氏のガイドで、伝統工芸品である丹波立杭焼の振興と丹波篠山市観光の拠点である「丹波伝統工芸公園 立杭陶の郷」を見学した。また、植木鉢に特化した窯元である丹波立杭市野伝市窯について話を伺った。



4. 現代芸術の国際展部会 in 珠洲市

開催日：令和4(2022)年1月21日(金)、22日(土)

開催方法：現地 ラポルトすず 他

オンライン開催 (ZOOM ウェビナー)

主催：珠洲市

共催：文化庁、創造都市ネットワーク日本 (CCNJ)

テーマ：「持続可能な地域社会と国際芸術祭」

～里山里海×アート×SDGsの融合と新しいコモンズの視点から～

参加者数：現地19名、オンライン30名(担当者ミーティング)

【1月21日(金)】担当者ミーティング

基調講演「持続可能な地域社会と国際芸術祭」

／奥能登国際芸術祭 総合ディレクター 北川 フラム氏

【概要】

2021年にコロナ禍の中、2回目となる「奥能登国際芸術祭2020+」を開催したことについて、公開した作品紹介を行いながら、珠洲市の魅力を紹介された。奥能登国際芸術祭の価値は、観光振興よりもアーティストや観光客と市民の間に関係性が生まれ、市民が地域に誇りを持つことにあるという。また、さいはての厳しい地域こそ面白いと感じ、芸術祭を通じて、“ここに住む”意味を見出すきっかけにもなっていると説明された。

- 珠洲市は能登半島の先端にあり、三方を海に囲まれている地域であるため、資本主義の中ではこのような地域は不便だと思われていたが、室町時代から続く地域活動が非常に強く、豊かな生活がある。これからの日本を考えるうえで非常に可能性に富んだ地域であり、芸術祭を通じて魅力発信に取り組まれている。特に珠洲市では9月・10月にお祭りが集中しており、アートとともに祭りも楽しんでもらえるよう、奥能登国際芸術祭の会期を秋祭りの時期に合わせている。方向性の一つとして観光振興があるが、それよりも大事なことはアーティストと市民が一緒になって作品を作り上げることで、市民が地域に誇りを持つことにある。
- 奥能登国際芸術祭は3年に1度のお祭りだが、それまでの準備期間が重要である。例えば空き施設を活用した「さいはてのキャバレー」では、多様な文化活動が行われ、これが芸術祭の準備につながっている。また、参加アーティストを市民が丁寧にケアすることで、また作品と観光客を市民がつなげる役割を果たすことで、新たな関係性が出来ていくことも重要だ。
- 珠洲市は人口が大幅に減少している地域だが、寒さも含めて厳しい地域こそ面白いのであって、芸術祭を通じて、“ここに住む”意味を見出すきっかけにもつながっている。地理的特徴や気候の側面からも、能登半島は東西の文化が混ざり合う地域であり、またユーラシア大陸と日本をつなぐ地域であり、面白さが生まれる背景を持っている。奥能

登国際芸術祭では廃校になった保育所や公民館などを徹底的に活用するように工夫されたが、珠洲市全体で家仕舞いを行うため、芸術祭を通じて大掃除をして、これからの未来を考える機会としている。

パネルディスカッション「持続可能な地域社会と国際芸術祭

～里山里海×アート×SDGsの融合と新しいコモンズの視点から～

／国連大学サステイナビリティ高等研究所 OUIK 事務局長 永井 三岐子氏

金沢 21 世紀美術館 学芸部長 黒澤 浩美氏

金沢市都市政策局 企画調整課 主査 笠間 彩氏

珠洲市長・奥能登国際芸術祭実行委員長 泉谷 満寿裕氏

<モデレーター>前 金沢大学特任教授 宇野 文夫氏

- 珠洲市は、2011 年に世界農業遺産に認定され、2017 年に奥能登国際芸術祭を開催し、2018 年には SDGs 未来都市に認定された。このような背景から、「持続可能な地域社会と国際芸術祭～里山里海×アート×SDGs の融合と新しいコモンズの視点から～」をテーマにパネルディスカッションが行われた。
- 泉谷市長からは、人口がピーク時から 1/3 まで減少し、また石川県内でもっとも高齢化率が高い厳しい現状にある中、地域の維持・発展のために魅力を高める取り組みを進めており、特に奥能登国際芸術祭を通じて移住者数が増加し、転入超過に転じたという話をいただいた。
- 黒澤氏からは、金沢 21 世紀美術館でまちづくりに取り組んできた経験を踏まえ、奥能登国際芸術祭でもアーティストがまちや風景を変えていっていることを紹介された。芸術祭への期待として、アーティストを介して「知る・気づく」こと、また「元気になっていく」こと、自らが自分ごととして関わり方を見つけることがあると話された。
- 笠間氏からは、金沢市が取り組む SDGs の取り組み「金沢 SDGs ツーリズム」を紹介された。これまでの経済・社会・環境の取り組みを SDGs に統合し、発信することで、市民と観光客が交流し、金沢市の魅力の向上につながると話された。
- 永井氏からは、国連大学での活動として、次世代に向けた里山里海の価値発信の取り組みについて紹介された。具体的には、地域の気候や風土に影響された豊かな食「ごっつお」を紹介するため、絵本づくり等に取り組んだというお話をいただいた。
- モデレーターの宇野氏が、SDGs の 17 の目標の中にアートが含まれていないことを指摘され、それに対して「アーティストは課題解決はしないが気づきを与えることに長けており、作品を通じて地域で起きていることに気がつくことが出来る」（黒澤氏）、「金沢市では歴代藩主が争いを避けるため、学術や文化に投資してきた」（笠間氏）といった意見があった。
- 最後に、今後どうすれば珠洲市に若い人が来るか、という宇野氏の質問に対して、「多様性を認めること」（永井氏）、「芸術祭を継続していくこと」（黒澤氏）、「文化と産業を融合し、住みやすいまちにしていくこと」（笠間氏）、「芸術祭を通じて色々なことができるまちだと気づいてもらうこと」（泉谷市長）といった回答があった。

総括

／文化庁文化創造アナリスト・学校法人稲置学園理事 佐々木 雅幸氏

北川フラム氏が「さいはて」を選んで奥能登国際芸術祭を開催したことを高く評価し、大都市で取り組んでいることとは正反対のことに取り組むことがSDGsの実現につながり、そこに興味のある人が移住する可能性を示された。また、世界の人々が奥能登の歴史文化や自然の価値を評価することで、地域住民の誇りが呼び覚まされ、コミュニティの再生につながっていることこそアートの力であろうと、まとめられた。



【1月22日（土）】エクスカーショーン・芸術祭座談会

「奥能登国際芸術祭 2020+」展示作品を鑑賞するツアーを実施した。鑑賞作品は下記の通りである。

- ・アレクサンドル・コンスタンチーノフ「珠洲海道五十三次」
- ・トビアス・レーベルガー「Something Else is Possible／なにか他にできる」
- ・山本基「記憶の回廊」
- ・中島伽耶子「明るい家」
- ・塩田千春「時を運ぶ船」
- ・スズ・シアター・ミュージアム「光の方舟」

また、午後には開催都市である珠洲市と参加者による意見交換が実施された。



5. 幹事団体会議の開催

CCNJ の運営を行うため、幹事団体会議を 3 回開催した。新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響から、第 1 回は令和 2 年度に引き続きオンライン開催とし、第 2 回は現地とオンラインによるハイブリッド開催とした。第 3 回については書面開催とした。

(1) 第 1 回幹事団体会議

日時	令和 3 年 6 月 28 日 (月) 13:30~14:30
会場	オンライン (ZOOM) (事務局：文化庁地域文化創生本部 3 階 会議室)
参加者	札幌市、鶴岡市、松戸市、豊島区、横浜市、新潟市、高岡市、金沢市、可児市、浜松市、京都市、神戸市、篠山市、宇部市、高松市、北九州市、大分市 文化庁、顧問、事務局
議題	〈報告事項・意見交換〉 ・オンライン化の対応について ・ウェブサイトのリニューアルについて ・参加登録状況について ・令和 3 年度 事業計画と役割分担について ・これからの CCNJ に向けて

(2) 第 2 回幹事団体会議

日時	令和 3 年 11 月 12 日 (金) 13:30~14:30
会場	京都市京セラ美術館 講演室 オンライン (ZOOM)
参加者	現地：金沢市、可児市、京都市、高松市 オンライン：札幌市、八戸市、鶴岡市、松戸市、豊島区、横浜市、新潟市、浜松市、神戸市、丹波篠山市、北九州市、大分市 文化庁、顧問、事務局
議題	〈報告および承認事項・意見交換〉 ・参加登録状況について (報告) ・令和 3 年度 各種会議の報告について (報告) ・これからの CCNJ に向けて ・令和 4・5 年度 代表幹事及び幹事団体について
	

(3) 第3回幹事団体会議

日時	令和4年2月14日(火)～18日(金)
会場	書面開催
参加者	札幌市、鶴岡市、松戸市、豊島区、横浜市、新潟市、高岡市、金沢市、可児市、浜松市、京都市、神戸市、丹波篠山市、宇部市、高松市、北九州市、大分市 文化庁、顧問、事務局
議題	〈報告および承認事項・意見交換〉 ※令和3年度ネットワーク会議(総会)配布資料の検討 ・参加登録状況について ・令和3年度事業報告について ・これからのCCNJの在り方について ・規約の改定について ・次期幹事団体の改選(案)について ・令和4年度事業計画(案)について

6. これからの CCNJ の在り方について

CCNJ の今後の活動の更なる活性化を図るため、以下のとおりビジョンを定めるとともに、体制強化に資する企画検討委員会及び部会を立ち上げる。

(1) ビジョン

多様な文化芸術創造都市への取り組みを通じて、 SDGs の達成にも貢献できるプラットフォームとしての発展

都市特性、人口規模、地域課題等により、地方公共団体が取り組む文化芸術政策は多様である。

CCNJ は、2030 年までに、そうした多様な政策事例の研究や共有、地域の連携・協働を推進するプラットフォームとして、文化芸術の持つ創造性を地域振興、観光・産業振興等に活用し、地域課題の解決に取り組む活動を推進することにより、SDGs の達成に貢献する。

(1) CCNJ 活性化のための運営体制の強化について

①企画検討委員会の設置について

代表幹事は、CCNJ が新たなビジョンの達成に向かうなかで、幹事団体会議での議論を活性化させるため、特に重要な事項（政策セミナーの実施内容等）の検討を行う機関として、企画検討委員会を設置することができることとする。

②部会の新設について

「現代芸術の国際展部会」に加え、新たに「創造農村部会」「国際ネットワーク部会」を立ち上げる。

新設部会	設立趣旨
創造農村部会	人口規模の小さい自治体や農村地域を有する自治体のネットワーク化を図り、課題やノウハウ等の共有を通して、文化芸術による創造性を活用した地域課題の解決やまちづくりに取り組む。
国際ネットワーク部会	創造都市の世界的なプラットフォーム機能を強化し、ユネスコ創造都市ネットワークや東アジア文化都市といった国際的なネットワークとの経験交流及び参加都市の拡充等による相互の発展を図る。

これからの CCNJ の在り方について

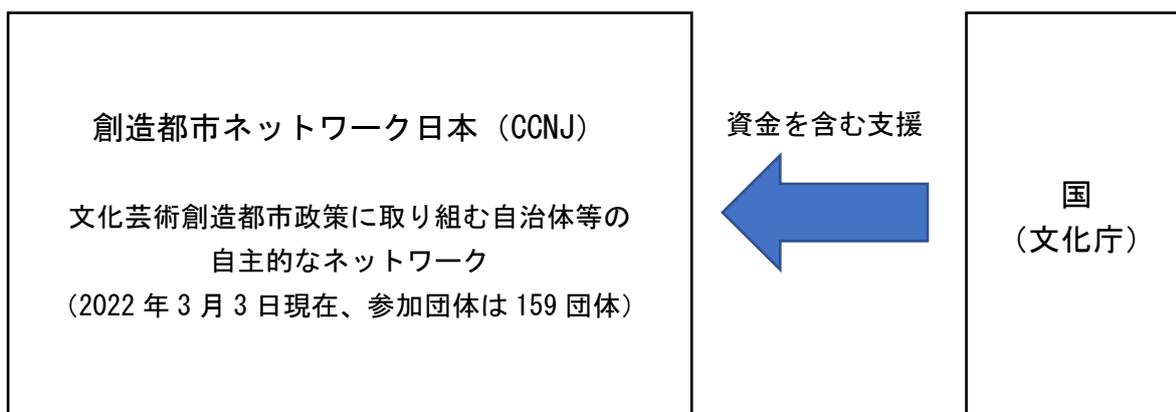
創造都市ネットワーク日本（CCNJ）は、2013年の設立以降、東京オリンピック・パラリンピック競技大会を契機として、世界に誇る日本の文化的な景観や資産を活かしたまちづくりや日本各地で行われている芸術フェスティバルを積極的に世界に発信していくためのプラットフォームとなり、「2020年に日本が『世界の文化芸術交流のハブ』となる」という目標に向けて、ネットワークを拡大するとともに、文化芸術活動を強力に推進してきたところです。

今後、これまで拡大してきたネットワークによる文化芸術創造都市の交流、取組をさらに活性化していくため、これまで同様に文化庁の支援を受けながら、より実効力のある組織体制など CCNJ の在り方や方向性を決めていくことが必要です。

1. CCNJ の現状と課題

(1) CCNJ 設立時の方向性

- CCNJ は、「**地方自治体等多様な主体の創造都市の取組を支援するとともに、国内及びアジアをはじめとする世界の創造都市間の連携・交流を促進するためのプラットフォームを形成し、我が国における創造都市の普及・発展を図る**」ため、2013年1月に設立された。
- 2014年3月に策定された「文化芸術立国中期プラン」では、CCNJ を「文化芸術創造都市」の国内拠点として支援することで、**日本の創造都市のネットワークや情報発信の拠点、世界との交流拠点としての機能を強化することとし、2020年までに約170自治体【全自治体の約1割】の参加団体とすることを目指してきた。**
2022年3月3日現在、参加団体は159団体であり、目標を達成できていないが、都市だけでなく農村も参加していること、自治体以外の団体も参加していること等、日本の独自性も見られる。



(2) 10年間の社会動向の変化

- 2017年に「文化芸術基本法」が改正され、文化芸術の本質的価値だけでなく、社会的・経済的価値を追求していくことが求められている。すなわち、**CCNJへの参加に関わらず、どの自治体も文化芸術創造都市として取り組んでいくことが期待されている。**
- 2015年に国連総会でSDGs（持続可能な開発目標）が設定され、翌年のユネスコ創造都市ネットワーク総会において、SDGsに創造都市がどのように貢献できるのかを議論している。また、**ユネスコでは2019年末に文化を通してSDGs達成に貢献するに資する指標（Culture|2030 Indicators）を作成。**

CCNJにおいても、「**創造都市の活動とSDGsの活動というのは、非常に親和性がある**」（2018年度ネットワーク総会、浜松市長）といった発言が行われてきた。

(3) 新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響

- **新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、世界中の文化芸術は大きな影響を受けている。**
- こうした中、2020年度のCCNJセミナー等はオンライン、または会場及びオンラインのハイブリッド開催で行われたが、**建設的な意見交換がしづらい、セミナー等の後の交流会を実施できないといった課題も散見された。**

(4) CCNJを取り巻く課題

①2021年度以降のCCNJのビジョンの確立

- 「文化芸術立国中期プラン」で設定されたCCNJの目標年次が過ぎており、CCNJとしての新たなビジョンやKPIの設定が必要と考えられる。特に文化多様性が求められる中では、量から質への転換が求められる。

②ポストコロナに向けたCCNJの更なる活性化の方向性

- **新たなCCNJのビジョンを踏まえた文化芸術創造都市政策の研究等**
ビジョンに掲げるSDGsの達成に対して文化芸術創造都市政策が貢献していくための施策・事業等の研究、情報交換等をCCNJにおける主要事業として実施する。
- **既存事業の拡充**
複数のCCNJ加盟団体が共有できる政策の検討に当たっては、積極的に部会を設置して継続的に議論が可能な体制を構築する。
- **新規事業の検討**
今後ますますグローバル間での交流等が重要になる中、東アジア文化都市やユネスコ創造都市ネットワーク等とCCNJの新たな関係構築を模索する。

③セミナー・ワークショップ等の今後のあり方

創造都市政策 セミナー	<p>■現状 文化行政に携わる自治体職員が創造都市政策を学ぶ研修機会として開始。開始当初は講義形式によるセミナーを実施していたが、現在は当番都市による事例発表等が中心となっている。</p> <p>□改善案 文化芸術創造都市政策の知見の少ない自治体でも CCNJ への加盟が容易になるよう <u>職員向けの研修（基礎編）を継続的に行う（可能であれば、映像化する）</u> とともに、「SDGs の達成に貢献する文化芸術創造都市政策の在り方」を主要なテーマとして、単発のセミナーではなく、<u>幹事団体会議の直轄事業とし、旬の話題を取り入れながら研究発表等を行う。</u></p>
創造農村ワー クショップ	<p>■現状 人口規模の小さい自治体が取り組む創造都市政策の好事例として、創造農村の理解や認識を広めていくため、「創造農村ワークショップ」を実施している。</p> <p>□改善案 複数の自治体による継続的な政策検討が容易となるよう、<u>固有の課題を扱う部会として立ち上げる。</u></p>
現代芸術の国 際展部会	<p>■現状 テーマを絞った形で情報交換やネットワーク構築のため、CCNJ において初となる部会（事務局：横浜市）を設立。全国の国際展を実施する自治体における継続的な政策検討等が進んでいる。</p> <p>□改善案 特になし（引き続き継続）</p>
国際ネットワ ーク部会	<p>□新規案 先進事例に学び、創造都市政策を積極的に推進するため、<u>ユネスコ創造都市ネットワークや東アジア文化都市に係る情報交換やネットワーク構築を行う「(仮)国際ネットワーク部会」を立ち上げる。</u></p>
分科会	<p>■現状 これまでは地域ブロック別での情報交換やネットワークの構築を目的として実施。昨年度からはコロナ禍の状況を踏まえたオンライン化に合わせ、地域ブロックにとらわれない CCNJ 加盟団体の様々なニーズに沿った研究等を行うこととした。</p> <p>□改善案 特になし（引き続き継続）</p>

2. これからの CCNJ の方向性

(1) ビジョン

多様な文化芸術創造都市への取り組みを通じて、 SDGs の達成にも貢献できるプラットフォームとしての発展

都市特性、人口規模、地域課題等により、地方公共団体が取り組む文化芸術政策は多様である。

CCNJ は、2030 年までに、そうした多様な政策事例の研究や共有、地域の連携・協働を推進するプラットフォームとして、文化芸術の持つ創造性を地域振興、観光・産業振興等に活用し、地域課題の解決に取り組む活動を推進することにより、SDGs の達成に貢献する。

(2) KPI

(アウトプット)

- ・ CCNJ が開催するセミナー、部会等の開催数

(アウトカム (短期)) ※1 年毎に評価する指標

- ・ CCNJ が開催するセミナー、部会等に参加した自治体・団体の数

(アウトカム (中長期)) ※5 年毎に評価する指標

- ・ CCNJ に加盟する市町村における文化芸術推進基本計画の策定率：〇〇%
※ 具体の目標策定率の設定に当たっては、CCNJ 加盟自治体に策定率を聴取し、設定する。
- ※ 全国の市町村 (政令市、中核市除く) の策定率は、13.6% (226 / 1663)
(令和元年10月時点)
※ 具体の目標策定率の設定に当たっては、CCNJ 加盟自治体に策定率を聴取する。

(取組期間)

- ・ 令和4年度～令和12年度

(3) 運営体制

① 幹事団体会議

- ・ 代表幹事は、CCNJ が新たなビジョンの達成に向かうなかで、幹事団体会議での議論を活性化させるため、特に重要な事項 (政策セミナーの実施内容等) の検討を行う機関として、企画検討委員会を設置することができる。
- ・ 企画検討委員会は、代表幹事都市及び過年度の代表幹事都市 (直近の2都市) と各部署の事務局とで構成し、各都市の経験を反映できるようにする。
- ・ 企画検討委員会で検討した内容は幹事団体会議で報告するものとし、幹事団体の賛同が得られれば、幹事団体の意見とすることができる。

- ・ 企画検討委員会の開催はメールやオンライン会議システムの活用を主とし、参加都市の負担軽減を図る。

②創造都市政策セミナー

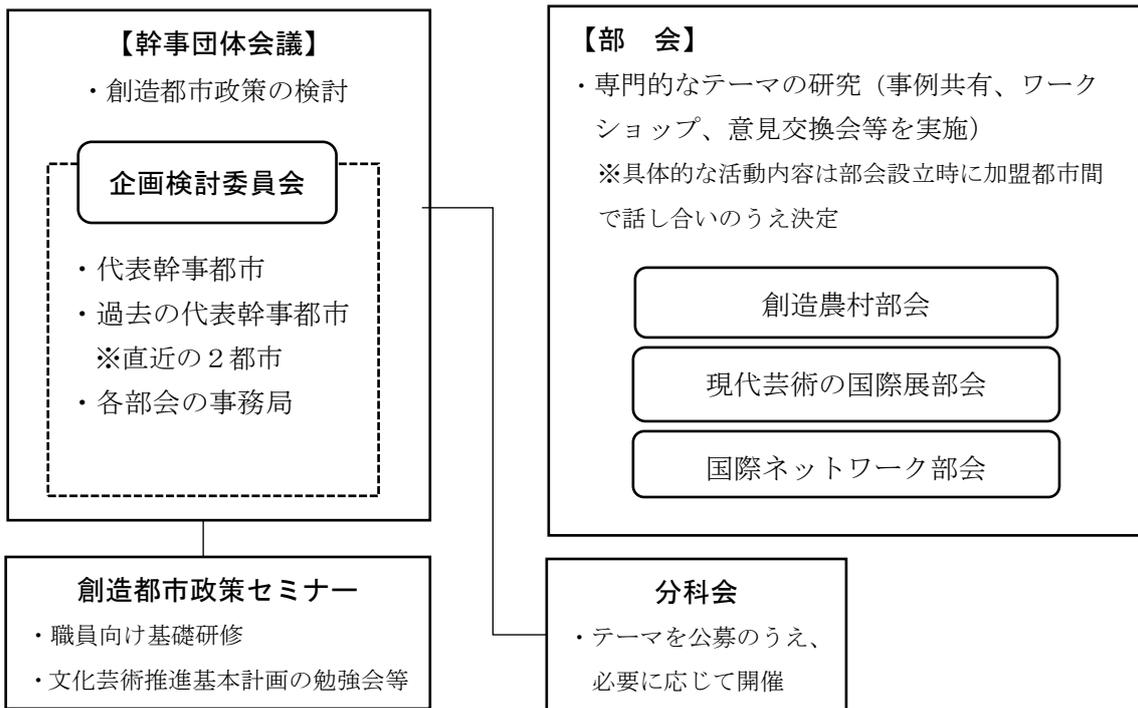
- ・ 文化芸術創造都市政策の担当職員向けの研修(基礎編)を継続的に行う(可能であれば、映像化する)
- ・ 「SDGs の達成に貢献する文化芸術創造都市政策の在り方」を主要なテーマとして、幹事団体会議の直轄事業とし、旬の話題を取り入れながら研究発表等を行う。

③部会

- ・ 新たに「創造農村部会」「国際ネットワーク部会」を立ち上げる。
- ・ 各部会は、毎年度テーマを設定し、年間を通じて研究等を行い、その成果を総会等で報告する。

④分科会

- ・ テーマを募集のうえ、必要に応じて開催する。



第3章 文化芸術創造都市に関する国内外の情報収集・分析・提供、 創造都市事業の効果検証・発信

文化芸術創造都市に関する国内外の情報収集・分析・提供を行うとともに、本事業の効果検証及びその発信を行った。

1. 国内の創造都市に関する調査研究

■調査の目的

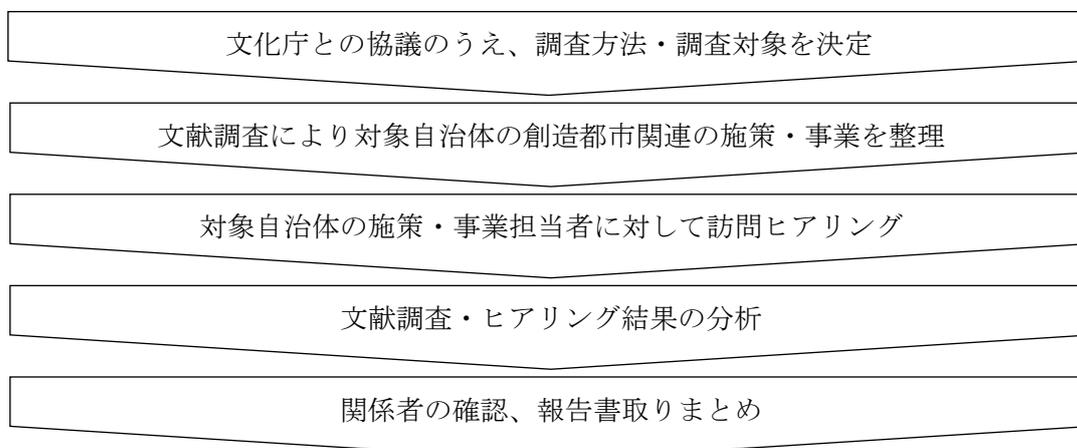
- ・わが国における創造都市の普及・発展を図ることを目的として、平成25年1月に発足したCCNJであるが、設立10周年を迎えるに際して新たなビジョンを策定したところであり、改めて今日的な国内の創造都市についてモデル事例を分析するものである。
- ・なお、調査結果については事例集として取りまとめることで、CCNJに参画する全国の自治体の職員が今後、創造都市に係る施策・事業に取り組む上での参考資料として活用されることを目指すものである。もって、CCNJ加盟自治体の活動の活性化を図るとともに、CCNJへの新規加盟自治体の拡大を促すものである。

■調査対象

- ・創造都市に係る施策・事業は、自治体の規模や地域事情によって創意工夫が行われていると推察されることから、国内の都市規模ごとに優良事例を取り上げて調査対象とした。(例;大都市:人口50万人超/中都市:人口10万人~50万人/小都市:人口10万人以下)
- ・なお、今年度調査については、文化庁当局と協議の上で下記の2都市を取り上げた。

大都市（人口50万人超）	京都市（人口約146万人）
小都市（人口10万人以下）	丹波篠山市（人口約4万人）

■調査フロー（令和3年10月～令和4年3月）



■ 調査項目

- ・ 調査対象自治体における都市経営の基軸と創造都市政策との関係性
- ・ 創造都市関連の各政策分野における取組の系譜（およそ 20 年程度）
- ・ 創造都市関連のエポック事業（目的・内容・成果・担当部署等）

1. 京都市における都市経営の基軸と創造都市政策との関係性

「文化を基軸とした都市経営」を永年に渡り推進

○京都市では、最上位の都市理念としている1978年の「世界文化自由都市宣言」において、「優れた文化を創造し続ける 永久に新しい文化都市」と自己規定するなど、半世紀以上前から文化を基軸とした都市経営を希求している。

○このため、京都市の都市経営においては、「あらゆる政策の基軸を文化に置く」ことを京都市長自ら公言している。

2001年の「京都市基本構想」では、「千年を超えて大切にしてきた市民の生き方と文化資源」に着目し、「これからもまちづくりに生かし、都市文明のあるべき姿を率先して追求し続ける」ことを定めている。更に2003年に「国家戦略としての京都創生の提言」の中で、文化・景観・観光を中心に「京都があらゆる努力をし、世界の宝・京都を守り創生する」ことを提言している。

○主軸となる文化政策においては、2006年に「京都文化芸術都市創生条例」を定め、「文化芸術を通じて市民生活やまちづくりの取組を活性化」するほか、「学術や産業との連携を図ることにより、京都を新たな魅力に満ちあふれた世界的な文化芸術都市として創生」することを謳っている。具体的には、文化芸術に係る施策のほか、文化と景観、文化と観光に係る施策の振興が位置付けられる。

○この様に、京都市における創造都市関連の政策領域は多岐に渡り、所管する部局が広範なことから、具体的な施策・事業については、文化市民局、産業観光局、都市計画局などが各々に担当している。次頁以降にて、各々の関連計画や施策を俯瞰する。

文化を基軸にした都市経営

世界文化自由都市宣言（1978年）

都市は、理想を必要とする。

○全世界の人々が、人種、宗教、社会体制の相違を超えて、平和のうちに、ここに自由に集い、自由な文化交流を行う都市。京都は千年の都であるが、ただ過去の光栄のみを誇り孤立すべきではない。優れた文化を創造し続ける永久に新しい文化都市でなければならない。

京都市基本構想（2001～2025年）

京都には千年を超えて大切にしてきた「市民の生き方」と「文化資源」がある。

＜市民の得意わざ＞

○めきき：本物を見抜く	○たくみ：ものづくりの精緻な技巧
○きわめ：何ごとにも極限まで研ぎ済ます	○こころみ：進取の精神
○もてなし：来訪者を暖かく迎える心	○始末：もったいない、始末

＜あらゆる文化資源＞

○伝統文化（茶道、華道等）	○有形文化財（神社仏閣、絵巻物等）
○無形文化財（伝統芸能、お祭り等）	○町屋や街並み
○モノづくり文化	○もてなしの心や宗教的な癒しの文化

これからもまちづくりに生かし、都市文明のあるべき姿を率先して追求し続ける。

「国家戦略としての京都創生の提言」（2003年）

文化・景観・観光を中心に

○京都があらゆる努力をし、世界の宝・京都を守り創生する

○京都の努力だけでは解決できない課題を国家戦略に

京都文化芸術都市創生条例（2006年）

○優れた京都の文化芸術を通じて市民生活やまちづくりの取組を活性化し、併せて学術や産業との連携を図ることにより、京都を新たな魅力に満ちあふれた世界的な文化芸術都市として創生することを目指す。

京都文化芸術都市創生条例

前文

第1章 総則（第1条～第6条）

第2章 文化芸術都市の創生に関する基本的施策

第1節 文化芸術都市創生計画（第7条）

第2節 文化芸術都市の創生のための施策（第8条～第21条）

- 第8条 暮らしの文化に対する市民の関心と理解を深めるための施策
- 第9条 市民が文化芸術に親しむことができるようにするための施策
- 第10条 子どもの感性を磨き、表現力を高めるための施策
- 第11条 伝統的な文化芸術の保存及び継承等のための施策
- 第12条 新たな文化芸術の創造に資するための施策
- 第13条 文化芸術に関する活動と地域のまちづくりに関する活動の活性化に資するための施策
- 第14条 国内外の地域との交流を促進するための施策
- 第18条 施設の充実を図るための施策
- 第19条 文化芸術及び学術研究が相互に影響を与え、創造的な活動を新たに生み出すための施策
- 第21条 市民の自主的な活動を支援するための施策

○第17条 景観を保全し、及び再生するための施策

- 第15条 国内外の人々の関心と理解を深めるための施策
- 第16条 文化財を保護し、及び活用するための施策
- 第20条 文化芸術及び産業が相互に影響を与え創造的な活動を新たに生み出すための施策

第3章 京都文化芸術都市創生審議会（第22条～第24条）

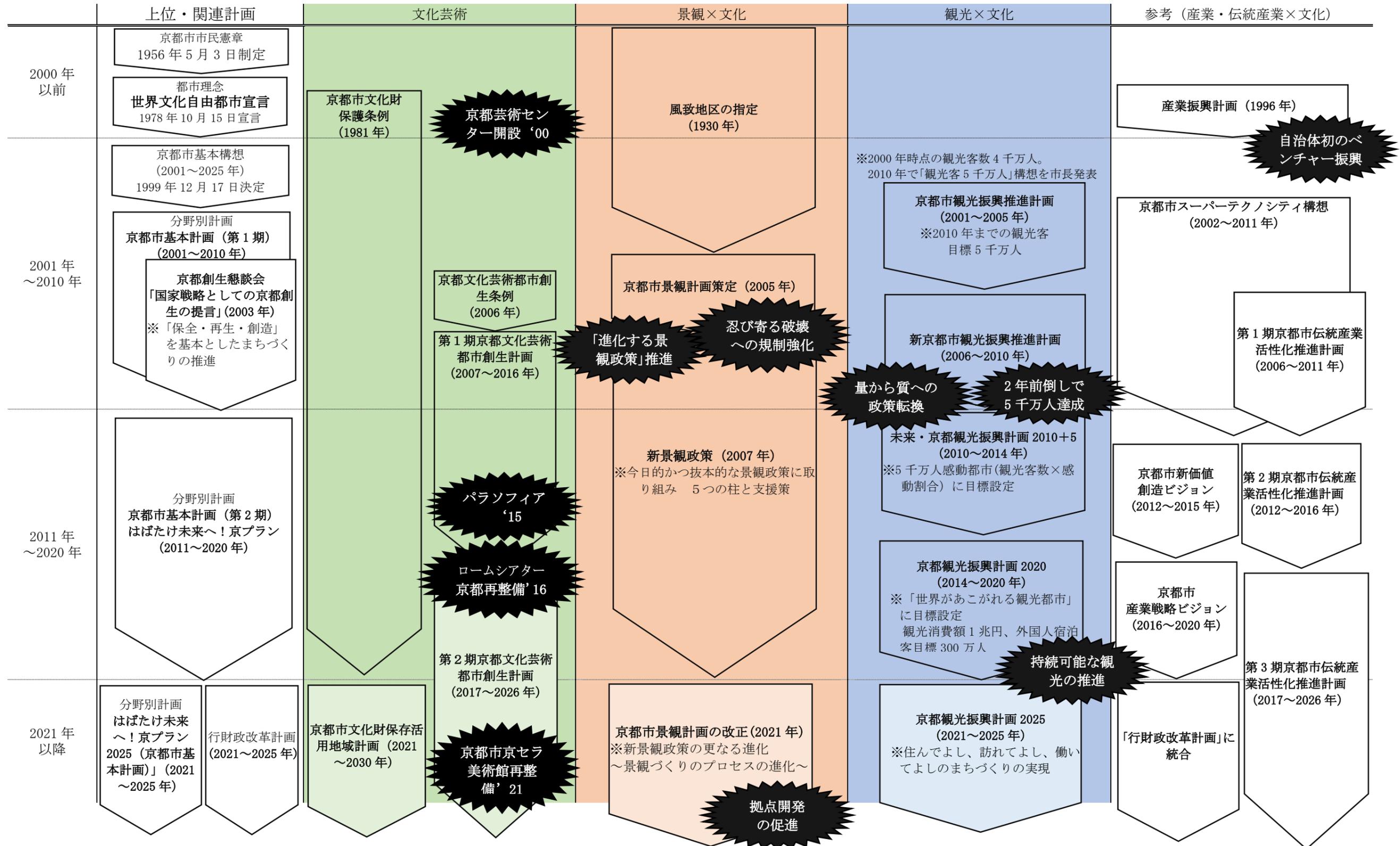
第4章 雑則（第25条）

2. 創造都市関連の各政策分野における取組の系譜

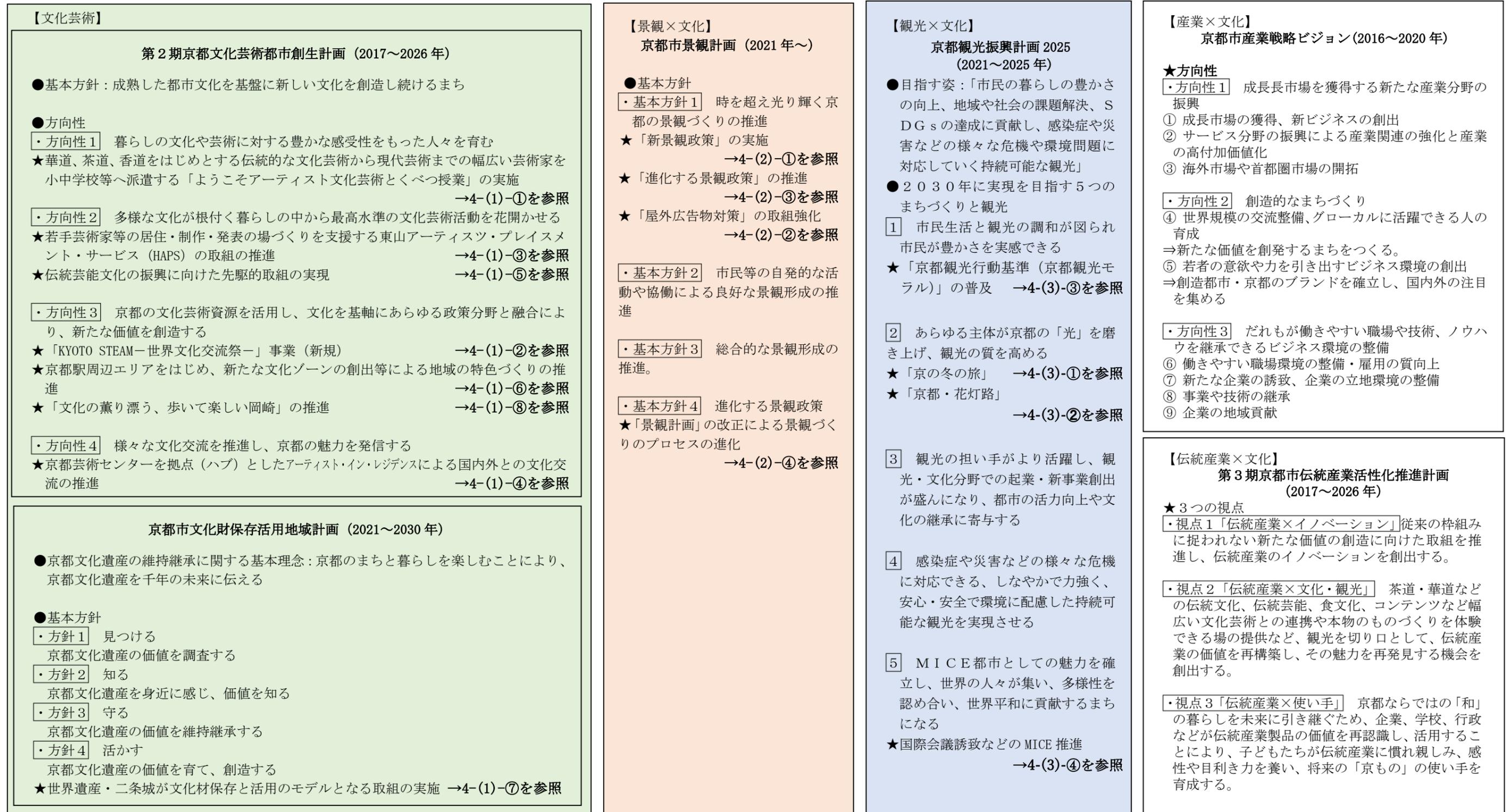
文化芸術を中心に 景観・観光など様々な政策領域と連携

○文化財保護と芸術文化振興を両輪とする文化芸術行政、街並みに調和したまちづくりを通じて都市文明のあるべき姿を希求する景観行政、文化財の保護と活用を通じて国内外の人々の関心と理解を深める観光行政など、新

たな魅力に満ちあふれた世界的な文化芸術都市を実現するべく、時々々の情勢に対応した施策・事業を部局ごとに立案し遂行している。



3. 主要な現行計画の概要とエポック事業



各政策分野におけるエポック事業について、次頁以降で具体的に紹介

4. 創造都市関連のエポック事業

(1) 文化芸術等の関連施策

- 京都市は3千点を超える文化財を有する歴史文化都市であり、文化庁の支援も得て古くから文化財保護活動に力を注いでいるが、その多くは神社仏閣をはじめ市民や企業・団体によって所有されており、その維持継承のために民間セクターの多大な資金や労力がかけられてきた。長い年月に渡り官民連携による文化財保護活動が取り組まれてきた稀有な都市である。
- このように文化財に係る優れた土壌を生かし、今日的にも文化芸術に対する市民の関心を高めるとともに、伝統的な文化芸術の維持・継承はもとより、新たな文化芸術の創造とこれを担う人材育成の施策を推進している

- また、多数の世界遺産を擁するポテンシャルを生かした観光誘客や、京都駅周辺や岡崎地域における文化芸術を生かしたまちづくりなど、新たな都市魅力の創出にも力を入れている。
- 今後も、京都市の有する文化芸術のポテンシャルを継承・発展させるとともに、他分野における施策との融合により、「世界的な文化芸術都市として創生」することが望まれる。時々の事情や課題に応じて、戦略的・系統的な政策体系を再構築していくことが求められる。

<子どもの完成を磨き、表現力を高めるための施策>

① 「文化芸術授業（ようこそアーティスト）」事業

文化芸術に親しみ、その楽しさを知る子どもたちの育成

- 目的：文化芸術に触れる機会を創出し、子どもたちの豊かな感性や人間性を育むとともに、京都の文化芸術を支え、継承と想像をしていく次世代の「担い手」「支え手」となる若者を育成する。
- 期間：2007年
- 内容：伝統的な文化芸術から現代芸術まで幅広い分野の一流の芸術家から、講話や鑑賞教室に留まらず、実際にプロの講師の手ほどきを受けながら、文化芸術活動を体験・体感し、身体で表現する喜びを感じる時間を提供。
- 成果：能や邦楽、茶道、演劇、現代美術など、各種授業を小学校等の市内数十箇所で開催。 (2021年は、小学校43校、総合支援学校4校、中学校6校、児童館4館、保育園12園、幼稚園3園、計72箇所で開催予定)。
- 担当：文化市民局文化芸術都市推進室 文化芸術企画課

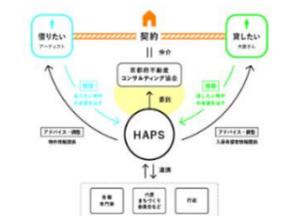


<新たな文化芸術の創造に資するための施策>

③ 若手芸術家等の居住・制作・発表の場づくりを支援する東山アーティスト・プレイメント・サービス (HAPS) の取組の推進事業

クリエイティブな人材育成の仕組みづくり

- 目的：若いアーティストが京都市内に居住し活動できる環境を整え、彼らの創作の活力をまちの活力に繋げることを目指し、2011年9月にHAPS実行委員会を設立。2019年4月に法人化。
- 期間：2007年に仕組みづくり、2011年に組織化、2019年法人化
- 内容：
 - ・居住環境整備（若手芸術家に適した価格・設えの空家情報の提供）
 - ・制作環境整備（閉校施設等を活用した制作スタジオの提供）
 - ・発表支援（専門家ネットワークを生かしてプロ芸術家になるために必要な技術・知識の習得サポート事業。また、地域と連携したワークショップ等の事業実施）
 - ・仕事コーディネート（若手芸術家に向けた仕事情報の収集&紹介を通じて、彼らの社会的・経済的地位を向上。「芸術家×仕事コーディネート事業」）
- 成果：2019年実績 年間相談受付数201件/物件マッチング件数4件
- 担当：文化市民局文化芸術都市推進室 文化芸術企画課

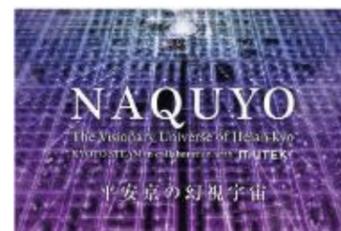


<国内外の地域との交流を促進するための施策>

② 「KYOTO STEAM—世界文化交流祭—」事業

新たな価値創造人材育成の仕組みづくり

- 目的：京都から「未来に希望が持てる社会」を構想・発信。特に、デザイン志向・アート志向の人材を対象に、「京都だからこそ可能な価値創造人材の育成」することを重視。
- 期間：2017年
- 内容：「京都賞」が先駆的に取り組んできた科学・技術・芸術の三分野を掛け合わせ、文化芸術の新たな可能性と価値をワールドワイドに問う事業。アート×サイエンス・テクノロジーのフェスティバル開催を中核に、「人材育成 (LABO)」「ネットワーク構築 (NETWORK)」を合わせた事業を展開。
 - ・参画機関：京都市、市立芸大、京都市京セラ美術館、京都市動物園、(公財)京都市芸術文化協会、(公財)京都市音楽芸術文化振興財団、(公財)京都高度技術研究所、京都商工会議所、京都経済同友会、日本放送協会京都放送局、京都新聞社、CCCアートラボ。
- 成果：平竹プロデューサー（元文化市民局長、京産大教授）のもと、市立芸大と連携したアーティスト目線の人材育成が進行中。
- 担当：文化市民局文化芸術都市推進室 文化芸術企画課



<国内外の地域との交流を促進するための施策>

④ 「アーティスト・イン・レジデンスプログラム (AIR)」事業

日本全国のAIRをネットワークするハブ拠点づくり

- 目的：京都市が文化庁と連携し、京都芸術センターが全国のアーティスト・イン・レジデンス (AIR) の連携拠点に相応し事業を実施することにより、文化芸術の発信力強化、国際的な交流による新たな文化芸術の創造に寄与。
- 期間：2000年
- 内容：
 - ・アーティスト、クリエイター、研究者などの創作活動を支援する短期間滞在型のプログラム募集情報を提供
 - ・シンポジウムや他のAIRと連携したイベント等を実施
- 成果：2000年以来、京都芸術センターと連携し、アーティスト・イン・レジデンス (AIR) プログラムを推進。その後、他のAIRと連携したイベント等を数多く開催、2017年に「文化芸術創造拠点・京都プロジェクト」にて、国内外の文化施設や異分野と連携した事業を展開。2018年に世界的なAIRネットワーク組織であるレザルティス財団の例会を開催、2019年には全国のAIRの拠点となるためのウェブプラットフォーム構築、アーカイビングや調査研究、相談窓口機能の設置等を実施。
- 担当：文化市民局文化芸術都市推進室 文化芸術企画課 及び京都芸術センター



<伝統的な文化芸術の保存及び継承等のための施策>

⑤ 伝統芸能アーカイブ&リサーチオフィス(Traditional Arts Archive & Research Office: TARO) 事業

伝統芸能の継承・発展に向けたアーカイブづくり

- 目的：伝統芸能の継承や保存、用具・用品とその材料の確保、普及・創造・発信活動など、伝統芸能文化の総合的な活性化の観点から、ネットワーク構築や基礎調査等を推進。
- 期間：2017年
- 内容：
 - ・ネットワーク構築に向けたヒアリングとアーカイブ調査
 - ・保存修復に関するリサーチ
 - ・古典芸能に新たな光をあてたシンポジウム開催
 - ・古典芸能の創生のための総合イベント開催
 - ・市民向け講座実施
- 成果：
 - ・54機関・施設等とネットワーク構築でき、情報共有
 - ・伝統芸能文化の各種復元・活性化プログラムの実施
 - ・伝統芸能文化の創生のためのシンポジウム&講演の開催
 - ・市民向け講座の開催：YouTube 能楽講座「高砂の思い出」全10回
 - ・コロナ禍における伝統芸能の状況調査の実施
- 担当：文化市民局文化芸術都市推進室・文化芸術企画課 及び 京都芸術センター



<文化財を保護し、及び活用するための施策>

⑦ 「世界遺産・二条城におけるMICEプラン」事業

国宝を活用した観光誘客の推進と修繕経費をねん出する仕組みづくり

- 目的：MICE戦略の推進と「世界遺産・二条城」の更なる活用のため、観光MICE施策と文化財保護・活用策を融合した「京都ならではのおもてなし」創出。
- 期間：2014年～
- 内容：二条城のMICE利用を希望する企業・団体等を誘致し、一般観光客に影響のない時間帯やエリアを活用した会議、研修、レセプション、展示会、イベント等の開催。収益は二条城の本格的修繕事業に必要な経費として充当。
- 成果：文化財の価値共有、文化や歴史に対する興味関心の想起、来城者の拡大、本格修理の財源確保、観光や産業への経済波及効果など。
- 担当：文化市民局文化芸術都市推進室 元離宮二条城事務所

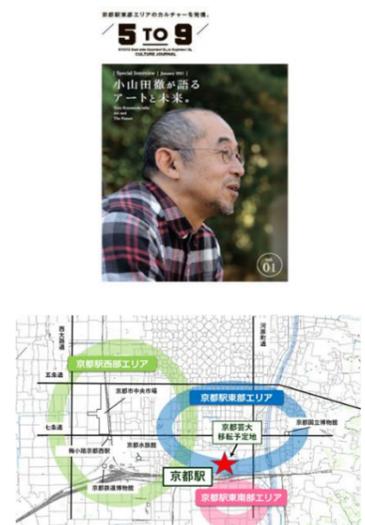


<文化芸術に関する活動及び地域のまちづくりに関する活動の活性化に資するための施策>

⑥ 京都駅周辺エリアをはじめ、新たな文化ゾーンの創出等による地域の特色づくりの推進

「文化芸術都市・京都」の新たなシンボルゾーンの創生

- 目的：京都市立芸術大学の移転などを契機として、文化芸術を創造し、国際的に様々な人が集い、交流し、まちが賑わい、世界に発信する「文化芸術都市・京都」の新たなシンボルゾーンの創生。
- 期間：2019年～2028年度（京都駅東部エリア活性化将来構想期間）
- 内容：活性化将来構想に基づくまちづくり
 - ・多様な人が交流し、多様な価値観が尊重される豊かなコミュニティの実現
 - ・京都駅と東山の文化エリアを結ぶ立地特性を活かした新たな賑わいの誘導
 - ・教育、研究、交流による「人づくり」をはじめする、文化芸術を創造・発展させ、次世代に継承するための環境整備
- 成果：京都駅東部エリア広報誌『5TO9』の発行。「京都駅東部エリアの飲食店等におけるアート作品の展示」「高瀬川を歩く」、「高瀬川オープンカルチャーフォーラム 2020」などの文化芸術イベントの開催。
- 担当：総合企画局プロジェクト推進室



<文化芸術に関する活動及び地域のまちづくりに関する活動の活性化に資するための施策>

⑧ 「文化の薫り漂う、歩いて楽しい岡崎」の推進

「夜のアート」「施設間連携」による岡崎地区の活性化

- 目的：岡崎エリアでは国際交流会館、京都市京セラ美術館、動物園、ロームシアタ京都（京都会館）、京都国立近代美術館など、多彩な文化・交流施設が立地するなど文化・交流ゾーンを形成している。このうち、京都市京セラ美術館やロームシアタ京都などのリニューアルアロームシアタ、これら施設を活用して、文化芸術やMICE拠点としての機能強化、美しい景観の保全・継承、近代化遺産の保全と活用、新しい賑わいの創出などにより、世界の人々が集いほんものに出会える「京都岡崎」の実現を推進。
- 期間：2012年
- 内容：
 - ・岡崎地域活性化ビジョンの策定・推進
 - ・官民地域連携のエリアマネジメント組織「京都岡崎魅力づくり推進協議会」を運営
 - ・地域連携型で魅力創出を図るための取組推進や情報発信
- 成果：まち歩き連続講座「岡崎探検」、「岡崎ときあかり 2019」「岡崎桜回廊ライトアップ&十石舟めぐり」等の開催を通じて夜の魅力や賑わい創出。また、「京都岡崎魅力づくり推進協議会」公式facebookページ、総合情報サイト「京都岡崎コンシェルジュ」の運用や総合情報パンフレット「岡崎手帖」発行等を通じて、岡崎地域の総合案内・情報発信。年間500万人を超える人々の交流の場づくりを達成。
- 担当：左京区役所まちづくり推進室



(2) 景観×文化の関連施策

- 京都市は、多数の歴史文化遺産のほか、伝統的な住まいである京町家によって構成された特徴的な街並みを有するが、1930年の「風致地区」指定以来、時代ごとに都市開発に伴う景観問題が発生してきた。その都度、市民運動が盛り上がり、これに対応する形で景観規制の施策が導入されるなど、常に市民主導で景観行政に取り組みられてきた。
- 平成19年の新景観政策では、「忍びよる破壊」に対して規制を強化するとともに、その後の景観政策の基本スタンスを「規制から創造へ」と転換している。市民目線&きめ細かな「進化する景観政策」により、京都市が積極的な都市ブランディングに取り組み始めた政策の大転換である。当初は「新景観政策による資産価値を下げ

- る」との危惧も高まったが、その後の「京都に住みたい」という人たちの増加に寄与するなど、市内の不動産価格は維持あるいは上昇している。
- また、町家を改造したIT企業の社屋や、市立芸大や中央市場周辺へのアトリエの集積など、新たなクリエイティブ人材の集積が進み、駅周辺など拠点周辺のポテンシャルの高い地区では、若者が働く場や街の活力を生み出す規制緩和など、新たな都市計画誘導策が求められている。「京都のアイデンティティとは何か」「市民の暮らしや生業とは何なのか」を捉えて、守るべきものは守りながら景観政策を進化させることが求められている。

<景観を保全及び再生するための施策>

① 「新景観政策」の実施

「忍びよる破壊」に対する抜本的な規制の見直し

- 目的：風致地区指定以来、京都市では様々な施策導入してきたものの、バブル期に多くの景観資源が喪失、「景観問題をしっかり考えよう」との市民的機運が盛り上がり、2002年には建築学会や京都経済同友会が提言を発表。京都市も2003年に「国家戦略としての京都創生」の懇談会を立ち上げ、2007年に「新景観政策」を取りまとめ、新たな景観政策への転換を開始。
- 期間：2007年～
- 内容：
 - ・建築物の高さ規制の見直し
 - ・建築物等のデザイン基準や規制区域の見直し
 - ・眺望景観や借景の保全の取組
 - ・屋外広告物対策の強化
 - ・京町屋などの歴史的建造物の保全・再生
- 成果：当初は全市的な建築物の高さ規制等による不動産価格の下落や建設産業の停滞が懸念されたが、その後も近隣他都市（大阪市・神戸市）と比べて特異な傾向は見られず、むしろ京都特有の景観を保全・再生することで「京都に住みたい」人が増加していると見られる。
- 担当：都市計画局 都市景観部 景観政策課



<景観を保全及び再生するための施策>

③ 「進化する景観政策」の推進

市民とともに創造する景観づくりと市民目線のキメ細やかな施策の導入

- 目的：新景観政策に対する市民や事業者の意見を反映し、景観政策全体を点検しながら長期的に京都の将来を見据えた高さ規制の枠組みを維持しつつ、景観政策を進化させる仕組みの導入。
- 期間：2011年～
- 内容：「市民とともに創造する景観づくりに関する仕組みの整備」「デザイン基準の更なる充実」「優れた建築計画の誘導」「申請手続の見直し、基準の明文化」などの仕組み整備。
 - ・「京都市景観白書」の発刊
 - ・「景観レビュー」制度の導入（自然、歴史的遺産、町並み、伝統、文化等との調和を踏まえた、地域ごとの特性に応じた眺望景観の創生）
 - ・「地域景観づくり協議会」制度の立上げ（建築等をしようとする事業者等は、建築等の計画内容について、協議会と意見交換を実施する仕組み）
- 成果：5年に一度の「京都市景観白書」発行、データ集の毎年更新。市内12地区における「地域景観づくり協議会」を立ち上げ。
- 担当：都市計画局 都市景観部 景観政策課

<景観を保全及び再生するための施策>

② 「屋外広告物対策」の取組強化

7年の歳月をかけた屋外広告物の適正化

- 目的：屋外広告物を、景観をかたちづくる重要な要素として捉えて、美しく品格のある都市景観となるように、屋上屋外の広告物全般の禁止、地域特性に応じた大きさ・色・表示できる高さなどの許可基準見直し。
- 期間：2007年に条例改正、2012年取組体制を強化
- 内容：
 - ・屋外広告物制度の定着促進
 - ・是非のための指導の強化と支援策の充実
 - ・京都にふさわしい広告物の普及促進
- 成果：2012～2014年に集中的に取り組んだ結果、短期間で劇的に屋外広告物が改善。2012年当時、市内全域で約45,600カ所の屋外広告物のうち約7割が新基準に不適合。2018年時点で96%適正化。
- 担当：都市計画局都市景観部 広告景観づくり推進課

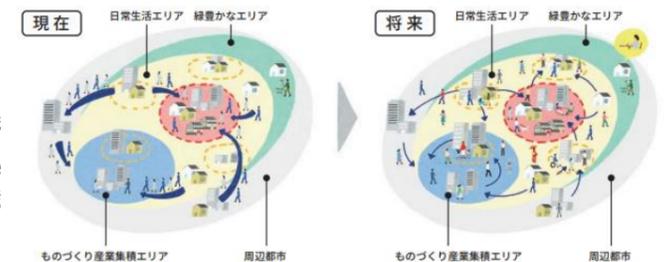


<景観を保全及び再生するための施策>

④ 「景観計画」の改正による景観づくりのプロセスの進化

新たな都市計画マスタープラン（2021年）と整合する景観政策への進化

- 目的：市民一人ひとりが京都の自然や文化を大切にしながら、生き活きと暮らし働き活動する姿がなによりも大切であるとの認識に立ち、持続可能なまちづくりを推進するため、新景観政策の基本的な枠組みは維持しつつ「景観政策の更なる進化」を盛り込んだ計画の策定。
- 期間：2021年～
- 内容：
 - ・地域ごとのビジョンを共に実現する景観づくりのプロセスの進化
 - ・都市計画と連動した、持続可能な都市の構築
 - ・地域ごとのビジョンに応じた優れた計画の誘導
 - ・緩和する部分・強化する部分の両立
- 方向：新たな都市計画マスタープランを踏まえて、きめ細やかな景観誘導を導入。地域ごとのビジョン（地域中核拠点等）の策定予定。各拠点のビジョンに応じた観誘導システムの導入を企図。
- 担当：都市計画局都市景観部 景観政策課



(3) 観光×文化の関連施策

- 京都観光の要諦は、千二百年の都として培ってきた豊富な歴史文化資源の活用にあるが、冬と夏の閑散期の落ち込み対策が長年の課題とされており、非公開文化財の特別公開や京都・花灯路事業など、文化財を活用した観光誘客など永年に渡る地道な取組を重ねてきた。
- 更に、2000年には「観光客5千万人」構想を発表、2年前倒しで目標達成すると2010年には「5千万人感動都市」を掲げて「量から質」を目指した観光政策への転換を図り、同時に、自治体初のMICE戦略を策定し、MICEを強力に推進、国際会議誘致の大幅な拡大に成功したところである。
- 折からのブームにより大量のインバウンド客が入浴したものの、観光客が街にあふれて一部観光地の混雑、観

- 光客マナーや違法・不適正な民泊などが社会問題となる中、観光課題への対応策などを推進している。
- 新型コロナウイルスの影響により、2020年以降の観光入込客の壊滅的な落ち込みの中、2021年策定の「観光振興計画2025」においては、市民の生活と調和した観光政策へと舵を切っている。1956年策定の「京都市市民憲章」において国際文化観光都市の市民である誇りをもって「旅行者をあたたく迎える」ことを謳うなど、いわば観光政策は京都市民の行動規範と言える。今後も、観光政策は京都の歴史文化遺産に対する国内外の関心と理解を深め、京都の観光産業を通じたにぎわいづくりに期待が持たれる。

<文化財を活用し、観光課題解決にも資する施策>

閑散期対策、時間等分散のための文化財を活用した仕掛けづくり

① 「京の冬の旅」事業

- 目的：冬季（オフシーズン）の観光誘客と新商品開発。
- 期間：1967年～
- 内容：文化財・伝統文化・地場産業など奥深い京都の魅力を伝え、ゆっくり楽しめる観光キャンペーンの実施
 - ・非公開文化財の特別公開
 - ・定期観光バスの特別コース運行
 - ・京都「千年の心得」等
- 成果：閑散期の国内観光客の増加に貢献。また、「生け花」「文化芸術体験」イベントにより京都の奥深い魅力を発信。
- 担当：産業観光局 観光MICE推進室、京都市観光協会

② 「京都・花灯路」事業

- 目的：冬季（オフシーズン）の観光誘客、消費額単価の高い「宿泊客」の拡大
- 期間：2002年～東山、2005年～嵐山。2021年度で終了
- 内容：閑散期（東山3月、嵐山12月）の夜間ライトアップ開催
- 成果：年間を通じた月毎の繁閑差の縮小。民間主催によるライトアップイベントの併催による来街者の拡大。
- 担当：産業観光局 観光MICE推進室、京都市観光協会



<文化芸術・文化財・学術・産業の融合施策>

④ 国際会議誘致などのMICE推進

京都の魅力を生かした国際会議の誘致

- 目的：MICEの開催により、学術の振興やビジネス機会の創出、都市格の向上、市民の知見の向上等に繋げる。
- 内容：
 - ・MICE商談会への積極参加
 - ・寺院をはじめ、京都らしい特別な会場（ユニークベニュー）の活用支援
 - ・コンベンションビューローの体制整備、開催経費の助成、伝統産業製品の購入支援、式典等における舞・茶道・着物着付等の経費支援などの実施。
- 成果：国際会議開催件数の伸長。2011年から2019年まで2.79倍（137件→383件）。コロナ禍の2020年も28件の開催
- 担当：産業観光局 観光MICE推進室、京都文化交流コンベンションビューロー



<国内外の人々の関心と理解を深めるための施策>

③ 「京都観光行動基準（京都観光モラル）」の普及・啓発

持続可能な観光の実現を目指した京都観光モラルの普及

- 目的：観光事業者・従事者等、観光客、市民とともに大切にしていきたいことを行動基準（観光モラル）として明確化し、持続可能な観光を推進。
- 期間：2020年～
- 内容：
 - ・観光事業者・従事者等を対象とした普及開発活動「京都観光モラルワークショップ」の開催
 - ・市民・観光客を対象とした「KYOTO again」キャンペーンの実施
- 成果：観光事業者・従事者等、観光客、市民がお互いに尊重しあい・持続可能な観光を推進し、SDGsの達成にも貢献することを企図。
- 担当：産業観光局 観光MICE推進室、京都市観光協会



<参考情報>

「宿泊税」の導入

- 目的：国際文化観光都市としての魅力を高め、及び観光の振興を図る施策に要する費用に充当。
- 期間：2018年10月1日～
- 内容：ホテル、旅館、簡易宿所等のほか、いわゆる違法民泊等への宿泊者も含めた、すべての宿泊者が納税。ただし、修学旅行参加者等課税免除有。（税込の用途）
 - ・住む人にも訪れる人にも京都の品格や魅力を実感できる取組の推進。例：文化財保護や歴史的景観の保全、快適な歩行空間の創出、観光や文化の担い手の育成
 - ・入浴客の増加など、観光を取り巻く情勢の変化に対する受入環境の整備。例：入浴客の安心安全の確保、観光案内標識の整備、観光地トイレの拡充
 - ・京都の魅力の国内外への情報発信の強化。このほか、「京町家の保存・継承」、「道路の渋滞や公共交通機関の混雑対策」、「違法民泊の適正化」などについても、宿泊税を財源として、各種取組を進めている。
- 成果：2019年度42億円の宿泊税

出典：京都市ホームページ

宿泊税について <https://www.city.kyoto.lg.jp/gyozai/page/0000236942.html>

宿泊税の用途について <https://www.city.kyoto.lg.jp/gyozai/page/0000275019.html>

1. 丹波篠山市における都市経営の基軸

- 本市は、篠山城を中心とした城下町、旧街道の宿場町、農村集落や窯業集落、森林と里山、農地などで構成されており、美しい田園風景のなか、全国ブランドとして名高い黒大豆、山の芋、丹波栗などが生産されている。京文化の影響も強く、また「元朝能」や「デカンショ節」など民族芸能も継承されており、明治維新後の国土の発展、戦後の高度経済成長やバブル経済などの影響も軽微であったことから、これらの歴史文化資源や農村景観、生業としての農業やものづくり、そして市民の生活スタイルなどが守られてきた。中でも、篠山や福住の伝統的建造物群保存地区は、歴史的な町並みの保存・修復のモデルとして広く知られている。
- 一方、少子高齢化と農業の担い手の減少、農地の荒廃など、本市の環境変化が進む中、市民が大切にしてきたものを守り、次代に受け継ぐための新たな方策が模索されていた。2009年に現市長が発表した「農都宣言」では、「自然の気候風土に恵まれた日本一の農業の都」を目指すことを掲げ、同年開催の「丹波篠山築城400年祭」では、まち歩きや地域の文化・歴史資源を再認識するワークショップ、伝統的な行事への参加など、市民の手づくりにより多岐に渡る諸事業を展開した。この折にスタートした「丹波篠山・まちなみアートフェスティバル」が今日まで発展拡大しているほか、一般社団法人ノオトの設立や「古民家の宿・集落丸山」事業の端緒を開くなど、今日の施策の土壌づくりの役割を果たしている。

- 2012年には、本市における創造的なまちづくりの理念や行動計画に係る「篠山市創造都市推進計画」を策定し、暮らしに結びつく産業を「創造産業」と定義し、食・農・里山の在り方、地域の拠点・空間・景観、伝統工芸・文化振興など、5つのテーマで行動方針を示している。期間満了後の今日においても、「本市における施策は全て、創造都市関連施策である」として、政策全般の根幹をなす存在として位置づけられている。
- 2015年には、クラフト&フォークアート分野でユネスコ創造都市ネットワークに加盟。大都市部から至近距離にありながら、都市化に走らず農村文化や伝統産業を守り続けており、今後も農村風景や地域コミュニティ、日常の生活文化が有する創造性に光をあてた「創造農村」のまちづくりが期待されている。
- また、豊かな自然風景や城下町の町並みなどが残存していることも本市の特徴である。こうした地域環境を守るため、2012年に「篠山市景観計画」、2014年に「丹波篠山市土地利用基本条例」「丹波篠山市都市計画マスタープラン」の策定も行われている。

暮らしに結びついた産業Ⅱ「創造産業」の継承・発展

農都宣言（2009年）

- 自然を生かした農業の振興や「丹波篠山ブランド」を誇る特産物の作り手確保、農地の保全、農村暮らしを守ることを実現。
 - ・「いのち」を支える「農」を未来に育む
 - ・「農」を支える「人・土・水」を大切に育む
 - ・「丹波篠山」を支える「特産物」を育む
- 「農業の都、日本一の篠山市」を目指す。

丹波篠山築城400年祭（2009年）

- 丹波篠山築城400年を機に、「これから100年のまちづくり」を市民が考える契機として開催。
- 市内各地で取り組む市民の手作りイベントを通じて、「創造都市に取り組もう」という意識の盛り上げに成功。

篠山市景観計画（2012年）

- 大規模な建築物の新設や既存の建築物等の老朽化・建替えに伴い、自然・田園・歴史が調和した町並みが失われつつある中、先人たちから引き継いだ美しい景観を守り、次代に継承するために策定。
- 景観形成の方針やルール、市民と協働した「景観まちづくり」の推進などを定め、本市の景観をより美しいものにし、ゆとりと潤いのある生活環境の形成を目指す。

篠山市創造都市推進計画（2013～2017年）

- 第2次篠山市総合計画を上位計画とした「創造的なまちづくり」推進のためのアクションプランとして策定、各部署が所管するビジョンや計画などを横断する位置づけとして策定。
- 本計画の3つの役割。
 - ・地域コミュニティの文化・経済活動についての行動計画
 - ・「創造的なまちづくり」の理念を市民が共有する役割、世界に発信する役割
 - ・他の施策との連携を図る指針として役割

篠山市創造都市推進計画

●ビジョン

暮らしに結びついた産業（創造産業）の育成

～先人が残した技術や資産に／新しい知恵を重ねて／生業として継承する～

地域コミュニティが主体となりそれぞれの生活を豊かにする場所（トポス）、豊富な資源、森林、里山、川、農地、集落、町並み、伝統的建造物などを、篠山人の技術と魂をもって耕し、未来へと継承していく

●目標

- 1) 美しい地域空間の創造
- 2) 地域コミュニティの再生と創造
- 3) 魅力ある地域資源を活かした「創造産業」の振興
- 4) 推進体制の整備と創造人材の育成
- 5) 創造都市の情報発信と交流

●事業計画

<1> 人材育成・組織形成

- ◎地区ごとのまちづくり検討会
- ◎食育
- ◎地域文化教育 → 4-(3)-①「丹波篠山 デカンショ節の保存・継承・振興」を参照
- ◎事業協同組合の設立
- ◎技術の継承・交換の場（職人学校）づくり → 4-(3)-③「篠山イノベーターズスクール」を参照

<2> 食・農・里山

- ◎集落農業の再生 → 4-(3)-④「日本農業遺産認定」を参照
- ◎里山文化創造事業
- ◎生物多様性の確保
- ◎環境創造型農業 → 4-(3)-②「里山暮らしツアー」を参照
- ◎特産作物の継承・改良と在来作物の研究
- ◎スローフード事業
- ◎豊かな森づくり事業

<3> 地域の拠点・空間・景観

- ◎ 空き家活用事業
- ◎ 地区の拠点づくり事業 → 4-(2)-①「篠山伝統的建造物群保存地区」、4-(2)-③「福住伝統的建造物群保存地区」を参照
- ◎ 城下町活性化事業 → 4-(2)-②「太陽光発電施設の設置ガイドライン」、4-(2)-④「景観まちづくり刷新支援事業」を参照
- ◎ 景観形成事業
- 伝統工芸・文化振興
 - ◎ 丹波焼の振興
 - ◎ 幅広い文化芸術活動 → 4-(1)-④「丹波篠山クラフトヴィレッジ」を参照
 - ◎ 中世的な民俗芸能・城郭や伝統技術・文化の現代的継承

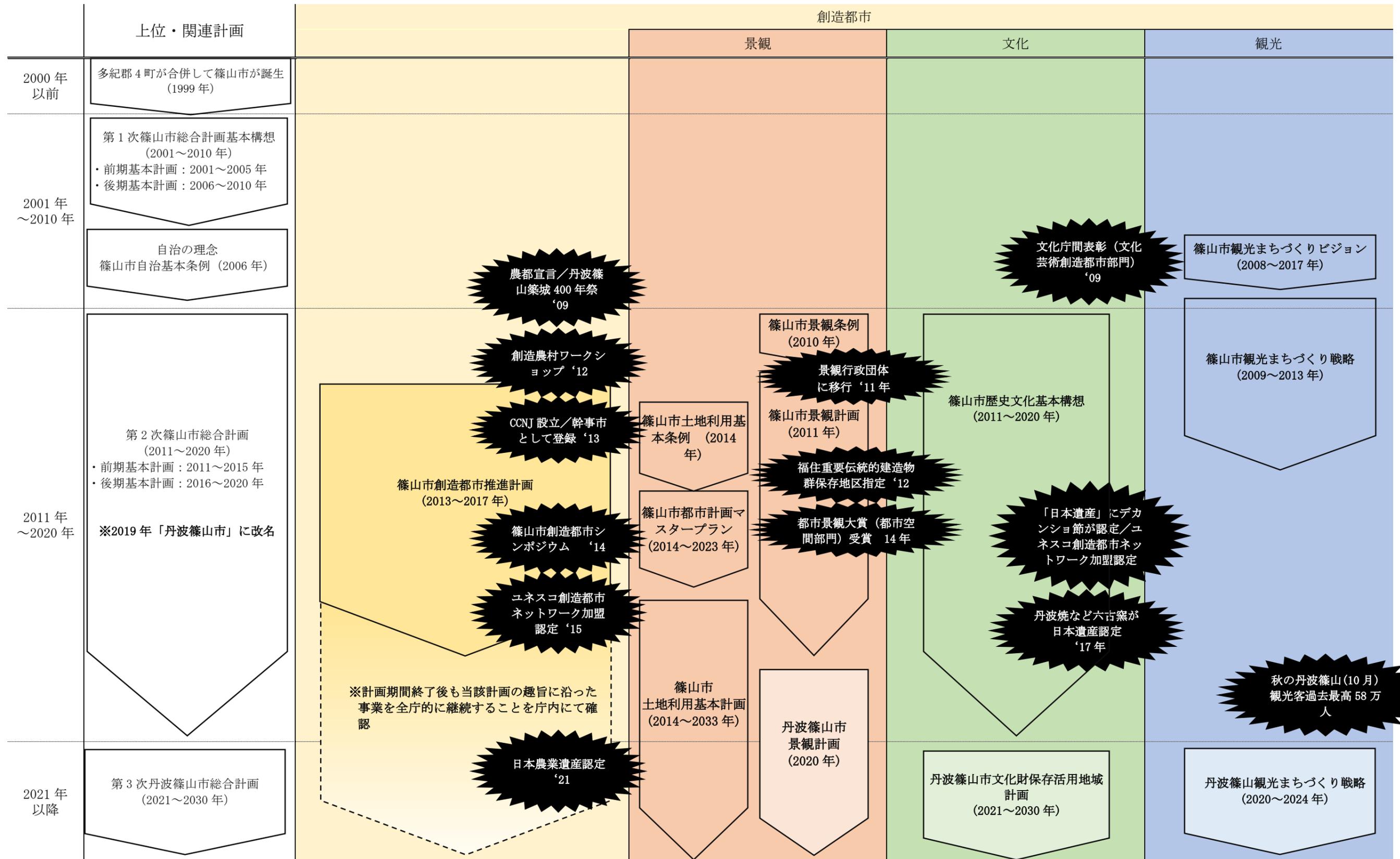
● 情報発信・交流

- ◎ 地域情報プラットフォームの構築
- ◎ 創造都市ネットワークへの参画 4-(1)-①「丹波篠山築城400年祭」を参照
- ◎ 創造農村推進事業 4-(1)-②「丹波篠山・まちなみアートフェスティバル」を参照
- ◎ 暮らしのツーリズム事業 → 4-(1)-③「古民家を活用した新たな交流拠点の開発」を参照

※ 当計画の計画期間は既に終了しているが、今日的な各種施策もこの計画に基づいて実施されて

創造都市におけるエポック事業について、次々以降で具体的に紹介

2. 創造都市関連の各政策分野における取組の系譜



3. 創造都市関連のエポック事業

(1) 伝統工芸・文化振興及び情報発信・交流の関連施策

○2009年の「農都宣言」と同年開催の「丹波篠山築城400年祭」は、本市における創造都市政策の黎明期のエポック事業として位置付けられる。まち歩きや地域の文化・歴史資源を再認識するワークショップ、伝統的な行事への参加など、市民の手づくりにより、多岐に渡る諸事業が実施された。「丹波篠山・まちなみアートフェスティバル」は今日まで継続されるなど、その後の官民連携のまちづくりの礎をなしている。

○市内在住の工芸家や美術家を巻き込んだ施策は、その後も盛んに取り組まれており、近年でも伝統工芸品の作り手と使い手の交流事業として「丹波篠山クラフトヴィレッジ」を開催しているほか、市内の飲食店や宿泊施設で使用する食器類への市内工芸品利用を促す「食と器の出逢い事業補助金」なども、地道な成果を上げている。

<情報発信・交流施策>

① 「丹波篠山築城400年祭」事業

ポイント：築城記念事業を生かした市民参加型のまちづくり

- 目的：丹波篠山築城400年を記念して、2009年に「丹波篠山築城400年祭（以下400年祭）記念事業」に取り組むことで、篠山市の魅力の再認識・再評価を行い、一過性のイベントではなく“篠山らしさ”を活かした持続可能なまちづくりへと展開を図る
- 期間：プレイベント2008年、メインイベント2009年4月～10月
- 内容：主催事業：記念講演、まちなみアート、地域の祭研究等
その他事業；市民・各種団体等が企画するイベントの支援
- 成果：市民や地域が主体となり、食の地産地消、歴史文化の保存・継承、環境保護活動等を展開
事業開催後も、滞在型観光への転換を目指したJRとの共同による「DESTINATION・キャンペーン」事業を展開
また、子どもたちの郷土愛を育むことで将来のUターンを促すとともに、大都市圏にアピールすることでJIターンを促進する施策を導入
- 担当：政策部 築城400年祭推進課



<情報発信・交流施策>

③ 古民家を活用した新たな交流拠点の開発

ポイント：地元の民間セクターによる宿泊施設・商業施設の展開

- 目的：古民家等の歴史的建造物を活用し、限界集落や街なかの魅力的な交流拠点を整備することで、これらの維持・継承と地域の新たな生業の創出、更には観光資源としての活用を図る。
- 期間：2009年 丸山集落と有限責任事業組合を設立、宿泊施設「集落丸山」開業。
2015年～一般社団法人ノオト等による「篠山城下町ホテル NIPPONIA」が中心市街地で開業。その後も多数の施設を開業。
- 内容：・集落丸山：事業企画立案・空き家の古民家を改修。宿泊施設として地域住民が運営。
・篠山城下町ホテル NIPPONIA：城下町全体を一つのホテルとして見立てた分散型の宿泊施設の運営。
- 成果：丸山集落では地元住民による宿泊施設を運営。5世帯19人の限界集落が、12世帯26人まで回復。
篠山城下町ホテル NIPPONIAでは9棟21客室の宿泊施設を展開。
- 担当：一般社団法人ノオト



<情報発信・交流施策>

② 「丹波篠山・まちなみアートフェスティバル」事業

ポイント：町家・町並みを活用した工芸作家・アーティストの表現の場づくり

- 目的：丹波焼の陶芸家をはじめ、市内の美術家、工芸家等を対象に、地域の文化資源（町家等）を積極的に活用することで、展示や発表の機会を提供するとともに、丹波篠山のブランド力向上につなげるもの
- 期間：2009年～
- 内容：市内在住の作家、篠山ゆかりのアーティストが町家で作品展示するなど、「文化資源（歴史的町並み、町家）とアートの融合事業」
・町家芸術祭の開催。子どもが参加するワークショップや陶芸、絵画、書、ガラスのパフォーマンス等
・ギャラリートーク（作家が作品に対する思いを語る会）
・街角コンサート（アマチュアからプロまでジャンル不問の演奏会）
・町家の芸術学校（講演やワークショップ開催）
- 成果：既存の美術館では出来ない試みとして定着。工芸作家や芸術家の活躍の場を提供できながら、地元のイメージアップに貢献
2018年のイベント開催10周年の際には、全国から18,000人が来場
地元ゆかりの作家をはじめ、メキシコ、ロシア、台湾、シンガポールなどから50名程度の作家が参加
- 担当：観光交流部 観光交流課



<伝統工芸・文化振興施策>

④ 「丹波篠山クラフトヴィレッジ」事業

ポイント：伝統工芸の作り手と使い手の交流機会の創出

- 目的：丹波篠山市内に移住して陶芸、木工、ガラス、染色、革、彫金等の工房やギャラリーを営む工芸家が増えていることから、市民や来街者がこれらを見学し、作り手と使い手が会える機会として開催
- 開始：2021年～
- 内容：5日間にわたって以下の活動を行った
・オープンファクトリー（普段は非公開のものづくりの現場を公開）
・ものづくり体験ワークショップ
・クラフトマーケット（王地山陶器所における開催）
- 成果：オープンファクトリーには、市内31カ所の工房が参画
クラフトマーケットでは、市内16工房が展示・即売。1,000人程度の来客
今後も継続開催することで、作り手と使い手、作り手同士のつながりが生まれることへの期待
- 担当：観光交流部 観光交流課



(2) 地域の拠点・空間・景観の関連施策

- 本市は、城下町、宿場町、農村集落や窯業集落、森林と里山、農地など多様な景観を有する。京阪神から至近距離にあるにも関わらず、戦後の高度経済成長やバブル経済などの影響も軽微であったことから、これらの町並みが比較的良く残されている都市である。
- 篠山城下町地区は、町並み保全の機運を受けて1993年に兵庫県の景観の形成等に関する条例に基づく景観形成地区（現在は丹波篠山市景観計画の歴史地区）に指定され、その後、2004年に篠山城下町地区の中心部が国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されている。また、2012年には市内2箇所目となる福住地区が国の重要伝統的建造物群保存地区に指定されたことに伴い、その周辺部を丹波篠山市景観計画の歴史地区として指定している。両地区ともに毎年数件ずつ保存整備と修景整備を実施している。
- 「農都宣言」に基づく面的な景観行政を進めるため、小規模自治体では珍しい「景観室」を庁内に開設、2010年に「景観条例」、2011年に「篠山市景観計画」、2014年に「篠山市土地利用基本計画」「篠山市都市計画マスタープラン」を

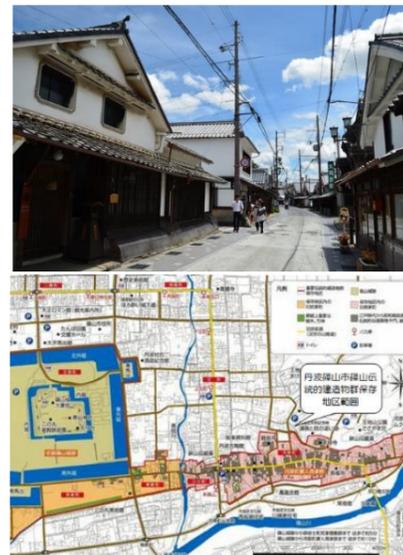
- 策定している。市域を「住宅が建っても良い地域」「工場がたっても良い地域」等に色分けし、無秩序な開発行為が起きないように規制誘導を図っているが、特に開発圧力の高い「農用地未指定の農振地域」では兵庫県の緑豊かな地域環境の形成に関する条例に基づく地区整備計画を定めている。また、200㎡以上の太陽光発電施設の立地基準を土地利用基本計画において定めることで、「創造農村」に相応しい環境保全に努めている。
- こうした一連の取組が評価され、2017年には全国10か所が指定された国の「景観まちづくり刷新モデル地区」の一つに選定されている。東京オリンピック開催に合わせた観光集客力の向上を図るべく、篠山重要伝統的建造物群保存地区内の無電柱化、篠山城下町地区内の道路美化など、3年間をかけてインフラ整備が実施された。
- このように、創造都市にふさわしい都市景観の整備・誘導を進めてきたところであり、観光客や移住者など外部から一定の評価を得るに至っている。今後は、市民自らが本市の景観の価値を日常的に体感享受できる施策が求められる。

<地域の拠点・空間・景観施策>

① 「篠山伝統的建造物群保存地区（通称：伝建地区）」

ポイント：城下町の歴史的な町並みの保存・修復を進める取組

- 目的：高齢化や空き家の増加、伝統的建物の取り壊しが進む中、歴史的市街地である篠山地区の継承に危機感が高まったことから、貴重な町並みの保存・活用を進めてまちの活性化を図る
- 期間：2004年に国の重要伝統的建造物群保存地区（伝建地区）に選定。以降、保存整備事業を継続
- 内容：国指定史跡篠山城跡と周囲の旧武家町、旧商家町から構成。東西約1,500m、南北約600m、面積約40.2haに及ぶ地域において、保存修理事業等を実施
2013年時点の伝統的建造物及び環境物件の特定件数は、伝統的建造物202件、伝統的建造物63件、環境物件72件
- 成果：2021年度末時点で91件の整備完了
篠山まちなみ保存会、建築士やNPOなどの専門家により、「丹波篠山まちなみアートフェスティバル」「ササヤマルシェ」「古民家再生プロジェクト」など、様々なまちづくり活動が展開。市内の創造的なまちづくり活動の場を提供
- 担当：教育委員会 文化財課



<地域の拠点・空間・景観施策>

③ 「福住伝統的建造物群保存地区（通称：伝建地区）」

ポイント：田園風景に囲まれた宿場町の風情と町並みを守る取組

- 目的：西京街道の宿場町として発展した福住地区では街道と農村集落が良く残されていたことから、貴重な歴史文化資産である町並みの保存・活用を進めることで、まちの活性化を図る
- 期間：2012年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定。以降、保存整備事業を継続
- 内容：本市東部の福住、川原、安口、西野々の各集落の一部から形成、東西約3.3km、面積約25.2haに及ぶ地域において、保存修理事業等を実施。
2012年時点の伝統的建造物及び環境物件の特定件数は、伝統的建造物157件、伝統的建造物55件、環境物件21件
- 成果：2021年度末時点で34件の整備完了
地域にまちなみ保存会が発足。定期的な会合を重ねて、主体的な町並み保存活動を推進
また、伝統的建造物等の空き家への移住、店舗等への利活用の事例が増えているほか、伝統的な祭礼への参加が生まれるなど、コミュニティ維持に寄与
- 担当：教育委員会 文化財課

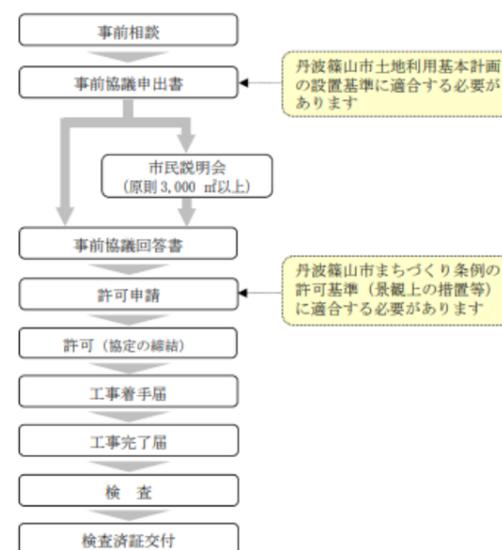


<地域の拠点・空間・景観施策>

② 太陽光発電施設の設置のガイドライン

ポイント：農村景観保全のための制度導入

- 目的：太陽光発電施設を設置する場合、周辺の環境とりわけ田園風景を悪化させることのないように、景観と調和した施設整備を誘導
- 期間：2015年～
- 内容：丹波篠山市土地利用基本計画における土地利用方針に基づいて、200㎡以上の事業面積を有する全ての太陽光発電施設を対象に立地基準を設定。丹波篠山市まちづくり条例に太陽光発電施設を位置付けることにより、市民説明会の開催等の事前協議制と景観上の装置等の許可基準に適合させる許可制で運用している。
- 成果：制度導入により大規模な太陽光発電施設の新設を抑制、丹波篠山市特有の素晴らしい農村景観の保全が可能
- 担当：まちづくり部 地域計画課



<地域の拠点・空間・景観施策>

④ 国交省直轄事業「景観まちづくり刷新支援事業」
ポイント：篠山城下町修景整備と無電柱化

- 目的：国交省選定のモデル地区として、東京オリンピック2020を目途に「日本遺産のまち丹波篠山」の中心地＝篠山城下町のまちなみ景観を整備
- 期間：2017～2020年
- 内容：篠山城下町地区157ヘクタールにおける下記事業の実施
・篠山城跡周辺の景観重要建造物の修景整備、城跡公園の整備
・篠山城下町地区内の道路美化
・伝統的建造物群保存地区等の無電柱化 など
- 成果：・景観重要建造物の屋根・外壁・内外装の修繕、市道の歩道の拡幅、舗装の美化、市営駐車場の整備、公園の老木の伐採及び新植
・広場整備、景観重要建造物改修、内外装修繕・耐震補強
・電線共同溝による無電柱化、照明灯の修景、歩道の拡幅・セミフラット化、石畳風舗装、低位置照明、ストリートファニチャー
- 担当：まちづくり部 地域計画課



(3) 食・農・里山及び人材育成・組織形成の関連施策

- 少子高齢化と農業の担い手の減少進む中、本市が大切にしてきた歴史と文化、暮らしと生業を守り、次代に受け継ぐ上で、創造都市政策に基づく各種の取組は、来街者や移住者はもとより、本市に暮らし働く市民にとっても「篠山の良さ」を再発見する機会を与える効果をもたらしている。
- 中でも、江戸時代から続く「デカンショ節」は、時代ごと地域ごとに丹波篠山で歌い継がれてきた伝統芸能であり、その保存・継承に努められてきたところである。2015年の「日本遺産」登録を経て、本市の地域アイデンティティを体現する存在として、対外的な認知度向上が図られている。
- 2020年から実施の「里山暮らしツアー」は、都市住民に数日間滞在してもらい、自然、文化、農業、陶芸など、

<人材育成・組織形成>

① 「日本遺産」登録

ポイント：丹波篠山デカンショ節の振興・継承

- 目的：城下町として栄えた丹波篠山は、江戸時代を起源とする「デカンショ節」により、時代ごと地域ごとの風土、人情、名所、名産品が歌い継がれており、地域への愛着を育んできた。今日でも新たな歌詞を生み出し後世に歌い継ぐ取組として生き続けており、既に300番にも上る。地域の民謡を保存、継承、振興させることで、ふるさとの活性化につなげるもの
- 期間：1954年より「デカンショ節大賞」、2015年に「日本遺産」登録
- 内容：・市民からデカンショ節の歌詞を募集する「デカンショ節大賞」
・地域の子供向けのデカンショ講座等の開催
- 成果：地域アイデンティティである「デカンショ節」を守ってきたが、日本遺産認定されたことにより、対外的な認知度も向上。
- 担当：観光交流部 観光交流課



<食・農・里山施策>

② 「里山暮らしツアー」事業

ポイント：地域特有の生活文化を生かした観光振興&移住・定住促進

- 目的：自然、文化、農業、陶芸など、本市の暮らしの魅力を体験するツアーの開催を通じて、観光誘客、移住・定住者を増進
- 期間：2020年観光庁「誘客多角化等のための魅力的な滞在コンテンツ造成」実証事業として実施スタート
2021年には、市役所、商工会、観光協会等が参加する「MASSE 丹波篠山」を設立して事業継続
- 内容：Masse 丹波篠山が主体となり、移住、二拠点居住、地域おこしに興味を持つ都市住民に対して、古民家ゲストハウスなどを活用した体験宿泊プログラムを提供。田舎暮らしや里山暮らし体験を実践
・城下町プラン：城下町・町家系ゲストハウスへの宿泊、里山の環境保全や丹波焼づくりの体験、移住者との交流等
・農村プラン：農村部・古民家系ゲストハウスへの宿泊、農作業体験や地場産食材を生かした料理体験、農村文化の体験等
- 成果：従来は京阪神からの日帰り客中心だったが、宿泊観光が増加
昨年度のツアー参加者から移住者が生まれ、本年度事業の中心的な役割を担うなど、今後の転入増加に期待感
- 担当：観光交流部 観光交流課



<人材育成・組織形成>

③ 「篠山イノベーターズスクール」事業

ポイント：創造産業の担い手となりうる人材育成

- 目的：2016年にJR篠山口駅構内に開設の「神戸大学・丹波篠山市農村イノベーションラボ」を活用し、若者の起業支援や移住・定住促進を目指した研修プログラムの提供
- 期間：2016年～
- 内容：農村の地域資源を活用したビジネスの起業・継業を支援するため、基本セオリーから実践ノウハウまで学べる環境の提供
・CBL (Community Based Learning)：実際のプロジェクトを進めながら、地域ビジネスの先駆者からノウハウ習得
・セミナー：講義を通じて地域ビジネスに必要なセオリー習得
・起業・継業サポート：先輩実践者とのネットワークを活用した支援
- 成果：受講生190名が参加。うち35名（うち市民27名）が起業、10名が事業拡大中
地域で活動する若者を増やす窓口として、起業の機運を醸成。農業、建築、食文化、工芸など、暮らしに結び付いた産業に係る人材の継承に手ごたえ
当スクールの卒業生が地域資源を活用して市内で起業、「地域内エコシステム」が形成
- 担当：企画総務部 創造都市課



<食・農・里山施策>

④ 「日本農業遺産」認定

ポイント：「丹波黒豆」の継承&情報発信

- 目的：本市の特産品である黒大豆（通称；丹波黒豆）の栽培は、社会環境に適応しながら何世代も継承されてきた独自の伝統農業であり、今後も受け継がれるべき重要な農林水産業システムであるとして、2021年に「日本農業遺産」に認定されたことから、今後も引き続き継承と情報発信を推進
- 期間：2021年～
- 内容：・栽培技術の継承はもとより、集落での助け合い、灰小屋のある農村景観、ため池・水路などの生物多様性などの継承促進
・補助金制度を通じた新規就農者の拡大
ア) 新規就農者の農業機械購入費、定住の為の家賃補助等
イ) 新規就農者の視察研修に係る経費補助
- 成果：食の安心安全に関する国民の関心が高まる中、地域特産物や在来作物の良さを紹介・発信することにより、地域イメージアップに貢献
- 担当：農都創造部 農都政策課



2. CCNJ に加盟する市町村における文化芸術推進基本計画の策定状況について

(1) 調査概要

①調査目的

令和3年度創造都市ネットワーク会議（総会）において、「CCNJのこれからの在り方について」が議決されたことに伴い、CCNJではアウトプット、アウトカムに対するKPIを設定することが求められている。

このうち、中長期のアウトカム（5年毎に評価する指標）として、CCNJに加盟する市町村における文化芸術推進基本計画の策定率が想定されていることから、CCNJに加盟する市町村における文化芸術推進基本計画の策定状況を把握するため、ウェブアンケートを実施した。

②調査期間

令和4年2月21日～3月2日

③調査対象

CCNJに加盟する自治体（市町村・都道府県）

④調査手法

ウェブアンケート（マクロミル社「クエスタント」）

⑤調査内容

- ・文化芸術推進基本計画（またはそれに類する計画等）の策定状況
- ・策定している文化芸術推進基本計画の種類
- ・文化芸術基本法の文化芸術推進基本計画として位置づけられているか
- ・KPIの設定についてのご意見・ご質問

⑥回収結果

85自治体から回答があった。

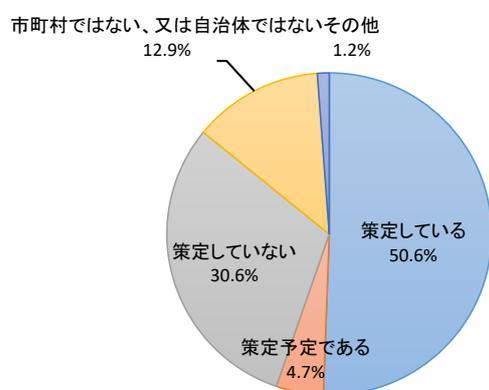
(2) 調査結果

①文化芸術推進基本計画（またはそれに類する計画等）の策定状況

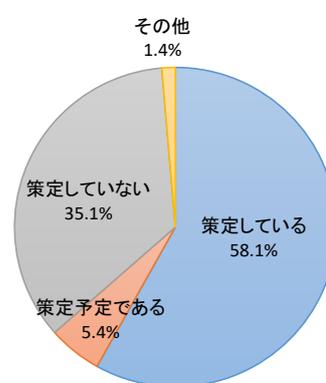
「策定している」が43団体（50.6%）で最も多く、続いて「策定していない」が26団体（30.6%）となっている。

	項目名	団体数	構成比(%)
1	策定している	43	50.6
2	策定予定である	4	4.7
3	策定していない	26	30.6
4	市町村ではない、又は自治体ではない	11	12.9
5	その他	1	1.2
	合計	85	100.0

都道府県を含めた構成比



都道府県を除いた構成比



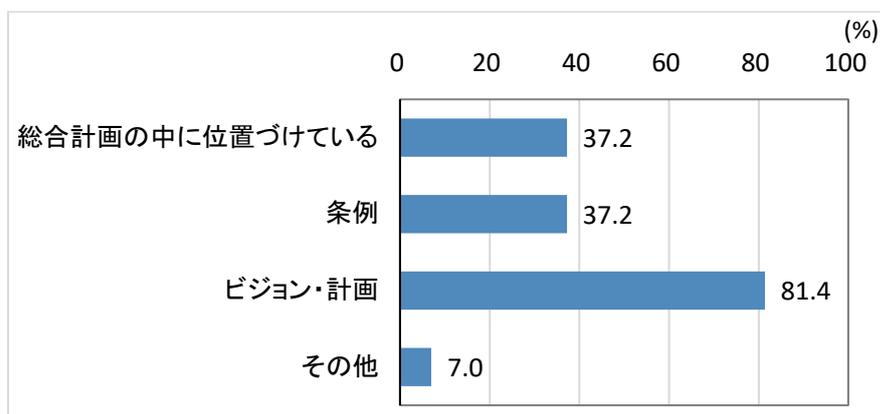
【その他】

- ・策定しているが、現在の2期（H26～R3）で終了

② (①で「策定している」と回答した自治体のみ回答) 策定している文化芸術推進基本計画の種類

「ビジョン・計画」が35団体(81.4%)で最も多い。

		n=	43
	項目名	団体数	構成比(%)
1	総合計画の中に位置づけている	16	37.2
2	条例	16	37.2
3	ビジョン・計画	35	81.4
4	その他	3	7.0
	合計	70	-



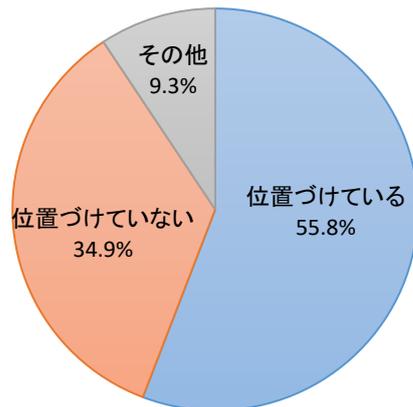
【その他】

- ・総合計画から派生する個別計画での位置づけ
- ・『横浜市文化芸術創造都市施策の基本的な考え方』
- ・プラン
- ・大分県文化振興基本方針、大分県文化創造戦略

③ (①で「策定している」と回答した自治体のみ回答) 文化芸術基本法の文化芸術推進基本計画として位置づけられているか

「位置付けている」が24団体(55.8%)となっている。

		n=	43
	項目名	団体数	構成比(%)
1	位置付けている	24	55.8
2	位置付けていない	15	34.9
3	その他	4	9.3
	合計	43	100.0



【その他】

- ・文化芸術基本法で基本計画が努力義務として位置付けられる以前から策定済み
- ・文化芸術基本法の第四条に基づき策定
- ・前身の文化芸術振興基本法の流れで策定。
- ・不明

(3) 策定率について

本調査から、CCNJ に加盟している市町村のうち、文化芸術推進基本計画を策定している市町村は、43 団体であることが明らかになった。

ここから策定率を検討する場合、下記の2通りが考えられる。

①回答した市町村数（74 市町村）を母数とする場合

：43 市町村/74 市町村=58.1%

②CCNJ に参加している市町村数（101 市町村）を母数とする場合

：43 市町村/101 市町村=42.6%

文化庁の調査では、令和元年 10 月時点の全国の市町村（政令市、中核市除く）の策定率は、13.6%（226 市町村/1,663 市町村）であることが分かっており、この数値と比べると 3~4 倍以上の高さとなっている。

本調査結果を踏まえ、CCNJ では引き続き、KPI の設定を検討していく予定である。

第4章 CCNJの活動を広く国内外に発信するためのウェブサイトの 充実、管理・運営

本事業におけるセミナーや部会の情報、成果報告書、国内外の調査結果をはじめ、CCNJ加盟自治体が実施する創造都市に関する取り組み情報、その他文化芸術創造都市の発展に資する情報の充実、及びウェブサイトの保守管理・運営を行った。

令和3年度は、ネットワーク参加団体について、検索機能を追加した。また、令和2年度に実施したリニューアルを踏まえ、ウェブサイトに掲載する情報の充実を図るとともに、CCNJ未参加の自治体（市）に対して、勧誘文書を郵送した。

1. ウェブサイトの保守管理・運営

(1) 検索機能の追加

CCNJ加盟自治体について、地域や人口、CCNJの活動の開催都市やキーワードで検索ができるよう、検索機能を追加した。

ネットワーク参加団体の検索

HOME > ネットワーク参加団体の検索

159団体 / 令和4年3月3日現在

◆ 地域で選ぶ

<input type="checkbox"/> 北海道・東北	<input type="checkbox"/> 関東・甲信越	<input type="checkbox"/> 北陸・東海	<input type="checkbox"/> 近畿	<input type="checkbox"/> 中国・四国	<input type="checkbox"/> 九州・沖縄
<input type="checkbox"/> 北海道	<input type="checkbox"/> 新潟県	<input type="checkbox"/> 富山県	<input type="checkbox"/> 滋賀県	<input type="checkbox"/> 鳥取県	<input type="checkbox"/> 福岡県
<input type="checkbox"/> 青森県	<input type="checkbox"/> 栃木県	<input type="checkbox"/> 石川県	<input type="checkbox"/> 三重県	<input type="checkbox"/> 岡山県	<input type="checkbox"/> 大分県
<input type="checkbox"/> 岩手県	<input type="checkbox"/> 茨城県	<input type="checkbox"/> 福井県	<input type="checkbox"/> 京都府	<input type="checkbox"/> 島根県	<input type="checkbox"/> 佐賀県
<input type="checkbox"/> 宮城県	<input type="checkbox"/> 千葉県	<input type="checkbox"/> 岐阜県	<input type="checkbox"/> 大阪府	<input type="checkbox"/> 広島県	<input type="checkbox"/> 熊本県
<input type="checkbox"/> 秋田県	<input type="checkbox"/> 群馬県	<input type="checkbox"/> 愛知県	<input type="checkbox"/> 奈良県	<input type="checkbox"/> 山口県	<input type="checkbox"/> 宮崎県
<input type="checkbox"/> 山形県	<input type="checkbox"/> 埼玉県	<input type="checkbox"/> 静岡県	<input type="checkbox"/> 和歌山県	<input type="checkbox"/> 香川県	<input type="checkbox"/> 鹿児島
<input type="checkbox"/> 福島県	<input type="checkbox"/> 東京都	<input type="checkbox"/> 兵庫県	<input type="checkbox"/> 徳島県	<input type="checkbox"/> 長崎県	<input type="checkbox"/> 沖縄県
	<input type="checkbox"/> 神奈川県		<input type="checkbox"/> 愛媛県		
	<input type="checkbox"/> 長野県		<input type="checkbox"/> 高知県		
	<input type="checkbox"/> 山梨県				

◆ 人口等の区分から選ぶ

政令指定都市 中核市 特別区 その他市町村（人口10万人以上）
その他市町村（人口1万人以上） その他市町村（人口1万人未満）

◆ CCNJの役職・所属で選ぶ

幹事団体 現代芸術の国際展部会

◆ CCNJの活動の開催都市で選ぶ

創造都市ネットワーク総会 創造都市政策セミナー 創造農村ワークショップ
現代芸術の国際展部会 その他分科会等

◆ CCNJに関連する活動で選ぶ

ユネスコ創造都市ネットワーク 東アジア文化都市 SDGs未来都市

◆ キーワードで選ぶ

[> この条件で絞り込む](#)

(2) 情報の充実

ウェブサイトに掲載するお知らせやイベント情報の充実に取り組み、令和3年度は16件の情報掲載を行った。特にCCNJが共催する創造都市政策セミナーや創造農村ワークショップ、現代芸術の国際展部会、ネットワーク会議（総会）については、事前案内だけでなく、開催報告を掲載するようにした。

月	件数	掲載内容
4月	1件	・【お知らせ】ユネスコ創造都市ネットワーク 2021年新規加盟申請国内公募について
5月	0件	
6月	0件	
7月	0件	
8月	1件	・【イベント】「オーケストラ・キャラバン47」のご案内
9月	1件	・【イベント】令和3年度 創造都市政策セミナー in 神戸市（オンライン配信）のご案内
10月	1件	・【イベント】科学、芸術、自然をつなぐ国際フェスティバル「科学と芸術の丘2021」
11月	2件	・【イベント】11.12 創造的市民や企業・組織がイノベーションと価値を生み出すまちづくりを次の横浜をテーマにシェアするパネルを開催！「クリエイティブシティの新陳代謝 YOKOHAMA 2030+ ～スモールリブートナイト」 ・【お知らせ】令和3年度 創造都市政策セミナー in 神戸市「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」を開催しました
12月	5件	・【お知らせ】令和2年度の文化芸術創造都市推進事業成果報告書を公開しました ・【イベント】令和3年度 現代芸術の国際展部会 in 珠洲市（ハイブリット開催予定）のご案内 ・【お知らせ】令和3年度 創造都市政策セミナー in 神戸市の当日配信映像をYouTubeで公開しました ・【お知らせ】創造都市ネットワーク日本（CCNJ）のウェブサイトをリニューアルしました ・【イベント】令和3年度 現代芸術の国際展部会 in 珠洲市のご案内（プログラム詳細）
1月	0件	
2月	2件	・【イベント】令和3年度 創造農村ワークショップ in 丹波篠山市のご案内 ・【お知らせ】【文化庁シンポジウム】「アフターコロナにおける国際的な文化芸術フェスティバルの進むべき方向性と可能性」のご案内【映像配信】
3月	3件	・【お知らせ】令和3年度 創造都市ネットワーク会議（総会）を開催しました ・【イベント】国際シンポジウム「文化遺産の持続的発展—観光とまちづくりとの結びつきから」のご案内 ・【お知らせ】令和3年度 現代芸術の国際展部会 in 珠洲市を開催しました

2. YouTube チャンネルの開設

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、セミナー・ワークショップ等の各種会議をオンライン又はハイブリッドで開催することが日常化していることから、各種会議コンテンツを映像化し、アーカイブしていくことが重要と考えられる。

このため、YouTube に「創造都市ネットワーク日本」のチャンネルを開設し、開催都市や登壇者と公開・限定公開の状況や公開期間の設定等を調整しながら、会議映像をアップロードしている。



添付資料

1. 令和3年度 創造都市ネットワーク会議 総会

日時：令和4年3月3日（木）15:30～16:40

開催方法：オンライン開催（ZOOM ウェビナー）

主催：京都市

共催：文化庁

創造都市ネットワーク日本（CCNJ）

参加数：67 構成員

（自治体 60 団体、自治体以外の団体 6 団体、個人会員 1 名）

1 開会

司会 ただ今から、創造都市ネットワーク日本令和3年度創造都市ネットワーク会議総会を開催します。

本日、会議の司会進行を務めます、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課 担当係長の濱田と申します。どうぞよろしくお願い致します。

はじめに、本日の資料の確認をさせていただきます。事前にメールでお送りしております資料を御確認ください。①ネットワーク会議次第、②資料1 出席者名簿、③資料2 CCNJ 参加団体一覧、④資料3 総会の議案書の4点です。お手元に御用意いただきますようお願い致します。

それでは、本日のプログラムに入ります。はじめに、本ネットワークを代表して京都市長門川大作より、御挨拶を申し上げます。

○主催者挨拶

京都市長 門川大作 氏

皆さんこんにちは。京都市長の門川大作です。創造都市ネットワーク会議について、創造的に御尽力いただいております皆様方に敬意を表したいと思います。顧問の佐々

木先生、お世話になります。よろしくお願ひします。また、文化庁の榎本審議官はじめ、御指導いただいております全ての皆様方に感謝申し上げます。

このネットワークは平成25年の創設以来、交流を深め、多くの皆様の御参画をいただきながら発展頂いております。文化庁の多大な御支援と参加されている179の自治体、団体、個人の皆様の努力によって、各地で力いっぱい取組が展開されておりますことに、感謝申し上げます。

日本には、地域固有の素晴らしい文化や芸術がございます。地域で輝く文化芸術をしっかりと支えていく、また、その活力を基軸に産業、福祉、まちづくり、教育など幅広い分野と融合させ、分野横断的な課題解決にも繋げていく必要があると思います。これをまさに実践しているのが、このネットワークであります。

しかし、コロナ禍で社会全体が閉塞感に包まれています。また、コロナ禍において貧困や格差、孤立、あるいは分断など、創造力とは相反する現象顕在化し、加速化しております。心豊かに人間らしく生き生きと生きていくために、文化芸術の力を再重要視していかなければならないと改めて感じています。

今回の総会では、ネットワークの更なる活性化を図る新たなビジョンをお示しさせていただきたく思います。SDGsの取組にもしっかりと貢献していきたいと考えております。体制強化のために新たに2つの部会を立ち上げさせていただこうと考えております。来年度中に京都に全面的に移転する文化庁とのネットワークも生かしながら、日本の文化創造、世界から尊敬される日本を目指していきたいと思ひます。

2 点だけ皆さんにお話したいと思っています。

現在、半世紀にわたって京都市の姉妹都市キエフのあるウクライナが、創造都市活動とは正反対の戦争に巻き込まれています。キエフの日本国内の姉妹都市は京都だけのようでございます。明日から、京都市の二条城においても黄色と青色のウクライナカラーにライトアップする予定をしています。市役所前にはキエフから寄贈されたモニュメントがあり、その前に、献花台設置や募金活動等の支援活動を行っております。ロシア軍の一刻も早い撤退と、平和が訪れることを心から願っております。

もう1点。今日は何の日でしょうか。3月3日お雛様の日であると同時に、100年前の本日、日本で最初の人権宣言と言われている「水平社宣言」が発せられました。人間が人間らしく相互理解を深め、多様性を認め合いながら暮らしていける社会こそが、創造都市の原点だと思っています。そういったことに思いを馳せながら、今後とも創造都市の取組を進めていきたいと考えております。よろしくお願い致します。

司会 門川市長、ありがとうございます。続きまして、文化庁審議官榎本剛様より御挨拶を頂戴します。榎本様、よろしくお願ひ致します。

2 文化庁挨拶

文化庁審議官 榎本剛 氏

御紹介いただきました、文化庁審議官の榎本でございます。門川京都市長には多大なる御尽力を賜りまして、深く御礼申し上げます。文化庁では、文化芸術基本法、文化芸術推進基本計画に基づいて、文化芸術を推進してきましたが、この5年間で文化庁がサポートしてきている文化芸術政策は拡大してきております。

従来文化庁は、文化財部と文化部という2つの部からなっていて、文化財部の担当は文化財のこと、文化部の担当は文化芸術のことをとということになっていましたが、縦割りを排し、一緒に動かしていこうということで組織の立て直しを行いました。そういった文脈の中で、文化と経済あるいは文化と観光といった強い結びつきを重視しています。この5年間で文化GDPという概念を打ち出し、各地の国際的な芸術祭を支援する取組をはじめ、アートを使ったまちづくりも進めてきております。

文化庁と観光庁が一緒になって文化観光推進法をつくったり、博物館法の改正も進めています。食文化に関しましても、地域創生本部を立ち上げ、生活文化の調査研究を進めております。多様な取組をこの数年間で進めていく中で、文化芸術のそのものの価値はもとより、産業や観光、国際交流等との連携の可能性も大にあるという意識を持って施策を進めております。

文化芸術創造都市推進事業を文化芸術の創造性を活かした地域の活性化を図っていく事業として大事にしていきたいと思っております。

CCNJ ネットワークについては、個別単独の自治体では成しえないような効果を生んでいかれることに期待したいと考えております。

先ほど門川市長からもありましたが、コロナの影響により多くの制約や御苦労がありました。コロナ禍から次へシフトしていくことを念頭に置きながら、様々な文化芸術活動を再興していく観点を持って取組を進めてこられたと思いますが、これからもCCNJを構成される皆様方が、文化芸術による地方創生に取り組まれてきたトップラナーとして、この困難な状況を共に乗り越えていきたいと考えております。

文化庁の京都移転がいよいよ近づいてま

いりました。補正予算によって、文化庁予算が実質的に倍になっています。文化芸術の創造支援、担い手育成等に関する事業予算を計上しております。日本の豊かな文化芸術の創造と発展のため、引き続き御尽力賜りたいと考えております。

今日の総会が皆様にとって実りあるものとなり、文化芸術創造の取組が一層充実したものとなるよう祈念し、御挨拶とさせていただきます。

司会 ありがとうございます。

それでは、議事に入ります。議長は、事務局から京都市文化市民局文化芸術都市推進室長の砂川が務めさせていただきますので、御了承ください。

それでは、ここからの議事の進行は、砂川室長にお願い致します。

3 議案審議

議長 議長を務めさせていただきます京都市文化市民局文化芸術都市推進室長の砂川でございます。どうぞよろしくお願い致します。議事の円滑な進行につきまして、皆様方の御協力を賜りますようお願い致します。最初に、本日の出席会員数について、事務局から報告願います。

事務局 本日の会議の出席者数について御報告します。自治体 60 団体、自治体以外の団体 6 団体、個人会員 1 名、計 67 構成員の参加となっております。以上でございます。

議長 ありがとうございます。それでは議案の審議に入らせていただきます。第 1 号議案「令和 3 年度事業報告について」事務局から説明願います。

事務局 第 1 号議案、令和 3 年度事業報告について御説明します。資料 3 議案書 1 ペ

ージを御覧ください。

最初に、「1 創造都市政策セミナー in 神戸市」についてです。令和 3 年 10 月 1 日（金）に、神戸市においてオンラインにより開催し、78 名の皆様が御参加されました。劇作家・芸術文化観光専門職大学 学長 平田オリザ様の基調講演「文化芸術が社会に与える影響」のほか、「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」をテーマに平田オリザ様、(公財)神戸市民文化振興財団理事長 服部孝司様、モデレーターには、同志社大学経済学部教授 河島伸子様をお迎えしたディスカッションが行われました。

さらに、デザイン・クリエイティブセンター神戸（愛称：KIITO/キイト）センター長の永田宏和様から、キイトの概要やこれまでの活動等について御紹介いただきました。それでは、開催地である神戸市様から補足等をお願いできればと思います。

神戸市 神戸市企画調整局つなぐラボの谷口と申します。実際に実施させていただいて、芸術文化観光という観点で平田オリザ先生にお話いただき、神戸市としても課題の見える、これからのことを考えるきっかけとなるセミナーとなりました。他都市にとっても参考になるセミナーかと思いますが、デザイン都市神戸のホームページ、また CCNJ のホームページでもアーカイブを配信しており、興味のある方はそちらで御確認いただけますと幸いです。よろしくお願致します。

事務局 次に、議案書 3 ページ、「2 現代芸術の国際展部会 in 珠洲市」についてです。こちらは、令和 4 年 1 月 21 日（金）、22 日（土）に開催されました。

現地では、ラポルトすず他、オンラインとのハイブリット形式での開催となりました。

奥能登国際芸術祭 総合ディレクター 北川フラム様による基調講演「持続可能な地域社会と国際芸術祭」に加え、「持続可能な地域社会と国際芸術祭～里山里海×アート×SDGs の融合と新しいコモンズの視点から～」と題して、国連大学サステナビリティ高等研究所 OUIK（オーユーアイケー）事務局長 永井三岐子様、金沢 21 世紀美術館 学芸部長 黒澤浩美様、金沢市都市政策局 企画調整課主査 笠間彩様、珠洲市長・奥能登国際芸術祭実行委員長 泉谷満寿裕様、モデレーターには前 金沢大学特任教授 宇野丈夫様を迎えたパネルディスカッションが行われました。

それでは、開催地である珠洲市様から補足等をお願いできればと思います。

珠洲市 珠洲市でございます。どうぞよろしくお願い致します。

1月21日（金）、22日（土）大変寒い日になりましたが2日の日程で開催させていただきました。コロナ禍において、現地参加は多くなかったのですが、沢山の人に見ていただけたと思っております。

芸術祭そのものについては昨年の9、10月コロナの影響もありましたが、10月からは蔓延防止等重点措置が解除になり、11月まで会期を延長して実施しました。

国際展部会については、芸術祭だけでなく、世界文化遺産やSDGsなど様々なものを組み合わせてまちづくりの一環として実施したものであります。

金沢市さんにも御参加いただき、石川県内でどう事業を展開していくのか、どう効果を出していくのかということで、大変参考になる議論をしていただきました。

引き続きこれからも珠洲市として取組を進めていきたいと思っております。

事務局 珠洲市様、ありがとうございます

た。次に、議案書5ページ「3 創造農村ワークショップ in 丹波篠山市」についてです。

こちらは、来週末、3月11日（土）及び12日（日）に、丹波篠山市で開催を予定されています。1日目には、文化庁文化創造アナリスト 学校法人稲置学園理事 佐々木雅幸様による特別講演「これからの創造農村とは」、公益社団法人 日本観光振興協会総合研究所顧問 丁野朗様による基調講演「日本遺産に認定された丹波篠山市の事例を基に」のほか、パネルディスカッションも実施されます。2日目は、コロナの状況により開催内容に変更があると伺っております。

それでは、開催予定地である丹波篠山市の方から補足と現在の検討状況等をお願いできればと思います。

丹波篠山市 丹波篠山市観光交流課の小山と申します。来週に開催致します創造農村ワークショップについては、残念ながら現地参加については兵庫県内の方のみを対象にさせていただきます。ZOOMにより配信をさせていただきます。2日目のエクスカッションについても関係者のみの参加とさせていただきます、後日、動画等で発信をさせていただきたいと考えております。どうぞよろしくお願い致します。

内容に関しましては、丹波篠山市が日本遺産に登録されているということと、創造都市を進めているということで、2つのテーマを1つに合わせたようなことで進めていきます。丹波篠山でこういったことが起こっているか事例等を紹介しながら情報共有をしたいと考えております。

金曜日午後の開催となります、年度末のお忙しい中ですが、是非御覧いただければと思います。よろしくお願い致します。

事務局 ありがとうございます。次に、議案書 6 ページ「分科会」についてです。こちらについては、参加団体から開催希望がなかったため、令和 3 年度の開催を見送りました。第 1 号議案「令和 3 年度事業報告について」は以上です。

議長 それではここで、議決について御案内させていただきます。

本ネットワークの規約第 10 条第 3 項の規定によりまして、議決については総会に御出席の構成員の「過半数」以上によることとなっております。今回は、オンライン開催の運用上、全団体様宛に予め議案に対する御意思を表明いただいているところであります。その結果、全回答数 119 件に対して、過半数は 60 件となっております。

それでは、議案第 1 号についてでございますが、事前に質問はございませんでしたので、承認へと移らせていただきます。

事前に皆様にお諮りした結果ですが、皆様から賛成と御回答いただきましたので、第 1 号議案は「承認」とされました。

それでは、引き続き第 2 号議案「これからの CCNJ の在り方について」事務局より説明をお願いします。

事務局 第 2 号議案「これからの CCNJ の在り方について」、議案書 7 ページを御覧ください。

CCNJ の活動の更なる活性化を図るために、ビジョンと運営体制の強化について御提案するものでございます。ビジョンは、「多様な文化芸術創造都市への取り組みを通じて、SDGs の達成にも貢献できるプラットフォームとしての発展」です。策定の経過としましては、CCNJ が 2020 年に日本が世界の文化芸術交流のハブになるということを目指し掲げ、ネットワークを拡大するとともに、文化芸術活動を推進してまいり

ました。また、国の「文化芸術立国中期プラン」では、CCNJ の加入数について、2020 年までに全自治体の 1 割、約 170 自治体の参加を目標としておられました。これらの目標年次も過ぎ、ポストコロナに向けた CCNJ の方向性を定めていく必要があると考え、目標を設定しております。

2 運営体制についてでございます。新たに、企画検討委員会、創造農村部会、国際ネットワーク部会を立ち上げます。企画検討委員会では、創造都市の普及啓発や人材育成のため、担当者向けの基礎研修など、創造都市政策セミナーを検討致します。

部会は、参加団体間で課題等を共有できるネットワークをつくることで、相互の発展を図ります。創造農村部会は創造農村ワークショップを引き継ぐ形になります。複数の自治体による継続的な政策検討が容易になるように、部会として立ち上げます。国際ネットワーク部会は、ユネスコ創造都市ネットワークや東アジア文化都市に係る情報交換やネットワーク構築を行う予定でございます。第 2 号議案「これからの CCNJ の在り方について」は以上でございます。

議長 議案第 2 号について、事前に質問はございませんでしたので、承認へと移らせていただきます。事前に皆様にお諮りした結果ですが、皆様から賛成と御回答いただきましたので、第 2 号議案は「承認」とされました。

それでは、引き続き第 3 号議案「規約改正について」事務局より説明をお願いします。

事務局 第 3 号議案、規約改正について御説明します。

議案書 8、9 ページを御覧ください。先ほどの第 2 号議案で承認いただきました、企画検討委員会について、代表幹事が幹事団

体会議の中に企画検討委員会を設置することができるようにするため、新たに第9条として、企画検討委員会の項目を追加致します。第3号議案「規約改正について」は以上です。

議長 議案第3号について、事前に質問はございませんでしたので、承認へと移らせていただきます。事前に皆様にお諮りした結果ですが、皆様から賛成と御回答いただきましたので、第3号議案は「承認」とさせていただきます。

それでは、引き続き第4号議案「次期幹事団体の改選（案）について」事務局より説明をお願いします。

事務局 第4号議案、次期幹事団体の改選（案）について御説明します。議案書11ページを御覧ください。

令和4年4月1日から令和6年3月31日までを任期とした、幹事団体の皆様については、御希望いただきました、御覧の15都市です。次期代表幹事都市については、「北九州市」を予定させていただいております。第4号議案「次期幹事団体の改選（案）について」は以上でございます。

議長 議案第4号について、事前に質問はございませんでしたので、承認へと移らせていただきます。皆様にお諮りした結果ですが、皆様から賛成と御回答いただきましたので、第4号議案は「承認」とさせていただきます。

それでは、次年度の代表幹事都市として承認されました北九州市様から、一言頂戴できればと思います。

北九州市 代表幹事に承認いただきました北九州市でございます。本来でしたら、市長から御挨拶申し上げるべきところござ

いますが、ただいま本会議中のため失礼致しております。

創造都市ネットワーク日本の代表幹事という大役を仰せつかりますには微力ではございますが、幹事団体、加盟団体の皆様のお力をお借りしながら創造都市の取組の推進に尽力して参りたいと考えております。

本市は、昨年12月まで約2年間、東アジア文化都市北九州を開催して参りました。コロナの影響を大きく受けつつも、感染防止対策を実施しながら200の事業を展開致しました。中でも本市は、2019年にアジア地域で初めて、OECD（経済協力開発機構）からSDGs推進に向けた世界のモデル都市に選定されました。東アジア文化都市事業の一環として、昨年4月からアートの力でSDGsの達成を目指す「北九州未来創造芸術祭 ART for SDGs」を開催致しました。

コロナ禍において、皆様の御招待は叶いませんでしたが、参加した方々から、芸術祭の参加によりSDGsを感じることができたという声を沢山いただきました。文化芸術を通じたSDGsの発展について、大きな手ごたえを感じました。また、開催期間中に本市において日中韓文化大臣会合や東アジア文化都市サミットを開催していただくなど、非常に貴重な経験をさせていただきました。

このような経験を活かしながら、SDGsの貢献にも寄与できる創造都市を目指して、皆様と共に邁進していきたいと考えております。2年間どうぞよろしくお願い致します。

議長 ありがとうございます。それでは、引き続き第5号議案「令和4年度事業計画（案）について」事務局より説明をお願いします。

事務局 第5号議案、令和4年度事業計画

(案)について御説明します。議案書 12 ページを御覧ください。ネットワーク会議総会については、例年どおり令和 5 年 1~3 月頃に開催予定でございます。

創造都市政策セミナーについては、2 種類予定しております。担当者向けの基礎研修に当たる研修セミナーを 6~7 月頃に、CCNJ のビジョンについて議論を行う政策セミナーを秋頃に予定しております。

続きまして部会についてですが、現代芸術の国際展部会については、引き続き事務局を横浜市様にさせていただきます。開催時期は未定ですが、岡山市においてハイブリッド形式で実施予定です。

創造農村部会については、事務局を丹波篠山市様にさせていただきます。年 3 回程度オンラインでの開催が予定されています。

国際ネットワーク部会については、京都市が事務局を致します。開催時期をはじめ詳細は今後検討してまいります。

これらの事業の開催時期等は全て予定となっております。詳細が決定次第、メールニュース等で皆様にお知らせさせていただきますので、よろしくお願ひ致します。

第 5 号議案、令和 4 年度事業計画 (案)については以上です。

議長 議案第 5 号について、事前に質問はございませんでしたので、承認へと移らせていただきます。事前に皆様にお諮りした結果ですが、皆様から賛成と御回答いただきましたので、第 5 号議案は「承認」とされました。

それでは、次年度の部会の事務局都市である、横浜市様、丹波篠山市様、京都市から一言頂戴できればと思います。

横浜市 引き続き来年度も現代芸術の国際展部会の事務局を務めます、横浜市創造都市推進課の丸山でございます。よろしくお

願ひします。

この 2 年間、海外の国々はもちろん、国内の人々も自由な往来がしにくい状況が続いております。国際展そのものが本来の形で開催できていない状況にあり、今年もそのような影響が続くかなと思っております。日頃国際展に関わっておられる皆様方が、一堂に会する貴重な機会であると考えておりますが、オンラインとのハイブリッド形式という限定的な状況になっております。

来年度につきましては、国際展部会開催都市を岡山市様にお引き受けいただくことになりました。岡山市様は今年度から当部会に御参加となっておりますが、既に岡山芸術交流という、国際的現代アートの祭典を 2 回開催されているという実績がおありですので、私どもの国際展部会で試行錯誤しながら開催してきた、with コロナにおける開催のノウハウを共有しながら進めていければと思います。岡山市さんがいらっしゃるということですので、一言お願ひできればと思います。

岡山市 ありがとうございます。岡山市文化振興課の新居田です。来年度の現代芸術の国際展部会を岡山市で開催していただければと思います。2016 年から岡山市でも 3 年に 1 度、岡山芸術交流という国際展を実施しております。今年の 9 月 30 日から 11 月 27 日までの約 2 か月間で開催を予定しております。できればこの期間に担当者ミーティングを開催し、皆様にもお越しいただきたいと考えております。よろしくお願ひ致します。

丹波篠山市 丹波篠山市の小山です。よろしくお願ひ致します。今年度から正式に CCNJ の創造農村部会ということで立ち上げさせていただき、事務局として関わられますことを嬉しく思っております。

部会に関しましては、現段階で未定としておりますが、小さな都市でも文化的な暮らしをどう営んでいくかということを経験共有しながら進めていきたいと思っております。オンラインではなく担当者同士膝を突き合わせながら議論ができる場を設けたいと考えております。来週に開催する創造農村ワークショップでもお話をいただければと思っております。よろしくお願い致します。

京都市 京都市文化芸術企画課の松本と申します。国際ネットワーク部会については、来年度新しく立ち上げさせていただきますが、創造都市の世界的なプラットフォーム機能を強化して、ユネスコ創造都市ネットワークや東アジア文化都市といった国際的なネットワークとの交流や、参加都市の拡充など、相互の発展などを進めていければと考えております。

来年度はできることからスタートしたいと考えており、担当者会議等の開催の中で、参加都市間の交流を行い、顔の見える関係から進めていければと考えております。そのことが、将来的には東アジア文化都市やユネスコ創造都市ネットワークの加盟都市や開催都市となるようなものに繋がっていくように頑張っていきたいと考えております。

議長 ありがとうございます。

以上をもちまして、予定していた全ての議案審議を終わります。オンラインの開催となり、とんとん拍子に進んでおりますが、これがいいところでもあり、悪いところでもあるのではないかなと思っております。皆様方には、議事の円滑な運営に格別の御協力を賜りまして、厚くお礼申し上げます。ここからは、事務局にマイクをお戻しします。

4 CCNJ 新規参加団体の紹介

司会 続きまして、CCNJ 新規加盟団体の紹介を行います。昨年度の総会以降、新たに2自治体、2団体、個人2名が本ネットワークに加盟いただいておりますので、御紹介させていただきます。栃木県鹿沼市様、栃木県那須烏山市様、一般社団法人 METACITY 推進協議会様、アーツ&コミュニティふくい様、横浜市立大学大学院都市社会文化研究科客員教授の野田邦弘様、横浜市立大学国際教養学部教授の鈴木伸治様でございます。以上でございます。

それでは、新規加盟の2自治体様には、御挨拶を頂きたいと思っております。まず、鹿沼市様からお願い致します

鹿沼市 皆さんこんにちは。鹿沼市長の佐藤と申します。この度は、創造都市ネットワーク会議ということで新しく加入をさせていただきますまして、ありがとうございます。

鹿沼市ですが、北は日光市、東は県庁所在地である宇都宮市であり、人口9万人少々のみであります。江戸時代から宿場町として発展してきました。日光東照宮の造営に関わった沢山の職人さんたちが冬の間鹿沼市に滞在され、東照宮の造営が終わってからも鹿沼市に留まれ、鹿沼市が誇る秋祭りの彫刻屋台27台は、そういった皆さんの手によって造られたものであります。那須烏山市と共に、ユネスコの無形文化遺産に登録された経緯もあります。沢山の伝統文化を継承して今日に至っています。日光東照宮の改修工事に関わられた若い3名の女性が、新たに組織を立ち上げられ、全国の仏像の修繕などを手掛けるということで話題になっております。若い芸術家の皆さんが活動できる文化芸術を中心とした拠点整備も行っていきたいと思っており、皆さん方の取組を参考にしながら取組を進めていきたいと考えております。御指導よろ

しく願います。

那須烏山市 那須烏山市でございます。鹿沼市さんからお誘いを受け、創造都市ネットワーク日本に参加させていただきました。総合政策課の関でございます。

那須烏山市につきましては、鹿沼市様と共に、ユネスコ無形文化遺産登録を記念して、「下野国二大祭り」を開催しております。また、山あげ祭という、約 200m に渡り道路を封鎖して舞台を作り歌舞伎を踊るという 450 年以上の歴史を持つ伝統文化も持っております。

那須烏山市で代々伝えられる民話等をアニメーション化して、民話ツーリズムとして普及展開もしております。地域資源を大切に、上手く活用しながら取組を進めたいと思っております。御協力よろしく願います。

司会 ありがとうございます。

それでは、最後に、全体を通じて、CCNJ 顧問の佐々木雅幸様より、総括を頂きたいと思えます。佐々木様、よろしく願います。

5 CCNJ 顧問による総括

CCNJ 顧問 佐々木雅幸 氏

皆さんこんにちは、佐々木です。創造都市ネットワーク日本は 2013 年の 1 月に設立をされまして、10 年近い経験を積み重ねて参りました。この 2 年間、コロナにより活動展開の上では非常に辛い、大きな試練に直面しております。歴史的なパンデミックの中で、様々な努力を経て活動を上げようとしていただいたことに感謝申し上げます。

とりわけ、この困難な 2 年間に幹事代表として京都市さんになっていただいたことについても心から御礼申し上げます。

京都市は、文化庁の京都移転に関して新たな責任の一端を担っております。京都市は文化庁を迎える大事な時期にあります。新たな文化芸術の創造発展を掲げていけるといいなと思っております。

昨年の総会時にシンポジウムを実施しましたが、刺激的な内容でした。京都は元々西陣の町家再生から創造都市がスタートしました。市民への拡がりと共に、金融機関が積極的に地域再生に乗り出し、創造都市の拡がりを実現しました。

世界銀行が創造都市プロジェクトに関心を持ち、2 年前に京都で世界銀行の会議を開催する機会がありました。途上国の代表の方々が、創造都市はこれからの希望であるということで熱心に参加されていきました。地球全体で創造都市のネットワークが拡がっていくことになるだろうと思っております。

そういった新しい動きを CCNJ においても受け止め、今回国際ネットワーク部会を立ち上げることになりました。立ち上げにはいくつかの目的があります。

1 つは、ユネスコ創造都市というグローバルネットワークがございます。2002 年に始まり、今や 295 の都市が認定されています。最近では大分県臼杵市が食文化で認定を受け、日本では 10 都市になりました。私は臼杵市の認定にあたって、アドバイスをさせていただきました。この町は、発酵の文化、地場産業、自然農法、こういったものが SDGs の達成にもつながっていきます。

ユネスコは SDGs に早くから意識的に取り組んでいます。CCNJ は 2020 年のオリンピック・パラリンピックを目標に取り組んでまいりましたが、次の目標として、2030 年の SDGs の貢献に向けて取り組んでいく創造都市ネットワークにしていこうというのが、今回の提案の真意です。創造都市ネ

ネットワークの新たなアジェンダとして設定しました。

芸術文化と SDGs の取組をどう議論を深めていくかについてがポイントになってまいります。この度代表幹事都市を務めていただくことになった北九州市は、かつて公害で大変でしたが、そこから観光都市に転換されました。

北九州市における東アジア文化都市の取組の中で「北九州未来創造芸術祭 ART for SDGs」を実施されましたが、大変素晴らしい取組、アイデアでした。残念ながら現地参加はできず、オンラインで参加しました。そのような素晴らしい取組をされました北九州市において、昨年末に、市長に代表幹事都市を引き受けていただきたいとお願いし、御快諾いただきました。2030 年に向けた CCNJ の新しいアジェンダは北九州市を先頭にして進めていければと思います。

東アジア文化都市事業と創造都市ネットワークとは深い関係があります。これまで創造都市ネットワークに加盟する都市の中から、東アジア文化都市が順番に実施されてまいりましたが、残念ながら、コロナの状況もあって北九州市の次の開催都市の手が挙がってこなかったのですが、今回は市ではなく、県として大分県が手を挙げられました。過去に大分県は CCNJ の創造都市政策セミナーを県として取り組んでいただいた実績があります。今回、東アジア文化都市は県内の各都市と一緒に開催いただけることになりました。

大分県の次の東アジア文化都市について、是非、御参加いただいております CCNJ 加盟都市の皆様から手を挙げていただければと思います。

ユネスコ世界遺産の話も出てきましたが、日本では、ユネスコの管轄は文化庁ではなく文科省の国際統括官付に「日本ユネスコ国内委員会」が置かれています。一方で

CCNJ は設立時から文化庁ということで、文科省と文化庁の関係が初めから別建てになっています。

実際は、ユネスコ関連都市 10 都市はすべて CCNJ 加盟都市で、CCNJ の活動をした都市が実績としてユネスコの認定を受けています。このため、双方の連携を円滑にしていきたい。国際ネットワーク部会については、東アジア文化都市経験都市とユネスコ創造都市を上手くつなぐものにしていきたいと考えております。

創造農村部会は丹波篠山市がユネスコ創造都市の認定を受けるときに、ユネスコは人口 10 万人以下のところは無理だという話がありましたが、人口が条件になることはおかしいと訴えました。人口が少なくても創造都市としてしっかりと経験を積んでアピールしていけるものだと考えております。創造農村部会の取組にも期待をしております。

司会 佐々木様、ありがとうございました。

それでは、以上をもちまして、創造都市ネットワーク日本令和 3 年度ネットワーク会議総会を終了します。お忙しいところ御参加いただき、ありがとうございました。

2. 令和3年度 創造都市政策セミナー — in 神戸市（オンライン配信）

日時：令和3(2021)年10月1日（金）

14:00-16:00

開催方法:オンライン開催(ZOOM ウェビナー)

主催：神戸市

共催：文化庁

創造都市ネットワーク日本 (CCNJ)

テーマ:「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」

参加者数：78名

<第1部>

1 開会

司会 ただ今より、令和3年度CCNJ創造都市政策セミナー「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」を開催します。本日はお忙しいところご参加いただき、誠にありがとうございます。本日の司会進行を務める橋本沙抽里です。どうぞよろしくお願いたします。

本セミナーは、全国の創造都市を推進する自治体が、共通の課題について検討するものです。今回は、「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」をテーマに、神戸市の創造性の発信拠点にあるデザイン・クリエイティブセンター神戸、通称KIITOよりオンライン配信を行っております。

本日は100名ほどの方にお申し込みいただきました。ありがとうございます。早速、セミナーへと移ります。最初に、開催都市の神戸市より、副市長の小原一徳が挨拶をさせていただきます。小原副市長、よろしくお願いたします。

○開催地挨拶

神戸市副市長 小原一徳 氏

神戸市副市長の小原です。本日は、令和3年度創造都市政策セミナーにご参加いただき、誠にありがとうございます。ここ、デザイン・クリエイティブセンター神戸、KIITOに、登壇者の方も集まってくれています。本セミナーは、文化庁と国内外の創造都市間の連携交流を促進するためのプラットフォーム、創造都市ネットワーク日本の支援の下で開催されるものです。

初めに、神戸市における創造都市への取り組みについて紹介します。1995年の阪神淡路大震災から10年ほどが経過した2007年頃から、創造都市を創造的復興として掲げ、2008年にユネスコのデザイン分野での創造都市の認定を受けました。また、創造都市ネットワーク日本には、2013年の設立当初から加盟しています。

私たちが考えるデザイン都市とは、色、物、形が美しい都市というだけではなく、市民が創造性にあふれ、神戸の新たな魅力をつくり出す都市だと考えており、BE KOBE、神戸は人の中にあるというシビック・プライド・メッセージを掲げて取り組みを進めてきました。しかし、このたびの新型コロナウイルス感染症の影響により、他都市の皆さまがたと同様、神戸市で行っていた創造都市活動、文化芸術への取り組みは大きな打撃を受けています。今後、市民に新型コロナウイルス感染症予防のワクチンが行き渡り、ウィズコロナ社会、ポストコロナ社会をにらんで神戸市がこれからも魅力的で持続可能な都市として発展していくためには、市民が日常的に文化芸術に触れることができ、日々の暮らしの中で創造性を発揮できる環境を自治体として提供していくことが重要であると考えています。

今回のメインテーマは、「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」です。本日のパネリストとして、兵庫県豊岡市で活躍されている平田オリザ先生、神戸市民文化振

興財団の服部理事長、モデレーターとして同志社大学の河島先生をお迎えし、ポストコロナ社会において文化芸術がどのような役割を果たしていくかについて、ディスカッションをいただく予定です。神戸のみならず、全国の創造都市の皆さまがたにとって、今後の政策を検討するにあたり、大変、貴重なお話をお伺いできると期待しています。

また、ディスカッションの後には、デザイン都市神戸の推進拠点である、ここ、デザイン・クリエイティブセンター神戸、KIITO に先日オープンした子どもの創造的学びと社会貢献活動の拠点、KIITO:300 の取り組みについても紹介したいと思います。最後になりましたが、本日のセミナーが、ご参加いただいた皆さまがたにとって有意義なものとなるように期待し、開会のあいさつとします。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

司会 小原副市長、ありがとうございます。続いて文化庁より、地域文化創生本部の安井順一郎事務局長が挨拶をさせていただきます。職務の都合上、オンラインにて参加します。安井事務局長、よろしく願いいたします。

○文化庁挨拶

地域文化創生本部事務局長

安井順一郎 氏

文化庁の地域文化創生本部事務局長の安井です。創造都市政策セミナーの開催にあたり、一言ご挨拶申し上げます。本日は創造都市政策セミナーに、全国各地から非常に多くの方々のご参加をいただき、誠にありがとうございます。このセミナーの開催に際して多大なご尽力をいただいています、開催地である神戸市の皆さま、また本日、登壇いただく平田学長、服部理事長、河島

先生、CCNJ の佐々木顧問、関係者の方々に、深く感謝いたします。

この創造都市政策セミナーは、毎回、各自治体において文化芸術創造都市の政策を担っている方々を対象とし、先進的な取り組みを実施している自治体や、文化芸術振興の関係者の方々から話題提供をいただき、各地域の文化芸術創造都市の取り組みを一層、充実させるきっかけとして開催いただいています。

本日のテーマの設定として、先ほど副市長からもお話いただきましたが、まず平田学長から、「文化芸術が社会に与える影響」という題目で基調講演をいただくと聞いています。文化庁としても、文化芸術基本法に基づき、文化政策の機能強化を進めているところです。文化それ自体の本質的な価値を追求することももちろんですが、文化の活動は本当に様々な政策分野と関わった、社会的、経済的価値を有している非常に幅広い広がりを持つ活動だと考えています。いろいろな政策分野との関わりを深めていく中で、政策の強化を図っていきたくと考えています。平田学長はこれまで長年、日本の演劇界をけん引してこられました。また、本年度からは、日本で初めての、芸術文化をテーマとした専門職大学を創設、学長という立場で、新たに人材育成や地域貢献にも取り組んでいただいていると聞いています。そうしたお話を聞きながら、皆さまと一緒に新しい文化政策の在り方を考えるきっかけとしていきたくと考えています。

続いてディスカッションとして、「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」というテーマを設定しています。こちらについては、昨年からの新型コロナウイルス感染症の影響により、文化芸術活動の実施が非常に難しい状況が続いている中で、われわれ文化関係者に対して正面から投げ掛けられた課題だと考えています。感染の拡大防

止という観点でいろいろな活動が制約されざるを得ない部分がありますが、文化芸術の活動はわれわれ人間が生きていく上で欠かせないものであるという、文化の本質的な価値もあらためて考えるきっかけになった時期でもあります。私ども文化庁でこの冬に行った全国の世論調査においても、文化芸術活動の減少に相まって、多くの方が生活の中での楽しみや幸せが減っていると答えたという調査結果があります。文化庁としても、何とか文化芸術活動の継続を支援できるように様々な取り組みを続けています。まだ不十分なところもあろうかと思いますが、しっかりとした支援をしていきたいと考えています。

本日このテーマのディスカッションで、ユネスコの創造都市ネットワークにデザイン分野で加入している神戸市を代表し、服部理事長のお話、また、文化審議会において日々ご指導いただいている河島教授のお話を聞いていただくとともに、私どももお聞きできることを楽しみにしています。本日のこのセミナーをきっかけにし、文化芸術創造都市に取り組む各地域の皆さまの、ネットワークの拡大にもつなげていただきたいと思います。このCCNJを最大限に有効活用いただき、それぞれの都市の文化芸術活動の発展に寄与していただければと願っています。本日のセミナーが皆さまがたにとって実り多いものになるよう祈念し、私どもからのあいさつとします。どうもありがとうございます。

司会 安井事務局長、ありがとうございます。本日のプログラムは、基調講演、ディスカッション、KIIT0:300の紹介の順に進めます。

ここで、オンラインセミナー中の注意事項をお伝えします。本セミナーはウェビナー形式で行い、オンラインセミナー中の皆

さまのマイク、カメラはオフ設定となっています。登壇者への質問は、画面下部にあるQ&Aへご記入ください。全てのプログラム終了後に質疑応答の時間を用意していますので、時間の許す限り回答します。また、セミナー内容の録画、録音は控えていただきますようお願いいたします。

2 基調講演

司会 それでは早速、基調講演に移ります。基調講演では、劇作家・芸術文化観光専門職大学学長の平田オリザ様より、「文化芸術が社会に与える影響」をテーマにお話しいただきます。平田様は1962年、東京生まれで、劇作家、演出家、青年団主催として数々の賞を受賞されています。2021年4月からは、兵庫県豊岡市に開設された芸術文化観光専門職大学の学長も務めていらっしゃいます。平田様、よろしくお願いたします。

○基調講演「文化芸術が社会に与える影響」
劇作家・芸術文化観光専門職大学学長

平田 オリザ 氏

平田です。よろしくお願いいたします。本日は少し時間が短いため自己紹介は省き、早速、本題に入ります。

私自身も大学ではアーティストの立場で、アートマネジメント、社会における芸術の役割を教えています。三つくらいに分けて考えるとよいのではないかと、学生たちには伝えています。一つは芸術そのものの役割です。私たちの作る作品が人々の心を慰めたり、励ましたり、勇気づけたりする役割です。これが最も大事ですが、それ以外に、お祭りなどによるコミュニティの形成・維持の役割や、最近よく言われることは社会包摂の役割です。

そして、先ほど局長からのお話にもあったように、昨今はもう少し具体的に、社会に役に立つもの、これは定量評価がしやす

いのでクローズアップされてきたのでしょう。それが教育や観光、経済、あるいは医療、福祉などです。例えば、認知症の予防に演劇やダンスは非常に有効だとして注目を集めています。今日は、特に教育と観光について話をします。

私は小中学校の国語教科の手伝いをしてきたため、現在も年間 30 校から 40 校の小学校、中学校に行き、このように授業をしています。後でも触れますが、豊岡市内の 36 全ての小中学校で演劇教育を導入しています。この導入が広がっている理由はいろいろありますが、実は一番の要因は大学入試改革です。大学入試改革について簡単におさらいをすると、今までのセンター試験を廃止して、共通テストでは極めて基本的な学力を問うようにします。そして、いわゆる昔で言うところの 2 次試験、各大学の試験では、思考力、判断力、表現力、さらには主体性、多様性、協働性を問うような試験をします。これは潜在的学習能力といいますが、大学に入ってから学ぶ力を測定する試験を実施するよう、文部科学省は求めています。

実際はどうかということ、AO 入試では今までの面接、小論文ではなく、多くの大学がグループディスカッションやグループワークを導入しています。例えばお茶の水女子大学は、文系の AO 入試を図書館で行ったり、理系の AO 入試を実験室で行ったりします。問題が出されてそれに答えるため、あるいはディスカッションをするための資料を、何十万冊という蔵書の中から選ぶことができるか、まさに学ぶ力を測るような試験になっています。

そうすると、今度は高校側の受験指導、進路指導が非常に難しくなります。要するに短期的な受験勉強では対応できない、最近の言葉で言うと、地頭を問うような入試になっています。こうした能力のことを、

社会学の世界では身体的文化資本と呼んでいます。身体的文化資本はご承知のように、ピエール・ブルデューという社会学者が提唱した概念で、コミュニケーション能力やセンスのことです。最近、ジェンダーなどの偏見がないということも身体的文化資本の一つだと考えられています。

こうした身体的文化資本は、20 歳くらいまでに形成されるといわれています。味覚などは 12 歳くらいで形成されるといわれています。そしてもう一つ、身体的文化資本は、本物や良いものに触れることでしか育たないと考えられます。それはもっともな話で、例えば味覚を植え付けるのに、おいしいものと、まずいもの、安全なもの、危険なもの両方を食べさせて、こちらがおいしいでしょうと教える親はいません。安全なもの、おいしいものを食べさせ続けることにより、危険なもの、まずいものを吐き出す能力を培います。あるいは骨董品の目利きです。何とか鑑定団のような人を育てるには、本物にだけ触れさせる必要があります。そうすると、偽物を見抜く能力が身に付くからです。

身体的文化資本なので、体に落とし込んでいかなければなりません。しかし、私たちがやっている演劇やダンス、ミュージカルやオペラ、要するにパフォーマンスアーツは、東京のほうが圧倒的に有利です。神戸ならまだしも、私が住んでいる豊岡、但馬の子どもたち、今は豊岡が逆転して演劇が非常に盛んになっていますが、自然状態の東京と但馬だったら、アクセス数は数十倍違います。

例えば、東京都の世田谷区は「日本語」の教育特区の認定を受けているので、週に 1 回、国語以外の言語活動があり、独自の教科書を持っています。そして世田谷には、オリンピックの芸術監督をする予定だった野村萬斎さんが芸術監督を務めている、日

本一の興行ホール、世田谷パブリックシアターがあります。そこに依頼をすると、区の予算でプロのアーティスト、俳優や狂言師や大道芸人などが学校に派遣されます。そのような施策を持った都市がたくさん出てきています。

もっと分かりやすい例で言うと、現在、演劇やダンスが本格的に学べる高校が全国に80校程度ありますが、このうちの6割が東京と神奈川に集中しています。東京、神奈川、大阪、兵庫で8割です。兵庫県で言えば宝塚北高校です。例えば隣の岡山県は、非常に豊かな県だとは思いますが、1校もありません。要するに、地方はコースさえも開設できません。文化の地域間格差はこんなに広がっています。

もう一つの格差は、ご承知のように経済格差の問題です。経済格差が教育格差に直結していることは当たり前のマイナスの常識になっていますが、文化格差はもっと深刻です。教育の格差は、学校に来てくれさえすれば発見されます。この子は頭が良いのに、家が貧乏で大学に行けなくてかわいそうだと皆が思いますし、本当に優秀なら奨学金などで支援できます。しかし、文化の格差は発見すらされません。親が美術館やコンサートに行く習慣がなければ、子どもだけで行くということは起こりません。しかし、連れて行く家庭は、神戸はもちろんのこと、但馬でも親が意識層ならば、例えばクラシックが好きだと、夏休みや冬休みに京都や大阪や神戸に連れていきます。美術館が好きなら美術館に連れていきますし、少なくとも科学館には連れていきます。しかし、行かない家庭はずっと行きません。行きたくても行けない家庭もあります。一人親世帯や、土日も忙しくて子どもをなかなか連れていけないなど、家庭ごとにスパイラル状に身体的文化資本の格差が出てしまいます。

日本は明治以降150年かけて、教育の地域間格差のない素晴らしい国をつくってきました。しかし現在は、文化の地域間格差と経済格差の2方向に引っ張られて、子どもたち一人一人の身体的文化資本の格差が広がっています。しかもこれが、大学入試や就職に直結する時代になってきました。

皆さまの中にも、地方の出身で、大学で神戸や京都、大阪、あるいは東京に出た人もいるでしょう。私たちがしているような小劇場演劇や、昔で言うアングラ演劇、それからジャズやコンテンポラリーダンスやコンテンポラリーアートなど、それらは大体、大学に出てから触れれば良かったものです。東京はすごいと思っても良かったのです。しかし、これが大学入試段階で問われてしまうと、田舎の子は逆転のチャンスがありません。君はセンスがないから東京に来られない、という話になります。

ちょうど2年前に、萩生田文部科学大臣が身の丈発言をして大きな問題になりました。これは英語の外部試験の話での発言でしたが、これが国会で問題になったとき、野党も問題の本質が全く分かっていませんでした。この大学入試改革自体は、理念としては間違っていない。それまでのような、知識偏重の一元的な試験では、日本の大学に多様性が確保できないので、これはせざるを得ません。しかし、多様性を確保しようとするとき、この身体的文化資本が問われるような試験になります。そのため格差が広がりやすいのです。

教育とは、必ずこのような根源的な矛盾をはらみます。皆、個性尊重の教育がよいと言いますが、個性尊重の教育だけをしようとするとき、必ず格差が生まれます。なぜなら、その個性は家庭で育つものだからです。当たり前です。もし格差を生みたくないなら、ゆとりのない完全な管理教育のほうがよいです。教育とはその根源的な矛盾

の中で、ベターなものを選択していくしかありません。

そうすると、今回の大学入試改革の本質は間違っていない。ただし、問題はそのまま進めると、身体的文化資本の格差が反映されやすくなるということです。だとしたら、ソリューションは一つです。要するに地方ほど、地域ほど、教育政策と文化政策を連動させて、子どもたち一人一人の身体的文化資本が育つような教育に変えていかなければなりません。これが実は、大学入試改革と連動した文化政策の在り方ではないかと私は考えています。

せっかくなので、コミュニケーション教育がなぜ演劇なのかということについて話をします。これはお茶の水女子大学の浜野隆先生の学力テストの追跡調査です。SESは家庭環境のことです。当然、SESの高い子ほど学力テストの成績が、残念ながら高くなります。ただし、ばらつきがあることが分かります。要するに、困難な家庭で育った子の中にも、一定数の学力の高い子がいます。この子たちを追跡調査しました。そして分かってきたことが、最近よく言われる非認知スキルです。

非認知スキルは大きな概念で、要するに学力テストやIQなど、数字に表せるもの以外は全て非認知スキルといいます。その中でも、特に困難な家庭に育ちながら成績の高い子たちは、このような能力があります。例えば、「ものごとを最後までやり遂げて、うれしかったことがある」、「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦している」。特に重要なのが、「学級会などの話し合いの活動で、自分とは異なる意見や少数意見の良さを生かしたり、折り合いをつけたりして話し合い、意見をまとめている」、「学級みんなまで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがある」です。非認知スキルとは、最初のうちは一般の方が、しつけは大事と

いうような形で注目されたのですが、集中力を育てるためには、正座をさせて30分ドリルをすることなどはあまり効果がなく、実は皆で何かをした時に達成感があり、しかも拍手を浴びる、そのような経験が非常に重要だということが分かりました。まさにこの演劇的手法を使ったコミュニケーション教育は、ここを狙ってきました。

このような数字もあります。これも浜野先生と同じ統計ですが、小学校6年生の学力テスト上位25パーセントのA層と、下位25パーセントのD層を比較したものです。もちろん1番は、「家には本がたくさんある」です。国語で24.6ポイント、算数でも14.9ポイントの差がついています。また、「子どもが小さい頃、絵本の読み聞かせをした」が17.9ポイントです。しかし、「博物館や美術館に連れていく」が次で、15.9ポイントです。これは、「毎日、子どもに朝食を食べさせている」の10.4ポイントよりも、断然、上です。子どもの成績を上げたかったら、朝ご飯を食べさせるより美術館に連れていきなさい、という話です。同じような統計で、アメリカではミュージカルに連れていくというものもあります。

ショッキングなものはこれです。「ほとんど毎日、子どもに勉強しなさいと言う」がマイナス5.7ポイント、算数ではマイナス7.3ポイントです。これは全く逆効果です。子どもたちは、知的好奇心を刺激してあげれば勝手に学ぶということです。この学ぶ意欲が大事であり、学ぶ意欲をもたらすものが、アートであったり、科学館であったり、そのような場所です。本も子どもの本ではありません。親の蔵書です。要するに、知的環境を子どもたちの周りに用意しておくことが大事です。しかし、繰り返しますが、これを自然状態で放っておくと、格差がますます広がってしまいます。そのため、地方ほど公教育でこれに取り組んで

いかなければなりません。

では、この子どもたちはどのような力を持っているのでしょうか。最近、学校では、学び合いという言葉をよく使います。実際にスキルとしても、「これから10分間は学び合いタイムです。今やったことを教え合ってください。」というようなことをやっています。要するに子どもは、先生の言っていることはあまり聞いておらず、それよりも友達の発言や失敗や成功から学ぶことが非常に多いということです。

これは非常に有名な統計です。先生が言ったことは5パーセントくらいしか聞いていません。プリントにすると10パーセント、実験学習などをするとますます上がっていきます。最も良いのは、他人に教えた経験です。要するにこの子どもたちは、隣の子の面倒を見ている子です。隣の子にちょっかいを出して教えている子です。昔は地域社会などで、原っぱにガキ大将などがいるようなところでも、こうした非認知スキルは育ってきましたが、現在はそれが学校だけになってしまいました。公教育の中でも、役割分担、リーダーシップの交換を意図的にしていかなければならない時代になっています。こうしたところでも、演劇手法を使ったコミュニケーション教育が注目されています。学力とは学ぶ力です。学んだ結果ではありません。今までは、大学入試でも学んだ結果を測ってきましたが、これからは大学入試でさえも、学ぶ力を測る試験になっています。この学ぶ力を育てるには、アートが非常に大きな役割を果たしています。

そうすると、文部科学省がずっと言ってきた、この学力の3要素の内容が異なってくるのではないのでしょうか。今までは知識や技能を基盤にし、その上で思考力、判断力、表現力を身に付けて、さらに高等教育で主体性、多様性、協働性を身に付けるよ

う言ってきました。しかし、こちらが基盤なのではないかということです。要するに、こちらをきちんと身に付けてあげれば、子どもたちは勝手に学ぶということです。

皆さんは反転授業という言葉聞いたことがあると思います。家ではインターネットなどできちんと予習をして、学校ではアクティブラーニングをします。これは何が反転したのでしょうか。要するに、学校の権威、教育の権威や権力が反転したのです。これまでは、教員が知識や情報を持っていたので、子どもたちは学校に来なければそれを得ることができませんでした。生きるための知識や技能を身に付けるためには、学校に来ざるを得ませんでした。しかし、インターネットの時代では、世界中どこにいてもその知識や情報は得られます。しかもそれが、今回のコロナ禍でばれてしまいました。多くの子どもたちは、こんなことなら学校に行かなくてもよいのではないかと思ったでしょう。しかし、そうではありません。学校でしか得られないことがあります。それはこちらです。

主体性や多様性や協働性は学校でしか学べません。このコロナ禍で、子どもたちの教育の権利は非常に奪われました。しかし、それを奇貨として何かに活かすとすれば、この点にあると思います。学校本来の力は、知識や技能を身に付けるのではなく、主体性や協働性、多様性を学ぶことによって、学ぶ力を育てることです。そのためにはアート、広い意味での芸術教育が、これから非常に大きな役割を果たすのではないのでしょうか。

豊岡市では、先ほど述べたように市内36校の全ての小中学校で、演劇手法を使ったコミュニケーション教育を導入しています。これは大学入試改革に、きちんと公教育で初等教育から対応しているということで、地方創生の予算を使っています。UターンI

ターン政策の一環です。現在は、但馬地域の全ての高校でもこうした教育を導入しています。本学の教員たちが交代で教えに行っています。

少しだけ豊岡の話をしてします。兵庫県の私のいる地域を但馬と呼びます。東京都と同じ面積を持っていますが、人口 16 万人です。豊岡は東京 23 区と同じ面積で、人口 8 万人です。ちなみにこの建物は、先ほどから紹介している KIITO といいます。神戸税関の隣にある巨大な建物です。これは KIITO を誘致するための建物でした。なぜ兵庫県がこれほど広いのかと但馬の高校生に聞くと、但馬は貧乏だったため神戸とくつついたと、大概答えますが、そうではありません。神戸港を国際的な港湾都市にするためには巨額な費用が必要でした。そこで当時の明治政府は、生野の銀山と但馬の養蚕、つまりカイコ、これが最大の輸出品目だったので、この但馬地域を兵庫県に組み入れることによって神戸港をつくっていききました。そのため、神戸と但馬地域は歴史的にも非常に密接な関係がありました。

3 市 2 町で構成されています。豊岡市自体も、2 市 5 町が合併した大きな市です。コウノトリの再生で有名になりました。それから城崎温泉です。コロナ前はインバウンドも 5 年で 40 倍になりました。城崎に城崎国際アートセンターという世界有数のレジデンス施設を造りました。現在も年間、二十数カ国から 100 件近い申し込みがあり、その中から 15 団体を選んで作品を作っていただいています。短期的な成果は問いませんが、必ずアウトリーチ活動をしていただいています。例えば数年前には、森山未来さんが 1 カ月ほど滞在して、城崎の子どもたちと作品を作りました。これは別に特別なことではなく、ほぼ毎月こうしたことが行われています。この施設のモットーは、「この町で、世界と出会う」です。要する

に、神戸、大阪、京都に出でいなくても、この町で世界的なアーティストに、普通に日常的に出会えるということです。

さらに、今年の 4 月に芸術文化観光専門職大学が開設しました。1 学年 80 人、定員 320 人の小さな大学ですが、四年制大学の誘致が地域悲願だったので、これが実現しました。国は、日本で初めて演劇とダンスを本格的に学べる公立大学としました。これも本日お聞きになった方はご存じかと思いますが、非常に恥ずかしい話です。東京藝術大学には音楽学部と美術学部があるだけで、演劇学部はありません。国立大学に演劇学部が一つもないなどという先進国は他にありません。やっと兵庫県立の公立大学の中に、演劇を本格的に学ぶ大学ができました。

なぜ観光と芸術なのかとよく聞かれますが、アジアの各国は、観光政策と文化政策を一元的に行っています。日本だけが、文化庁は文部科学省、観光庁は国土交通省とばらばらの政策になっていますが、これを一体化していかなければなりません。これは少し考えると分かると思いますが、コロナ禍以前、特に関西はインバウンドで大変潤ってきました。もちろん観光業界の大変な努力もありましたが、最大の外的要因は円安と東アジアの経済発展です。中国、東南アジアに、10 億人近い中間層が一挙に出現しました。年間所得が 300 万、400 万になってくると、皆、海外旅行に行くようになります。そのときに、中国、東南アジアの方が初めての海外旅行先として、近くて安くて安心安全な日本を選んでくれました。

しかし、これからです。もう一度、来ていただかなければなりません。しかし、富士山に何度も登りたいという人はあまりいません。そうすると、食やスポーツなども含めたコンテンツが重要になってきます。これを文化観光といいます。その文化観光

の中でも特に日本が弱いものが、夜のアミューズメントです。例えばブロードウェイのように、家族で安心して楽しめるミュージカルのようなものが少ないです。夜の時間帯が非常に退屈だということが、アンケート調査にも出てきています。

例えば、ウィーン国立歌劇場は、毎日、違うオペラを上演します。なぜ毎日、違うオペラをするかという、オペラはご承知のように、ソリストを休ませなければならぬため、毎日、同じ演目ができません。ただし、それで劇場が休んでしまうと、アメリカや中国や日本から来た音楽好きの観光客は、ローマやパリに行ってしまう。せっかくヨーロッパに来ているのですから。しかし、ウィーンで毎日、違うオペラを上演すれば、重いスーツケースを置いて、昼間はザルツブルクに行ってモーツァルトハウスを見たり、チロルの森まで足を延ばして「サウンド・オブ・ミュージック」の舞台を見たり、あるいは美術館を見るなどして、夜はウィーンに戻ってきてオペラを見ます。富裕層なので、当然、良いホテルに泊まって、1日に最低でも5万円くらいは落とすでしょう。ウィーン国立歌劇場は2000人収容できるので、直接収益だけで1億円です。年間250ステージすれば250億円です。そこに、ホテルやレストランの雇用が生まれ、消費が生まれます。

現在、ヨーロッパはLCCの時代といわれています。ローコストキャリアです。ヨーロッパ圏内のどこに行くにも100ユーロ程度で行けて、時間も1時間以内です。そうすると現実的に、午前中にパリでエッフェル塔に登り、夜はウィーンでオペラを見ることが普通にできるようになってしまいました。そこでヨーロッパの多くの都市は、どうすれば泊まってもらえるかを競うようになってきました。今、述べたように、夜の文化的な催し、ナイトカルチャー、ナイ

トアミューズメントがなければ泊まってもらえません。昔は男性しか旅行をしなかったのが、観光地のそばに歓楽街をつくっておけば良かったのです。しかし、現在は家族で旅行をし、財布は妻が握っています。従って家族で楽しめる、子どもと一緒にに行く、できればハイカルチャー、ハイスペックのものがが必要です。

例えば現在、関西ではカジノの誘致が問題になっていますが、シンガポールの人によく言われました。シンガポール政府はカジノを最後に造りました。シンガポールはかつて日本人がショッピングを楽しむまちでしたが、シンガポールドルが上がっていく過程でショッピングの魅力がなくなっていく。そこでシンガポール政府は、観光政策を大きく転換します。周りにいる、これから富を持つであろう華僑にどんどん来てもらうまちにしようと考えました。例えばシンガポールオーケストラは、東南アジア最高峰の技術を持っています。そこに良いプロデューサーがいてプログラムを変えていけば、ジャカルタやバンコクやクアラルンプールのお金持ちのクラシックファンは何度でも来ます。マーライオンを何度も見たいという人はあまりいません。しかし文化観光は、コンテンツを差し替えればリピーターが何度でも来てくれます。これが文化観光の強みです。

本学は、文化観光の中でも舞台芸術に特化したものを学び、そしてこうしたものを企画し、運営し、実践できるような人材をつくっていくことが狙いです。芸術文化観光専門職大学とは、芸術と文化と観光を学ぶ大学ではなく、芸術文化観光という、日本にとってどうしても必要な、最も重要な学問をこれから確立し、その人材を育成しようとは私たちは考えました。これは豊岡の観光課題とも直結しています。要するに、豊岡、但馬が国際的なリゾートになっている

き、海外からの富裕層の長期滞在を狙うためには、昼のスポーツと夜のアートが必須条件です。そのための人材を育成します。

ここまで話せばご理解いただけたと思いますが、実は神戸も全く同じ課題を抱えていると考えています。神戸市の生きる道は、ナイトカルチャー、ナイトアミューズメントの育成でしかないと思っています。これだけ世界遺産に囲まれていて、夜景がきれいで、そして神戸ビーフという圧倒的なキラコンテンツを持っている都市です。昼間は京都に行こうが大阪に行こうが高野山に行こうが、広島に行こうが姫路城に行こうが、夜は神戸に戻ってきて連泊していただき、時にはスポーツを楽しんでいただく、夜はアートを楽しんでいただきます。

昼のツーリズムと夜の滞在では、消費額が7倍から10倍違うと言われていました。皆さまもヨーロッパへ旅行に行くときに、昼は忙しいのでサンドイッチなどで済ませ、夜にお金をかけるでしょう。従って、京都や大阪で昼間、散々観光しても、お金は神戸に落とさせます。但馬も国際リゾートとして、そのように発展していきたいです。150年前、但馬が港湾都市、神戸を支えたように、神戸市と但馬、豊岡が連携し、兵庫を文化観光立県にしていくことが、私たち芸術文化観光専門職大学の狙いです。これからもぜひ連携していければと思っています。駆け足でしたが終わります。

司会 平田様、ありがとうございました。平田様が行ってこられた演劇の活動が、子どもたちのコミュニケーション能力の向上や、地域社会の活性化にとって非常に重要であることがよく分かりました。

3 ディスカッション

司会 続いてディスカッションの登壇者を紹介します。ディスカッションでは、神戸

市民文化振興財団理事長の服部幸司様と、「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」をテーマにお話しいただきます。モデレーターは、同志社大学経済学部教授で文化経済を専門にされている河島伸子様です。よろしくお願いいたします。

○ディスカッション「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」

劇作家・芸術文化観光専門職大学学長

平田 オリザ 氏

(公財)神戸市民文化振興財団 理事長

服部 孝司 氏

<モデレーター>同志社大学経済学部教授

河島 伸子 氏

河島 ご紹介ありがとうございました。早速、ディスカッションに移ります。平田さんの圧倒的で大変説得力のある具体的なお話をいただいた後で、さらにそれを服部さんと共に深めていくことが、このセッションの狙いです。最初にこのディスカッションのテーマ、「ポストコロナ社会における文化芸術の役割」をいただき、ポストコロナ社会というのは少し早いのではないかと思います。そう感じる方もおられると思いますが、主催者の皆さまの意図としては、ワクチンが行き渡り、ある程度、自由に活動できるような時代をポストコロナと呼びたいという話でした。まさに本日がそれに当たるのでしょうか。できればこれがずっと続いてほしいですが、緊急事態宣言が解除され、完全に昔のようにはならないまでも、ある程度は自由に活動できる社会のことを指しているとのことでした。

今、平田さんの講演の感想を少し述べましたが、服部さんにもぜひその辺りをお聞きしたいです。そして、文化振興財団での取り組みについてご説明いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

服部 神戸市民文化振興財団の服部です。先ほどの基調講演で平田さんがおっしゃった、身体的文化資本を身に付けるというか、育てる機会や場を提供することがわれわれの役目だと思います。ポストコロナ社会が早く来てほしいです。まず、昨年の年度半ばの頃、財団は7億円の赤字に陥ってしまいました。基本財産が2億円しかないので、民間企業ではとうに倒産しています。われわれも路頭に迷うような状況にありました。コロナ禍のダメージが非常に大きく、アーティストたちを支援しなければならないという役割を担いながらも、自分たちそのものが存続を脅かされる事態でした。

このような財団法人は、法律で正味財産が300万円を切る状態が2年続くと自動的に解散することになっています。これには全国の財団法人が皆、非常に苦しみ、おびえました。そうした制度上の問題も、コロナ禍で浮き彫りになりました。われわれは幸いなことに、神戸市との協議で資本注入され、また、かなり自助努力も行い、何とか乗り切って今年に入っています。コロナ禍のダメージは、文化芸術、それを支えるわれわれにとっても大きく、非常に辛い時期です。

私たちは神戸市内の文化振興の役割を担っていて、15施設を運営しています。基幹的な施設が神戸文化ホールという2000人余りの大ホールと900人の中ホールを備えたホールで、それ以外に9区にある各区の文化センター、それから、演劇や美術の先端的なアートを創造したり発表したりする神戸アートビレッジセンター、愛称 KAVC という所を運営しています。このように、非常に上下の幅が大きく、全国でも第一線の芸術団体であるプロの室内管弦楽団やプロの混声合唱団を運営し、知名度を上げるための広報活動をする一方で、文化センター

などを中心に、一般の方々に身近で文化に触れていただく事業も行っています。

コロナ禍を経験し、職員たちの総意として、非常に辛い目に遭いました。このような目には遭いたくはなかったのですが、逆にコロナ禍であったからこそ知らされたというか、痛感した面もありました。例えば、オリンピックの1年延期で露呈してきた女性蔑視の問題や人種差別の問題など、日本は本当に先進国なのかと疑わざるを得ないような事象がいろいろと表面化しました。そのことを考えても、コロナ禍以前に戻ってはなりません。われわれはそれを踏み越えて、新たなステージに上らなければなりません。

去年はベートーベンの生誕250年ということで、「ベートーヴェン・チクルス」という連続演奏会をしました。各演奏会には主にヨーロッパの指揮者やソリストを招く予定でしたが、結果的にはそれができないため、日本在住の指揮者やソリストにどんどん置き換えていきました。それがかえって、われわれには欧米至上主義のようなものがありました。日本の音楽家も十分に実力を兼ね備えていることを再認識させました。もっと身近なことで言うと、例えば、舞台をつくっている舞台課の職員たちとアーティストの上下関係のようなものが、少し民主化されてきました。それと、舞台関係者の中で昔からずっとある縦主義のような上下関係も、こうした中でフラットになってきました。そのような気づきがありました。

その中でわれわれとしては、まさに身体的文化資本のようなものを提供できる団体に、さらになっただけでいかなければなりません。ビフォーコロナではなくポストコロナというステージとして、一歩、二歩、高い所に上っていくことがわれわれの使命だと思っています。

河島 どうもありがとうございました。今、コロナ禍の現状において、どのようなことをされてきたかということにも触れていただきました。あらためてお二人に、コロナ禍での文化芸術活動に関してどのような制限や現状があり、そして、コロナ禍での文化芸術の役割について、改めて伺いたいと思います。平田さんからお願いいたします。

平田 良いことは一つもありませんでした。もちろん、その中でいろいろ希望を見つけなければなりません。音楽を含めたライブエンターテインメント産業はこの20年で急速に伸び、1兆円産業といわれています。一説によると、その7割から8割が溶けて流れてしまったとのこと。特に私たちは在庫を持たない商売なので、すぐには回復しません。飲食業でも、緊急事態宣言が解除されたからといって、皆、1週間に7回も8回も外食するようにはならないと思うので、回復には時間がかかるだろうとよく言われます。多くの方たちが職を失ったり、他の職に転職していったりしました。

何より、公演中止などになった場合、上演されるはずだったその作品が、世界の演劇史に残る作品になった可能性があるわけです。私たちにはどこにチャンスがあるか分かりません。私がヨーロッパでデビューしたのは、1998年のフランスワールドカップの関連事業で、私の「東京ノート」という作品が上演され、100人しか見ていなかったのですが、そこに有力プロデューサーがいたことがフランスデビューのきっかけになりました。どこにチャンスがあるか分からないので、そのチャンスを失わせたしまったことは、最も悔いの残ることです。

私だけではなく、野田秀樹さんや宮本亜門さんや西田敏行さんなどいろいろな人間

が窮状を訴えてきましたが、テレビなどで窮状を訴えるたびにインターネットでたかれました。勝手なことを言うな、命のほうが大事だろう、今まで好き勝手なことやってきたのだろう、というようなことを言われます。命は大事ですが、命の次に大切なものは一人一人、違うと思います。要するに皆さまの中にも、音楽で人生を救われた人もいれば、映画で勇気をもった人もいます。絵を見ると心が落ち着くという人もいれば、週に1回はカラオケに行きたい人、スポーツ観戦に行きたい人など、様々な人がいます。命の次に大切なものは一人一人違うので、それを理解することを、最近ではエンパシーといいます。シンパシーはかわいそうな人をかわいそうだと思う自然に出てくる感情ですが、エンパシーとは、異なる価値観、異なる文化的な背景を持った人が、なぜそのようなことをするのかということを理解する能力のことを指します。

要するに、演劇などは不要不急だと言うことは簡単ですが、自分は演劇を見ないけれども、君にとって演劇は命の次に大切だということは分かる、という気持ちがエンパシーです。このエンパシーを育てるのに、芸術は非常に大きな役割を果たします。ヨーロッパで演劇教育が盛んな理由は、多文化共生型の社会になっていくときに、他者を演じてみることで、異なる価値観、異なる文化的な背景を持った人の行動や言動の理由が理解できるようになるからです。その訓練を初等教育から始めます。このエンパシーは非常に重要であり、そのためにはアートが必要なのですが、エンパシーのない方にはアートが届きにくいというジレンマがあります。これは時間をかけて、本日述べたように公教育で少しずつアートを増やしていき、傷を少しずつ癒やしていくのではないかと今は思っています。

河島 ありがとうございます。服部さんはいかがですか。先ほど少し触れていただきましたが、その他にもいろいろ工夫して活動されていたのではないのでしょうか。

服部 平田さんがおっしゃったように、命が大切で、文化芸術は不要不急なもので、お飾りのように乗っているものという認識は、私ははっきり間違いだと思っています。人によってはもう一つのパンです。われわれはそれを提供する立場であり、抽象的表現ですが簡単にはやめません。

その一つとして、神戸は4年に1回、国際フルートコンクールを開催しており、今年がその開催年に当たります。今回は他のコンクールが中止になったこともあり、前回の倍以上である400人以上の応募者が全世界からエントリーしてきました。その中から五十数人の予選通過者を選びました。本来であればこの神戸に集まってきて、8月末から9月の初めにかけて、文化ホールで1次審査、2次審査、最終審査まで行い、優勝者を決めます。しかし2週間待機などいろいろなことがあり結果的にそれができないため、悩みに悩んで、代替措置として予選で選ばれた五十数人をさらに1次審査で二十数人にまで絞るといって、本来なら神戸で行うコンクールを、審査員のそれぞれの国で審査してもらいました。審査員も6カ国から9人の方に来てもらっていたのですが、彼らも訪日できないためです。そうして26人が選ばれました。望むらくは、この人たちが来年の3月末に神戸に来て、2次審査以降を文化ホールで行い、最終的に1位、2位、3位を決めたいです。それが、現在われわれの進めていることです。そのためいろいろ盛り上げもしています。

一方で、平田さんもいろいろしていらっしゃいますが、われわれとしても特に子どもたちには、例えば6年かけて神戸市内の

全小学校に、先ほど話した室内管弦楽団や混声合唱団、もしくは地元の音楽家たちをお願いをしてアウトリーチを行っています。これも緊急事態宣言が出ると中止や延期になるのですが、何としても6年間で全うしたいと思っています。

また、文化ホールに小学4年生全員を集めて、インリーチの活動も行っています。なかなか全校が来てくれる状況にはありませんが取り組んでいます。このように、現在は何としてでも粘って、しない方向に行かないように歯を食いしばっています。

河島 ありがとうございます。次の話題は、次世代の育成についてです。冒頭で述べたように、ポストコロナ社会を生きる次世代の育成について、まずは服部さんに、それから平田さんにも伺いたいと思っています。私たちくらいの年齢になると、この1年半は長い人生において我慢の1年半として受け止めることもできますが、若い人にとっては非常に大きいです。現在、自分の身近なところで言うと大学生ですが、大学に入ってからずっとオンライン授業で、ようやくこの頃は週に1回、出掛けるようになっただけという人も結構いて、胸が痛みました。さらに若い小学生になると、8歳の子を想定した場合、そのうち1年半がコロナ禍だった、そのような人生は今後、大きな心のしこりになるのではないかという心配もあります。

神戸市は次世代の育成について、特に力を入れていると聞いています。後ほど、このKIITO:300の新しいスペースにおける次世代育成の活動について詳しく説明があると思いますが、その他のところで服部さんにお聞きしてもよろしいでしょうか。

服部 次世代を育てることは非常に大事なことです。これはコロナ禍の時期において

も歩みを止めるべきではないと思っています。皆さまは、例えばパフォーマンス、舞台を使った芸術については、そこで音楽を奏でたり演劇をしたりする人とホール、というようにしか映らないかもしれませんが。しかし実は、その演劇や音楽を作り上げて支えるために、それ以外の様々なスタッフがいます。その人たちのレベルアップや宣伝の企画をつくるためには、マネジメントが非常に重要です。先ほど平田さんが話されたように、音楽大学や美術大学や芸術大学はいくつかありますが、マネジメントをする、作り上げていく人材を育成する教育機関は極めて少ないのです。

そのような人材が、この芸術文化観光専門職大学から卒業していきます。卒業した後は、その人たちが活躍する場がなければなりません。それは恐らくわれわれの役割です。まさに学問として身に付けた人たちに、オン・ザ・ジョブ・トレーニングで実際に仕事をして身に付けてもらい、さらにレベルアップしてもらうためには、その人たちを引き受けていかなければなりません。そのために、平田さんの大学とわれわれが提携し、恐らく来年度以降に学生たちを引き受けて、インターンシップ的にわれわれの所で働いてもらい、身に付けてもらうという取り組みも行います。

もう一つ大事なことがあります。せっかくそのような能力を持った人が入ってきても、新人ばかりでは機能しません。その人たちを指導して、さらに高いレベルに引き上げていくリーダー的な人たちがが必要です。私たちも、そのような役割を担える人として音楽や演劇などの人たちを引っ張ってきて、プロパーの位置に置いています。当財団もかつては神戸市の出向職員がほとんどでしたが、現在はそれをプロパーに置き換えており、その人たちがこの財団を牽引し、神戸の文化を向上させていく中心部隊にな

ってほしいと考えています。そのようなソフトが、ハードに勝るくらい必要で大事なことであると認識しています。

河島 ありがとうございます。アートマネジメントという職業の大切さということでしょう。在学生の研修も引き受けるのですか。

服部 はい。平田さんの大学はまだ始まったばかりで、卒業生は数年後まで出てこないで、取りあえずは在校生を引き受けて学んでもらいます。

河島 ありがとうございます。平田さんも、そのような方々を育てる専門職大学だと思いますが、もう少しその辺りを具体的にお聞かせください。

平田 先ほども紹介したように、このような公立大学ができたのは日本で初めてです。私自身は幸いにも世界中の大学で教える機会をいただき、様々な大学を実地に肌で感じてきたので、周回遅れの利点を活かして、世界的にも例のない大学ができたのではないかと思います。要するにアートマネジメントと、俳優やダンスの実技、それから照明や音響のスタッフワークを、全ての1年生が学びます。その中で徐々に専攻を決めていきます。

観光やビジネス、マネジメントの授業も多くあるので、起業ができるようになります。日本のアートマネジメントで弱い点は集客です。公的なお金を使っても、きちんと集客は意識しなければなりません。そうしたところを4年間で鍛えます。さらに、おっしゃっていただいたように専門職大学なので、600時間以上のインターンシップが課されているため、通常のインターンシップ以上に、3年次、4年次になると1

カ月単位で預かっていただき、鍛えていただきます。このような人材が毎年80人ずつ出てくれば、恐らく日本の舞台技術の世界に大きなインパクトを与えるでしょう。

学生も本当に日本中から集まってくれました。この少子化の時代に大学をつくって大丈夫かと多くの方から言われましたが、ふたを開ければ平均の倍率が7.8倍で、1年目の大学としては異例の高倍率でした。北海道から沖縄まで、全国から来ています。例えば根室から来た女子学生は、オーストラリアでの1年間の留学体験があります。私たちの世代だったら、当然、国際的に活躍する人間になりたいというようなことを志願書に書くでしょう。しかし、彼女はオーストラリアの地方都市に1年間いたのですが、オーストラリアでは商店街もまだ生き生きしているし、5時になったら皆、仕事をやめて、夜は音楽を楽しんだり演劇を楽しんだり、家族でバーベキューをしたりして生活も楽しんでいるのに対し、地元はなぜこれほど寂しくなってしまったのだろうかと考えていろいろ調べ、豊岡で4年間、アートと観光を学び、根室に戻って根室のまちづくりに貢献したいと言います。そのような学生がほとんどです。まちづくりや地域振興の意識を持ったアートマネジャーが育成できるということが、本学の一番の強みではないかと思っています。

河島 このセッションは短く、もう残り数分しかありません。最後に、平田さんに再び、神戸市との連携について伺います。先ほど、学生のインターンシップの話伺いましたが、文化観光政策という本日お話しいただいたことについて、神戸のポテンシャルや伸びしろとして期待できるものは何でしょうか。また、専門職大学と神戸市との連携について、学生だけでなくもっと広がりがあるのではないかと思うので、その

辺りの環境についてお話しいただけますか。

平田 基調講演の最後にも話したように、神戸はこれだけの観光資源に囲まれた街です。神戸単独ではなく、連携がポイントになってきます。淡路島から但馬まで非常に豊かな自然があり、それから、兵庫の場合は何と言っても、海外を引き付ける食です。この食を含めた文化観光はこれから非常に重要になってきます。ぜひ豊岡市、但馬地域と神戸が、人材育成についても連携し、そうしたことも最初から意識した人材を育てていければと思っています。

河島 どうもありがとうございました。短い時間でしたが、非常に内容の濃いディスカッションができたと思います。簡単にまとめると、新型コロナウイルス感染症の拡大で人々が分断されがちな時代にあっても、文化芸術は非常に大事なもので、平田さんがキーワードとして挙げていたエンパシーという、それぞれの違いを認めていき、そのことに対して共感していく社会をつくるためにも、文化芸術が非常に重要であるということです。

それから、神戸市はこの創造都市ネットワークの中でも先輩格で、先進事例として皆さまが目指してこられた、一つのモデル都市だと思います。本日お話を伺い、最先端の芸術、それから一般の人たちに身近な参画的な活動まで非常に幅広くカバーされていること、そして、但馬地域との連携も含めて、ますます発展していきそうだという印象を大変強く受けました。

この後また、第3部で詳しく KIITO:300の活動や神戸市の文化戦略についても伺いたいと思います。ディスカッションはこれで終わります。どうもありがとうございました。

司会 平田様、服部様、河島様、ありがとうございました。文化芸術の力で人々の相互理解が進んでいくということが分かりました。ポストコロナ社会における神戸での文化活動に、一層期待が持てます。平田様、服部様には、後ほど皆さまからの質問に答えていただきます。ここで10分間の休憩とします。15時20分より再開しますので、よろしくお願いいたします。

<第2部>

4. KIITO、KIITO:300の紹介

司会 政策セミナーを再開します。デザイン・クリエイティブセンター神戸、通称KIITOの永田宏和センター長よりKIITOの紹介、そして、先日9月18日にKIITOの3階にオープンした、子どもの創造的学びと社会貢献活動の拠点、KIITO:300の紹介をしていただきます。永田センター長、よろしくお願いいたします。

○KIITO:300の紹介「元気が集まる。元気が広まる。創造の中心地KIITO:300」

KIITOセンター長 永田 宏和 氏

皆さま、こんにちは。KIITOのセンター長をしている永田宏和です。今ご紹介いただいたように、社会課題解決型のデザインセンターとして展開しているこのKIITOと、先月オープンしたKIITO:300について、スライドを使って紹介します。

本日は皆さまにはオンラインで視聴していただいているので、まず建物について、どのような施設かを簡単に紹介します。一言で言うと非常に古く伝統的で、そして広いです。1万4000平方メートルという大きな面積を有しています。下のほうにあるように、レンタルのスペースが数々あります。見ると分かるように、1階には大きなホール、2階にはギャラリーやライブラリーの

ような少し公共的なスペースもありながら、3階と4階にはスタジオと呼ばれている、クリエイターたちの事務所が入るテナントスペースもあります。3階には会議室もあります。

写真をご覧ください。これがKIITOホールです。見えている所だけで1000平方メートルあります。そしてKIITOカフェ、ライブラリー、これは2階です。3階に行くと非常に重厚感のある会議室があります。本日、今はこの場所にいます。この辺りはレンタルスペースです。そして、先ほど言ったクリエイター関係のスタジオ、オフィスが集積しています。40近くスタジオが集積しているので、その人たちとのコラボレーションも数々展開しています。

少し歴史を振り返ります。先ほど平田オリザさんの話にもありましたが、ここはKIITOと呼ばれているゆえんでもある生糸検査場です。西日本を中心に生産されていた生糸がここに集められ、品質検査、等級分けをして神戸港から輸出されてきました。これが先ほどのKIITOホールで、ここも検査のスペースになっていました。今は生糸検査場の歴史を伝えるギャラリーというか、小さなミュージアムのようなものも2階に併設しています。

神戸市は2008年にユネスコの創造都市ネットワークの中のデザイン都市として認定されました。現在は、デザイン部門だけでも世界で40のデザイン都市があり、そのうちの一つが神戸です。デザイン都市・神戸の拠点として、この生糸検査場だった建物が、2012年8月にKIITOとしてオープンしました。

KIITOの事業は、自分たちで企画をして行っている自主事業と、先ほどのスペースをレンタルする事業という二つの軸で展開しています。2012年の開設当時に掲げたキャッチコピーがあり、これはここがやろう

としていることを非常によく表しています。「みんながクリエイティブになる。そんな時代の中心になる」。コピーライターの岡本欣也さんをお願いをして作ってもらったコピーです。つまり、神戸市民が全員クリエイティブになるために私たちは活動するということです。もっと言えば、神戸市民が全員クリエイティブになれば、もう KIITO は要らないかもしれないというくらいの気持ちで始めました。言い換えると、子どもから高齢者までが皆クリエイティブになるということなので、あらゆる世代を対象とした創造教育拠点として 2012 年に誕生しました。

様々な活動を展開していますが、KIITO の活動に横たわっているフィロソフィーがあります。活動理念です。市民が全員クリエイティブになるということなので、神戸市民や神戸の地域を支援していく施設ということですが、この、風、水、土、種という考え方はどの形でも使えるというか、地域でも大学生でもいろいろなところで使える考え方なので、少し紹介します。

まず、土の人です。風、水、土のうち、土は動かない存在なので、地域住民のことです。神戸であれば神戸市民のことを土の人と呼んでいます。恐らく、昔の土の状態はコミュニティが豊かで、お祭りがあり、餅つきをして、本当に皆、仲良く暮らしていたはずです。そのような状態だと、土が肥沃です。水分も養分も含んでいるので、地域の活動のことを種と呼んでいるのですが、どのような種を植えても自生できました。誰の手を借りなくてもお祭りは皆でつくるものだったし、餅つきも皆が参加するもので、豊かでした。

ところが現在の土の状態は、元気な所もちろんありますが、往々にして、非常にコミュニティが希薄になっていて、崩壊しているといわれている地域まであります。

そうなってくると土が枯れているので、今までの種、つまり活動を植えても育たず、根が張りません。そうすると、種を品種改良して、乾いた土にも効くような強い種をつくらなければなりません。ところが、地域の方が種をつくり替えることはなかなかできません。しがらみもあり、なかなかそのような場所に立てません。その中で KIITO は風の人という存在で、種を品種改良して強い種につくり替え、風に乗せて地域に届けに行きます。

KIITO は種をつくり続けなければならないので、その種に水をあげて育ててくれる人も必要です。それが地域の市役所の方、区役所の方、社会福祉協議会の方、まちづくり団体の方、最近では大学も頑張ってくれたり、NPO が頑張ったり、実は水の方は結構います。しかし、種をつくり替える風の人がいまいません。強い種がないという状況です。

私たちは種をつくってきたので、良い種、強い種とはどのような種なのかということが分かってきました。条件は二つです。まず、不完全プランニングです。つまり完成しきっていない、持っていったときに地域の人たちと一緒に作り替えることができる、関わりしろがあるように、不完全にできていたほうがよいというポイントです。

もう一つは、とはいえ興味関心を持っていただかなければならないので、クリエイティブの力で種そのものに魅力があふれていて、皆が興味を持って関わろうとしたときにつくり替えられるようにつくっていくかどうかが、非常に重要だと分かってきました。KIITO のコンセプトとして、「+クリエイティブ」というものを開館当時に掲げました。これは、社会課題+クリエイティブということです。社会課題もたくさんあります。まちづくり、教育、観光、防災など、ここに書いてあるこの左の文字は、実は開

館以来、神戸の様々な部局の方から相談をいただき、各部局で抱える課題を社会課題として、市民を集めてゼミを開講するというように、課題に対して打ち返しをしてきた、その歴史です。

KIITO では、様々な種をつくってきました。本日はその種を一つ一つ詳しく紹介できませんが、種の種類として、先ほどのゼミでつくる種と、自分たちで企画をしてスタッフとクリエイターと一緒につくってきた種があります。この中にKIITOを非常によく表している、象徴的なプログラムが二つあるので見てください。一つ目が、「ちびっこうべ」という、子どもの創造教育プログラムです。二つ目が男性高齢者向けの、もう一度、技を磨いていただき地域で活躍してもらおうという、通称、パンじいといわれている、「男・本気のパン教室」というプログラムです。

「ちびっこうべ」では様々なワークショップを展開していますが、シェフ、建築家、デザイナーなど、全てプロが子どもたちに教えています。そしてワークショップスタイルで、子どもたちが飲食店をつくっています。15軒の飲食店が集まってまちを形成していくのですが、もちろん飲食店だけではまちにならないので、ラジオ局ができたならラジオ関西が手伝いをしてくれたり、新聞社ができれば神戸新聞社が手伝ってくれたり、そのようにして、どんどん、まちを活性化させていくプロジェクトです。このお店づくり、まちづくりのプロセスにおいて、神戸の子どもたちは様々なクリエイティブの専門家から指導を受けながら、一緒に創造教育をしています。これは海外から視察に来られるような、世界的に有名なプロジェクトとして成長しています。

もう一つが、「男・本気のパン教室」です。料理教室もあります。これは、神戸を代表するパン屋のシェフたちが先生役になり、

男性高齢者にパンの技術を教えています。男性高齢者の居場所問題は非常に大きな問題で、リタイアした後、家にいてテレビばかり見て、おばあさんがノイローゼになるというような社会課題があります。そうした中で、仕事ではなく、自慢ができる技を磨きます。パンや、他の料理の技も現在たくさんつくっています。このように、シェフが先生役になってパンの製造技術を学び、このおじいさんたちは、実は5期生までいるのですが、地域で非常に活躍しています。神戸で生まれたプログラムが、現在は大分や広島や大阪でも行われています。

実は介護予防にも効果があるということが分かってきました。今までは体操などしかありませんでしたが、現在はこのように、国も注目するような、高齢者向けの新しいプログラムを展開しています。他にも、ゼミと書いていますが、先ほどの神戸市の各部局から課題をいただいてゼミを開講し、様々な社会課題解決のアクションを事業化しています。

そして今年から、新しいキャッチコピーを掲げました。「これまでも、これからも。クリエイティブがつくるのは、元気だ。」。これから神戸の町をもっとアウトリーチして元気にしていこうということで、それに併せて内装改修も1階と3階で行いました。本日は皆さまに来ていただけませんが、これが1階エントランス部分です。これが30メートルのロングカウンターで、図書館が2階にこれから移転してくるので、自習スペースとしても使っていただけます。

KIITOに残っていた家具を家具職人にリメイクしていただき、随所で使っています。KIITO ショップもこれに併せてオープンしています。KIITO と関係のあるクリエイターにオリジナルグッズを作っていただき、販売を開始しています。

そして、これがKIITO:300です。創造的

学びと文化活動のスペースとして、2階は先ほど言ったように、三宮図書館が来年の7月頃に移転してきます。3階には社会貢献活動のプラットフォームと、子どもの創造的学びの拠点が生まれました。

子どもの創造的学びの拠点と、社会貢献活動プラットフォームの二つの機能がオープンするというので、ブランディングを行いました。まず、コピーライターの岡本欣也さんと、日本を代表するクリエイターである、アートディレクターの寄藤文平さんをお願いをして、岡本欣也さんにスペースの名前を考えていただき、KIITO:300と名付けました。会議室が301から始まっているので、300と名付けました。これだと普通なのですが、さすがコピーライターだと感じるころは、「元気が集まる。元気が広まる。」の丸。丸です。このKIITO:300のロゴマークも作っていただき、子どもの創造的学びのプラットフォームはキャンプと名付けました。これはステートメントですが、ホームページに書いているので、一度、読んでみてください。ここで何をしようとしているかというメッセージが書いてあります。そして、社会貢献活動の支援のクリエイティブなプラットフォームは、ファームと名付けました。これもステートメントに書いているので、読んでみてください。

本日は皆さまをお招きできませんでしたが、900平方メートルのスペースに、このように、子どもの創造教育をするキッチンも作りました。ここで、パンじいたちが子どもにパンの製造技術を教えるようなプログラムを、これから展開していきます。そしてこれは、工作など物を作るスペースです。

真ん中がセミナールームで、ワークショップができます。奥に行くとミーティングルームがあり、大学との連携もこれからやっていくので、大学のプロジェクトチームが占有してしばらく使えるようにもしてい

ます。

キャンプではどのようなことをしていくかということ、先ほどの風、水、土で言うと、子どもたちにも将来は風の人になってほしいです。リサーチをして企画をし、強い種をつくれる人を育てるための創造教育をしていきますが、これにはゴールがあります。ここのKIITO:300はこれから土日にオープンして、クリエイティブな学童保育のようなことをしていきます。そのときに来る子どもたちが楽しむことも大事ですが、ここで様々な種、プログラムをつくり、それを最終的に公教育や地域のイベントや家庭への動画配信などにつなげたいです。つまり、ここが拠点になって種をつくり、もっとアウトリーチしていく、その種づくりのための生産方法というイメージを持っています。

土日に開けるのですが、本日、来ていただいた皆さまは分かるように、結構不便です。駅から離れているので、相当、吸引力のあるものを持ってこなければ、土日に開けても親御さんに来てもらえないのではないかと考えました。そこで、ちびっこうべが大変な人気なので、ちびっこうべをやっていないときも、3カ月に1回、ちびっこうべカフェやちびっこうべショップを皆でオープンするという短めのゴールを設定し、小さな山をつくります。それまでの間は、毎週土日に来てカフェのメニューを考えたり、エプロンを作ったり、様々なプログラムを展開しながら、皆でいろいろなものを作っています。現在の予定では、ちびっこうべお化け屋敷を作るというプログラムがもう始まりそうです。その様々なカフェやショップ、お化け屋敷もそうですが、それらを作っていくところに、ちびっこうべでお世話になっている様々なアーティスト、建築家、デザイナー、シェフが協力してくれます。月替わりで来ていただくことになると思います。

他にも、神戸市の教育委員会との連携が始まっていて、小学校の総合学習のプログラムを作り始めています。これは、建築と子どもの総合的学びを組み合わせた、「ユメイエ。」というプログラムです。子どもたちが夢の家の模型を作るというプログラムを、現在、このKIITOの入居者である畑さんという建築家と一緒につくっていて、来年の1月頃には北区の道場小学校でモデル授業を展開する予定です。

また、現在、創造教育で注目されているボードゲームがいつ来ても体験できるように、45種類のボードゲームを入れました。そして、企業との連携もどんどん進めようということで、これも既に始まっています。実はもう終わりましたが、アシックスから相談を受けて、速く走れる靴を開発するというので、靴のデザイナーになってもらい、リサーチから企画、デザインまでしてもらいました。本当に工場に発注し、写真に写っているような靴を作りました。速く走れるための靴なので、最初に測定をしておいて、最後に走ってもらったのですが、皆、見事に速くなりました。そのようなプログラムも展開しています。最後に、商品発表会のようなプレゼンテーションもしてもらいました。

他にも、VIVITAという所と組んでプログラミング教育を始めようとしていたり、キャンプ専属のボランティア、サポーターを集めて、キャンパーという名前で創造教育の人材育成をしていこうと考えたりしています。

そして、ファームです。現在、地域活動、社会活動の担い手が完全に不足しているので、ファームでは大学生や社会人の新しい担い手づくりと、現在、活動している地域団体、NPO法人の支援をしていこうとしています。未熟ですが、実際には単独の学生個人を扱うというよりも、大学機関と連携

しています。現在は各大学が社会課題解決型の人材育成機関をつくっているの、そうした所とKIITOが課題を設定し、ゼミのようなものを始めていきます。社会人では、シニア層にターゲットを絞ったり、神戸市の職員の副業マッチングのようなこともしていきたいと考えたりしています。他には、地域団体の方々向けの研修プログラムも展開予定です。

これも既に始まっていて、神戸大学のV. School、大阪大学のSSIの超域イノベーションなどと組み、2023年に開催予定のフラワーロードを舞台にSDGsをテーマにした地域共創イベントを企画しています。そのイベントの企画を現在、大学生たちに考えてもらっています。もうこれは終わりましたが、KIITOのゼミでも同じテーマでイベントのアイデアを考えてもらいました。10月16日に神戸大学、大阪大学の学生も集まり、KIITOのゼミ生、その中には神戸の他の大学生も入っているので、様々な人たちが集まってそれぞれが考えたアイデアを交換し、その中から選んで、2023年に開催予定となっています。

他にも、明日、1dayワークショップとして私も講師を務めます。この社会課題解決手法を伝えて、実際に例題として、KIITO:300で多世代交流のプログラムを考えてもらうというプログラムを設定しています。明日、そのワークショップを、大学生を中心にした20名の学生たちと一緒に、4時間から5時間かけて実施予定です。

これが最後のスライドです。既に相談対応の窓口も開いていて、地域団体、NPO団体、神戸市の区役所でまちづくりをしている方々、企業からの相談もどんどん来ています。それらの困っている方々に、種づくり方や事例を紹介し始めています。以上です。ありがとうございました。

司会 永田センター長、ありがとうございました。KIITO:300 ではこれからいろいろなプログラムが実施されていくとのことなので、神戸にお越しの際はぜひ皆さま、お越しください。

5. 質疑応答

司会 次に質疑応答に移ります。Q&A にお寄せいただいた質問に答えていきます。平田様、服部様、永田様へ質問がある方は、今からでも大丈夫なのでご記入ください。質問をいただくまでの間、登壇者より本日の感想を一言いただきます。まず平田様、本日はいかがでしたか。

平田 このKIITOの説明を聞いて、本当にうらやましいと思いました。但馬には神戸にない圧倒的な自然があり、子どもを対象にこういう試みをしています。ですから、ぜひ交流や交換など、神戸の子どもたちに但馬に来ていただき、今度は自然を使ってこのようなことをする、あるいは但馬の子どもたちをここに連れてきて遊ばせたいと強く感じました。神戸市とともに発展していけるといいと思います。本日は2時間半かけて但馬から来たかいがありました。

司会 ありがとうございます。続いて服部様、本日の感想をお願いいたします。

服部 冒頭にも述べたように、当財団はコロナ禍で非常に大きなダメージを受けました。そうした中で、文化を守っていくとか、平田さんが言うように、身体的文化資本を身に付けてもらう機会を確保していくことがより大切だということを、本日のシンポジウムでも本当に実感しました。それには、本日このシンポジウムを視聴してくださった、地方自治体の文化の関係の方々、また、その関係団体の方々の責任と

いうか、役割が非常に大きいということをあらためて強調したいと思います。なかなか民間ではこうしたことを支えていけません。自治体が文化の火を消さないことを、より強く求めます。

司会 ありがとうございます。永田様、感想をお願いいたします。

永田 本日は、前半の平田さん、服部さん、そして河島さんの話を聞いていて、次世代育成、そして次世代育成における創造教育の大切さがひしひしと伝わってきました。先ほど平田さんがぜひ交流をと言ってくれましたが、皆で取り組んでいかなければなりません。どこかが単独でするのではなく、いろいろな所が協力し合いながら進めていくことだと感じました。

平田さんの話から、1点、神戸にアドバイスというかヒントをいただきました。ナイトカルチャーには、もちろん久元市長も力を入れています。完全に妄想ですが、一度、ナイトカルチャーを考えるゼミを試みたいという思いもあったので、本日、私も参加させていただいて、非常に有意義な時間でした。ありがとうございます。

司会 ありがとうございます。それでは、Q&A にいただいた質問を紹介します。こちらは平田様宛てです。「基調講演で出ていた文化資本の概念がよく分からなかったのもう少し詳しく教えていただけないでしょうか。また、演劇と学校の関わりに関連して、学校の教育プログラム以外での展開は考えられないのでしょうか。学校で実施する意義についてもご説明いただけると幸いです」と来ています。お答えをお願いいたします。

平田 文化資本とは非常に広い概念であり、

これまで教養といわれていたものが全て文化資本に当たりますが、その中でも本日紹介したものは身体的文化資本です。後天的に獲得できる、例えば資格や蔵書や書画などは全て文化資本です。その中でも、現在、非常に問題になっているものが身体的文化資本、要するに自分の努力だけでは獲得できない、家庭環境などが非常に影響するものです。この身体的文化資本は、日本では間違っただけで捉えられることがあるのですが、ピエール・ブルデューが言っているのは、これほど格差がつくという、実は負の概念です。だからどうにかしようという話なのです。それが後段の学校教育への質問にもつながります。

例えば、KIITO の素晴らしい活動でもジレンマがあります。小学生がここまで自分で来ることはなかなか難しく、富裕層、意識層の子どもたちしか参加できない。行政のアートのイベントは常にそのジレンマを抱えています。そのため、ある程度は公教育で行い、興味のある子たちが自分でこうした所に来られるようになる力までは、公教育の中で付けなければなりません。

もしかすると質問は、不登校の子たちをイメージしているのかもしれませんが。それはそれでまた別の施策として必要なことがあります。公教育で取り組むということが、今は特に格差社会の中では非常に大きなことです。

司会 ありがとうございます。次の質問です。こちらも平田様宛てに来ています。日本国内外の方々が、兵庫県豊岡市を演劇のハブにしようとする平田オリザ様の姿に感銘を受けています。質問です。1、エンターテインメントと学問は親和性があるでしょうか。私の学生時代、学力低下や凶悪な少年事件を誘発する恐れがあるマンガやゲームというエンターテインメントは、教育

とは相性が悪い印象でした。2、今後の学校教育のあるべき姿を含め、エンターテインメントは日本の学校を救う切り札となり得るのかを伺いたい、とのこと。お願いいたします。

平田 エンターテインメントを広く捉えると、人を楽しませるということです。これは観光とも非常に親和性が高いです。逆に言うと、日本のこれまでの学校教育の活動は、大学あるいは研究者でさえも、他者を意識することは非常に少なかったです。例えば、豊岡市はコミュニケーション教育を3段階に分けて、小学4年生まではあいさつができる、人の話が聞けるというコミュニケーションの基礎力を鍛えます。小学5年生から中学1年生は協働性です。一緒に何かをして楽しい、達成感があるという気持ちです。中学2~3年生になると、誰に伝えるかを意識します。

例えば、最も京都府寄りの但東町は、最も過疎の町ですが西陣を支えていて、まさに絹織物の産地です。ここは中学校の修学旅行で東京に行くのですが、有楽町のど真ん中で、但東町についてのプレゼンテーションを中学3年生が行います。どのようなプログラムにするか、1年かけて自分たちで考えます。撒くチラシなども全て自分たちで作ります。ある学年はダンスをしました。要するに、誰に何を伝えたいかの、「誰に」の部分が、今までの学校教育では非常に弱く、他者性がありませんでした。私は、エンターテインメントという要素がこれから日本の学校教育に入っていくことが、日本の学校教育を豊かにすると考えています。

司会 ありがとうございます。次で最後の質問とさせていただきます。こちらは平田様と服部様宛てに来ています。「文化事業、文化活動がコロナ禍で渴望されているのは

確かだと思います。一方で、それを提供する現場が疲弊していると思いますし、提供する現場や時間帯がコロナ禍の後も従来のように確保できるか難しいことも考えられると思います。まずは再建が必要だと思いますが、そのときに何が必要になるのでしょうか。まずは平田様からお答えください。

平田 最も必要なものはお金です。予算を付けてもらうことです。これは国レベルの問題であり、芸術文化が国にとって本当に必要なものなのかが改めて問われると思います。伝統芸能もそうですが、一旦切れてしまうと再開することが非常に難しいので、照明や音響のスタッフなど最も疲弊している方々に辞められてしまうと、再開するときに担当する人がいなくなってしまうのです。そのような方たちをどう救済するかが喫緊の課題です。

司会 ありがとうございます。続いて服部様、お願いいたします。

服部 あくまでも私どもの財団の枠内での話ですが、かつて当財団は、ほとんどの職員が神戸市からの出向職員でした。いわばプロパーの職員はその下働きであり、しかも有期雇用で何年かで雇い止めでした。それではほとんどやる気になりませんし、ノウハウも蓄積されません。私は、出向職員からプロパー職員にどんどん人材をチェンジしていくというか、プロパー主体の財団にしていく方向で進めています。プロパーの職員も試験などをして、どんどん幹部職や管理職に昇進してもらい、財団の運営全体をけん引してもらうように切り替えていきたいと思っています。

プロパー職員がやる気を持ち、自分たちでいろいろなことを主体的に企画したり実行したりできるようにするために、平田さ

んがおっしゃるように、私の仕事はお金の獲得です。市や経済界から取ってくることは私の仕事ですが、本当に自分たちで財団を引っ張っていく、つくっていくという自覚が、ポストコロナの中でより生きてくるのではないのでしょうか。

司会 ありがとうございます。時間となりましたので、ここで質疑応答は締め切ります。皆さま、いろいろな質問をいただき、ありがとうございました。

6. 総括

司会 最後になりますが、創造都市ネットワーク日本の顧問であり、文化庁、文化創造アナリスト、学校法人稲置学園理事の佐々木雅幸様より、総括の言葉をいただきます。オンラインでつなぎます。佐々木様、お願いいたします。

○総括

文化庁文化創造アナリスト・学校法人稲置学園理事 佐々木 雅幸 氏

皆さん、こんにちは。佐々木です。本日は2時間にわたり、大変、素晴らしいシンポジウム、討論会が行われたと思います。ちょうど2年前に豊岡に伺い、創造農村ワークショップをCCNJとして主催しました。たまたまそのときに、平田オリザさんが住民票を豊岡市に移し、これからは兵庫県に根付いてクリエイティブな若者たちを育てると言っていました。さらに、豊岡演劇祭を世界的なものにしたいという話を聞いたことを思い出していました。

日本全国の創造都市という運動がさらに大きく深く強くなっていくためには、どれだけ創造的な人々を生み出せるかです。特にこのコロナ禍の中で、これからの社会を担い、コロナ禍を超える、ビヨンドコロナのクリエイティブな若い人材をどのように

つくっていくかということ、非常に大事なテーマです。まさにそのテーマにチャレンジされるという話で、非常に勇気が湧いたと思います。

それから、現在 117 を超えている、全国の創造都市のネットワークで、ここの卒業生やそこから生まれた人たちが、まちづくりに、あるいは芸術的な事業の拡大に貢献してくれる姿も目に浮かんできています。

私も現在、金沢で、幼稚園から大学まである学校法人の理事をしています。これからの社会の担い手をどのように創造的につくれるかということが、日本の社会の再生にとって非常に大事だということで、本日の平田さんのメッセージは深く受け止めたと思いますし、厚く連帯をしたいです。また来月、秋田でも一緒しますが、創造都市のネットワークは世界的にも広がっているんで、ぜひ豊岡市も、神戸市と並んでユネスコ創造都市に入っていただくと、もっと厚みが出ると思いました。

本日は服部さん、河島さん、永田さん、それぞれの方に、大変、貴重なコメント、発表をいただき、誠にありがとうございました。神戸市の皆さま、私は KIITO の評価委員を 10 年近くしてきました。この新しい KIITO:300 には図書館も加わるので、さらに発展されることを期待しています。どうもありがとうございました。

7. 閉会

司会 佐々木様、ありがとうございました。今回のセミナーは、神戸のみならず全国の創造都市にとって、今後の政策を検討するにあたり、大変貴重な話となったのではないのでしょうか。

最後に視聴者の皆さまへ、アンケートへの協力のお願いです。セミナー終了後、自動的にアンケート画面に移りますので、そちらで回答をお願いします。本日の回答が

難しい場合は、後日、皆さまにメールでお送りする URL よりアンケートの回答にご協力をお願いいたします。それでは、これをもって本セミナーを終了します。お忙しいところご参加いただき、誠にありがとうございました。登壇者の皆さまもありがとうございました。

3. 令和3年度 創造農村ワークショップ in 丹波篠山市（現地・オンライン配信）

日時：令和4(2022)年3月11日（金）

14：00～17：00

開催方法：現地 ユニトピアささやま

レイクホール

オンライン（ハイブリッド開催）

主催：丹波篠山市

共催：文化庁

創造都市ネットワーク日本（CCNJ）

テーマ：「日本遺産のまち・創造農村の役割とは」

参加者数：現地21名、オンライン28名
（創造農村ワークショップ）

1 開会

司会 本日はお忙しいところご参加いただき誠にありがとうございます。私は本日の司会進行を務めます CCNJ 事務局の西河公嗣と申します。どうぞよろしくお願いいたします。さて、このワークショップは、食と器をめぐるクリエイティブツーリズムの醸成などの検討が進む丹波篠山市で、日本遺産に認定された、丹波篠山市の文化・芸術の事例を基に、これからの創造農村の在り方を皆さまと一緒に考えていくものです。今回は、「日本遺産のまち・創造農村の役割とは」をテーマに、現地会場およびオンライン配信のハイブリッドで開催いたします。まず初めに、開催都市の丹波篠山市より酒井隆明市長がご挨拶申し上げます。酒井市長、よろしくお願いいたします。

○開催地挨拶

丹波篠山市長 酒井隆明 氏

皆さんこんにちは。ここ丹波篠山の地で創造農村ワークショップを開催していただき大変ありがとうございます。うれしく光

栄に思っております。本来ならば全国から世界から、ここ丹波篠山にお越しをいただいてワークショップを開催したかったのですが、コロナの影響でこのようなオンライン配信となりました。皆さま、機会がありましたら、ぜひ、ここ丹波篠山にお越しをいただきたいと思います。本日のワークショップでは、この後、創造都市の第一人者であります佐々木先生、それから日本遺産や観光で全国的なご活躍をされております丁野先生に、それぞれご講演いただきます。また、その後は小山さんや丹波篠山市の創造的な皆さんが出演されますパネルディスカッションもありますので、どうか皆さま、楽しみにしていただきたいと思います。

少し丹波篠山の紹介をしておきますが、ここは町の中心にお城があり古い町並みが広がり、その周辺に農村の集落が広がっています。城下町で小京都とも言われているきれいな町並みがあり、人口は約4万人の小さな町となっています。一番、全国的に皆さんに知っていただいておりますのは黒豆ではないかと思えます。黒豆、山の芋、お米、お茶など農業にも力を入れて、農業の都、農都宣言というものもしております。それから、非常に文化の香る町であります。丹波焼という焼き物、王地山焼、それからデカンショ節という民謡がありまして、デカンショ祭や各地に伝統的なお祭りが息づいており、お能もあります。このようにいろんな文化の香る町ですから、丹波篠山市では10年ぐらい前から、こういった町の活性化を、普通の町の都市化とか工業化ではなくて、町の文化やいろんな魅力を活かすことによって活性化を図ろうという創造都市、創造農村の取り組みを始めました。

その取り組みが実りつつあるとも思っております。観光に来られる方も確実に増えてきました。また、うれしいのは、コロナ禍の影響もあり人々が豊かさや幸せとい

うものの価値観を考え直すような方も多くなりまして、丹波篠山で住みたいという方も増えてきております。高齢の方が増えているのではないかとと思われるのですが、決してそうではなく、若い方がそういった価値観を持って来ていただいているケースが多くなっています。また、工芸、芸術、こういった方の移住も特に目立っており、市外から50人以上、陶芸、ガラス、竹細工など、いろんな工芸の方が移住して来られています。私がここにしております時計がありますが、見えますか。私も去年の暮れまで知らなかったのですが、丹波篠山市に移住してきて、このようなものを作っている方がおられるということで、本当に工芸、芸術の町になってきたかと喜んでおります。これからも、この町の良さを活かしながら活性化を図っていきたく思いますので、どうか皆さん、今後ともご指導をよろしくお願い申し上げます。

実は、今日の午前中に、私はロシア連邦総領事に会いに行ってきました。まさか会ってくれるとは思っていなかったのですが、お会いしていただきまして30分ぐらい話をしてきました。何を願いしに行ったかということ、平和な世界が築かれるようにと行ったのですが、どういつながりがあって行ったかということ、今、激しい攻撃を受けているウクライナに第2の都市ハリコフというところがあるのですが、ここはユネスコの創造都市の加盟都市なのです。美しい町が壊されている。調べてみると、ロシアにも四つのユネスコ創造都市がありますので、創造都市の皆さんに文化の力で平和な世界を、という手紙を届けていただくように、お願いに行ってきました。改めて、こういったつながりというのが大変大事ではないかと思ったところです。本当に平和を祈りたいと思いますし、そのためにも、これからもこういったつながりを国内でも

国外でも大切にしていきたいと思っておりますので、どうか皆さま、よろしく願いを申し上げます。本日はお世話になりますが、皆さま、楽しみにお聞きいただきたいと思います。ありがとうございました。

司会 酒井市長、ありがとうございました。続きまして、文化庁より地域文化創生本部、暮らしの文化・アートグループの濱田泰栄グループリーダーよりご挨拶申し上げます。濱田様、よろしくお願いいたします。

○文化庁挨拶

地域文化創生本部

暮らしの文化・アートグループリーダー

濱田泰栄 氏

皆さまこんにちは。文化庁地域文化創生本部の濱田でございます。本日は創造農村ワークショップにお招きいただき、ありがとうございます。コロナウイルス感染症の拡大がまだ収まりを見せない中、また年度末のご多用のところにもかかわりませず、兵庫県を除く全国各地からオンライン参加となりましたが、多くの方々のご参加を得て本ワークショップが開催されますことをお喜び申し上げます。本ワークショップの開催にあたり、多大なるご尽力を賜りました酒井隆明市長をはじめ、丹波篠山市の皆さまに深く感謝申し上げます。また、創造都市ネットワーク日本の顧問である佐々木雅幸先生や関係の皆さまに、心より御礼申し上げます。

さて、本日は佐々木顧問のご講演の後、文化庁の日本遺産の施策推進にご助力いただいております丁野朗先生による基調講演、日本遺産を持つ町の取り組みと創造農村の未来というテーマでのパネルディスカッションなど、日本遺産に認定された丹波篠山市の具体的な事例や取り組みをもとにお話を伺えると伺っており、大変楽しみにして

おります。ご登壇の皆さま、どうぞよろしくお願いたします。

長引くコロナ禍の中、文化芸術の在り方が大きく問われております。生きていくことが危機にさらされている中で、文化芸術活動とは何か、文化芸術とは人間の営みにとってどのようなものか、どう継続していくのか問い続けられております。このような難しい問いが続く中、多くの関係者が集まって話し合う場、情報共有を行う場があることは非常に重要なことだと思います。そんな中で、3月3日のCCNJ総会の開催時に丹波篠山市のご発意の下、人口規模の小さい自治体や農村地域を有する自治体が、継続的に文化芸術による創造性を活用した地域課題の解決や、まちづくりに取り組むことを目的とした、創造農村部会の立ち上げが提案、承認されました。創造農村部会では、丹波篠山市のリーダーシップの下、年間を通じて自治体間の交流、情報交換等を進められると伺っておりますが、こうした日頃からの自治体間の連携が、単独の自治体では実現できないような課題解決や成果につながっていくものと期待しているところです。

本日は、創造農村の中でもトップランナーともいえる丹波篠山市における、日本遺産の認定を契機とした取り組みを中心としたお話をお伺いできるということですが、文化伝統都市の魅力や価値を再整理し、観光や産業といった地域の活力につなげていくという取り組みは、現在、文化庁が特に重点的に取り組んでいる施策の一つであり、お集まりの皆さま方にとりましても非常に関心の高いテーマであるかと存じます。文化庁におきましては、令和3年度補正予算として、文化芸術活動継続支援等に加え、令和4年度予算としては文化芸術の新たな政策パッケージを基軸とした、文化芸術の創造発展と人材育成を柱として、文化芸術

のグローバル展開や創造支援、担い手育成等の予算を計上しております。今後とも様々な施策を通じて、ポストコロナにおける、我が国の文化芸術の一層の推進に努めてまいりますので、ご出席の皆さまにおかれましても、わが国の豊かな文化芸術の創造と発展のため、引き続きご尽力賜りますようお願い申し上げます。最後になりましたが、本ワークショップが丹波篠山市の皆さま方にとって、この地域の素晴らしい文化支援等を再確認できる機会となるとともに、ご参加の皆さま方の今後の取り組みの一層の発展に寄与することを祈念いたしまして、ご挨拶とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いたします。

司会 濱田様、ありがとうございました。

2 特別講演

司会 それでは早速、特別講演に移りたいと思います。特別講演では、創造都市ネットワーク日本の顧問であり文化庁文化創造アナリスト、学校法人稲置学園理事の佐々木雅幸様より、「これからの創造農村とは」をテーマにお話しいただきます。佐々木様は創造都市研究の日本とアジアにおける第一人者であり、創造都市ネットワーク日本の顧問として、ユネスコや全国各地の創造都市の取り組みを支援しておられます。それでは佐々木様、どうぞよろしくお願いたします。

○特別講演

「これからの創造農村とは」
文化庁文化創造アナリスト・学校法人稲置学園理事 佐々木雅幸 氏

皆さんこんにちは。久々に丹波篠山市にまいりました。実はこちらに来させていただいてから十数年たっておりまして、最初にまいりましたのは篠山城の築城400年を

祝う 400 年祭、この記念シンポジウムがございまして、これから 400 年先の丹波篠山の未来をつくろうではないかということをお願いしたと思います。文字通り文化遺産というものを軸にした丹波篠山の未来というものを考えようとしたわけです。丹波篠山にまいりまして、今日、お話をいたします創造農村という言葉が私の中でひらめきました。丹波篠山はきっと創造農村のトップバッターになるだろうと、これから日本と世界の創造農村というものをリードしていく、これが丹波篠山のミッションであるということを感じましたので、以来、相当に肩入れをし、応援してまいりました。

今日はまず、今、我々が生きている時代、この確認からいきたいのですが、日本政府は数年前からソサエティ 5.0 ということと呼び掛けております。簡単に言いますと、狩猟社会、農耕社会、そして産業社会、情報社会、とずっときましたが、新しいフェーズは何かというと創造社会である。お見せしているのは経団連の資料です。情報社会の次は創造社会である。言い方を変えると、スマートシティというのも実はクリエイティブシティなのです。人々のクリエイティビティとイマジネーションというものが社会をリードしていく、従って、そこに力を注ぐ地域が大きな発展をしていくだろうということを行いました。これをテクノロジーから言えばスマートシティ、人間の側に立って言えばクリエイティブシティ。つまり、人間の顔をしたスマートシティがクリエイティブシティであると、このように私は考えております。

さて、第 2 回の創造農村ワークショップは、10 年近く前にこの丹波篠山市で行われました。そのときに丹波篠山市に駆け付けてくれたのが当時の木曾町長で、酒井市長にお会いになりました。木曾福島の町長です。町長は、創造都市というものの農村版

というものがあるだろう、そういったものを創造農村として広めようではないかということに私に託されました。そして、この丹波篠山まで出掛けてこられて、この流れを大きくしようとされていました。以来、丹波篠山市に民間の NOTE の人たちが加わり、今日はウイズささやまの方も来ていますが、新しい移住者も迎えながら創造農村づくりに踏み出してこられた。そうしましたら、その後を追って山形の鶴岡市は食文化で創造都市を狙ってユネスコに応募され、ユネスコ食文化創造都市というタイトルを獲得されました。それからまた、徳島県の神山町の大南さんというリーダーが、やはり 10 年前に丹波篠山に来られ、一緒に語り合いました。これからの時代は創造的過疎という考え方で社会を切り開く。過疎だ、過疎だと嘆いているのではなくて、クリエイティブな人たちを集めれば、そこに新しい創造のコアができる、これは大都市じゃなくてもできるということを言われまして、今や過疎再生のトップランナーになりました。

私は、こういう流れの中で、「創造都市」という本を発表し、「創造農村」という本も発表してまいりました。この中で特に強調したのは、都市であれ農村であれ、これからの時代に創造性というキーワードで人々が活動していく、そういう地域が発展する。特に都市と違って農村の場合は、豊かな自然をしっかりと保存し、そして、そこにある暮らしというものを磨いて、そして人々の農業をはじめ、工芸や様々な仕事、これを創造的にしよう、創造的に仕事があり、創造的な暮らしがあり、NOTE の人たちは「クリエイティブ暮らし」と名付けました。「クリエイティブ・クラス」はアメリカのリチャード・フロリダが言ったのですが、「クリエイティブ暮らし」と、クラスを暮らしに変えた言葉も生み出し、暮らしが豊かにな

って、それが人々を引き付けていく、その魅力というものを発信することを提言しました。

大きく言えば、今は工業経済の社会から創造経済の社会への大きな転換点であると思っております。20世紀というのは大量生産、大量消費があって、そして画一的なものの方が支配をしてまいりました。情報の流れ方もマスメディアが一方向的に流してきた、こういう時代は、地域は産業都市と食料基地に区分されています。ツーリズムもマスツーリズムです。しかし、これからはフレキシブルな脱工業化、あるいは文化的で個性的な消費者というものが生まれてきます。そして、マスの流通ではなく、今はSNSも始まっていますが、パーソン・ツー・パーソンの差別化された情報が流れ、そういった中では地域の在り方は創造都市と創造農村を基調とする、これを創造社会と呼ぶ。つまり、経団連が言っている創造社会というのは、創造都市と創造農村がセットになった社会であると、こういうことでございます。やっと日本政府もそのことに気が付いてくれました。私どもは20年以上前から、こういったことを提唱してきたわけです。

さて、ユネスコが創造都市ネットワークというものを応援し始めたのが2004年のことです。先ほど酒井市長がロシアのユネスコ創造都市の話をされました。ロシアにもこのネットワークは広がっておりまして、今や世界295の都市、日本は10都市です。この中に、わが丹波篠山市も入っておりまして、昨年暮れには九州大分県の臼杵市も加わっています。いよいよ創造都市、創造農村が世界的なスタンダードになっていくのではないかとすら思います。思い返していただきたいのは、ユネスコという組織は第2次世界大戦後に世界人権宣言が発せられて、人の心から戦争が生まれるため、

ユネスコはそういったものをなくすために集まろうとしました。これがユネスコの精神です。ですから、まさに総領事にお話しに行かれたというのは、ユネスコ創造都市の市長として大変素晴らしい活動だったと思います。

七つのジャンルがありますが、日本は唯一、文学の分野がないので、どこかの都市に文学の創造都市を目指してほしいというのが私の現在の願いでございます。ユネスコは国連の一部局でございますので、当然のことながらSDGsを大きな目標に掲げて、芸術文化からSDGsの実現に貢献しようというのがユネスコネットワークのミッションになっています。このミッションに向けて、私ども創造都市ネットワーク日本も、今回の3月の総会で新しいミッションとしてSDGsの実現を目指す取り組みを、創造都市ネットワークが文化芸術の領域からアプローチするということを付け加えました。ぜひ、日本の創造都市ネットワークもこういった方向で活動して行ってほしいと思っております。

ユネスコのネットワークの中で、丹波篠山市がお手本とする都市がございます。それはアメリカのニューメキシコ州にあります、サンタフェという小さな都市でございます。丹波篠山市は4万人と言われましたが、サンタフェは5万5000人ぐらいで、ほとんど同サイズです。この町が素晴らしいのは、砂漠の中心、真ん中にあるため、世界の都市とツーリズムを通じてつながりを広げようとして、それもマスツーリズムではなくて、芸術文化を活かしたクリエイティブツーリズムというものを最初に世界で提唱し、そしてユネスコの会議の中で広めようという努力をされてきました。なぜ、サンタフェがクリエイティブツーリズムを提唱するかといえば、そこには様々な歴史的背景があり、例えばネイティブインディ

アンの時代、それからメキシコやスペインの影響を受けた時代、そして今は現代アメリカの影響を受けていて、芸術文化の多様性がある。この多様性を魅力に変え、様々な世界から集まったツーリストと一緒に市民がクリエイティブな体験をする、クリエイティブな体験をシェアする、共有する、これをクリエイティブツーリズムと呼んでいます。ですから、単に文化を消費する、鑑賞するというを超えて、お互いにツーリストと市民が創造的な体験、経験を行い、経験価値を高めましょうと提唱しました。ぜひ、丹波篠山やこれからの創造農村でも、こういったクリエイティブツーリズムというものを一つの軸に置いていただきたいと思います。

世界の創造都市の中で私が特にイチ推している町は、イタリアのボローニャです。なぜボローニャを推すかという、ここはオペラと食文化の町だからです。オペラもオペラハウスで行われるオペラだけではなく、工芸職人が行う仕事、作品もオペラという言葉なのです。今日この後、クラフトヴィレッジの話がありますが、まさにクラフトというのはオペラなのです。職人がオペラをしているということなのです。ボローニャは職人だけじゃない。例えば、フェラーリというスーパーカーも大量生産はしないので、職人的な仕事の中に入ってきます。ここがイタリアらしいところです。

日本の場合は、現在、創造都市ネットワークがございまして、約 116 の自治体、それから民間団体入れまして約 150 を超える団体がございます。この中で金沢市が特に工芸の分野では抜きん出た成果を上げております。金沢というのは美しい町並みを保存し、文化的な施設を大事にし、そして工芸的なものづくりというものを現代に活かそうという努力をしております。酒井市長にもたびたびお越しいただいておりますが、

金沢は市役所の隣に 21 世紀美術館を造り、世界の最先端の芸術などを若い人たちに体験させる、その中から新しい工芸作家が生まれ、3D プリンターを使った未来工芸のようなものも生まれてくる、こういうものづくりをしている。従って、ボローニャにも金沢にも共通するのは、芸術文化とオペラ的な働き方、そして工芸的なものづくり、これが大量生産の時代を乗り越える、つまりソサエティ 5.0 の基調になるということでございます。

こういう中で私どもは、創造農村ワークショップというものを積み重ねてまいりました。ちょうど 11 年前ですか、東北の大震災がございましたが、この年の秋から第 1 回創造農村ワークショップを始めまして、毎年、回を重ねております。この丹波篠山市では第 2 回を開催させていただいて、大きな成果を上げてきたところでございます。当時、文化庁長官をされておりました近藤誠一さんが、第 1 回の創造農村ワークショップに寄せたメッセージは、これから 21 世紀の社会を切り開くのは、地方分権と芸術文化であり、これを結び付けるものが創造都市ネットワークであり、中でも小規模な自治体が頑張っている、これが大事だということで創造農村ワークショップというもの今後の発展を、文化庁としても全面的に支援しましょうというものでした。先ほど文化庁の濱田さんが、さらに突っ込んだ支援の方向について検討していると言われていましたが、大都市には創造都市を目指す力があります。しかし、小規模な自治体が創造農村、創造都市を目指すというのは、それなりの努力や支援が必要です。そうしたことを話し合っていきたいと思っております。

日本の創造農村の代表選手を簡単に紹介いたしますと、まず木曾町です。それから、先ほど言いました鶴岡、丹波篠山、そして

神山、これらはいずれも豊かな自然の中で芸術文化や工芸というものを育みながら、創造的な地域をつくっていくことで、行政と市民が協力して進めてきた。そこに優れたリーダーが生まれ、あるいは若い人たちが移住してきました。では、さらにこの先に向かって、何に取り組まれているか。例えば、神山町では進出した Sansan という ICT 企業が、これからは若い人を神山で育てたいということで、神山まるごと高専、高等専門学校をつくるということで出資され、来年からいよいよ学生募集が始まります。

それから、芸術文化の国際的な祭典、現代芸術祭、これを過疎地で展開したのが、越後妻有の大地の芸術祭です。この流れは、例えば奥能登の珠洲市でも展開してございます。それから、このすぐ近くにある兵庫県豊岡市では、さらに突っ込んで深みのある演劇のまちづくりというものを進めながら、コウノトリの先に行こうとしており、そしてそこに観光と文化の専門職大学をつくり、人づくりをしています。こういった人づくりというものがうまくいってこそ、創造都市や創造農村というものが持続的に発展していくことになるのだと思います。ぜひ、丹波篠山でもこういった方向での取り組みをお願いしたいと思います。

時間がありませんでしたら、私の創造農村のバックグラウンドの理論を少し紹介したいのですが、もうほとんど時間がないので1点だけ申します。実は、宮沢賢治が「農民芸術概論」という本を書いています。まさに農業をしながら芸術を行う、半農半芸の夢というのがあります。これはイギリスのラスキンという人の思想の影響で、私はラスキンが開いた芸術文化の価値を活かす、それを人づくりに活かす、あるいは地域づくりに活かす、これから農村こそ、そうした社会の先頭に立つ、これが21世紀のこれか

ら先を切り開いてく大きなうねりになってくる、なっていくようにしていきたいと考えております。どうもご清聴ありがとうございました。

司会 佐々木様、ありがとうございました。

3 基調講演

司会 続きまして、基調講演に移らせていただきます。基調講演では、公益社団法人日本観光振興協会総合研究所顧問の丁野朗様より、「日本遺産に認定された、丹波篠山市の事例を基に」をテーマにお話しいただきます。丁野様は、観光や産業に関するさまざまな著書を手掛けられ、平成27年には「地域からの未来創生」を執筆されました。地域の強みを観光まちづくりに活かせる仕組みづくりと、人づくりの重要性を発信されています。それでは丁野様、どうぞよろしく願いいたします。

○基調講演

「日本遺産に認定された丹波篠山市の事例を基に」

公益社団法人 日本観光振興協会総合研究所 顧問 丁野朗 氏

皆さまこんにちは。ご紹介いただきました丁野でございます。丹波篠山は2度ほどお邪魔しました。1度目は立杭の窯を、どなたと来たかはあまりはっきり覚えていないのですが見せていただき、2度目は兵庫県の観光ビジョンの委員会に10年ぐらい属しておりましたので、県内各地を順番に見ることになり、丹波篠山を見ていないのは良くないという話になり、大勢で押し掛けたいことがあります。だから、まだ2回ぐらいしか来たことがなくて、それほど土地勘もあるわけではないのですが、見るからに山に囲まれた素晴らしい地形、そういう風土を持ったところですので、明日、時間が

あればゆっくと堪能させていただきたいと思っています。

今日はこういうテーマをいただいたわけですが、昨日たまたま、文化庁で新しく「100年フード宣言」というものができまして、全国で131の食文化を認定させていただき、ぼたん鍋は、実はその中でもさらに絞り込みをかけられた、いわゆる審査員特別賞に選ばれました。私も審査員をやっておりますが、イノシシは美味しい栗やいろんなものを食べているのでしょうか、時々悪さをするとおもいますが、とても美味しいぼたん鍋であり、前回、少しいただきましたが、非常に素晴らしい食文化だと思いました。

今日はこのようなお話をしたいと思えます。最初に私の自己紹介を書いています、読んでいただければ分かりますので、後でご覧いただきたいと思えます。実は私は若い頃、環境屋というか公害を追い掛けていました。ですから当然、来年、幹事になれる北九州の洞海湾、それから四日市湾、水俣など、当時、日本で公害が激甚な頃に、いろんな地域を訪ねておりました。そういうところに行きますと、いつも工場の裏門から入ります、あまり正門からは入らない。裏門には排水溝があり、廃棄物を積んである、ここは実は非常に危ない場所で、廃棄物を一つまみつかむれば、どういう原材料を使っているかが全部分かります。特にIC工場などは、そういうことを狙って裏門から入る人もいたりします。そういうことをやっているうちに、日本は大変な危機を迎えていると感じました。ご案内のとおり、北九州市は国連の環境賞をいただきました。いわゆる公害都市から環境都市に変わったわけです。そして今、創造都市に変わろうとしており、先ほど佐々木先生が示された、発展段階という言葉はおかしいのですが、要するに次の新しいバージョンを目指す都市になっているのです。

自分が昔、公害をやっていたということが、こういうところで、こんなふうにつながってくるとは思わなかったのですが、私も公害から余暇、レジャーという分野に入り、それからその中の一部である観光という世界へ来て、ここ10年ぐらは何となく文化庁さんの仕事ばかりやっております。文化のほうに何となくシフトしております。日本遺産や文化観光推進法、それから昨年認定を取られた文化財保存活用地域計画などの関係の仕事にも携わっております。略歴はそんなところです。

今日は三つほどお話をさせていただきたいと思っています。最初のお話は、これは皆さんには釈迦に説法なので、どうしようかと思ったのですが、一応、おさらいという意味でご覧いただければと思えます。実は文化観光は、今でこそ文化観光という言葉をしているわけですが、直接的なきっかけ、いわゆる追い風になったのは、平成28年の観光ビジョンの頃かと思えます。この中で三つの視点と10の重点施策というものが示されて、文化財をもう一段、活用の方向にシフトしようという、大きな流れができました。実はこの頃から、いわゆる文化観光推進法的な新しい法律の体系や、特に日本遺産は、こういう流れの中でできてきました。100程度、それも個々の文化財ではなく、その背後にある地域の文化の物語をつくらうとしました。文化庁的には、そのような作り方はかなりの革命でしたが、そういうものが生まれました。そして、それを受けて骨太の方針の中では文化GDPという言葉が使われました。そして、芸術基本法の改正、基本計画が作られ、一昨年の2月には文化観光推進法というものができたわけであります。

わずか2年足らずの間に41地域を指定しました。私も審査を行っていますが、目まぐるしい勢いで拠点計画と地域計画を作

ると、それをフォローアップするところまではまだ追いついていないのですが、そういう流れで新しい方向に舵を切りました。ただ、このような観光的な活用ということに対しては、いろんな危惧もありました。これは現在もまだあります。ここに書いているように、例えば社会教育施設である博物館を観光的に活用するということについては、いろんなアレルギーもあります。それから、何よりも行き過ぎた観光が、一番大事な地域の文化の資源を損ねてしまうといったような、これは危惧ではなくて現実にあります。そういうものを受けたというか、最初の警鐘が ICOMOS のではないかと思えます。このときに観光活動の急速な進展と開発にともない、遺産の保護や保全が達成されないのではないかという危惧もありました。世界遺産も様々ですから、過度な観光開発が人類普遍の価値を損なうような側面が当然ありました。

ただ、かなり時代がずれますが、1999年に国際文化観光憲章が出たわけですが、このときには共生的な観点ということが非常に強く主張されました。つまり、もう保全か活用かという二項対立的な考え方ではなくて、それは実はコインの裏表なので、それをしっかりと作ろうということです。その後、ユネスコが提案し、そして、これは新しいので皆さんの記憶にあると思いますが、ICOM 京都大会では、文化財としての文化信用、適切な投資によって社会的便益を極大化するといったような、一歩踏み込んだ考え方も示されるようになり、こういった大きな流れが、先ほど冒頭に言った流れにつながっているのではないかなということです。これも釈迦に説法です。今はこういう循環的で一体的な捉え方をしようとしています。

そういう中で、これは資料としては古いのですが、先ほど佐々木先生からもお話が

あった、十日町のトリエンナーレと瀬戸内芸術祭で、十日町では創造農村ワークショップも 2015 年に実施しています。私はそのときはまだ別のところにおいて、十日町は随分、昔から入っています。それから、アール・ブリュットについては滋賀県の県立美術館を核にして、これは近江八幡ですが、新しいいろんな方々にアートの分野に入ってきてもらおうという試みも行っております。それから、文化財で稼ぐ、前の前の長官が盛んに言っておられましたが、文化財で稼ぐというような考え方は言葉がかなりストレートですが、先ほどの投資をするという新しい考え方が生まれてきています。

同じ県では、姫路城の大修復について。実はちょうどこの頃、私も姫路の仕事をやっておりました。平成の大改修をやることになりましたが、姫路城のない姫路の観光はどうすればいいかというご相談を、姫路市の理事の方から受けました。姫路には確かに、たくさん資源があるのですが、いわゆる観光客の数からいえば圧倒的に姫路城ということになり、天守閣が隠れてしまうと姫路の観光にならないという危惧を持ったわけです。そのときに、私もお相談受けて、1週間ほど待ってもらって、少し考えさせてもらいました。姫路城を大修復するときに、誰がやるのかと言えば、当然、石工はいるか、いぶし銀の瓦は誰が焼くのか、漆は誰がかけるのかなど。そのときにお答えしたのは、姫路の周辺にそういう職人さんたちがどれぐらいいるのかを調べてもらいました。これが結構いて驚きました。金属加工でいうと明珍さんのような方もいらっしゃるわけですが、例えば家具屋さんの中に漆の職人がいる。それから、姫路城の北のほうに瓦を焼いている大産地がありました。ここの瓦屋さんの集団の中に鬼瓦などを焼ける職人がいる。つまり、現代産業がこういう伝統的あるいは文化財補修のよ

うな職人技術をしっかり溜めこんで大事にしている、そういう環境が姫路の中にあっただのです。従って、このときに素屋根をかけて、その横にエレベーターを設置して、「天空の白鷺」という見学スペースをつくってもらいました。たまたま私が属しておりました日本観光振興協会の会長が東芝の会長でございまして、東芝のエレベーターをお借りしたというような経緯もありました。文化財で稼ぐという観点から、いろんなことができるかと考えています。

それから、二つ目として、今日は日本遺産のお話をしようと思います。日本遺産はそもそも何を指すのかというような話は、これも釈迦に説法ではありますが、日本遺産というのは、先ほど言いましたように、個々の文化財の価値、意味というのはもちろん当たり前のことですが、日本遺産も旧石器時代から現代まで、ものすごく長い年代、そして目に見える有形のものから無形のもの、祭りや技術など、そういうものまで様々なものがあります。それが一つの地域にバラバラにあっても、一般の方には何のことか分かりません。従って、なぜここにこういう祭りがあるのか、なぜここにこういう文化遺産があるのか、時代が違うものを一つのストーリーで説明できないものか、それがつまり、文化財の裏側にある地域の文化を物語で説明するというようなことだったのです。これがストーリーとしての日本遺産です。特にこのときは、海外にしっかり日本文化の多様性を伝えるのかということが主議題だったと思います。そういうことで、いろんな文化を6年かけて認定していきました。

6年間で104件の遺産を認定しました。六古窯はここに位置付けていますが、実際、この辺は幅がありますので、平安末期から鎌倉というような時代です。大体、一番目立った時代というのは鎌倉期かと考え、こ

こに位置付けています。それから、デカンショ節も一番多いのは江戸時代です。一番身近で、私たちの食文化も含めてそうですが、大体が江戸時代の、ある意味、鎖国経済の中で文化が熟成するということがあったのでしょう。だから、江戸時代が一番多いわけですが、こんなに多様なものが認定されているということです。デカンショ節、そして六古窯の丹波焼が認定を受けたわけでありまして。二つとも非常に個性的な日本遺産だと、個人的には思っています。大体は有形の文化財、つまり、ここで言うと重要伝統的建造物群のような建物があって、そういうものが軸になって地域の物語を組んでいくというパターンが多いです。デカンショ節が日本遺産になったときに、審議会の中でも非常にタイプの違うものであり、議論は何もなかったのですが、どういう位置付けをすればいいのかという議論がされたことを、未だに覚えております。この辺の話は皆さん、よくご存じなので、私がとやかく言うことはないと思います。

今日はこの話をするつもりはあまりなかったのですが、一昨年の12月に制度を見直し、総括評価というものを入れることになりました。これは本来、我々選定した立場の人間から言えば、あまり安易に総括評価などをすべきではないとの思いが根底にはありました。地域によってストーリーも違う、そして資源も違う、それを実際に活用するといっても、とても活用しやすいものから、そうでないものも当然あります。ですから、3年や5年のスパンの中で、とてもうまく活用しているものとそうでないものが、どうしても出てきてしまいます。ただ、そういうことよりも、活用するという事は、地域のいろんな機関やいろんな人たちが一緒になって、それを支えていくような体制ができていないと、活用もできないわけですね。実際のところ、停滞している

地域もたくさん出てきました。そういう中で総括評価という制度を入れて、見直しをしていこうということになったわけです。

基本的には、日本遺産というのは一つのブランドです。ですから、そのブランドをしっかり担保したいという思いが、当然あったと思います。これは文化庁側にもあり、議員連盟というのが裏側にありますが、議員の先生方も、日本遺産は個々の文化財を単に指定して終わりという話ではなく、それ自体が一つのストーリーをベースにしたブランドなので、それが崩れるというのはあまりよろしくないという議論は前からありました。そういう中で総括評価をやることになりました。目標を自ら立てていただき、それをしっかり達成できているかどうか、取り組み内容についても、こんな取り組みをしたらいいのではないかとというように、これも実際に自治体から出てくるわけですが、そういうことがしっかりできたかどうかといった評価をします。そして、その上で次の3年間の新しい計画を組んでいただくようにしたわけです。計画を組むときに、よくできているところと、そうでないところがあるわけで、なぜ、できなかったのかをしっかりと評価し、そこはこんな新しい仕組みの中で進めていきたいと思います。計画の中に書けていけばいいわけです。これがあまり書けていないところがあります。

他方で、いわゆる重点支援地域みたいなものを決めて、一種のモデルをつくりたいというようなこともありました。今回は4地域を選定しました。最終的には取り消し制度というものを入れることになったわけです。他方で、候補地域というのを新しく選び、制度としてどうやって入れ替えていくかと考え、新しい候補地域を取り込んでいきます。昨年の場合で言うと、初年度でしたが、20地域から申請があり3地域を候

補地域にしました。最終的には入れ替えをしていくわけです。これから3年後には、候補地と再審査を受けた地域が入れ替えをされます。なかなか厳しい戦いでありまして、我々も一番神経を使うところですが、そうならないようにぜひ頑張ってくださいと思います。

デカンショ節については、こういう評価をいただけていました。地域の生業や景観などに配慮した持続的なまちづくりが、よく計画されている。確かに、これは歴史文化基本構想をしっかりと作って、去年は文化財保存活用地域計画も作られたということで、長いスパンで地域の文化資源をどう活かしていくかを非常によく計画して取り組んでおられるところが評価されたのだと思います。ただ、この中に自立自走に向けた取り組みのさらなる推進を望みたいという1項がありまして、これは実は丹波篠山に限らず、どこでもそうなのです。裏返して言うと、行政はどこでも、新しい整備も含めてスタートダッシュは大きく実施しますが、それを受けた民間や市民の方々、あるいは事業者、そういう方々は、そういうものをしっかりと受け止めて何か新しい事業を生み出し、まさに事業創造をしていくというようなことが、なかなかできないのです。それができない以上、いつまでたっても税金で賄っていくというスタイルになり、それは長い目で見るとよろしくないわけです。自立自走というのはそういう意味です。

そのような指摘があり、これは丹波篠山に限らないのですが、全体的な課題になっています。今、お話ししたのは大体こういう流れで、同じことを言いましたので繰り返しません。新たに候補地域になったのは小樽、富津・鋸南、京都で、この三つが候補地域として新たに参入していました。

私は日本遺産の認定とフォローアップを

やってまいりました。6年以上やってきておりますが、その中で、こういうチャートを作って説明させていただいています。何が必要なのか、これは丹波篠山の二つの日本遺産に共通することだと思えます。一番大事なのは、物語というのは、我々よその人から見ると、とても魅力的で行ってみたいという気を起こさせるものです。ですから、実際にその場に来たときに、物語がどういうふうに地域の中で表現をされているか、あるいは物語どおりの景観があるか、あるいは実際に行ってみると詳しい情報が得られるかどうかなど、いろんな点があります。従って、環境整備というのは非常に大事なのではないかと思います。つまり物語が伝わる仕組みです。これはとても大事な点だと思います。皆さんが、例えば、よその地域の物語を頭の中に入れて行ってみたいと思って行ったときに、どこ行ったら情報があるか分からない、その景観はどこを見ればいいのか分からない、となると、がっかりします。お互い様の問題ですが、そういうことです。

そういうことができてから、その次にいきなり事業ではなくて、私は大事なのは基本戦略、つまり中長期的な視点がとても大事だと思っています。この中には当然、戦略、マーケティング、コンセプト、この地域をそもそもどうやって次代につないでいくのか、ここは創造農村になっていますが、それはどのような組織によって仕組み的に維持できているのか。そして、全てにおいて、それを支えるのは人なのです。ある意味、人がいなくなったら、プレーヤーも含めてですが、その事業は持続できないわけですから、非常に大事なポイントです。そういうことができて初めて、いわゆる観光等のいろんな事業が動いていきます。この点はよく誤解されますが、日本遺産になっただけで観光だと、いきなり商品を作ったり

する、うまくいくはずがないとは言いませんが、うまくいきません。中長期的な視点があるかないかによって、その地域の長い戦略スタンスに裏付けられた事業、そして人を育てる、あるいは人にいろんな事業を担っていただくにも5年やそれ以上の期間がかかります。

観光でよく間違われるのは、観光商品は2~3年でできますが、まちづくりは30年です。最低でも10年かかります。このタイムラグがあるのです。皆さんが案内される丹波篠山もそうですが、日本を代表するような観光地は間違いなく30年かかっていると思ってください。ですから、いきなりここへ飛ばうとしても無理があります。私はそのような捉え方をしております。今申し上げたことは、課題の1、環境整備、それから物語を活かす戦略の明確化、それから組織整備です。

最近やっと、日本遺産でもDMOのような、いわゆる民間主導の組織が、少しずつ文化資源についても学びながら、なおかつ文化財あるいは文化政策が分かった人がDMOの中に入って動かすことができるようになりました。そして人です。経済効果、観光事業化ということですが、学校や地域での普及啓発という言葉はあまり良くないのですが、地元がそれをしっかり理解して、その中に何か一緒に担いでいこうというような人たちが育ってこないと駄目なのです。

実は同じ兵庫県ですが、3年前に日本遺産の銀の馬車道のイベントをやったときに、馬車道は73kmあるのですが、その中に六つの高等学校があります。その高等学校の子どもたちがサークルをつくり、夏頃から日本遺産をどうやって活かせばいいのかという活用物語を一生懸命書き、それを12月に一斉に発表するという機会を持つてくれました。これは今でもやっています。

そこで私は、銀の馬車道だけではなく、

いわゆる生野鉦山のもう一つのルーツになる、四国の新居浜にある住友の別子銅山との関連が非常に強いため、別子の高等学校の学生も集めて、そこでシンポジウムをやりました。子どもたちの感性はすごいです。自分たちは自分たちでいろんなことをやっているのですが、外にまた、同じ年のすごい高校生たちがいて、それがものすごい発表をしている。今日は時間がないので中身は言えませんが、そういうことです。思っていたら、なんと今年、丹波篠山市の高校が観光甲子園の日本遺産部門のグランプリ受賞ですか、素晴らしいです。私も実は観光甲子園の審査を何年かやっておりました。だから、子どもたちのこういう発表は非常によく分かります。実はこういう活動が地域の中で非常に大事なのだということ、改めて強く感じました。

最後は、情報の発信です。これも地域がいろんなやり方をしています。私は海軍の鎮守府の4都市と非常に深く付き合っておりまして、ここで一番近いのは舞鶴ですが、4都市がバラバラにやるのではなく、一緒に何か事業をやろうということが非常に特徴的です。例えば、舞鶴のガイドは呉を説明できるか、呉のガイドは佐世保を説明できるか、説明できないと困るため、毎年、4都市のガイドさんが集まってガイド交流をやっています。中高年の方が多いのですが、すぐに仲良くなり、かなり脱線気味ではありますが、横須賀のガイドが、俺は佐世保に行つてガイドをやるんだ、という段階まで来ています。こういう交流がとても大事です。

最後は自立自走の考え方、これは先ほどお話をしたとおりで繰り返しません。

三つ目のお話は日本遺産と地域ブランディングです。いくつか事例をお話してみたいと思います。今日は私もまだ丹波篠山ビギナーなので、十日町を事例としてお話し

てみたいと思います。十日町は日本遺産を二つ持っています。一つはシリアルですが、「なんだ、コレは!」、火焰型土器は国宝ナンバーワンです。火焰街道というものがあります。それから2020年、認定の最後の年ですが、単独で、いわゆる豪雪地帯ということタイトルに日本遺産を取りました。

実は、ここの日本遺産の考え方は、非常にある意味、ジオパーク的な捉え方をしています。つまり、地域の原型は一体何なのか。あの町へ行っていただくと分かりますが、真ん中に信濃川が流れていて、ものすごい河岸段丘があります。火焰型土器は河岸段丘の上で発見をされているわけで、そこに縄文集落があったということになります。こういう地形、地質みたいなものをしっかりと皆さんが共有している。例えば、こういう地形の中の生態ですが、例えば、アングンの原料のカラムシや、そういうものがたくさんある。十日町というと織物産業が有名なところですが、昔は越後縮、今は明石織りという織物がありますが、その原料、ルーツはこの河岸段丘の上のこういう植物生態だったわけです。そして、縄文海進で雪が降るようになりました。雪が降るのも半端な雪ではなく、丹波篠山もある程度の雪が降ると聞いていますが、十日町は世界の人口5万人以上の都市の中で世界一の豪雪地帯なのです。ロシアへ行ってもツンドラですから雪は降らないのです。だから、そういう中で雪と暮らす、雪を食す、雪に祈る、雪を織る、雪と遊ぶ、こういう1個1個の経済社会現象が起きてきます。こういうことというのは、全て、生態系や地質みたいなものに裏付けられているわけです。これを日本遺産物語にしたのです。

具体的に言うと、これは火焰型土器ですが、信濃川流域に火焰型をした土器が集中しています。会津などにも多少ありますが、

ほとんどが信濃川の河川敷沿いにある、つまり十日町は火焰型土器のセンター的機能を持っていたのではないかとされているわけです。それから、先ほど言いましたように、こういう豪雪が織物産業を生み出したことになるわけですが、これも一つの地域のストーリーになります。非常に骨太のストーリーです。それから、皆さんはへぎそばを召し上がったことがあるといます。これも100年フードに選ばれ、審査員特別賞でした。へぎそばの「へぎ」は、回りの木枠のことをいうのですが、なぜ、くりりと巻いてあるのか。へぎそばのつなぎは繊維産業ののりなのです。そののりをそばのつなぎに使う。従って、そばはこういうふうにくりと巻いているのですが、これはご存じですか。織物のかせです。同じ形をしています。こういうデザイン感覚が、へぎそばを作るときにもベースになっているのです。火焰型土器をずっと見てると、火焰型といいながら、実は信濃川の波の文様ではないかと言う人もいまして、この下にある文様がへぎの文様に似ています。これは専門的に言うと全く根拠のないことですが。こういうデザイン感覚というのが一種のアートの遺伝子みたいなものとして、この地域の中にしっかり根付いているのではないかと思います。要するに、大地の芸術祭みたいなものをこの地域でなぜ始めたのか、富良野さんの影響は大きいわけですが、そういうことだけではなくて、地域にはそれを受け入れる土壌があったのではないかと私は思っています。

その後、単独で「究極の雪国ものがたり」というものをつくりました。これも日本遺産になりました。着ものがたり、食べものがたり、建ものがたり、まつりものがたり、美ものがたりがあり、先ほど言った雪と遊ぶ、雪を食すなど、こういうものをストーリーにするとこうなるわけです。まさに、

先ほどのGEOからBIO、SOCIOという大きな流れをストーリーにしたわけです。しかもここは、二つの日本遺産に続いて、一昨年になります。文化観光推進法ができたと同時に地域計画を作りました。この地域計画は令和2年11月に認定を受けましたが、十日町の新しい博物館は今のストーリーに沿って造った博物館なのです。その他に越語妻有のキナーレや能舞台、森の学校キョロロ、これは生態系です。そういう五つの拠点を核にして、一種のフィールドミュージアム的なつくり方をした。文化観光推進法というのは、文化庁さんがいらっしゃるので話にくいのですが、拠点施設が必ずしも明確になくとも、こういうふうにネットワーク型でできる可能性があるということを示唆していると思います。

もう一つだけ、お話ししたいと思います。たまたま昨日、100年フードのシンポジウムがあり、その後すぐに自宅へ戻り、島根県益田市のオンライン塾をやりました。その塾の最終回だったのですが、益田も実は日本遺産の認定を受けています。「中世日本の傑作益田を味わう」というテーマです。ここは、いわゆる中世に、大陸との間で国際交流も行った、非常に秀でた益田氏が、大内氏との関係でいろんなものを築きながら、海外に打って出るという大変な手腕を持った領主だったわけです。実は、中世から近世に移るときに、要は近世都市ができなかったのです。いろんな関係があって、そこに近世城館ができず、近世城館ができなかったということは、町割は中世のままなのです。町の中に入って驚いたのは、曲線だらけなのです。お城も当然、中世の山城で曲線なのです。今、われわれがイメージしているような近世のお城とは全く違う、そういう町割があります。屋敷跡を御土居と言ひ、町の中を歩いていますと、普通は角を1個、2個、3個曲がると元へ戻ります

が、この町は戻れないのです。角を3個曲がると、とんでもないところへ行ってしまう。そういう中世が色濃く残っている。だったら、この物語をベースにして何かいろんなことをやってみようということです。今日は時間がないので、起承転結はこういう物語なのです。最終的には中世を味わえる町、益田というテーマがあり、中世をどうやったら味わえるのか、これがまちづくりの肝になるわけです。

これは今のストーリーと同じことですが、要するに一番大事なものは、物語ですから起承転結の結の部分です。これは未来に向けて、この町をどうつくっていくのか、先ほどの基本戦略の問題ですが、これをしっかり書かなければいけないわけです。今、益田は歴史文化基本構想と文化財保存活用地域計画を作る中で、担い手をどうやってつくっていくか、組織をどうやってつくるかということ、これから一生懸命、議論していく段階になっているわけです。そういう文化財ならびに観光の部署の方から、この1月に日本遺産を活かすための事業創造塾を開きたいと、突然、言ってこられて、昔から付き合いがあったので、「分かりました」と言ったものの、今年度末までにつくるのは無理なため、取りあえず構想だけを皆さんにつくってもらいました。

一つは中世都市の骨格をどう活かすかということ、これはいわゆる、まちづくりそのものなのですが、もう一つは、こういう事業、例えば中世には何を食べていたのか。益田家の文書の中に食材がたくさん出てきますが、レシピはありません。これは益田家の文書に書かれたいろんな食材を、1個1個出したものです。スイーツもあるのです。鎌倉武士はスイーツを食べていた、という話です。こういうものを地元のシェフが再現しました。なまじレシピがあると、美味しいものは作れません。これは変な話で

すが、海軍鎮守府の料理というのは全部レシピがあり、そのとおり舞鶴が作ったのですが、最初はまずかったのです。味が薄いのです。今の我々の味覚では、とてもじゃないけど美味いとは言えない。その点、中世の食はレシピがありませんから、どうやってもいいわけです。いろんなシェフを集めて、それを作りました。とても美味しいです。あとは弁当のようなものも作りました。

それともう一つは、ここに右田さんという酒屋さんがあり、1601年創業で、中世にどういう酒造りをしていたかという資料が残っていました。だから、彼も事業に参加して、食というテーマでやっています。益田といえば、雪舟が二つの庭園を造った雪舟の晩年の地になります。これは萬福寺という重要文化財のお寺ですが、その庭を眺めながら中世の食を味わうという最高の贅沢をやったりしています。

そんなことで中世の丸々を作りたいというテーマで、塾生たちを集めているいろんな塾を始めました。乗馬をやっている人たちもいて、そういう人たちには流鏑馬をスポーツで表現するという課題を出し、これは芸術村というところをやっている若者ですが、彼の実家はお寺さんです。中世の音を再現してくれないかという注文を出したら、彼は何をやりだしたかという、かなりめっちゃくちゃなのですが、西洋音楽の有名な曲を和楽器で演奏する、それを全部録音、録画して町中のいろんな地域で聞いていただく。中世の食があれば、中世の音もある、中世の遊びもある、中世のアートもある、中世の学びもある、こういうことをみんなで再現することを始めました。急にぼたん鍋になりましたが、ごめんなさい、どこかに入れておかないといけないと思ひまして。これも素晴らしいです。そういうことをいろいろやっております。

私はまだまだこの丹波篠山について、深

掘りも何もできていませんが、この二つの物語をどうやって具体的な形にしていくのか、景観や情報もそうで、それに基づいてどんな事業を生み出していけばいいのか。創造農村というのは、先ほど佐々木先生もおっしゃったように、新しい地域の生業を生み出す、あるいは産業を生み出していくとかいうことでもあるわけです。だから、そういうものをどうやって運営していけばいいのか。これは行政だけでできる話ではもとよりないわけで、実際に地域の方々、事業者の方々がやる気にならない限りは進んでいかないわけで、先ほどの益田の例もそうです。そういうことを私たちはやらなければいけないということです。

そして、同じことですが、地域を創造する、これは誰がやるかという、まさに人なのです。人がいないと地域は何もできない。私は今、官公庁のいろんな事業もお手伝いしていますが、一番先に感じるのはプレーヤーがいないということです。いろいろ仕組みはできるけれどプレーヤーがいない、誰がやるのかという話に大体なっています。それが残念ながら厳しい地域の現状です。人を育てる、これは今日、この後のディスカッションで、いろいろ話せると思っております。

最後に、私はどちらかというと観光分野で仕事をしています。観光というのは、地域の中にいろんな観光の受け皿をつくります。そして、人の移動サポートし、旅行商品を含めて集客するときにサポートする。観光の商品というのは、ある意味、比較的短期間でできますが、繰り返しになりますが、地域がしっかりした明確なビジョンを持ち、例えば2次交通の整備や文化資源の保全をするには、ものすごい時間がかかります。ですから、ここにしっかりと行政の方針、地域としての方針がなければ、こういう事業はなかなか続かない。同じよ

うに商工会や商工会議所などの経済団体がありますが、こういうところも町のにぎわいをつくる、食のブランドをつくるなど、当然、必要になってくるわけです。その上で、できれば全体をマネジメントし、文化資源を活用できるDMOのようなものがしっかりできて、民間がもっと地域に自由に入って動いていければいいと思います。

目の前に1分前という紙が出ましたので、そろそろ終わります。今日、この後、ディスカッションでいろんなお話が出ると思います。今日の話をつたき台にさせていただければと思います。どうも、ご清聴ありがとうございました。

司会 丁野様、ありがとうございました。ここで、10分間の休憩とさせていただきます。15時30分より再開いたしますので、それまでにお戻りくださいますよう、よろしくお願いいたします。

また、休憩中ではございますが、動画放映のご案内をさせていただきます。今年開催された高校生の動画コンテスト、観光甲子園の日本遺産部門にて、篠山鳳鳴高校がグランプリを受賞されました。日本遺産のストーリーになったデカンショ節に、篠山鳳鳴高校生がオリジナルの歌詞を乗せて丹波篠山の魅力を伝える映像です。タイトルは「360°デカンショ?! “New”な民謡に乗せて歌い継ぐ「それぞれ」の思い出」です。前方のスクリーンにて放映させていただきます。ぜひ、ご視聴ください。

(映像)

4 パネルディスカッション

司会 皆さま、お待たせいたしました。それでは15時30分となりましたので、ワークショップを再開いたします。ここからはパネルディスカッションを開始いたします。

パネルディスカッションのテーマは、「日本遺産を持つまちの取組と創造農村の未来」です。ご登壇者を紹介します。パネリストには、丹波立杭陶磁器協同組合理事長の市野達也様、クラフトヴィレッジ制作委員会代表の加古勝己様、MASSE 丹波篠山事務局長の井本季伸様、最後に公益社団法人日本観光振興協会総合研究所顧問の丁野朗様にご登壇いただきます。モデレーターは、元日本遺産プロデューサー、株式会社ブルームコンセプト代表取締役の小山龍介様です。それではよろしく願いいたします。

○パネルディスカッション

MASSE 丹波篠山 事務局長 井本季伸 氏

クラフトヴィレッジ制作委員会 代表

加古勝己 氏

丹波立杭陶磁器協同組合 理事長

市野達也 氏

公益社団法人 日本観光振興協会総合研究所 顧問 丁野朗 氏

<モデレーター>

元日本遺産プロデューサー・株式会社ブルームコンセプト代表取締役 小山龍介 氏

小山 ここからは私がモデレーターという司会役を務めまして、パネルディスカッションを進めてまいりたいと思います。簡単に私の自己紹介をしますと、日本遺産のプロデューサーとして丹波篠山に関わらせていただきまして、その後、丹波篠山の文化活用の様々なところでご縁をいただき、お手伝いをさせていただいております。現在、丹波篠山の隣の亀岡市というところも、霧の芸術祭という芸術を使った地域活性化をしているのですが、そこでお手伝いをしており、こういった文化観光の面でいろいろな地域の事情なども分かっていますので、司会にとどまらず情報提供もさせていただきながら進めていきたいと思っています。

それではまず、講演を聴いていただいて、実際には、丹波篠山の具体的な取り組みがどうなっているのかというところを伺っていきたいと思っています。まず市野さんに伺いたいと思いますが、市野さんは有名な植木鉢をご専門に作られていて、作家さんでもあり、実は私のオフィスにウンベラータという観葉植物があるのですが、その植木鉢を作っていただいて、ものすごくすくすくと育っています。そうした、本当にすごい腕の持ち主でもあり、今回は組合の理事長としてここに登壇いただいておりますが、どんな取り組みをされているのか紹介をいただけたらと思います。

市野 こんにちは、皆さん。丹波立杭陶磁器協同組合の市野達也と申します。家業としては市野伝市窯で植木鉢を専門に、息子と2人で作陶をさせていただいております。まず、丹波焼というものですが、先ほど丁野先生等のお話でもありましたように、850年ぐらい前から続いておる日本六古窯の一つとして作陶している産地であります。今現在、約60軒の窯元が軸となって産地を盛り上げようと頑張っております。

続きまして、丹波焼の概要ですが、今、特に頑張っているのは、新しい観光客にどのような形で来ていただくか、また作品づくりをどのようにしていくか、それとあとPRの仕方、そういうところに特に取り組んでいます。ここに「丹波のイロドリ」という文字が見えていると思いますが、これは約5年前に始めた丹波陶磁器協同組合主催の通販サイトです。最初は数万円の売り上げしかなかったのですが、少し外部業者を入れて、いろんな形で写真撮りから商品の開発までして売上も上がり、また、コロナ禍になりおうち時間が増えたというところで、それがまた数倍、数十倍に売上がアップし、窯元全体で頑張っているところで

す。それと、後でもお話をさせていただきませんが、窯元路地歩きというものを頑張っていますが、コロナ禍で集客ができず、休止状態という形になっております。

続きまして、日本遺産ですが、備前焼さんが軸となっただき、デカンショ節の後に丹波篠山市で二つ目の日本遺産を丹波焼でいただくことができました。「きっと恋する六古窯ー日本生まれ日本育ちのやきもの産地ー」、私たち 60 の窯元が心を込めて手作りで焼き物を作っていますが、市長も来ていただいて、最古の登り窯の横で写真も撮っていただき、本当に日本遺産になって集客が増えました。いろんな形で PR がしやすくなり、日本遺産に認定されて良かったところだと思っておりますが、これからまた、今後の取り組みのところで少しお話しさせていただけたらと思っております。

続きまして、丹波焼の取り組みですが、44 年前、丹波焼の若手の有志の方が丹波焼の陶器祭という焼き物の祭りを 2 日間開催してくれました。最初は数万人のお客さんだったのですが、今では狭い町に 2 日間で約 10 万人というたくさんのお客さんに来ていただくまでになりました。今はコロナ禍で密にならないようにどうしたらいいか考え、ロングランでゆっくりと丹波立杭の地を歩いていただきたいということで、昨年と一昨年は約 3 週間の期間を設けまして、窯元への訪問や、土曜日曜にイベントをさせていただき、屋外のイベントで集客を見込むなどしておりました。

それと、約 7 年前に、この横にポスターが見えていると思いますが、赤字で丹波焼陶器まつりという片口の写真が入ったポスターがあります。それにはいろんな形の焼き物ばかりを載せていたのですが、なかなかお客さんのターゲットが絞れないということで、その横にある少しポップなかわいいポスターに変えました。これは 40 代の女

性に絞ったものです。チラシを置く場所やどういう PR をするかを皆さんで考えて、40 代の女性にターゲットを絞ったところ、本当にぴったり合いまして、今現在も若いカップル、ご夫婦、それと小さなお子さま連れ、お母さんと娘さんなど、そういう若いお客さまがた立杭の地に来ていただくようになり、作品のカラーも変わってきたというような形で進んでおります。

産地の活性化や文化財は、分かりづらいかもしれませんが、炎が見えているところが明治に作られました丹波焼最古の登り窯です。平成 26 年に丹波陶磁器協同組合と兵庫陶芸美術館が協力しまして、約 2 年間かけて、少し傷んでいた窯を修復させていただきました。5 月のゴールデンウィークにはそこで焼成するイベントを実施し、また、窯に入れる作品を一般公募し、丹波焼の粘土を買っていただきつくった作品を入れて、焼成してお客さまにお返ししています。それと、この横の立杭の風景は、私が住んでいる町の上立杭自治会ですが、景観条例ができて、外部から奇抜なものが入ってこないように地域を挙げて作っていただき、景観を守りながら進んでおります。

今後の取り組みですが、市役所の方々とお話しさせていただいたりする中で、より深い体験の提供として、窯元の空いた部屋に泊まっていたり、長いスパンで作るところから焼成まで体験できるようなことができないか、また、先ほど言いましたように、窯元路地歩きで本当に生活の中を歩いていただきながら、洗濯物が干してある軒先を通して工房に入るなど、そういった少し深い体験の提供ができないかということ、今後の取り組みにしていきたいと思っております。また、インバウンドの勧誘なのですが、大阪万博があと 3 年後に行われるため、そこでの個人のお客さま、団体バスで

なく、ゆっくりと来られるようなインバウンドの方の勧誘の仕方も考えていければうれしいです。また、私たちの拠点であります陶の郷という施設がありますが、そこは陶芸体験、陶器の販売、古丹波、現在の作家の展示が見られます。そこでもインバウンドを勧誘するだけはいけないので、簡単なエアレジなど、いろんな決済ができることも取り組みの一つで、勧誘をするための下準備として取り組んでいます。それと大阪万博での情報発信は特にしていただきたいし、私たちも積極的にやっていきたいと思っております。

創造都市、六古窯の産地との文化交流ですが、創造都市というところがある以上、いろんな国内外問わず海外とも交流ができて、丹波篠山、丹波焼が世界に発信できたら非常にうれしく思っておりますし、来年度ですが、コロナ禍でずっと中止、延期になっております六古窯サミットが、次回は信楽であると聞いておりますので、その辺で文化交流もできて、いろんなところで作家同士の交流ができればうれしく思います。また、いろんな形で皆さんの目にも見えてくるような丹波焼になれば、うれしく思います。私からの報告は以上です。

小山 ありがとうございます。本当に狭い地域にたくさんの窯があります。何軒ぐらいでしょうか。

市野 窯元が約 60 軒あります。

小山 60 軒ということで規模的にも相当、大きな産地なのでしょう。

市野 日本の産地では一番規模が小さいぐらいです。

小山 本当に路地を歩くと、すぐに次のと

ころに行けるということで、町歩きとすごく深い体験を提供していこうと取り組まれているところなんです。ありがとうございました。

市野 ありがとうございます。

小山 続いて、加古さんに伺いたいと思います。先ほどお昼休みにお話を伺っていたら、本当は京都に拠点もあり、別のところに工房もあったが、いいところを探してたまたま車で行って見つけた場所が、ここ丹波篠山だったという、本当に偶然のような、でも呼ばれたような、そういうお話を伺って、そんなご縁もあるのだなと思えました。加古さんは丹波篠山のご出身ではなく、ここに移住をしてきて取り組まれているということで、これからクラフトヴィレッジという取り組みをご紹介いただきたいと思います。加古さん、よろしく願いいたします。

加古 加古です。よろしく申し上げます。僕自身は丹波篠山市の東の端のほうの村雲地域にある上笹見というところで焼き物をさせていただいています。僕自身は京都からの移住者ですが、焼き物をやっています、篠山では丹波焼が伝統のある焼き物として確立されていますが、僕たちのように、細々と個人作家が移り住んできていることが近年増えて、それを耳にしながあまり交流がなかったので、少しずつ交流を持ちつつ何かできないかということで、行政ともお話をさせてもらって、取り組みを考えてみようということで、丹波篠山クラフトヴィレッジという名前を付けて活動してみようかということになりました。

市内には、染色、革工芸、ガラス、木工、竹工芸の人も最近来ましたし、天然石を扱って自分で探しにいった、それを加工して

いる人も移り住んでこられています。昨年11月に第1回クラフトヴィレッジというイベントをしましたが、10月の30、31日に王地山焼のある王地山陶器所でクラフトマーケットを行い、それと同時期にオープンファクトリーという市内工房を開放していただいて自由に見て回れるというイベントをさせていただきました。全体で30軒ほど参加していただき、なかなか普段見ることのできない現場を自由に見て回れるというイベントを開催させていただきました。このように丹波篠山市内に多くの散らばっている工房があるのですが、そこが一堂にオープンさせるということで、当初はどれぐらいの人が来てもらえるのかと思ったのですが、ふたを開けてみると、結構、回っていただいたようで、その期間、市長も一緒に回っていただき、改めて移住した工芸家が、これだけのものづくりの現場を持っていることを知っていただけたという感じでした。

昨年の11月に続いて、今年はどうしようかという話になり、5月28、29日の2日間に、場所は篠山チルドレンズミュージアムで、ワークショップベース形式で開催することになっています。去年は見ることに重きを置き、知ってもらうことだったのですが、今回は作ることに触れるイベントとして、ワークショップベースで参加してもらうということで、今、募ってしまして、何人かはお返事をいただいています。3月15日が締め切りで、今後はどのような進行にするのかを、製作委員会の中で練っているところです。

クラフトヴィレッジについてですが、クラフトヴィレッジ自体はイベント名ではなく、僕の中ではクラフトヴィレッジという構想であって、特にイベントするだけのものではなく、年間を通して工芸家の皆さん、およびものづくり工房をサポートできるよ

うな体制ができないかと考えています。参加も自由で、特に団体をつくっているわけではなくて、数人の製作委員会のスタッフでいろいろ情報を取りながらサポートができればと思っています。大半が移住者なので、これが不思議と、新しい工芸という文化が篠山に根付いたらいいというような感じで取り組んでいます。僕の中では、工芸のある空間演出というのが大きなテーマで、そこにみんなが楽しんでもらえるようなイベントも含めて、新たな取り組みができればいいという感じで進めさせてもらっています。

小山 ありがとうございます。先ほど市長が時計を購入されたというのも、このイベントがきっかけですか。

加古 オプションです。去年はコロナ禍だったので、あんまり表立って人が集まることはできなかったのですが、その中でツアーをしてみたいという声があり、一つの車に乗って数軒のものづくり工房を回ってもらうツアーを考えていました。その中の一つに市長も来ていただき、市長、教育長、課長にも回ってもらって知っていただきました。そのときに訪れましたが、その後、市長は個人的に行って購入されました。

小山 それを伺っていると、意外と地域に住んでいる方も、時計を作っている人がいたことを知らない人が多かったのですか。

加古 多分、僕自身も、篠山の端のほうでやっていることを知られていないと思いますし、僕も多くの人を知らないですから。いろんな情報をもらいつつ、お声掛けをしており、参加は自由なので、無理な場合は無理という返事をもらいますし、その辺はまったく自由です。

小山 作家の人たちも、実は隣でこういう作家の人がいるなんてことも知らなかったという、作家の人同士のつながりにもなっていたということですか。

加古 知っていても、なかなか行けないです。こんにちはと言っただけで、すぐ入れないので、こういう機会をつくることによって、すぐ近くにもものづくりの人がいるので、ちょっと覗いてみようかという気になります。そういうことも目的の一つでもありました。

小山 ありがとうございます。そして最後に、MASSE 丹波篠山の事務局長であり、もう一つにはウイズささやまの代表理事もされている井本さんです。ウイズささやまといえば、先ほど佐々木先生の登壇のときにも名前が出ていましたが、丹波篠山の文化観光を支えている組織でもあり、その井本さんから里山暮らしのツアーについてプレゼンをいただきたいと思います。ではお願いいたします。

井本 分かりました。皆さん、改めまして、こんにちは。MASSE 丹波篠山の井本と申します。「里山暮らし 5 日間～人とつながる旅」、旅を通じて文化を見てもらおう、生活を見てもらおうというツアーを企画させていただきました。MASSE 丹波篠山といいますが、これは事業母体で任意の団体でございます。構成している団体をお伝えしますと、丹波篠山市商工会、そして株式会社アクト篠山、これは指定管理を受けまして篠山の物販などを市で行っている会社でございます。丹波篠山観光協会、一般社団法人ウイズささやま、ここは私が代表をしております。そして、歴史施設などを管理しております。そして、株式会社 NOTE、一般社団法人ノオトということで、NOTE さんは皆さん、

一番ご存じだと思いますが、古民家なんかを改修して旅館等として運営されております。そして、アドバイザー、ツアー支援としまして丹波篠山市にご指導を受けております。観光送客から移住までの総合的な窓口と考えておまして、そういったものとして、みんなで団体を組んでおります。

それでは、どのようなツアーをしているかということで、ツアーコンセプトについてお話をさせていただきます。その前に、ちょうどツアーの途中で散歩して、農業をされているおじさんに出会いながら日常の話をするというような、こうしたほっこりとしたようなツアーをしたいと考えております。丹波篠山暮らし 5 日間ということで、ツアーコンセプトをお話しさせていただきます。戦後、昭和期、バブル期を通じまして、そもそも旅行というのがマスになってきて、要するに観光の大衆化、大量集客、大量送迎、大量宿泊ということで、いずれにしても大人数を送り込んで施設などを見てもらうというような旅行が多く行われておりますが、そうではなくて、ステイケーション、マイクロツーリズム、そしてワーケーションと、最近はいろんな言葉で言われていますが、遠くに旅行に行くのではなくて近場のホテルに滞在する、自宅から 1 時間以内の地元や近隣の短距離観光をする、さらには観光地で働く、働きながら観光するというようなことが、特にこの 2 年、コロナ禍が始まって以来、見直されるようになってきております。

われわれは、コロナ感染が始まったからやったのではなく、7、8 年前から日帰りのツアーとして 15 人、20 人ぐらいのツアーを年に数回開催しておりました。篠山市限定という免許ができたということで、一昨年に旅行業の免許を取りまして、受かりやすく取りやすいということもあり、旅行業の免許を取り、地域の日々の暮らしを観光

資源にしていこうということで、それをテーマにしてツアーを組んでおります。どういったツアーかということをもう少し掘り下げていきますと、いわゆるマストツーリズムでは不足しがちな3要素、体験する、学習する、交流する、参加者が観光旅行を通じて丹波篠山の暮らしを学び、体験を通じて自分なりに何かを持ち帰ってもらう、体験型観光コンテンツを通して、これからの暮らし方のヒントを見つけてもらう、地域の人々と交流して、さらにつながることで将来的な移住候補者としてのコンタクトリストづくりにも役立てたい、そう考えております。

そして、宿泊していただく宿ですが、これは暮らすように泊まるということで、里山暮らしを体験できる宿泊施設をご用意させていただきました。ホテル、旅館とも違う、そして地域の暮らしが分かるような宿、江戸時代に栄えた商家もしくは旅籠などを改修した城下町の宿、かやぶきの宿。急に造ったのではなくて、何世代かの人を渡っていきながら培われた宿、当然、少し不便は感じます。寒いときには寒い、暑いときには暑い、それが宿でございます。我慢して泊まっていただきます。

それで、我々は観光コンテンツと言っていますが、農業体験、六古窯にもお伺いして陶芸体験、そして収穫した食べ物で創作料理を作っていただきます。時にはぶらりと立ち話もさせていただきます。そして、移住された芝居小屋でコーヒーショップを開いておられるところなど。農業体験といいますが、作付けと収穫だけではありません。当然、草刈りもあります、草刈り体験。そして、ブリキ工房などにも行っていただきました。より深くご説明をさせていただきます。農業体験、仕事体験と書いてありますが、農業体験では作付け、収穫そしてトラクターも体験で運転していただき、

先ほど申しあげました草刈りもしていただきました。仕事体験では、移住されたコーヒー屋さん、これは芝居小屋を改修されておりますが、そこでの豆をひく体験、歴史施設では美術館の展示、模様替えです。ビール工房さんでの研修も行っていただきました。

続きまして、移住者を訪問させていただきました。これは革工房さんやデザイン工房さん、それから先ほどの腕時計の工房さんなどへ訪問させていただきました、どのように移住されて、考えられたのか、その辺のこともお伺いしております。右半分が料理体験です。先ほどの創作料理をつくりました。当然、六古窯の素晴らしい陶芸家さんたちがおられますので、左半分は立杭焼に行き登り窯の体験や陶芸体験をさせていただいております。右半分は市内中心部に帰ってきまして、お城の上に大書院という建物がございまして、そこの見学、そして市内には木造の裁判所もございまして、そちらで模擬裁判なんかも行いました。

伝統を知るということで、デカンショ祭、8月の15、16日に、関西でも1番、2番を争います大きな盆踊り大会がありますので、宿泊施設で盆踊りの講習を行いました。右半分、これは農業をされている方を訪問したのですが、農業体験は別でやりましたので、今度は里山の整備事業を見学していただきました。よく獣害などがありますので、間伐をしていただき、里山整備事業の大変さなどを講習で伺いました。次は、高城山という山を朝5時から登りまして、丹波の朝霧を見ていただくということで、これも大成功しまして、いい天気の下、山登りを楽しんでいただきました。右半分、これは旅の途中途中で人との交流をしていただいております。まさに地元案内人と一緒に人との交流です。参加者の方には観光だけでは知り得ない丹波篠山の日常を体験する、

まさに暮らすような旅を経験していただきました。

今回の旅では市内 19 団体、23 名の方にご協力いただきました。移住してお店や農業をされている方、廃校となった旧小学校を活かす活動を展開されている方、様々な方にお世話になっております。

この旅行ですが、丹波篠山市から補助金をいただき、1 人 3 万円いただいております。ただ、この 3 万円でも全然賄えませんので、2 倍あるいは 3 倍の旅行代金をいただけるように、もっとコンテンツを磨いていきたいと思っております。参加者ですが、マイクロツーリズムにありますように、一番左の輪です。兵庫県そして大阪、合わせますと 55 パーセント、少し離れています。和歌山も入れると近場の方が 6 割を超えているということで、だんだん近場への旅行や移住を考えておられる方が増えているということが分かりました。ツアー参加者ですが、コロナ禍で延び延びになりながらも、今回は 11 月と 12 月に 2 回やりました。11 月は 14 名、12 月は 9 名に参加いただきました。大体、15 名から 20 名ぐらいがベストだと思っておりますので、コロナ禍で延期した都合で参加者が減ったこともありますが、その人数であれば集客もできるし、うまく運営できるのではないかと分かりました。

今回の観光交流、関係人口創出までを目的としたツアーで、地元の事業として実施することの意義を知ることができました。今後もこのツアーを年数回やっていって、採算ベースに乗せていきたいですし、移住定住、もしくは関係人口の増加につなげたいと思っております。ちなみに 11 月、12 月のツアーで 2 組移住される方が決定しております。大変な成果じゃないかと思っております。この熟成度を高めて採算ベースに上げて、今後も継続してやっていきたいと思っております。

ます。以上です。

小山 ありがとうございます。井本さん、念のため確認ですが、有料でやっていて、参加者が参加しているということですね、3 万円というお金も払って来てくださる。一つだけ質問ですが、3 万円払って、収穫ならまだしも草刈りやつらいこともやる、里山の整備などもやる、これは皆さん、どんな反応なのですか。

井本 結局、観光地はお祭りにしてもそうですが、参加するということが大事だと思います。トラクターや草刈りはよく見る風景ですが、当然、こんなことしないですし、木をチェーンソーで切ったこともないですし、体験する、文化に触れる、これが文化かどうか分かりませんが、暮らしに触れる、体験するということが、非常に受ける一つの理由になるのではないかと思います。だから、なぜこんなことをするのかというクレームは全くなく、喜んでいただいていたと考えております。

小山 私たちはお金をもらおうとどうしても、おもてなしをして観光客として接待する感覚でいるのですが、実はこのツアー、本当に地域の人の暮らしにどっぷり漬かって、草刈りもやり里山の整備もやるというツアーということで、その点からも非常に面白いし、それが結局、最終的に移住につながっているというところは非常に興味深いと思いました。

ここで丁野先生にもぜひコメントいただきたいのですが、私のほうから一つだけ、基調講演の内容と少し補助線といいますか、線を引いてみたいと思っております。一つは、今出てきた工芸、クラフト、それから農業、これ丁野先生のキーワードを使わせていただくと、生業なのです。日本遺産にしても、

文化財の感覚からすると、生業というのは文化財と呼べないのではないかと思います。それを活用するというのに、なかなか意識が向かないケースがあるのですが、実はそれこそが最大の観光資源であり、本質的には文化資源であるという、こういうことが三つの事例に共通しているのではないかということをおもいました。生業が非常に重要だと。生業ということが単なる労働というか、つらい労働だけではなく、表現や収穫やお祭りなどという喜びにつながっているということだと、佐々木先生のおっしゃっていたオペラ、単なる仕事ではなくて、そこに喜びと創造性が含まれている。実はどの地域にも、そういったオペラ的な生業があるのだらうと、それを丹波篠山では非常に大きな魅力、地域の魅力として、今、活用しようとしている、そんな事例というふうに読み替えることができると思います。丁野先生、この三つの事例はいかがでしょう。

丁野 ありがとうございます。事前のパネルディスカッションの打ち合わせに参加できてなかったのが、どんなご質問が来るかなと思って恐々としておりました。文化財というか文化という中では、あえて言えば文化資源という捉え方をしていますので、狭く、いわゆる文化財というような捉え方はしていません。私自身が実は長い間、観光の分野といっても産業観光など、いわゆる生業ツーリズムなどの分野を二十年以上手掛けてきておまして、やっと最近、そういうものが、いわゆる一種の産業文化財といえますか、そういうものとして活用が進んでいくという流れが出てきております。

2点申し上げたいのですが、一つは、他のいろんな地域の事例を思い浮かべながら、お話を伺っておりました。今一番、分かりやすい例で言うと、燕三条でしょうか。工

場の祭典ということをやっています。あそこは工場といっても、いろんな業種業態、特に金物系や食器など、いろんなものがあるのですが、そういうところが、いわゆるオープンファクトリーを今から10年近く前から始めました。最初はけっこう抵抗がありました。というのは、陶芸なんかの方とまた違うのかもしれないけど、一般の工場の労働者というのはあまり語らないのです。もう一つは、語ってはいけないという風土があったのです。社長はしゃべるけど従業員はしゃべっちゃいけないというような風土がありまして、最初はなかなかしんどかったのです。

ところが、あそこの工場の祭典というのは、単に工場の祭典ではなくて、町場をどう見せるかもあります。例えば、町の中に農機具を作っている小さな工房など、とにかく本当に小さな工房が多く、そういうところが町の中に点々とある、そうすると、そういうところには、例えばお寺さんや食堂もあり、いろんなものがあるわけです。そういうものをエリアとして全体を見せられないかと考えました。例えば、ラーメン屋ですが、ラーメンは全部、上にあんかけやカレーを乗せているわけです。なぜかと聞くと、出前すると冷えるからなのです。だから、上にあんかけを乗せるラーメン、これが地元のソウルフードになっているのです。また、製品で一番いいものができたら、まず真っ先にお寺さんへ届けに行くような習慣があり、お茶などは、みんなそうです。だから、お寺さんも例外ではなく、工場の祭典のプロジェクトマップでは、黒とピンクのどぎついカラーをテーマカラーにしている、それをお寺さんに照射するのです。あんたら、ばち当たるでと言っていたのですが、ところがOKでした。お寺さんは工場の皆さんと一緒にだからと、みんな檀家でもありますし。だから、工場

の祭典といいながら、実は町場の祭典になってきたのです。

そこに今度、農業が入ってくるわけです。町の中でマルシェをやるわけです。このマルシェは食材で、工場では食器なども作っているのです、一体的にそういうものが見られるわけです。ですから本当に、町場の祭典になってきたという感じがある。クラブトヴィレッジの今日の事例を聞いてみて、オープンファクトリーというのは年数をかけてずっと見ていくと、まちづくりになってくるというのが私の感想です。他にもたくさん事例はあるのですが、もし必要であれば後でお話します。

もう1点は、さっきの井本さんのお話です。私は一応、観光が専門ですが、昨年、一昨年ぐらいから、やっと観光庁が誘客多客化や域内連携という事業を始めました。域内連携とは何かというと、昔のツーリズムというのは地域の方々が参加しなくても商品ができました。旅行業界にとっては、これほど楽な時代はなかった。大手旅行会社が地域のひととほとんど関係なしに、観光地のこれとこれとこの資源を組み合わせ、ホテルを付ければ商品になるわけです。飛ぶように売れました。ところが売れなくなってきた、なぜなのか。結局は、さっきのマスからFITへという話がありましたが、FITになってくると地域のいろんな事業者が協力しないと、魅力的なものがないのです。

例えば、メディカル、医者がどうか、アーティストがどうか、農業がどうか、漁業がどうか、ものづくりがどうか、こういう人たちがきちんと参画をしないと、本当の意味でこれからはいい商品ができなくなる。特に海外のエージェントなどは、有名観光地などを恐らくパスしています。これからは、どんなものが我々を興奮させてくるのか。彼らは非常に客単価の高いお客さまを

小人数で連れてくるのです。そういうエージェントから見れば、申し訳ないけど、あまり固有名詞はいけませんけど、京都にあるような、ベタな観光地はもういいという感じなのです。恐らく、これからインバウンドはもう一回戻ると思います。今度出てくるときは、そういう形で出てくると思います。だから、域内連携が必要なのです。やっと観光庁もそちらに舵を切りました。来年もこの事業は続きますので、ぜひ、やっていただけたと思いますけど、そういう時代になってきたということなんです。

小山 ありがとうございます。今の話の流れで、まちづくりと域内連携がありましたが、特に域内連携についてはMASSE 丹波篠山の取り組みのお話も出てきて、MASSE 丹波篠山というのは任意団体で、複数の事業者が協力し合いながら、そこに行政も入ってやっているとお聞きし、この辺り、立ち上げたときの動機やそこでの困難など、そういったものを井本さんに伺えたらなと思っています。というのも、多分、これをご覧になられている他の地域の方の中には、こんな域内連携ができるならいいが、ただ、どうやってやったのだろうと疑問に思われている方も多いと思うので、ぜひ、その辺り伺いたいのですが、いかがでしょうか。

井本 丹波篠山にはいろんな観光資源、文化があることは、我々も当然、分かっております。ただ、それぞれこの6団体、努力はしているのですが、目指すところは一緒なのに、一緒にすることはなかったのです。ですが、一緒にしたらいいのではという軽い発想で、それぞれがお声を掛け合っつつあったという状態です。

小山 お声掛けした。

井本 私というよりも、みんなで。

小山 自然発生的にですか。

井本 そう考えていただいたほうがいいと思います。だから、みんな分かったとすぐ賛同していただきました。今後の課題としては、今は MASSE 丹波篠山自身が法的な人格がないので、これを今後どうしていくかということです。考えはあるのですが、まだ決定しておりませんので、その辺が課題だということです。また、今はコロナ禍で、いろんな行事が中止になっております。先ほど講演でもお話ありましたが、小京都といわれるだけあって、祇園祭のような山鉦が出るような祭りも幾つもありますので、そういったお祭りに実際に参加して引く、もしくは飾り付けをするなど、そういったツアーも考えていきたいと思っております。

小山 意見が対立したり、トラブルになったりということはあるものですか。言いづらいのかもしれないですが。

井本 まだ、昨年できたばかりで、これから出てくる可能性はありますけど、一つ一つクリアしながら頑張っていきたいと思えます。

小山 でも、今おっしゃっていただいた、目標が一緒だからというところでつながっていくというのは、非常に理想的な組織です。同じように、加古さんに伺いたいと思いますが、作家さんは一人一人いろんな思いとか考え方があって、先ほどもクラフトヴィレッジは自由参加であるというお話もありましたが、皆さんのバラバラな考え方があって、一つにまとめていくためにどんな苦労があったのでしょうか。

加古 まとめてないのです。本当に自由に、参加も自由ですし、今度ワークショップをするのですが、ワークショップのやり方も、いわゆる今までのワークショップは安い金額で簡単にできる子ども向けみたいなものが多かったのですが、今回はそうではなく、もうちょっと大人目線で興味を持つようなものという、それだけ決めておいて、もちろん子ども向けでもいいのですが、それを決めて、あとはみんな考えてもらい、自由に設定もしてもらって、それを僕らが広報するというだけです。団体をつくと必ず参加みたいになってしまうのですが、そういうことはなく、本当に自由に、知ってもらうことと楽しんでもらうことだけで、今のところ進めています。

小山 団体はつくらないとおっしゃっていますが、一方では単なるイベントでもないわけで、先ほどは構想とおっしゃっていましたが、MASSE の話ではないですが、こういう方向に行こうという目標みたいなものは共有されているのでしょうか。

加古 イベントだけをするなら、実行委員会という名前が付くのですが、僕はそれを避けて製作委員会という名前を付けました。それは、年間を通して何かやりたいと思っている、クラフトヴィレッジに参加している工芸家たちの中で、何かをサポートできるようなシステム、ファンの拡大、獲得や、それぞれの情報を共有して提供できるようなものにしたいと考えたからです。

小山 そこは、あまり強制的に何かをやるということではなく、かなり個人の自由を尊重しながらも、全体としてみんなで息を合わせて PR をやるけれど、やることは結構、バラバラでいいわけですか。

加古 ものづくりは、特に篠山に来られているというのは、恐らく風土も含めて自由があるから来ていると思っています。だから、それを特に寄って固めるようなことはする必要はないのではないかと考えています。

小山 通常、行政や日本遺産もそうですが、日本遺産の運営委員会をつくって委員長は誰でと、どうしても組織化してしまいがちですが、そうするとかえって、クラフトヴィレッジはうまくいかなかったかもしれない、緩いやり方だからこそ、みんなが息を合わせてできたということでしょうか。

加古 僕らも昨年初めて形にして、行政とも話をしつつ始まったので、まだこれからだと思います。今は取りあえず市内の作家が、市内の人たちに知ってもらうことを目的に進めています。その後、2年、3年と続ければ、丹波篠山の工芸というのはこういう形で盛り上がっているということ、外に向けて発信することが目的になると思います。取りあえず、今は市内の人に市内の作家を知ってもらうという感じで進めています。

小山 ありがとうございます。その点で最後に市野さんにも伺いたいと思います。というのも、よくこういう陶芸の組合は、何とか焼はこうであるべきだ、こうでなければいけないなど、いろんな条件を決めてやっている地域もある中で、丹波焼というのは良くも悪くも本当に多種多様な作家さんの個性が表れる、そんな特徴があると聞いています。組合として、先ほど40代の女性に特化したとのことですが、意思決定はスムーズにいくものでしょうか。

市野 先ほどあったように、こちらは本当

に60の窯元の組織です。もともと組織をつくるきっかけは、丹波焼の粘土を安定供給するための組合を74年前に設立したことが起源になっております。時代背景に合わせて、販売やイベントなど、そういうものが出てきたわけで、私たちは加古さんと違って、陶器祭は実行委員会制を取っております。本当に真逆のことをずっと今もやっていますが、それは焼き物の窯元がどんなことを求めているか、各窯元のお客さんがどういうことを求めているか、というところの意見の出し合いの中で、進むべき道を考えているのが今の実行委員会制で、その中で40代という提案が出てきたのであって、みんながそっちの方向に向きたいという部分を見いだす実行委員会になっております。丹波焼の組合は一つですが、他の産地行くと二つ三つの組合があってやりにくいと聞きます。丹波焼は一つの産地で、私たちの同年代の方も、生まれてから中学までは地元の小学校、中学校を卒業しており、高校で初めていろんなところに旅立っていくところで、地元愛が強いところがあり、産地を守っていききたい、地元を大事にしたいという気持ちの表れが、今の組合のいい流れになっているのではないかと思います。

小山 ありがとうございます。今、一連の話をお聞きして、思い付いたキーワードで整理をすると、地域に根差した地元の人たちについては、コミュニティという言葉があります。もう一つ、アソシエーションという言葉もあるのです。アソシエーションというのは、もしかしたら住んでいるところはバラバラでも、同じ志で協力しようというように、コミュニティの上にクラフトヴィレッジやMASSEなど、そういった今まではつながらなかった人たちのアソシエーションでつながりが生まれてきている、それが二重に丹波篠山を非常に面白い魅力的

なものにしていると言えるのではないかと
思っています。非常に興味深いのはクラフ
トヴィレッジと立杭焼の丹波焼の、ここも
協力関係にあって、決して対立するわけ
ではなくて、お互いに面白いことをやって
いるということにつながり合っているとい
う緩やかな連携、ある種の緩さみたいなも
のが、アソシエーションとしてすごく丹波篠
山の魅力になっていると感じています。

先ほど丁野先生の基調講演の中で、人が
重要であるというお話をいただきましたが、
こういうアソシエーションをまとめる人
として、どんな人材が必要なのか。加古さん
にも先ほどお話を伺ったのですが、どんな
人が取りまとめられたのかというヒントを
伺い、丁野先生にコメントをいただきたい
と思います。実はキーマンがいるというお
話を聞きました。

加古 キーマンをどういうふうにするか
ということですか。

小山 私は直接2人とも知ってはいますが、
いろんな人をまとめるにあたって、林さん
が結構、飛び回ってつないでいったとい
う話をお聞きしました。

加古 製作委員会というのをつくったとき
に、それまではものづくりをしている人が
何人か集まって話していましたが、夢しか
語らないため現実には一歩踏み出せなかつ
たのですが、それを仕切れる人、スケジュ
ールなどを組んで予算もしっかり出して
くれる人が1人入りました。そうすること
によって、物事がすっと動き出したので
す。それで今年のクラフトヴィレッジは丹波篠
山市が主催になりましたので、年度内に
いろんなことを進めていく必要があり
ましたが、彼が入って話をしていたこと
で本当に面白い形で進んでいったので、
そういう人材

であるキーマンが必要になるのでは
という気はします。

小山 他にも、いろんなデザインを取り
まとめた中西さんという方もおられ
ました。

加古 デザインはデザイナーの中西さん
という方がいて、彼といろいろ話を
して、誰が必要かと考え、今は6人
ぐらいの最小メンバーで動いて
いますが、今が一番、企画がし
っかり動いている形になっている
気がします。

小山 ありがとうございます。こうした
人材が地域をまとめて地域を
活性化していくというのは、ど
の地域にも多分、共通して
いることだと思いますが、丁
野先生、ご意見をいただけ
るでしょうか。

丁野 ものすごく難しいです。いろ
んなタイプのものであるので一
概にはなかなか答えられ
ないです。例えば、今の話を
聞いてピンときたのは鯖江
です。五つの伝統産業があ
りますが、それぞれ全く交
流がなかったのです。そこ
に新山さんや若手グループ
が入り、10人で会社をつ
くっています。10人中9人
がよそ者です。彼らは産地
をパッケージデザインやロ
ゴなど、そういうデザイン
でつなごうとしており、大
きなイベントを始めたわけ
です。イベントだけではも
ちろん駄目なので、彼ら自
身が新しいデザインの産
品を作り始めました。眼鏡
や塗り物の端物がたくさん
出ますから、それをも
らってデザインングを
して、収益を上げながら
少しずつ地域で認知して
もらっています。彼らも10
人の会社ですから、食
わなければいけません。
これはある意味、新しい
リーダーです。

それからもう一つ、今、石川
県の小松で現場プロジェクト
というものやっています。

小松では従来、九谷焼が完全に牛耳っていましたが、昔は加賀絹という織物の巨大な産地でした。それから、もともと小松製作所のルーツは石ですが、石を使う産業としていろんなものがありました。そこで現場の人たちを集めた現場プロジェクトをやろうと3年前から準備を始め、昨年、日本遺産サミットと並行して、それを始めました。これは実は明確なリーダーがいなかった。でも考えてみると、加賀絹のリーダーの小倉さんは、小倉織物という昔からある会社の方で、この人だったら地域は納得するという方です。もう一人は同じ織物でしたが非常に若手で、ジャガード織の織り方をベースにして写真を瞬時に織物で出せるなど、新しい技をどんどん取り入れてきた人です。そういういろんな人が、みんな責任感を持ってやるようになりました。その人たちが地域の異業種のニューリーダーとしてどんどん出てきました。

リーダー論はすごく難しいです。だから、あまり一概に言えないところですが、地域に依じてそういうものが生まれてくる。地域のそれぞれソシオメトリックといいますか、社会構造がありますので、それに抵触するものはうまく回らないということです。

小山 ありがとうございます。なので、移住者がそういった役割を担うケースもあり、これはしがらみがないということで、地雷も踏みながら、知らないからこそできることがある。一方で地域を支えてきた有力なリーダーの人たちに、そこを担ってもらっているケースもあります。いずれの場合も、まとまっていこう、地域をこういう方向にしていこうと、それこそ MASSE 丹波篠山の取り組みもそうだと思います。こういうふうにやっていこうということを目指すと、みんながまとまっていくということで、指し示すのではないですが、最後に、

今後の展望を皆さんに伺っていきたいと思います。

もちろん陶磁器協会は随分、長い歴史がありますが、クラフトヴィレッジにしても里山暮らしにしても、実はまだ始まったばかりの取り組みでもあります。始まったばかりとはいえ、もう既に、先ほどから指摘されてきたように、すごく重要な今後の生業をベースにした、オペラをベースにした地域の魅力発信ということに取り組んでいます。これが今後、10年後、20年後、30年後にどんな展開になっていくのか。また同時に、立杭焼の地も多分は、今後いろいろ変化してくると思うのですが、どんな展望があるのか、ぜひ伺っていきたくと思いますが、さっきと逆で井本さん、加古さん、市野さんという順番で伺っていく形でよろしいでしょうか。

井本 MASSE 丹波篠山の MASSE というのは、これは、やりませ、頑張りませのませです。要するに、やろう、頑張ろうという人が集まってもらいたいということなのです。私が常々、これはウイズささやまの中で言っていることですが、よくイノベーションと言いますが、技術革新とも言え、技術革新というのは今ある技術の組み合わせなのです。別にびっくりするようなことを開発するわけでもない。それをまさに観光に当てはめると、今あるもの、今ある文化を右から左からひっつけて一つのものにするということなので、まだまだ丹波篠山には、いろんな陶芸作家さんとのもっと緊密な連携であったり、地域に眠ったお祭りであったり、そして神社やお寺もあります。私も今年は神社の役員をしております、3カ月間で早くも神主さんと一緒に玉串奉奠（たまぐしほうてん）を3回やりました。最近、「神社へ行きなさい」という本が出ていますが、神社のお世話をさせて

もらっていると思いながら、今年1年間はいいことがあると思っています。あくまで、そういう楽しい、しかしありふれたような、みんながまだ経験していないようなことがあると思います。そういうことをいろいろ組み合わせるコンテンツをつくり上げていきたいと思っています。そして、1組でも2組でも移住者を増やしていき、いろんな楽しい人が増えていけばと願っております。そういった取り組みができればと思っています。

小山 ありがとうございます。MASSE に込められた思いで、やりませという人が来たらウエルカムと、どんどん活動を取り込みながら広げていくということです。意欲のある人がつながっていくことができるオープンなプラットフォームと呼んではいいのでしょうか、そういう場になっていきそうな気がしました。

では続いて、クラフトヴィレッジの取り組みはいかがでしょう。

加古 昨年、今年と開催させていただいて、これだけ多くの工芸家の方が市内に移住し、ものづくりの製作の場をつくっているところは、なかなか他の地域でないのではないかと思います。それをしっかり知ってもらって、しっかり発信して、そしてサポートできるような仕組みをつくれればいいと思いますし、ものづくりだけでは物足りないと思うので、食の文化や産業においてもそうでしょうし、観光面もそうです。その辺をうまい具合に組み合わせるパズルがしっかりと出来上がっていけばいいと思っています。丹波焼は伝統的な組織としてありますが、そこには次世代の若い子たちもいるのです。そういう人たちともうまく組んで、新たな形で市内全域として何かをつくり上げられるようなことができたらいいいと思

ます。こういうことがきっかけになって、新しくパズルが合わさっていくような気がしますので、ぜひよろしくお祈りします。

小山 ということ、伝統的な産業である丹波焼、立杭焼とも連携しながら、また食なども含めて、クラフトヴィレッジといいながら、クラフトに限らない構想として展開されていくというお話でした。

続いて、市野さん、いかがでしょう。

市野 丹波焼も850年と簡単に数字ではいえますが、今の組合としては、これから30年先、どのような形で丹波焼の産地が残っていくか、残さないといけないのか、優先順序を付けて何をやっていかなければいけないのかを、今は話している最中です。加古さんや井本さんが言われていましたが、今日も控室で話して、せっかく今日、3人でこういう話をさせていただいて、MASSE やクラフトヴィレッジ、丹波焼だと言葉だけではなく、何かうまくつながるようなことができれば、人のつながりもそうですし、仕事関係でもうまくつながるような話が出来たような気がします。これを大事に、これからも丹波篠山市さんにも協力していただきながら、工芸や食や農業など、いろんなところで、微力ですが頑張っていけたら、組織的にも個人的にもうれしく思います。

小山 ありがとうございます。ある意味、伝統芸能というのは軸足みたいなもので、そこが軸になりながら、いろんな連携を図っていくという、閉じて固まるのではなくて、本当にいろんな取り組みとつながっていくことによって可能性が広がっていく、それは伝統芸能側も可能性が広がるということでしょうか。ありがとうございます。改めて、冒頭のお話の中から、生業とオペラというキーワードを引用しながら、そこ

での非常に魅力的なコンテンツと、それがどうも地域のコミュニティだけではなく、移住者も含めたアソシエーションをつくって、緩やかなところがあるところが重要ですが、そういうものをつくって、そこが未来に向かっていくという、丹波篠山の姿が見えてきました。

一つ質問が来ています。丁野先生にお答えいただくか、私も答えようかと思えます。こうした取り組みを進めるときの行政の役割は、どうすればいいのでしょうかという、ざっくりとした質問が来ています。なかなか難しいところだと思います。先ほども申し上げたとおり、例えば日本遺産に認定されると、行政的には補助金等の受け皿になるような組織をしっかりとつくらざるを得ない部分もあるとは思いますが。ただ、今、見てきたように、あまりかっちり決め過ぎても広がりがなくなっていく、MASSE のように、やる気がある人はどんどん来てくださうというように広げていくときに、一体、行政的な役割はどんなところにあるのか。かなり難しい質問ですが、丁野先生、いかがでしょうか。むちゃぶりですが申し訳ありません。

丁野 いつも一番難しいところが回ってきます。私が今日、お話の中で申し上げたことと言うと、計画行政です。事業はいろんなことができるわけですが、地域がしっかりしたブランディングをしていく、あるいは地域の骨格をつくっていくということになると、観光や文化という世界でいっても、資源の保全や2次交通など、そういうことがしっかりできなければいけない。それから都市計画です。そういう計画は個々の民間ではできないので、だからこそ長期的なビジョンがあった上に、いろんなこういう事業が花を開いていく。行政の役割は、基本的にそういうことであって、もちろん、

一人一人はとても優秀な人がいますが、異動があります。人は消えても計画は残ります。だから、そういう作り方をすべきです。その関係づくりは非常に微妙ですが、それができていないと、あまり固有名詞で言うてはいけないのですが、昨年なかなか大変な思いをした地域というのは、行政官が走っていたのに異動したところなんです。それから、市長が目の前にいらっしゃるので言いづらいですが、市長も代わるなど、いろんな要因が重なりました。だけど、それはしっかりした保存活用地域計画などがあれば、本来は継続するはずなのです。だから、そういう関係はしっかりつくっておかなければ、地域はうまくいかない。いろいろありますが、それが行政の最大の役割だと思っています。

小山 ありがとうございます。私も一つ、丁野先生の基調講演の中にもありましたが、日本遺産がこれから継続するかということに、もう一度判断が下るという中の一つに、地域でしっかり民間の力も借りて自走できるような体制ができているかどうかという、非常に重要な指標があると思います。行政が主人公でやっていくことには限界があり、担当者も代わります。地域の人たちが盛り上がるということは非常に重要だということです。丁野先生がおっしゃったように、ある種の計画を立てつつ、その実行について、いかに民間の力を引き出していけるか。それについては、丹波篠山は本当にうまいと思います。

丁野 誤解を与えてはいけませんので、もう一つだけ補足しますと、丹波篠山はもう文化財保存活用地域計画を作りました。これからのバージョンは何かというと、要は支援団体、これをつくっていかなければいけない。つまり、活用するにしろ保全する

にしろ、それはそもそも文化資源を持っているのは民間が多いですから、その人たち、例えばお寺の住職さんなどいろんな方がいるわけです。その人たちから、保全しましょう、活用してみましようという動きが出てこない限り、地域の文化資源は保存も活用もできないのです。

実は先々週は小浜に行っていましたが、小浜でもやっと支援団体をこれからつくることになりました。もちろん、活用のほうはDMOがありますので、そこが牽引すればいいという話になりますが、誰が保全するのか。寺も屋根が壊れた、何かが壊れたといったときに、右から左に動かせるお金はないわけです。そういうものを地域がどうやって保全していくのかという仕組みができないと、本当の意味で地域の文化、食文化もそうですが、そういうものは継承されていきません。単に事業をするという意味の民間の活用だけではなく、保全をするという意味での民間の役割も非常に大きいと思います。誤解をされると困るので、あえて補足しました。

小山 ありがとうございます。ということでパネルディスカッション、時間が迫ってきました。まとめではないですが、まさに今日始まったばかりの2つの皆さんの活動を取り上げました。このワークショップの意味は、多分10年後なったときに、10年前はこうでしたよねっという、神山の例などいろんな地域の例が出ていましたが、ぜひ、MASSEとクラフトヴィレッジが、将来、あのとき、こういう話をしていただけたらこうなっただよねっということで、ぜひまた、こういったワークショップの中の事例として紹介されていくことを願っていますし、丹波焼はこれだけ長い歴史がある中で、その歴史を抱えながらも、いろんな最先端の面白い取り組みをしていくというところで

の事例としても取り上げられる、注目されるような、そんな活動になっていくと思っています。時間もまいりましたのでパネルディスカッションのパートは以上としたいと思います。皆さん、登壇された方へ、ぜひ、盛大な拍手をお願いいたします。ありがとうございました。

司会 井本様、加古様、市野様、丁野様、小山様、ありがとうございました。

5. 総括

司会 最後になりますが、創造都市ネットワーク日本の顧問であり、文化庁文化創造アナリスト、学校法人稲置学園理事の佐々木雅幸様より総括のお言葉をいただきます。佐々木様、よろしく願いいたします。

○総括

文化庁文化創造アナリスト・学校法人稲置学園理事 佐々木雅幸 氏

皆さま、ご苦労さまでした。オンラインでシンポジウムに参加されたかたがたも十分に聞き応えがある、とても充実したものだということを実感されたと思います。私は十数年間、関わってきまして、確か2008年か2009年に、初めてこちらに伺ったとき、それが創造農村や、あるいは現在でいうところの文化遺産を活用した地域の再生、キックオフ1.0です。2015年はユネスコの創造都市ネットワークの認定と、日本遺産の一つ目の認定、これが篠山創造農村の2.0です。今回、改めて思うのは、次のフェーズに入りかけたのだと、つまり3.0です。ソサエティ5.0の話をしてしましたが、丹波篠山創造農村の3.0というところに差し掛かっている。これを改めて感じたのは、800年を超える伝統工芸、伝統の焼き物の産地の中で全く新しい動きが出てきたことです。

この新しい動きが、ある意味では規模が

小さかったから良かったのかもしれない。そして、たくさんの窯元がコンパクトに集まっているから、それを逆手に取って、それは路地歩きのことですが、そういう形での新しい生活者や消費者との触れ合いの場をつくれば、そのことによって40代の女性をターゲットとしたものづくりを始める。これは簡単なようで意外に勇気が要ります。それによってデザインや色彩が変わってきて、そのことが恐らくは周辺に新しいものづくりの独立した方があって、そういう雰囲気を感じつけた移住者たちが、ここは工芸を大切にしている、保存している、そういう土地柄で、つまりこの町の人々は共通に大事にしているものがあると考えた。これは言い換えると、文化資本なのです。文化遺産というのは文化資本です。遺産は積み重ねる、文化資本というのはこれから投資していくものです。文化遺産から文化資本に変わります。

そこでクリエイティブヴィレッジになるわけです。クラフトヴィレッジがまさにクリエイティブヴィレッジ、創造農村です。この人たちはある意味ではノマド、別の言い方をするとボヘミアンかもしれない。アメリカでボヘミアンが集まるところが創造都市の最先端をいくのです。シリコンバレーです。ハイテク分野だけではなく、ノマドやボヘミアンが集まってくる場所は新しいイノベーションが起きるのですが、それを小さな組織から起こすのです。大きな組織ではクリエイティビティがないので、そこで自発性を持った個人や小さな集まりというものがアソシエーションなのです。そういう非常に注目すべきものが、この数年の間で出てきた、これを上手に行政が応援してきている。それで、暮らしを体験するツーリズムで、井本さんが活躍されているわけです。

私は冒頭に、NOTEの連中がクリエイティ

ブ暮らしと言った話をしました。クリエイティブ・クラスはアメリカのリチャード・フロリダの売りなのですが、クリエイティブ暮らしは、スとしが1字違います。暮らしがクリエイティブです。でも、それは決して新しいものでなく、むしろ伝統的な、ゆったりとした農村の暮らし、日常の暮らしが面白い、それを体験するというこの意味。これからは商品消費の社会から、経験消費の社会に変わります。経験経済なのです。だから、どれだけ質の高い体験や経験を準備できるかということを考えてみるときに、MASSEというのはいいです。そこに焦点がある。

それで、ツアーの目標がビジネスとして、もちろん自立するのはいいのですが、そういう経済価値だけを考えていない。移住者を増やしたいわけです。これは全国の過疎地あるいは小規模自治体の最大のテーマです。大都市もそうかもしれない。そうすると、クリエイティブな人たちが選んでくれる、そういう地域をつくっていくときに、里山暮らしツアーはすごく強力な武器です。であれば、行政は簡単で、ここに集中投資すればいいのです。そうすればいい結果が出てくるのは間違いない。そういうテストマーケティングをやってくれているわけです。だから市長さん、頑張って応援してください。そうすると多分、ソサエティ5.0を超えるような素晴らしい丹波篠山の未来が開かれていくということを、改めて思いました。

創造都市ネットワークはこの先、国際的なユネスコのネットワークとの連携を深める、そういう国際ネットワーク部会というのも新たに立ち上げます。そして、創造農村ワークショップをリードしてきた丹波篠山市が中心になって、創造農村部会という新しい部会をつくります。それが恐らく、つまりグローバルとローカル、このことが

今非常に閉塞状況にある日本をクリエイティブに変える、つまりクリエイティブジャパンをつくるということにつながってほしいと思っております。10年前に第2回のワークショップを丹波篠山でやったときも非常に面白かったのですが、今回も、これからの展望が開けてくるような、それを予感させるような内容になったと思います。どうもありがとうございました。

6. 閉会

司会 佐々木様、ありがとうございました。それでは、これをもちまして、令和3年度CCNJ 創造農村ワークショップ in 丹波篠山市、「日本遺産のまち・創造農村の役割とは」を終了させていただきます。お忙しいところ、ご参加いただきまして誠にありがとうございました。ご登壇者の皆さまも、長時間にわたり、ありがとうございました。

4. 令和3年度 現代芸術の国際展部会 in 珠洲市（現地・オンライン配信）

日時：令和4(2022)年1月21日（金）

14：00～16：30

開催方法：現地 ラポルトすず

オンライン（ハイブリッド開催）

主催：珠洲市

共催：文化庁

創造都市ネットワーク日本（CCNJ）

テーマ：「持続可能な地域社会と国際芸術祭～里山里海×アート×SDGsの融合と新しいコモンズの視点から～」

参加者数：現地19名、オンライン30名
（担当者ミーティング）

1 開会

司会 皆さま、お待たせしました。ただ今より、令和3年度CCNJ、現代芸術の国際展部会担当者ミーティング、「持続可能な地域社会と国際芸術祭～里山里海×アート×SDGsの融合と新しいコモンズの視点から～」を開催いたします。お忙しいところご参加いただき誠にありがとうございます。私は本日、司会進行を務めます豊福宏光です。と申します。どうぞよろしく願いいたします。

さて、この担当者ミーティングは、全国の創造都市を推進する自治体のうち、現代芸術の国際展への開催に取り組む自治体に共通する課題について検討するものです。今回は「持続可能な地域社会と国際芸術祭～里山里海×アート×SDGsの融合と新しいコモンズの視点から～」をテーマに、石川県珠洲市の文化芸術拠点である、ここラポルトすずで、現地会場及びオンライン配信のハイブリッドで開催いたします。

まず初めに開催都市の珠洲市より、泉谷満寿裕市長がご挨拶申し上げます。泉谷市

長、どうぞよろしく願いいたします。

○開催地挨拶

珠洲市長 泉谷満寿裕 氏

皆さんこんにちは。珠洲市長の泉谷でございます。創造都市ネットワーク日本の現代芸術の国際展部会を珠洲市で開催できることを光栄に思います。文化庁、また佐々木先生はじめ関係の皆さまに、心から感謝を申し上げます。また基調講演をなさっていただきます、北川フラムさんをはじめ、パネリストの皆さま、ご参加いただきました皆さんを、心からご歓迎申し上げます。ありがとうございます。

珠洲市の最大の課題は人口減少であります。人口が減少する中であっても、地域を維持、発展させるためには、地域の質を高めること、魅力を高めること、さらには一体感を高めることが重要であると考えております。クリエイティブな地域となるためには、何をすべきか。どんな地域がクリエイティブな地域といえるのか。本日のシンポジウム、対面とリモートでのハイブリッドでの開催となりますが、地域の課題解決に向けて、さまざまなヒントが得られる、まさに創造的なシンポジウムになりますことを念願しております。皆さま、どうぞよろしく願いいたします。

司会 泉谷市長、ありがとうございました。続きまして、文化庁より、地域文化創生本部暮らしの文化・アートグループリーダーの濱田泰栄様にご挨拶申し上げます。濱田様、どうぞよろしく願いいたします。

○文化庁挨拶

地域文化創生本部

暮らしの文化・アートグループリーダー

濱田泰栄 氏

文化庁の濱田と申します。開催にあたり、

ひと言ご挨拶を申し上げます。国際展部会の主催である泉谷珠洲市長をはじめ、珠洲市の皆さまには、新型コロナウイルスの再拡大が懸念される中、安全対策を講じながら、本日の部会や明日のエクスカージョンを開催くださいまして、誠にありがとうございます。また、本日ご講演いただく奥能登国際芸術祭の総合ディレクター、北川フラム様、創造都市ネットワーク日本の顧問、佐々木雅幸先生、そしてパネルディスカッションにご登壇の皆さま他、関係する多くの皆さまに深く感謝を申し上げます。

さて、一昨年から続く新型コロナウイルス感染症の拡大により、文化芸術の活動、特に芸術祭等を含むイベントが開催しづらくなる中で、ここ珠洲市で開催されておりました奥能登国際芸術祭も1年の延期の上で、先頃、無事閉幕されたと伺っております。開催にあたりましては、大変な労力を注がれたことと存じますが、文化芸術の素晴らしさに携わることができる場を提供し続けてくださったことは、本当にありがたいことだと存じております。関係者の皆さまのご努力に深く敬意を表します。

現在、文化庁では、補正予算や次年度予算で、地方自治体や文化芸術団体、芸術家等を対象とした、文化芸術活動支援のためのさまざまな事業メニューの準備を進めているところです。CCNJという自治体を中心としたネットワークにより、テーマを設定し、具体的事例を踏まえながらノウハウ等を共有する、この文化芸術都市推進事業は、来年度も継続していただけます。このようなネットワークにおいて、それぞれの地方公共団体が持つ地域課題の解決に向けて、共に話し合い取り組める、このネットワーク組織の重要性は常に感じているところであり、今日、明日のこの時間を有意義に使って、この部会を実りあるものとしていただければと思っておりますので、どうぞよ

ろしくお願いいたします。最後に改めまして、本国際展部会の開催について感謝申し上げますとともに、皆さま方の今後の発展を祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございます。

司会 濱田様、ありがとうございました。

2 基調講演

司会 それでは早速、基調講演に移りたいと思います。基調講演では、奥能登国際芸術祭、総合ディレクターの北川フラム様より、国際芸術祭と地域社会の再生をテーマにお話をいただきます。北川様はアートによる地域づくりの実践として、大地の芸術祭、越後妻有アートトリエンナーレ、瀬戸内国際芸術祭、房総里山芸術祭、いちほらアート×ミックス、北アルプス国際芸術祭、奥能登国際芸術祭で総合ディレクターを務められております。それでは北川様、どうぞよろしくをお願いいたします。

○基調講演

「持続可能な地域社会と国際芸術祭」
奥能登国際芸術祭 総合ディレクター
北川フラム 氏

こんにちは。今日はいいチャンスをいただいております。今日は能登空港から雪の中を来ました。珠洲は今、雪の中ですね。最初に珠洲に伺ったのは、珠洲市の特に商工関係の方たちが何度も来られ、珠洲で芸術祭をやれないだろうかというお話をいただいたのが縁でした。最初に伺ったときは年の暮れだったと思いますが、海岸沿いの道を来まして、よく分からなかったのですが家並みがすごくしっかりしていることにちょっと驚きました。翌日見てみると、どっしりとした黒瓦のさまざまな家がある。一つ一つの家がみんなしっかりしていました。北前船、あるいはそれ以前

の生活というのがよく分かる。しかもその黒屋根の中にあるうっすらとした家、家の中はまさに陰翳礼讃というべきもので、確かにここは漆もすごいですが、珠洲焼きもそうです。そういったかなり味のある世界があり、しかもそれが年月を経て色がものの後ろから見えてくる。そういう世界がここに存在していると思い、非常に感銘を受けました。今日の雪景色も素晴らしいもので、この日曜日から名古屋市の美術館で展示される、ほとんど今、生きている人たちは見たことがない、蕪村の雪景色を彷彿とさせるようなものでした。そんな意味で、今日は私にとって、この珠洲に伺ったことはいろんな意味で思いが深いわけです。では、中身に入ります。

昨年、第2回の奥能登国際芸術祭が行われました。コロナ禍の中で1回延びている。それでいながら、すごく多くの人たちがいらっちゃって、珠洲の良さっていうものを感じることができました。これはポスターで、浅葉克己さんのデザインです。写真は石川直樹さんです。後ほどお話するシアター・ミュージアムの場所に立っている、風で形が変わった松の木です。そこで家を1軒全部、大掃除して大蔵ざらえをし、家じまいの中で出てくる物を展示する、その途中の光景が、ポスターに急遽変わりました。

この珠洲というのは本当に不思議な場所で、まさに半島です。3面が海であり、この岬巡りは本当に素晴らしいわけです。市の面積でいえば62~63番目でありながら、海岸線は世界第6位の長さを持っている。日本もこの列島、大陸、あるいは南のほうからやってきた人、ホモサピエンスが本当に海の豊かさ、あるいはいろいろな交流、そういったもので得てきたもの。それがこの地域が代表的に表しているものですが、近代になり東京からの距離でいろいろなことが測られるようになって、効率性とか資

本の集中とか、そういうことによって、何か遅れているというか、不便な場所だと思われてきた場所ですが、実際にはこれは非常に豊かなものだと思っていました。ここに通い始めて、この豊かさは将来に向けて本当に大きな可能性を持っていると実感しました。

この珠洲の芸術祭は非常に上手くいっているモデルだと思いますが、その理由をひと言で言えば、この地図で表したように、もともと室町時代からあるこの地域の郷、あるいは惣という単位での共同体の強さです。珠洲の場合は、この共同体の強さが公民館活動として今も残されています。コロナ禍で公民館活動、あるいは保健所の問題が表れてきましたが、そういう意味でも珠洲市はこの地域活動に極めて深く寄り添っている。コロナウイルスのワクチン接種も非常に早かった。そういうところに表れています。

この10の地区単位で、地元の人たちと丁寧にお話をし、この活動をやってきました。どんなものをやったかをお話しますと、古い家に蝶が数万匹いる作品では、コロナ禍の中でアーティストからリモートで指示を受け、全部地元の人たちがつくったものです。あるいはこれは保育園でやっているものですが、これが衣装にもなり、ダンスには地元の子どもも参加しました。あるいはこの地域は漂流神、よそから流れてくる者を神様として、天草で石牟礼道子が述べていた尊い神、よそから来る方をそのように表している。日本の場合、よそから来る者は極めて大切なものであり、今の排他的なこととはおよそ違うものです。それが残念ながらゴミになっていますが、この漂流神の伝統を生かした作品が海岸線にある。あるいは地域のお母様たちとやっているワークショップ。

これも保育所を使っており、鏡面にテニ

スボールがアトランダムに発射され、その音を聞くものですが、この隣にある部屋を使った世界の絵本という作品もすごく良かった記憶があります。あるいは小さな家に明かりが入ってきて、まさに陰翳礼讃の世界を表してくれました。これは珠洲に流れる波と言ってもいいですが、かなりたくさんの透明の板の一つ一つに絵が描かれ、それが重なって見えるもので、素晴らしい迫力です。これも遠くに海が見えますが、この水平線を合わせた里山里海が珠洲の特徴、あるいは日本の特徴と言えるかもしれません。つまり山が迫ったわずかな海岸線、珠洲の場合はそこで塩を作っているわけですが、ここがあって海のいろんな豊かさにつながっている。まさに山は海の恋人で逆もそうです。それをこの製材所さんから見る、場所の特長を活かした作品や、これは大学がこの地域の波や海を木で表した作品です。

これがざっと芸術祭でやってきたことの概略ですが、詳しくはまたお話しします。今出しているものは、会期中だけで今はほとんど見るできないものです。今年の9月4日から11月5日までやりましたが、会期の外にあるもの、中にあるもの、恒常的な活動をするものを上手く分けながら、皆さんに見ていただきました。外国のアーティストの皆さんはすでに一昨年に全員来られているので、実際の設置作業はリモートでしたが、この地域をよく知っている方が参加していることになります。

ここで珠洲市の概要ですが、以前は4万人近くおられました、現在は1万3000人強になっているとのこと。本州では一番人口が少ない市です。珠洲ではどのようなことを皆さんが大切にしているか、その風景をお見せします。

これは見附島で、少しずつ削られています。この内浦から本州のほうを覗いている。

これは港で漁業は盛んです。禄剛崎の灯台は本当に日本海に突き出ている有名な灯台です。はざ干しは海でやっている。塩にはいろいろな物語がありますが、揚げ浜式製塩で非常においしい塩を作っている。珠洲では会期中はほとんど毎日いろいろな場所でお祭りをやっていますが、このときに行くと、皆さんが「今日は祭りだから」と言われます。その日は特別なんです。農業もそうですが、いろいろな人たちが、いろいろな苦労の中で生きていて、お祭りを大切にします。秋の珠洲では毎日のように違う集落で祭りがあり感動的です。子どもたちのグループがうちの中を回ってくれることもあります。この辺は全部、珠洲の人たちが、ステキ発見で自分たちの本当に誇るべきもの、素晴らしいもの、大切にしているものを挙げてくれたプロジェクトがあり、そのときのものです。

「ヨバレ」も今は少しずつ違ってきていますが、その日、どの家に行っても誰でも家に上げてくれ、おでんを出してくれるという習慣があり、僕も最初に来たときは何件かはしごをさせていただきましたが、このうれしさはちょっと格別なものです。これは寺家のキリコ祭りで、朝に4台が勢ぞろいして、お宮に入るところです。秋の9月、10月のカレンダーをお見せすると、いかにいろんな所でお祭りをやっているかが分かります。芸術祭の会期はここに合わせています。まさにこの地域の一つの成果としてのお祭りがあり、そこに芸術祭を重ねて、この地域を見ていただこうということです。

この芸術祭は、その土地にある地殻、あるいは気候、それが一緒になった土壌、そして植生、生活、そういった地域をつくっているもの全体を見て、アーティストは直感で選ぶのだらうと思います。それを地域の人たちと一緒に協働して、その場所の作

品にする中で、地域はよそとつながっていく。ご自分たちの誇りを持つ。そこに多くの人たちが来てくれる。これがこの地域の人たちの誇りになります。地域の芸術祭は、言ってみれば地域の人たちが自分の土地に誇りを持つためにやっているのかもしれない。それが行ってよし、来られてよしとなるといいわけです。私たちのこういう活動は観光と言われますが、それは人が来られることの喜びとともに、その地域の人が幸せを感じる観光でありたいと思います。

先ほど少し述べましたが、この地域の特徴として、最初来るとびっくりするのは人名です。上政頼(カミマサヨリ)、指南谷(シナンタニ)、爰地(ココチ)、水鶏口(クイナグチ)、万代(マンシロ)など、全然読めません。こういった人名があり、右側には地名を書いているつもりですが、ほとんど読めません。これは昔からここに人が住んでいたということと、半島であっていろいろな人たちがここに寄ってきたということです。僕の知っている範囲では、香川も読めない地名、人名がたくさんあります。やはり両方とも人がすごく行き来していた場所だと思います。これが特徴です。

どんなふうはこの活動をやってきたかをご説明します。その前に、珠洲の戦後の大きな流れですが、54年に合併とありますが、この合併したそれぞれの地域というのが、昔からほぼ一つの単位として頑張ってきたところです。金沢藩は地域の独立性を大切に統治した。前田藩が徳川藩に負けなかった重要なところです。また、徳川幕府ができる前の戦国時代は、この地域の農民一揆はとても強かった。こういう伝統があるわけです。1961年に観光ブームがあり、1964年に能登線が開通して、やがて廃止されるわけですが、ブームがあると国定公園になる。原発の建設に向けた対立があり、その後、原発がない中で能登線が廃止され

る。ここに私たちの近代の一つの典型が見てとれるわけです。これが概略です。

そんな中で、どういう活動をしてきたか。芸術祭は3年に1回で、たかが50日の話です。残りの1050日がこの芸術祭を決めるのです。芸術祭は3年に1回のお祭りですが、そのお祭りまでのいろいろな活動がすごく重要なわけです。これは、市長が10地区で集落説明会を非常に丁寧にやっている様子です。面白いのは、第1回目に「さいはてのキャバレー」という作品ができました。これはもともとあったレストランが廃業して、その場所をうまく使おうとしたわけですが、これが公立でやっている「さいはてのキャバレー」です。そこで何をやっているかということ、これは角田光代さん、山下洋輔さんです。こういう文化活動、セミナーなどをやっており、この土地の野の師父、海の師父というか、そういう人たちが来られて、地域のことを勉強する塾をやっています。こういう活動を延々とやってきます。こうしたことによって、3年に1回の芸術祭が担保されているわけです。これをキャバレーでやっています。なぜキャバレーという名前を付けたかということ、文化活動と食事が一緒にできるといいなという感じでした。

このコロナ禍で、人類が獲得してきた移動、人と話す、人と食事をするという楽しみが全部失われました。しかし、皆さんのそれぞれの人生ではありますが、やっぱり楽しいことがあっていいと思います。その地域やそういったものに根ざしながら、それを超えていくつながり、そういったものが重要だということを表わし、あえてキャバレーという名前でやっています。ここの利用がすごく面白くて、夏は飯田高校の子どもたちが受験勉強に来ており、キャバレーの本来の意味が出てきているかもしれません。

ここで少し申し上げますと、この芸術祭は現代美術の結構いい人たちの粋を集めたもので、そういう人たちがこの地域に来て、何を感じ得るか。その地域の人たちに手伝ってもらいながら、何を作るかということで、作品の強さが決定されますが、この芸術祭をやってきて分かったことは、それと同じように大掃除や作品づくりを手伝い、そして大切なのは運営です。そういうことをやりながら、いろいろな人たちが関わっていく。つまりアートはそれ自身の発信力もありますが、なかなかいうことを聞いてくれない参加アーティストを、手間暇かけて多くの人たちがケアする。お母さんが赤ちゃんを守るように、そんなアートという不思議なものを周りの人たちがケアすることによって、コミュニティができていく。あるいは、そこでできる新たな関係性。これがこの間、日本で特に芸術祭が多くなってきた理由です。

つまりアートそのものの発信力だけではなくて、それを守り、つなげていく人たちのコミュニケーションがすごく重要です。これが今までベルサイユ宮殿、あるいは市民革命以来の美術がそれぞれ天井や壁から離されて、タブローと呼ばれる動産になり、それがアートオークション、あるいはいろいろなアートフェアになってきている。もともとそういった均質空間では、どの作品もどこでやっても同じように見え、これはこれで重要なことですが、しかし今、地域はないがしろにされています。ただ、このコロナ禍のように、自然の氾濫が猛烈に起きています。その中で、どういうふうにやっていくのか。アートは均質空間という名の実験室から出て、都市の猥雑さ、あるいは過疎の地域の中に入ることによって、その持っている人と人をつなぐ力を、この数十年で大きくしてきました。これがいろいろな関心を呼んでいるわけです。

次に進みます。こういう形でやっていいますが、珠洲は特に食事がすごくうまい。私は今日、お昼ご飯に、香箱井、とても美味しいズワイガニのメスをいただきましたが、とにかく珠洲は本当にうまい。里山里海があり、昔からのさまざまな伝統がある。鶴岡市では庄内藩の食文化がユネスコ創造都市ネットワークの認定を受けたことについて、大下さんが述べられているのですが、この日本食は銀座のレストランで食べるものと違い、その地域の旬の物を食べる。そしてカロリーが高くなく美しい。これが日本食の特徴だと言われていますが、珠洲はその典型みたいな所です。食については、今回はしっかりできませんでした。お弁当でやるしかなかった。しかし、この食についての勉強会はこういう形でやっており、コンスタントにやっています。ここに相当な力を入れています。これが今年の芸術祭でのお弁当です。

ここでこの地域に関して、簡単に申し上げますと、先ほど申し上げたように、人口3万8000人余から、現在は1万3000人ぐらいまで、3分の1に減っています。これが現実ですが、社会増になっているのが最近の変化だと思います。このような転出、転入の状況があります。事業所と従業者の数が減り人口が減っています。珠洲市の人口ビジョンは2040年に人口9500人を目指すというもので、今の日本の平均で言えば2040年には人口が3分の2になるという想定ですが、そこを何とか食い止めようとしています。これが少しずつ功を奏してきている。

人口の自然減は私たちには何ともいいようがありませんが、それも分かりません。ただはっきりと言えることは、いろいろなことはありますが、そこに住むことが面白くなければ人は住みません。これは決定的な理由です。そこに住むことが面白い、生

きがいがある。そのきっかけに芸術祭があるかもしれません。先ほど申し上げたように、私は2012年から関わっていますが、これがずっと続いており、その中からいろいろな活動が出てきたということになります。ここで考えたものは、先ほどお話ししたように、厳しい地域ほど魅力的であるといえるかもしれません。これも陰翳礼讃ですが、寒いということがやはり魅力的なのかもしれない。珠洲は地政学的にも本当に特異です。日本海に飛び出ている半島である。それが近代ということの中でスポイルされてきましたが、近代がほとんど間違ってきたという中で、珠洲の持っている可能性はひいき目ではなく決定的にあると思います。

3回の芸術祭、10年やれたら少し形が見えてくるのではないかということが、この奥能登国際芸術祭の出発点です。そんな中で第1回目の芸術祭の数カ月前に、こんな言葉はタブーでしたが、あえて「最涯（さいはて）の芸術祭、美術の最先端。」という言い方をしました。このときにこのような言い方が行政の人、あるいは地域の人に受け入れられたことで、すごいスピードで理解が始まったと言えるかもしれません。地域資源の整理です。祭り、食文化。海を通していろいろなことの関係性がある。漁業、塩田、里山、寺社・木造建築。これもいろんな種類の神社が100以上ある。そういったことを含め、しかも家の造りがしっかりしているということですね。大きな屋根の中に住んでいて、その中のささやかな、あるいは微妙な生活を大切にしている世界です。伝統、伝説がいろいろあるということです。それを地図的に見せれば、こういうことです。

ここの半島のすごさを申し上げますと、寒流、暖流が沖合でぶつかっているところです。ですからここの植生は、東の植生、西の植生が混ざっています。そして里山と

里海が近接している。これが海流の特徴であり、季節風が日本海の水蒸気を吸い上げて、こちらに雪を降らす。これが基本的なこの地域の特徴である。アーティストは当然これを使おうと思います。これは昨年行った磯辺行久さんの二つのプロジェクトです。一つは偏西風、一つは海流です。これは子どもたちと一緒にブイを流すところです。これは空中で流すわけですが、佐渡から、あるいは秋田県、あるいは茨城県から、着いたぞという連絡がありました。こういう形でやっているわけです。あるいは海からの話もあります。こんな感じでやっている。これがこの地域の地形的な特徴です。

これは有名な富山でつくったものです。つまり私たちのこの列島は、ユーラシア大陸の環礁です。そこに素晴らしい内海として日本海がある。ですからこの半島が、日本列島のこのような位置にあって、ここでいうと右側、南からの人たちが3万年ぐらい前から上がってきて、あるいは千島、朝鮮半島から来られている。それは一衣帯水の地域です。これが基本になるわけです。

そういう中で、この芸術祭の方向性は決まっていくわけです。公民館活動が活発であり、外浦・内浦の景観、植生の違いを見るために、ぜひ岬巡りをやってほしい。祭り、ヨバレの濃密さや、寺社、仏閣の多さ。苗字の面白さ。これが最初、私が思っていたこの地域の特徴です。

そういう中で先ほどのステキ発見をやりました。皆さんが感じている面白さ、素晴らしいは何かというのが、最初にお見せした写真です。そして、プロモーションの宣伝費がないためSNSを使うことになりました。10の地区に核になるアーティストを配置し、外国人作家、若手作家、それをできるだけバランスよく配置しました。それと、のと鉄道の跡に、徹底的にフォーカスしました。重要なのは、半島の道路はどうして

も最短、最速にしたいため真ん中を走ります。だけど、失っていくものが多い。この岬巡りをすることによって、風景が多様に変わっていく。私はツアーをやるときに、いつも岬巡りのバスツアーで音楽を流しながら解説をしますが、これがいいのです。ヨバレの体験もやり、美術の最先端をやるうとしています。

ここからはさっとお見せしていきますが、今も残っている作品を中心にお見せしています。列島の生活として、塩田千春さんは塩田に注目し、私のふるさとだと言ってやりだしました。名作ですね。今回は来れなかったのですが、台湾のアーティストはここにクジラ伝説があるということで、クジラの遺跡があるという見立てで作品をつくりました。次は最果ての海だということで深澤さんが漂流物で神社をつくりました。次は本当に地図にもない島に鴻池さんが作品をつくりました。次は塩を使った山本基さんの名作です。鉄道は徹底的に皆さんが使われました。小さい忘れ物美術館という河口龍夫さんの作品です。これは遠くにある駅を見る施設で今もあります。上戸駅はもうないわけですが、その駅舎が夜はこのような見えるという作品です。一覧表は出せませんが、この珠洲の芸術祭では学校、保育所、鉄道、あと民家もそうですが、失われていったもの、でも、あるものを徹底的に使っています。これは重要な資源です。つまりいろいろな意味で失われていくもの、大切じゃないと思われていますが、そこに大きなものがある。空間だけではなく、作品は時間を内包することができるというのが、この芸術祭の特徴です。

そういった形で作品をつくっていく。お風呂屋さんでの青木野枝さんの作品です。これも公民館を使ったさわひらきさんの作品で、特に1回目のご自分の家族の歴史とこの地域の歴史を重ねた映像は名作でした。

鴻池さんが地域のお母さんたちと作ったテーブルランナー。こういった形の活動があります。これは上黒丸の小学校で、いろいろな人たちの民俗学的なアプローチが多かった作品です。これは昔、海で運んでいた伝承を活かした作品です。これはこの地域ではバス停が丁寧につくられていることに着目し、バス停というものは、ある意味で住民に対するホスピタリティーであり、ロシアの数学者でもあるコンスタンチーノフさんが、全部自分でDIYをやりにながらつくりました。これは去年の金氏徹平さんの作品。

最後に、いろんな学校、保育所、家を使っていますが、珠洲全体ではもはや、家代わり、家仕舞いの時期になっています。100年を超えたいろんな家がある。息子さんなどはまだ残してほしい、来たいと言っていますが、おばあさまにとってはその家をどうするか大問題です。それでは市民全体で大蔵ざらえやろうとしました。しっかり掃除をして残し、その文物をしっかり見てもらいました。これがこの2回やってきた中の一つの結節点です。家仕舞いの時期と、この地域の特徴を明らかにして、博物館もなかなか人に見てもらいにくいいため、ここで見てもらう、ものがものとして語れるようなミュージアムをつくらうとしました。そこはシアターであると。右側で頑張れ、頑張れと言っているのは市長のイメージです。驚くことに65軒の家から1500点の収集品がありましたが、これはただ集めさせてもらったわけではありません。

佐倉市の国立歴史民俗博物館の先生方が、集める段階から全部ヒアリングを行い、話を聞きながら分類しました。こんな感じですよ。博物学的な保存もありますが、緩やかな保存というものもあるでしょう。分類をしっかりとやりながら、収集、研究、展示を兼ね備えた、ものと生活のパフォーマンスを

つくろうということで、外浦に面している高台にあった体育館を使い、ここでシアター・ミュージアムをやることになりました。ネオンサインは有名なデザイナーの KIGI さんです。そして体育館に全部設置しました。南条さんがディレクションをやっています。こういう感じです。時間になると、音楽が流れ、それぞれのアーティストもこの地域のいろいろな特徴を明らかにするような活動を、この中に設置しています。これが全部、出来上がった後、音楽が必要だということで阿部海太郎さんに連絡したところ、珠洲に行って来られて、ここで音楽を流しました。これはできますか。

(音楽)

この辺で止めましょうか。とにかく一度いらしてください。物が本当に語ってくれます。いろいろな場所、一人一人の家に一つの物語があり、一つ一つの思いがあります。アートというのは、そういった先人を含めた人たち、つまり他者とつながりながら、亡くなった人たちとつながっていくものでありたいと思います。地球という限られた中で私たちは生きていく。自然の氾濫が、もう待たないで起きています。そういう中でやっぱり人類が、残念ながら人類という言い方しかできませんが、そこで関わってきたもの、その思いというものを残していきたいと思っている。珠洲でやっているのはそういうことです。

公式グッズはいろんな形で準備していますが、これからの課題です。徹底的にやっていくのはバスルートです。これは珠洲の人たちが頑張ってください。作品とよそから来た人たちは、なかなかつながりません。地域の方たちはやはり忙しい。田舎に行けば行くほど、お年寄りも働いています。いろんなサポーターがいますが、何とか地元の年配者の人たちが手伝ってください。毎朝 8 時に朝礼をする。

日によって人の集まり方が違うため、毎日配置を考え、遊撃隊がいろいろ御用聞きをして、夜にその反省をして翌日に活かすという形でやっています。

残念ながら今回はコロナ禍で、金沢の人たちに少し加わってもらうことができた程度で、市内の人はもちろん関わってくださいますが、全国、外国の人は無理でした。瀬戸内国際芸術祭はサポーターの半数が外国人です。こんなふうに日本列島のそれぞれの地域でやっていることが、外国とつながっています。ここで一度オープンにしておきますと、私は五つの芸術祭に関わっています。その中でやっていることは、今、述べているようなことですが、ひそかにやっていることは、日本に來られたことのない国のアーティストを呼ぼうとしています。つまり、私たちは世界のいろいろな人たちを具体的に知ることが大切だと思っています。だから不思議な、あまりなじみのない国のアーティストが結構芸術祭に参加しています。これがサポーターの活動です。皆さんにはやはり珠洲の秋祭りのときに、芸術祭がないときも作品は相当見ることができますので、ぜひ来ていただきたい。ここの食事もうごいす。

最後に、明るい兆しについて述べます。珠洲は学校連携、あるいは SDGs の未来都市に選定されました。里山里海を含めて国連大学、金沢大学が関わってくださっている。そういった動きを意識的にやってきました。それと、もともとあったコミュニティ、そういったものが掛け合わされ始めました。これは後ほど市長が話されることだと思いますが、とにかく移住者がこの間、ぐっと増えてきました。今、シアター・ミュージアムのお話をしましたが、言ってみれば、公民館や学校、そういった使われなくなった施設や家を使っているのは、スズ・シアター・ミュージアムの分館といえるかもし

れません。初め、そんなことは全く思っていないかもしれませんが、もしかしたら珠洲全体が、つまりそこにまちがあって、人が住んで、生活していることは、まち全体がもしかしたら歴史的な空間であると言えるかもしれない。当たり前のことですが、珠洲の芸術祭はそういったものになってきているような気がします。

食文化に関してはますます力を入れていきたいと思っています。五つの芸術祭をやっていますが、この間、非常に不思議なことが起きました。この辺は省略しますが、世界銀行が初めて、いろいろなお金を集めて工場誘致をするのではなく、スリランカの一つの県で自分たちがお金を出して、地域づくりを芸術文化でやろうという動きに入りました。初めてです。これが復活して動き出しました。昨年ですが、経団連が企業に、とにかく今こそ地域を大切にしよう、地域に大きな可能性があるということで激を飛ばしています。これが今後、大きな流れになると思います。そのような意味で、地域というのはもう一度、自然と関わる、いろいろな歴史とつながっていく、素晴らしい可能性を持つのではないかと思います。その辺がこの珠洲、あるいは日本全体に表れてきた新しい流れです。

コロナ禍でアーティスト、あるいはパフォーマンス関係の人は、個々の段階では相当厳しいです。そういうことを仕事にしている私たちも厳しい。しかし、芸術、文化、美術、そういったもの全体の勢いは、それぞれの人たちが気を吐いているというか、相当工夫してやっています。それによってこの2年間、衰えていくよりはもっと元気になってきていると感じます。これはこの2年間、いろんな所で皆さんが頑張ってきた、それが表れ始めているのだと思います。今日はどうも呼んでいただいてありがとうございました。

司会 北川様、ありがとうございました。ここで10分間の休憩とさせていただきます。3時5分より開催いたします。よろしくお願いいたします。

3 パネルディスカッション

司会 ここからはパネルディスカッションを開始いたします。まずはご登壇者様のご紹介をいたします。パネリストには国連大学サステイナビリティ高等研究所いしかわ・かなざわオペレーティング・ユニット事務局長の永井三岐子様、金沢21世紀美術館学芸部長の黒澤浩美様、金沢市役所都市政策局企画調整課主査の笠間彩様、最後に珠洲市長で奥能登国際芸術祭実行委員長の泉谷満寿裕市長にご登壇いただきます。モデレーターは前金沢大学特任教授の宇野文夫様です。なお、永井様と笠間様は、本日オンラインでの参加となります。それでは宇野様、どうぞよろしくお願いいたします。

○パネルディスカッション

「持続可能な地域社会と国際芸術祭～里山里海×アート×SDGsの融合と新しいコモンズの視点から～」

国連大学サステイナビリティ高等研究所
OUIK 事務局長 永井三岐子 氏

金沢21世紀美術館学芸部長 黒澤浩美 氏
金沢市役所都市政策局企画調整課主査

笠間彩 氏

珠洲市長・奥能登国際芸術祭実行委員長

泉谷満寿裕 氏

<モデレーター>前 金沢大学特任教授

宇野文夫 氏

宇野 パネルディスカッションの司会進行を務めます宇野文夫です。どうかよろしくお願いいたします。一応4時10分までには終わってほしいと言われておりますので、1

時間ほどお付き合いください。

私は昨年3月まで金沢大学で特任教授を務めておりました。ここにおられます、泉谷市長が初当選された2006年に、珠洲市の最先端の岬という所で、廃校になった小学校をお借りして金沢大学の能登学舎を開設しました。ここで金沢大学の教育と研究の拠点づくりをしております、さらに能登里山里海マイスター育成プログラムという社会人の人材育成事業に関わってきました。今もその事業は継続されています。この間に、2011年に能登半島が世界農業遺産、GIAHSに認定されまして、能登の里山里海が国際的にも注目されました。そして2017年に珠洲市が独自に国際芸術祭を開催し、翌年の2018年には内閣府のSDGsの未来都市に登録されました。こうしてざっと流れを見てみますと、珠洲市というのは時代を先取りするように進んできた15年間だということ、自分自身も目の当たりにしてきました。

今回のパネルディスカッションでは、「持続可能な地域社会と国際芸術祭～里山里海×アート×SDGsの融合と新しいコモンズの視点から～」と題して、これからの珠洲市にどのような未来の可能性がもたらされるのかということをお話し合っていきたいと思っています。先ほども紹介がありましたが、パネリストの方は4人で、国連大学の永井さんと金沢市役所の笠間さんはオンラインでの参加となります。今日は私のほうから、パネリストの皆さんにそれぞれ自己紹介を兼ねて、5分程度の話提供をしてほしいとお願いしていますので、皆さんから最新の話提供をお願いします。では最初に、泉谷市長からお願いできませんでしょうか。

泉谷 珠洲市の泉谷でございます。あらためてどうぞよろしくお願ひいたします。そ

れではまず私のほうから、GIAHS、世界農業遺産、そしてSDGs、アート、国際芸術祭について、イノベーションと題して少しお話をさせていただきたいと思ひます。まずこの写真ですけれど、昨年の秋の奥能登国際芸術祭2020+のメインといひますか、スズ・シアター・ミュージアムの外観の様子です。先ほど北川フラムさんの基調講演にもございましたが、珠洲市の概要については、石川県能登半島の先端に位置しており、人口は1万3000人余りでございます。昭和29年に珠洲市がスタートいたしました。それから67年ほど経つわけですが、当時は3万8000人いた人口が、今現在1万3000人余りですので、もう本当に3分の1ぐらいに減少してきています。高齢化率も51パーセントということで、石川県に19の市町がありますが、最も高齢化率も高く、非常に厳しい状況ではございます。

珠洲市の最大の課題は人口減少でございまして、こちら国勢調査の人口の推移でございまして、平均すると毎年350人ずつぐらい人口が減ってきているというような状況でもございます。こうした中、冒頭にご挨拶いたしました、人口が減少する中であっても、地域を維持発展させるためには、地域の質を高めること、そして魅力を高めること、さらには一体感を高めることが重要であるということも述べさせていただきました。おかげさまで珠洲市は2006年、私が市長に就任した当初から、大学連携を進めてまいりました。人材育成事業も翌2007年度から継続をしております。そして2011年には珠洲を含む能登の里山里海が世界農業遺産に認定をされました。付加価値を高める可能性が本当に高まってまいりました。また、奥能登国際芸術祭を2017年と昨年の2回開催してきました。これは本当に魅力を高めるということになると思ひます。SDGs未来都市にも2018年に認定をされた

ところでもございます。

これは昨年の秋の奥能登国際芸術祭スズ・シアター・ミュージアムの様子で、こちらにも北川フラムさんの基調講演の動画でもありましたが、コロナ禍ではありましたが、おかげさまで約4万9000人もの方々にお越しいただきました。2017年の奥能登国際芸術祭では、アーティストの皆さまが珠洲のいろんな地域の歴史、伝統、文化、またその豊かさや魅力をアートで表現していただきましたが、今回の芸術祭では、それに加えて時間とか記憶、これを感じられるアートがかなり多くて、皆さん本当にコロナ禍の中で、これからどうなっていくのだろう、そういったところを現在も含めてもう一度見直す、そういうきっかけにもなったのではないかと考えています。この奥能登国際芸術祭でございますが、一連の人材育成などは世界農業遺産にも全部つながっていくのですが、珠洲市の最大の課題である人口減少を何とかしたい、そんな思いで取り組んでいるわけですが、コロナ禍になって、かえって移住相談件数がぐんと増えてきております。

2020年度はその前の年度に比べて、もう本当に倍近く増えてきています。今年度に入りまして、これは12月末までですが、やはり昨年度と同じように、非常に高いペースで移住相談件数が増えております。移住者の推移でございますが、これも本当にどんどん増えてきております。今年度はもう既に72人、12月末現在ということですが、こちらがこの芸術祭を境にどう変わったかという数字ですが、2017年に最初に芸術祭を開催しましたが、それ以前の5年間、移住相談窓口で把握している移住者数150名でしたが、この2017年からこちら5年間は255名ということで、ほぼ2倍近くに増えてきております。このように、これまでのいろんな取り組みが功を奏していると思っ

ておりますが、このシンポジウムのパネルディスカッションを通して、また皆さまからさらにいろんなアイデア等を賜りたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひしたいと思います。

そして、こちらは直近ですけれども、今年度の上半期、いよいよ転入超過になってきたといった数字です。そして、さらには東証1部上場企業が珠洲市に本社機能の一部を移転していただきました。珠洲市の自然景観、また人の良さがその移転のきっかけになったということですが、珠洲市がSDGs未来都市に選定されているなど、そうしたさまざまな取り組みを進めていることも大きな要素になったということでございます。遅ればせながら珠洲市も来月にはようやくですが、市全地域で光ファイバーの整備も完了いたします。さらにリモートワーク等も通して、この移住・定住の促進につなげていきたい。そのためにも、これはまた繰り返しになりますけれども、世界農業遺産やSDGs、そして芸術祭、こうした取り組みを総合的に進めることによって、人口減少の対策を講じていきたい。そのように思っております。どうぞよろしくお願ひいたします。

宇野 ありがとうございます。一応、一通りの話題提供が終わってから、私のほうから質問させていただきます。それでは金沢21世紀美術館の黒澤さん、アーティストがやってくる街というテーマでよろしくお願ひします。

黒澤 皆さまこんにちは。金沢21世紀美術館、チーフ・キュレーターの黒澤と申します。本日はよろしくお願ひいたします。自己紹介代わりに画像の用意をと、宇野先生からお申し出がありましたが、私が美術館で働いている仕事をご紹介します画像をお持

ちするよりは、本日は国際芸術祭の一応援団としても参加させていただいておりますので、画像自体は珠洲の皆さんの様子を選ばせていただきました。まず私の肩書に付いております、チーフ・キュレーターというのですが、主に美術館を中心に、現代美術の作品を調査、研究いたしまして、皆さまに展示公開をしてお伝えするというのが主な仕事です。ただし、金沢 21 世紀美術館は、作品を保管する建物としての機能だけではなくて、まちづくりの一貫として美術館を建てた経緯があります。そもそも私が配属されたのが都市計画局というところで、美術館のスタッフというのは普通、教育委員会などに所属するのですが、まちづくりが美術館づくりということで、徹底的にまちに貢献するというを最初に教えられました。

ですから、建物がある美術館と珠洲の場合は違うかもしれませんが、やっていることはやはりまちづくりに通じるものということで、展示公開をさせていただいています。私が選んだ画像をこれからご紹介しますので、ちょっと待ってください。お借りしているコンピューターで助けていただけるとありがたいです。これだと思います。

アーティストがやってくる街というタイトルをつけさせていただいているのは、これは金沢 21 世紀美術館も珠洲も同じですが、国際芸術祭や美術館がローンチしたことで、街にアーティストがやってくるようになった。これは大きな違いだと思います。街を変えていく、街の姿形、それから風景、人の行動などを変えていくということが、徐々にではありますけれども、起きてきています。例えば、これは珠洲の Instagram。国際芸術祭の Instagram からお借りした画像ですが、これだけ豊かな自然の中で、日常的にも長い歴史を育んでいる街。これは金沢も同様ですけれども、それぞれにささ

やかな物語があり、それが大きな歴史のうねりとなって、街の形をつくってきていると思います。ここにちょうど中央に、塩田千春の赤い糸と船の作品がございますけれども、風景の中に溶け込む、皆さんの暮らしの中に作品が溶け込む。アーティストが来なければ、決してこのような光景は生まれず、このような街の形の変化もなかっただろうと思います。

これは金沢も同様で、21 世紀美術館ができたことで、明らかに 20 年前とは違う人々の暮らし、それから人々の交流などが起きています。国際芸術祭を機会に、どういうことが期待されるか。一つには知る、気付くということがあると思います。アーティストという職業、あるいはアマチュアの方もそうだと思いますけれども、芸術というものは、飲んだり食べたり、それから住まいや礼儀などの、その次にあるというふうに考えられがちですけれども、実は人生、人間が生きる一生の中で、様々なことを知り気付くというのは、お勉強だけではございません。やはり人に会ったり、人とお話をしたり、あるいは違うこと、違う場所に移動したりということで気付くということがあると思うのです。それを皆さんの街にアーティストが持ってきてくれる。あるいはアーティストが持ってきたものを、皆さんがまたアーティストに返すといったことが起きるのではないかと思います。

つまりそれは下にある、交流するということ。ボランティアサポーターのスズサポの皆さんに、私も大変お世話になりました。バスにも乗らせていただきましたし、メンテナンスの場所に遭遇しました。ご案内もいただきましたし、作品だけではなくて場所の歴史や、いわれなども教えていただきました。このように国際芸術祭を機会に、街全体が元気になりレジリエンスしていく。先ほど市長のお話から人口が少し心

配だということがございましたが、これを機会に元気になっていくとあるといいと思っています。それから、国際芸術祭を機会に〇〇〇〇と、ここは空白になっております。これは私としては、皆さまが自分事に引きつけて考えた、自分事の国際芸術祭というのを見つけて、これを機会にどのような関わり方を自分で見つけていくのかというのを、ぜひお考えいただきたいと思っています。アーティストが来ることで、今まではなかった気付きや交流が生まれるといいなというのが私からのメッセージです。

宇野 ありがとうございます。続きまして笠間彩さん、お願いいたします。笠間さんは、金沢市役所のSDGs推進担当で、テーマは金沢SDGsツーリズムということです。よろしくお願いします。

笠間 はじめまして。金沢市役所の企画調整課の笠間と申します。よろしくお願いします。私はもちろん金沢市役所代表という立場ではないのですが、この3年ほど金沢でSDGsの推進を一生懸命やってきた一行政職員として、思っていることや感じていることなどをお話しさせていただければと思います。最初は、金沢市がどんなSDGsを推進しているのかということをご紹介させていただきたいと思います。画面共有させていただきます。

金沢市は持続可能な金沢観光を実現する、金沢SDGsツーリズムというものをテーマに掲げて、SDGs未来都市に選定されました。SDGs未来都市としては、世界の交流拠点都市金沢の実現、市民と来街者がしあわせを共創するまちというのを、SDGsを通して実現していきたいと考えています。具体的にはSDGsの文脈でまちの魅力を磨き高め、世界に発信すること。そのことにより、責任

ある観光客を世界中から呼び込むこと。それにより、市民生活と観光の調和、市民と観光客双方のしあわせを実現することを目指しています。これまでも実施してきた、経済、社会、環境、それぞれの取り組みをSDGsというもので解釈し、統合し直して、ツーリズムというもので、新たに発信をしていこうということです。SDGsの文脈で、まちの魅力を磨き高め、世界に発信することを目指しています。これはどこからスタートするのかということになるのですが、例えばSDGs体感ツアーというものが実施できるようなまちになることで、責任ある観光客と言われる方に来ていただき、そういう方と一緒に市民と観光客がまちの魅力を共につくっていく。そうすると金沢のまちがますますSDGsを体感できるまちになる、という形で、どんどんいい循環をつくっていかれたらと考えています。

多様なステークホルダーが協働して、コレクティブインパクトを創出することを、SDGsとツーリズムを組み合わせ実現していこうと考えています。いろいろなことを進めているのですが、金沢でSDGsを進めるのに一番大切にしていることは、常に多様な主体と共に進めていくということです。ツーリズムはもちろん観光事業者さんが大事なプレーヤーになりますので、観光事業者さんとの勉強会を昨年度いたしました。観光事業者さんたちが、自らでたどり着いた、持続可能な金沢観光の在り方に、このようなものが挙げられました。地域コミュニティや持続可能な金沢観光を実現するために、観光事業者がどうあるべきかについて、このように表現しています。地域コミュニティや自然に敬意を払おう。居心地の良いまちをつくろう。働きがいのある環境をつくろう。地球の資源を大切にしよう。地域の文化や経済を守ろう。新たな可能性に挑戦しよう。地域の魅力と観光の貢献度

を併せて発信しよう。垣根を越えてパートナーシップを進めようということです。

これは本日のテーマともつながってくるところがあると思ひまして、今ここで紹介させていただきました。金沢 SDGs ツーリズムということで、動画等も作成しておりますので、また皆さん、お時間がございましたら、そちらもご覧いただければと思ひます。私の自己紹介と金沢 SDGs のご紹介は以上です。ありがとうございます。

宇野 ありがとうございます。続きまして国連大学の永井さんに、里山里海の次世代への継承というテーマで、お話をいただきます。

永井 宇野先生ありがとうございます。オンラインの皆さん、こんにちは。珠洲の会場の皆さま、どうもこんにちは。きょうは金沢からオンラインで参加をさせていただいております。よろしく願いいたします。それでは一度、画面共有をさせていただきます。私は国連大学のいしかわ・かなざわオペレーティング・ユニットという所で、普段は持続可能な地域づくり、主に環境保全に重きを置いた側面から、研究活動を行っています。その研究活動で、どうやって自治体の皆さまに持続可能な政策をご提言するかというところで活動をしているわけですが、珠洲市さんとは、先ほど市長からも世界農業遺産というお話が何回かありましたし、SDGs 未来都市ということもございました。そういったものを研究の面から、あるいは国連のグローバルネットワークという面から、何かとお手伝いをしていたということでございます。今日はその全体像を話すのはとても大変なので、主に次世代のこの里山里海、あるいは皆さまから非常にたくさんご紹介があった、珠洲市の価値というものを、どうやったら次世代に継承

できるかという活動の一部をご紹介させていただきます。

里山里海の価値というのは、すごくたくさんありますが、実は珠洲の豊かな自然をうまく人間が利用する、そのときの自然との共生の在り方ということになるかと思ひます。では人間はどんな恵みを受けているかということ、やはり食事なのです。本当に珠洲や能登の食事はおいしいです。それをとても上手に利用していて、その知恵が詰まったものが、北川フラムさんの発表にもあった、祭りのごちそうなのです。これはもう、知恵の百科事典です。この知恵をどうすれば次の世代に伝えることができるかということで、国連大学では地域の人と一緒に、ごちそう、「ごっつおをつくろう」という絵本を作りました。これは小学生の2人がおばあちゃんから祭りのごちそうの作り方を教わるのですが、それがいかに地域の気候、風土、文化に根ざしているのか、そういったものを子どもたちが学んでいくものです。これは英語版もあり、後ほどご紹介しますが、これを国際的な交流にも利用しています。

こういったものを地域の方にどうやったら利用してもらえるかということも一つの課題なのですが、輪島市の三井小学校は能登にある唯一のユネスコスクールで、ここでこの「ごっつおをつくろう」の絵本を、1年間を通じて、実際に総合学習の時間にやってみよう、春の山菜の採取から、それを塩漬けにして、最終的には3月に一緒に食べる。最後には「あえのこと」を体験するなど。この写真は、珠洲のトビウオのあごだしづくりのところに、三井小学校の輪島の子どもたちがおじゃまをして、珠洲の小学校の子どもたちと一緒にトビウオをさばいて、焼いて、そのだしをつくるという体験もしました。そういったものを、このような「ごっつお草紙」として、1冊の本にま

とめました。こういったことを地域の人とやっていくことによって、地域の人にも、実は自分たちの普段しているような生活の知恵は、こんなに素晴らしい価値があるものだということを発見してもらえています。

先ほど言いましたが、こういった里山里海の価値を、せっかく国連大学もお手伝いしているのですから、国際的なつながりにも活かしていこうとしています。左側の一番上の写真はフィリピンのイフガオという所で、能登と同じように世界農業遺産に認定をされていて、ここの素晴らしい棚田は世界遺産にも認定をされています。この子どもたちと、去年は能登の大谷小学校の子どもたちとの交流をお手伝いさせていただいたのですが、子どもたちは世界観がそんなに広くないので、先ほどご紹介したごちそう作りや、その地、その地のごっつおを紹介し合うことを軸にして交流を進めました。今はコロナ禍で、本当なら実際に会って、触って交流をしたいのですけれども、関係者が本当に努力して、オンラインでの交流となりました。多分、コロナ禍でなければ、ここまでオンラインでやろうという力学も働かなかったと思います。ましてやフィリピンのイフガオは非常に通信状況が悪いへき地です。やる度に通信が悪くてトラブルがあり、あちらに台風が来たり、校舎に動物入ってきたりなどいろいろあったりするのですが、そういったものも含めて、子どもたちは本当にいい交流ができています。

何よりも子どもたちの自信になっているということが挙げられると思います。最初は国際交流という漢字4文字の言葉だったのが、画面の向こうの子どもたちと交流することによって、相手のことを知りたい、そこから自分のことをもっと知ってもらいたい、ではどうやって伝えよう、そういった能動的な行動につながっていると思いま

す。このプロセスは子どもたちだけではなくて、一緒にやった先生方にも非常に大きな学びがあったということで、今、私どもでは先生方や保護者、一緒に関わってくださった方のインタビューを取り、継承する活動自体の影響のようなものも教材としてまとめて、また発表することになっています。以上が国連大学の活動の一部になります。ありがとうございます。

宇野 楽しい話題提供、とっかかりをつくらせていただきました。私のほうから簡単に質問しますので、答えていただければと思います。泉谷市長、私はもともとマスコミにいましたので、ストレートにお聞きしますが、国際芸術祭のスタートは、やはり多くのお金がかかります。よく決断されたとは思っています。あるいは、そのやろうと決めたきっかけは何だったのでしょうか。

泉谷 先ほどの北川フラムさんの基調講演にもございましたけれども、私が北川フラムさんと初めて直接お会いしたのが2013年1月だったと思います。そこで芸術祭という話が出てきたわけですが、百聞は一見にしかずで、2013年は瀬戸内国際芸術祭の第2回目だったと思いますが、そこを見に行きました。そうしましたら、空き店舗だった所や空き家だった所が、芸術祭で多くの方々が来られるものですから、食事を提供する場所が変わっていたり、あるいはレンタサイクルのお店になったり、本当にその地域を変える力といますか、アートの力はすごいということを感じました。もちろんアートを見ればやっぱり面白いです。人の心を動かす力があり、加えて本当にこれで地域が変わるという思いで、何とか開催できないかと思いました。ただ、瀬戸内の国際芸術祭見ていると、すごい数のスタッフがいました。例えば、フェリーの案内

であったり、あるいはそれぞれのアートの受け付けであったり、メンテであったり、すごい数でしたので、予算もかなりかかる。人数も相当、動員しなくちゃいけない。これが果たして珠洲でできるのかと思いましたが、やっぱり珠洲を変えるために、アートの力を何とか活用できないか、そんな思いで決断しました。

宇野 ついでにもう一つ。さっき転入が転出を上回ったというお話でした。これは見える成果のうちの一つなのですが、問題はその他にどのような変化があったのかということです。お気付きの点はありますか。

泉谷 特に2017年、初めて奥能登国際芸術祭を開催したときに、先ほども少し申し上げたと思いますが、アーティストが珠洲のそれぞれの地域の歴史や伝統、文化など、先ほども申しましたが、珠洲は三つの町と六つの村が一緒になってスタートしておあり、九つ、あるいは今の公民館単位で10の地区、それぞれに地域性が違います。それぞれの特徴があります。アーティストにはそれぞれの地域で、そういった特徴や魅力を見事にアートで表現していただきました。これまで、珠洲の良さを一生懸命いろんな形で伝えようとしてきましたが、なかなか思うように伝わらない。それが奥能登国際芸術祭を開催することによって、これまでになく、珠洲の魅力、良さといったものを、広く遠く伝えることができたということ。また、その珠洲の良さの中には、人の良さもちろんです。第1回目の芸術祭、今回2回目の芸術祭はコロナ禍ということもあって、なかなか地域の皆さんが来られた方をおもてなしするのが難しかったのですが、第1回目のときはそうやっておもてなしを一生懸命しました。

珠洲市の皆さんのその姿も、テレビのニ

ュースや新聞記事で伝わりました。もう来られた方をおもてなしするために、自分たちでササの葉っぱを切って舟の形にして、小さなジャガイモを塩ゆでにして、そこに盛り付けて食べていってください、食べてがし、飲んでがし、と、すべて無料で勧めていました。私はもっと経済的な効果を得られるようにするべきじゃないかと思いましたが、そういう見返りを求めない、無償のおもてなしと申しますか、そんな姿も映し出されて、私自身も改めて珠洲の人っていいな、と思ったぐらい、そういったところが伝わりました。

やっぱり自分たちが住んでいる地域に誇りを持つというのは、本当に大事なことだと思いますが、たくさんの方が来られて、そうやっていろいろと褒めてもらわないと、誇りは持てないと思います。そういった意味では、芸術祭の開催によっていろんな方が来られて、ここいいですね、ここは素晴らしいですね、すてきですね、そうやって言っていただくことで、そこに住んでいる地域の皆さまが、自分たちの地域に誇りを持てるようになった。その誇りが高まった。これも大きな変化だと思います。

宇野 それでは次、黒澤さんお願いします。黒澤さん、学芸部長であり、チーフ・キュレーターという肩書ですね。このキュレーターという言葉は、恐らく今日初めて聞く方もあると思います。簡単にいうと、どのようなお仕事ですか。

黒澤 キュレーターというのは美術業界の用語ではなく、実はさまざま所で使われています。一番平たくいいますと、さまざまなものをつなぎ合わせたり、編集をし直して皆さまにご覧いただいたりする仕事です。例えば、国際芸術祭のキュレーターでしたら、作品について様々な調査を行い、

どの場所にどんなプレゼンテーションをするかといったことを、編集、編み直すというような仕事です。

宇野 珠洲市にも何人かアーティストの方を紹介したということも聞いております。そこで、先ほどフラムさんもおっしゃっていましたが、珠洲市にはキリコ祭りをベースにした、もてなしの文化というものがあります。やはり遠来から来たお客さんをもてなすという、温かい気持ちがあり、もてなすことによって、自分たちも元気になっていくということがあります。私は国際芸術祭という大イベントは、祭りとは違って見てしまいがちですが、黒澤さんどうお感じですか。

黒澤 世界にもいくつも国際芸術祭と呼ばれるものがありますし、日本にも海外からたくさんお越しになる、そういったプラットフォームがあります。祭りの一体感というのは、やはりつくる側にはすごく生まれやすく、それは伝統的に珠洲が持っていて、継承し共有したものを一体感を持って外に出していくということは、国際芸術祭も祭りもすごく似ていると思います。ただ、お祭りに向かっていく日常が、国際芸術祭の場合様々であり、珠洲のように日常の延長に国際芸術祭がある場合は、やはりお祭りと同じように準備していくのです。もう少しビジネスや商業ベースになっている国際芸術祭は、本当にその日にサーカスのように立って、終わると全く違う。そこに何があったのか、夢のあとのような感じで終わってしまうようなものもあります。ですから、どちらかという、珠洲や地域に根ざした国際芸術祭はお祭りに近いという意味は、よく分かりますし、私もそう思います。

宇野 それでは笠間さんにお尋ねします。

金沢 SDGs ツーリズムということですが、これは珠洲市と連携する可能性、同じ SDGs 未来都市として、例えば、金沢と珠洲で連携できないのかと思ったのですが、その可能性はどうか。

笠間 ぜひお願いしたいと思います。共通点はすごくたくさんあります。

宇野 例えばどんな点でしょうか。

笠間 SDGs ツーリズムや、責任ある観光というのを、私たちがどう捉えているかということです。もちろん、金沢の東山などで問題になったことは、そこで市民が生業を営んでいますが、来てくださった方が興味を持ち家の中を覗くなどして、住みにくくなったなど。例えば、そこは人が住んでいるので覗き込まないで、といったレベルの話もありますが、そこにとどまらず、行った先のその歴史や文化を本当に理解して、あわよくば、その行った先の価値をより高めて帰っていくような観光客のことを、私たちは責任ある観光客と定義をしています。市民も気付いていないような、我々の在り方や価値というものを、その観光客の人から逆に提示してもらい、見せてもらうということで、その人たちと市民と一緒に新しい価値を生み出していくことを、SDGs という共通言語を持って進めていくことができるのではないかというのが、SDGs ツーリズムなのです。

ここまでのお話をお聞きしていて、この芸術祭でそういうことが、もう実際に生まれているのだと、改めて思いました。そういうまちづくりをどんなふうに進めたいかということも、似通ったところがあるのではないかと考えています。お互い未来都市であり、それをキーワードにいろんなことで連携できればと思います。国連大学は

珠洲でもいろんなことをされていますが、金沢でも今、一緒に活動しているので、きつとつなぎ手になっていただけるのではないかと思います。

宇野 ありがとうございます。永井さんお願いいたします。さっき、ごつつお、いわゆるごちそうですけど、学ぶことで地域の里山里海の豊かさを学ぶ、子どもたちの学習プログラムですが、確かに能登の山菜や海草やキノコはものすごく豊富で、珠洲のある方が実際に調べたところ、山菜は32種類、キノコは11種類、海草や貝類は25種類あるそうです。これを普段の生活の中で取り入れている。そしてその山菜の種類によって、それぞれまた料理が違うということも聞いたことがあります。そうすると、このごつつおというのは、すごい学びになると私も感じました。ここで質問です。珠洲市の大谷小学校の児童と、フィリピンのイフガオの学生の皆さんが、オンラインで共同授業をされたということですが、内容的にはどんな内容の授業だったのですか。簡単にいうとどんな感じだったのでしょうか。

永井 最初にご紹介した「ごつつおをつくらう」の絵本の英語版もお伝えしました。まずそれぞれ日本語と英語を見て、1年に3回実施したと思いますが、最初はそれぞれの自己紹介から始まりました。イフガオの子どもたちは、日本の子どもたちとオンラインで会議することが初めてです。珠洲の子どもたちも、海外の小学生とこんなふうに交流するのは初めてで、お互い何をどうしたらいいのか、ちょっと恥ずかしいというのがありました。最初は本当に、これはランドセルだよとか、これは石川県出身の有名なアイドルだと、浜辺美波の写真を見せ、フィリピンの子は面白くて

実物を持ってくるのです。パパイアとか、ココナツの実とか。それから食べ物を紹介したり、最後のほうは打ち解けてきて、保護者の方もすごく協力してくださって、能登の太鼓を見せたりしました。フィリピンのほうは、民族衣装を着て踊りを見せてくれたりしました。

宇野 大谷小学校の子どもたちにとっては、非常に刺激的だったのではないかと思います。赤っぽい民族衣装が面白いです。確か以前、珠洲市に彼らが来たことがあるのではないかと思います。また交流の輪を広げてください。よろしくお願いします。

それではパネル討論の本論に入っていきます。このパネルでは、国際芸術祭で見た作品について、1点だけ紹介いただき感想をいただけないでしょうか。

まず私が見て感動したのは「海をのぞむ製材所」です。海辺の新出製材所です。地元の木材で作られたベンチや丸太が整然と並んでいて、そこに座ると製材所の向こうに窓越しに海が見えて、吸い込まれるような気持ちになりました。最近、インスタレーションという言葉がありますが、現場の場の芸術というべきか、そこでしか見ることができない空間、その空間でしか見ることができない芸術というべきか。インスタレーションの典型的な場所ではないかと思いました。同時に、自分自身にとってみると里山を手入れして良い木材をつくるのが、きれいな海を守ることになる。山と海はつながっているという、そんなことも考えさせられました。私的には非常に印象に残る一品でした。よろしかったら次、永井さん、印象に残る作品をお願いできませんか。

永井 私はこの「網の小屋」という作品が非常に印象に残りました。私は室内作品が

見られない時期におじゃまさせていただいたのですが、行ったときは天候も大雨で、少し暗い感じの中で行かせてもらいました。そのときに、海辺に近く捨てられたようなこういう場所に、圧倒的な存在感を持って、おどろおどろしい形が現れたので、私はこれが本当に素晴らしいというか、非常に印象に残っています。よく見ると、能登の里海の生業の象徴でもあるような網がふんだんに使われていて、何か大地からの叫び声が聞こえるような、そんな迫力があつたので、本当にアート作品としてのインパクトを受け止めました。なんかこの背景で網だから、里海だからと言いたくなりますが、やはり圧倒的なアートの力をこのときに感じました。

宇野 では次に、笠間さんお願いします。

笠間 ありがとうございます。私は先ほどから何度もご紹介に出ている、このスズ・シアター・ミュージアム「光の方舟」がすごく印象に残っています。私は付喪神（つくもがみ）というものを結構信じていて、100年ぐらいたった古道具には魂が宿り、少しいたずらするような考え方があります。私はちょうど、ショーを拝見することができました。いろいろ仕掛けられていて動くのですが、これは仕掛けられてない道具も勝手に動いているのではないかと、思っただけで見ていて、すごく楽しかったです。あとはもう一つ、印象に残った理由は、そこで係員をしてくださっていたお母さんが、この動くショーを見なかったら来た意味がないから座って座って、という感じで、そこに座ると一番いいからと、パワープッシュしてくださったことです。

そこら辺をふらっと見ている人にも、ここに座って座って、という形で、さっきから何度も言葉が出てきましたけど、ものす

ごくおもてなしを感じました。金沢でやると、係員の人は、皆さんご自由にどうぞ、という感じになると思います。その、いいんだ、伝えたいんだ、いい気持ちになってほしい、という気持ちをその場で感じたため、その二つの意味でこの展示がすごく印象に残っています。

黒澤 チョン・ジュンホの作品を選びました。少し渋めに皆さんにご紹介します。瓦工場だった1棟を使って、ほぼ中をさわった形跡もなく、中に皆さんがお入りになると音が聞こえてくるという、そういう作品です。国際芸術祭の魅力の一つは、そこにその作品を見に行くことで、その場所を知ることであると思います。例えばそれが観光として有名な場所じゃなかったとしても、極めて個人的な物語が宿っている場所であったとしても、そこに作品がなければ、ほとんどの場合は行く機会がない。そこに地図を頼りに訪れたときに見る光景に、心奪われるということがあると思います。ムン&チョンは実は丁寧にリサーチをする作家なのですが、この建物を見てから金沢に戻ってきたときに、すごくいい場所があったんだ、なぜかという時間眠っているから、作品で皆さんを起こしたいと言っていました。ですから、美術作品は見るということもあります。先ほど宇野先生がおっしゃったように、その場所ではしかあり得ない、その作品に遭遇することで何がしか感じながら、光景やこの場合は音が重なり合う、そのレイヤーによってどんどん深まっていくということもあると思います。五感で感じるというのが、やはりこの作品の魅力の一つであり、是非と思い推薦させていただきました。

宇野 ありがとうございます。では泉谷市長お願いします。

泉谷 これ一つに絞るのはなかなか難しいのですが、私はこの尾花賢一さんの「水平線のナミコ」にすごく感じるどころがありました。嫁礁(よめぐり)伝説や、あるいは現代の恋愛物語、出征兵士のことなど、三つ、四つぐらいのストーリーが同時進行していて、最後の最後に、ザザーッとこのカーテンをめくると、ナミコという感じのこれが、すごく良かったと思います。

一つだけということですが、やっぱりスズ・シアター・ミュージアムのことを少しお話したいと思います。ラストシーンにこの月が昇って行って消えるというところがあったと思いますが、これを南条さんにお聞きしましたら、海の底から月が上がって行って、水平線の所で海面に消えるということらしいです。世の中のいろんなきれいな光が珠洲の海の底に集まって、それが月になって登っていくのだと聞いたとき、鳥肌が立ちました。また、ここに出てくる民謡ですが、最初、なぜ地元の砂取節じゃないのかと思いましたが、3回ぐらい足を運んで聞いているうちに、これがやはり珠洲らしい民謡なのだと感じました。歌詞の中に油のような汗を流して働くというようなところが出てきて、今は本当にパソコンなどで仕事をする時代ですが、やはり今の珠洲が築かれてきたのは、そうやって汗水たらして頑張ってきた人たちのおかげであり、それが珠洲らしさなのだというのも、改めて気付かされた作品でもあります。

宇野 次の私が投げ掛ける質問ですが、そもそも論として、市長が冒頭に里山里海、世界農業遺産、アート、そしてSDGsという、この三つをミックスしたような形で、今後の地域興しや地域の活性化の大きなテーマにしていきたいとおっしゃっていました。ところが、ここでまた意地悪な質問なのか

もしれませんが、SDGsは貧困に終止符を打ち、地球の環境を保護して、全ての人が平和と豊かさを享受できるようにすることを呼び掛ける国連の目標ですが、そのSDGsの17の目標の中に、アートや芸術という文字はありません。ということは、アートと芸術祭とSDGsは果たしてつながるのかという素朴な疑問を持ってしまいますが、これに関して黒澤さんからお話していただけますか。私の疑問点を解決してください。

黒澤 SDGsは本当に皆さんがお経のように唱えられているこの頃で、あるサイエンスマガジンが昨日発表したように、人類に残された時間はあと1分40秒ぐらいで、世界時計がかなり進んだ状態になっていて、当然さまざまな課題に向き合わなければならないと思います。ただ、アーティストがアート作品を発表したからといって、皆さんのまちにやってきたからといって、すぐ課題解決になるわけではありません。ただし、気付きを与えてくれます。今回もさまざまな作品の中で、見える化してくださると、何がここで起きているのかということがはっきりと提示される、そのようなアーティストは非常に優れている方たちだと思います。

非常に残酷な話ですが、炭鉱ではカナリアが一酸化炭素のあるなしを教えてください。アーティストは観光のカナリアと呼ばれることもあり、そういう場所に分け入って、見事に直感力を働かせて、様々なことを読み取り作品化していきます。そういう方たちなので、彼らの作品を見ることで、その地域に起きていること、場合によってはその課題に気付くということがあると思います。一つだけ事例をお伝えしようと思います。オラファー・エリアソンという作家がいます。彼は国際的に非常に著名になっていて、多くの国際芸術祭に呼ばれて

います。今までは作品を発表するだけだったのですが、彼が小さなヒマワリ型のライトを作っていて、それをリトルサンと呼んでいます。それも彼の作品です。それをプロダクト化して、電気がない地域の子供たちが、夜危なくないように、勉強ができるようにしました。非常にかわいらしいランプで、太陽光パネルを裏側に付けた小さなものです。

気付きによって、そこになにがしかの形を持ち込むと、そのまちの暮らしが変わるという、具体的な事例もあります。なので、アーティストの気付きをどのように受け止めていくのかという、需要側の問題もあります。

宇野 なるほど。では笠間さん、SDGsの推進役ですけれど、笠間さんから見て、アートとはどのような関連性があると思いますか。

笠間 SDGsの目的は、結局、そのまちというか、地球を持続可能にするということだと、究極的には思っています。金沢がよく言っているのは、歴代の加賀藩主が戦いを避けて学術文化を大切にしてきたことによって、結局そのまちが守られ、今、その豊かさを我々は享受できていると、市民は認識しています。ですから、住み続けられるまちであるためのまちづくりの中心に、文化なり学術なりアートなりを据えるということは、その歴史がまちの持続可能性につながるということを証明していると、私は感じています。

SDGsのもう一つのポイントだと思っていることは、Transforming our worldというアジェンダのタイトルですが、我々の世界を革新するということです。ただ、私たちが日々を普通に暮らしていると、そのtransformingということがどんなことな

のかを実感しづらいのですが、さっき黒澤さんも言われたように、何かアートなどでそれを見せられたときに、transformするということがどんなことか、自分たちがガラッと変わること、自分たちのまちを持続可能にしているかもしれないという気付きを、何かの瞬間に与えることができる可能性もアートにはあるのではないかと思います。それは、私たちのまちにも21世紀美術館があって、恐らくそれで気持ちの変化が起きているのだと思います。そういったことで、アートを常に守り続けることは、まちの持続可能性に欠かせないのではないかと感じていて、それはSDGsとアートの関連ではないかと思っています。

宇野 ありがとうございます。あと5分、早いです。では、テーマを変えましょう。これまで国際芸術祭、SDGs、アートということテーマにして話し合ってきました。これをベースにして、この珠洲市に限らず、日本の各地域は地域活性化のための正念場を迎えているわけですが、東京、名古屋、大阪、金沢の若い世代が、珠洲に魅力を感じてこちらに移住してくる。そのようなことができる可能性もある。この新たなコモンズというか、ある意味、その芸術祭やアート、SDGsを共有財産にして、ぜひとも能登半島の先端に行きたいという若者たちも、現実的には増えています。そこで、パネリストの皆さんに、泉谷市長もそこにいらっしゃいますから、ぜひとも提案をしていただけませんか。こういうことをすれば若い人たちがもっと来ますよ、ということをお願いします。永井さん、いかがですか。

永井 今回、転入超過になったということですが、やはり珠洲市が、住民の人がどうすれば楽しいか幸せか、それを考えながらいろんなチャレンジをしてきた結果だと思

います。それはやっぱりチャレンジを恐れない。そしていろんな人と仲良くするとうか、多様性を認める。やはりそういったところに若い人は来ると思います。

宇野 では次に黒澤さん、お願いします。

黒澤 難しいのですが、先ほどの基調講演でフラムさんもおっしゃっていたように、3回10年、最低、続けていただきたい。できればそれにゼロが付くぐらい、30回100年ぐらい。やはり1回、2回では分からない。お客様として訪れることはあっても、そこを住まいにするかどうかは、大きな人生の選択だと思います。だんだんと馴染んでくることで発見することもあると思うので、ぜひとも続けていていただきたい。続けていくことで、皆さん、まちの方々も外から来られる方も、珠洲市がどこにあって、どういうまちなのかを認識してもらうことに力を入れていただくことで、世界地図の中に珠洲がマッピングされる。金沢が世界の中でマッピングされるために、様々な文化施設や活動を含めて、21世紀美術館は少しお役に立てると思っています。珠洲は国際芸術祭でマッピングされるといいと思います。

宇野 ありがとうございます。次に笠間さんお願いします。

笠間 そうですね、難しいです。私は芸術祭に行ったときに、二三味（にざみ）珈琲cafeに入ったら、東京の大学に通っているはずの知り合いがそこで勉強していて、すごびっくりしたのですが、本当に若者を引きつけるまちになってきているのだと実感しました。一方で、私と永井さんが、今日は運転技術の問題もあって珠洲市にたどり着けなかったように、やはり交通の問題

がり、それを補うための光ファイバーが全市に通るというお話もお聞きしましたが、DXの問題もあります。そういったことは、珠洲の問題というよりは、金沢も同じように問題ですし、そういったところを強化していくことで、より住みやすいまちになっていくという側面ももちろんあると思います。

創造都市は、文化芸術と産業と経済を掛け合わせて、お互いに発展していこうという概念だと理解しています。金沢もクラフトの分野で創造都市に選定されていますが、文化芸術と産業・経済と一緒に発展させていくとは、一体どういうことなのかということに常に考えています。冒頭に、私は金沢市の代表ではないと言いましたが、ぜひ珠洲市さんと一緒に研究しながら、お互いに持続していける、若い人を呼び込めるまちづくりを進めていけたらうれしいと思っています。ありがとうございます。

宇野 これを受けて泉谷市長お願いします。

泉谷 私は1回目の芸術祭のときから、珠洲市にとって奥能登国際芸術祭は単なるイベントではないと思っています。この奥能登国際芸術祭は、半島の最果ての珠洲から、人の流れ、時代の流れを変える運動なのだという事を言ってまいりました。本当に芸術祭を通して、動きを変えていきたい、新しいいろんな動きを生み出していきたい、そのように思っていますし、やはり芸術祭を開催することで、若い方にとってみれば、外から見てもいろんなことにチャレンジができる地域、あるいは、いろんな白抜きの部分がたくさんあるから、自分たちがやろうとしていることができる場所なのではないか、そんなふうに思っただき、移住される方、興味を持っていただく方も増えていると思っています。先ほど黒澤さ

んからも、芸術祭を何とか続けてほしいという話もございましたが、また皆さんのいろんなご支援、ご協力をいただきながら、この芸術祭、そしてさまざまな取り組みを進めていきたいと思っています。

宇野 時間が10分を超えましたので、ここでお開きにしたいと思います。キーワードとすると、クリエイティブな若者たちを集めるには、未来につなげるイノベーションを起こしたい。さっき光ファイバーの話が出ましたが、ぜひとも大容量の光ファイバーを利用して、その時間、空間を超えるような取り組みを進めていただき、その上でアート、世界農業遺産、里山里海、そしてSDGsを取り込んで、この地に根付いて、世界でマッピングされる一つになるように期待いたします。今日はどうもありがとうございました。

司会 永井様、黒澤様、笠間様、泉谷市長、宇野様、ありがとうございました。

4. 総括

司会 最後になりますが、創造都市ネットワーク日本の顧問であり、文化庁文化創造アナリスト・学校法人稲置学園理事の佐々木雅幸様より総括のお言葉をいただきます。佐々木様どうぞよろしくお願いします。

○総括

文化庁文化創造アナリスト・学校法人稲置学園理事 佐々木雅幸 氏

皆さん、今日はどうもご苦労様です。私が今日一番感動したことは、あの雪が降りしきる中、北川フラムさんがはるばる羽田から飛行機に乗り、飛行機の中から空港に降りられずに戻るかもしれないという連絡を受けました。しかし、ここに私が来たら、北川フラムさんが来てくれました。私とフ

ラムさんは長い付き合いがありますが、今日の講演は素晴らしかったです。これはやはり、彼が相当の思いを込めて、奥能登芸術祭を成功させてきたという、その自負にあふれていました。そして彼が選んだ、最果てで最先端、これはやはりこれからの珠洲の一つのキーワードです。現在の中心は多分、最後発になるのです。東京というのはこのままいけば、世界から見捨てられるぐらいの感じです。エネルギーを大量に消費しなければ、生活の質が維持できない。この大都市の存在がSDGsに反しているわけです。その反対やっぺいかないと、この気候変動を乗り越えられないのです。これははっきりしているわけで、それに気が付いた人たちが移住してきているのです。それは、この珠洲が最先端の地であるということです。

ここでの生活が本当の豊かさにつながるということ、我々は芸術祭を通じて世界に発信していく。その意味はパネリストの方々のいろんな話で伝わったと思います。私自身はクリエイティブシティということ、20年以上前に提唱して、そして金沢21世紀美術館の基本計画の最初の所を数人でつくりました。そのときに、これからの現代アートは街の再生に貢献してこそアートの本質だということを書き、それが現在の21世紀美術館の成功につながったと思っています。この21世紀美術館のあり方と、スズ・シアター・ミュージアムのあり方は共通していることが、今日示されました。これは何かといえば、世界の人たちが金沢や珠洲にある歴史文化、そして自然、この質を再発見していく。そして世界史、地図の中にマッピングすることを通じて、地域の人たちの誇りが再生される。基本的にはコミュニティが再生していくというのは、住民の誇りなのです。アイデンティティー、これはアートの力であり、これによって本

来の持っている地域の固有価値が、皆さんの心の中に染み渡っていく。ですから泉谷市長、ぜひこの事業を続けていってください。どうもありがとうございました。以上でございます。

5. 閉会

司会 佐々木様、ありがとうございました。それではこれもちまして、令和3年度、CCNJ 現代芸術の国際展部会、担当者ミーティング「持続可能な地域社会と国際芸術祭～里山里海×アート×SDGs の融合と新しいコモンズの視点から～」を終了させていただきます。皆さま、お忙しいところご参加いただき、誠にありがとうございました。また、登壇者の皆さまもありがとうございました。本日はどうもありがとうございました。

発行日 令和4年3月31日
編集・発行 株式会社地域計画建築研究所（アルパック）
〒600-8007 京都市下京区四条通り高倉西入ル立売西町82
TEL：075-221-5132 FAX：075-256-1764
E-mail：ccnj@arpak.co.jp
主催 文化庁

本報告書は、文化庁の委託業務として「株式会社地域計画建築研究所（アルパック）」が実施した令和3年度文化芸術創造都市推進事業の成果を取りまとめたものです。

従って、本報告書の複製、転載、引用等には文化庁の承認手続きが必要です。

